
振り回される日々の中で

芹沢 京

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

振り回される日々の中で

【Nコード】

N7982U

【作者名】

芹沢 京

【あらすじ】

え、俺って魔剣なの！？主人公であるサウザートは自分の事を普通の剣だと思っていたが、実は魔剣だという事を、ある日突然告げられた。しかも、彼は意思と一部の感覚を持つ以外は何もできない落ちこぼれ魔剣だった。そんな悲しみを背負ったサウザートの前に一人の女鍛冶師が現れ、波乱に満ちた振り回される日々が今始まる。

ブローグ

木々がうつそうとしている森の中の少し拓かれた空間。そこで俺達は曲刀を巧みに操る二足歩行の爬虫類と対峙していた。

痛い。

痛い。

痛い、痛いつてば！

俺の足の部分、要するにグリップを握るゴツゴツした大きな手は、容赦なく俺を振り回す。振られる度に風景が高速で移り代わり、速すぎてコマ送りのようになっていく。

それが気持ち悪くて最初の内は酔ったりもしたが、最近では慣れたもんで、大体どんな速度にも対応できるようになった。もちろん風景を見ないようにすれば、そんな心配はないのだが、それはそれで問題がある。見ていないと覚悟が決められない……あ、くる。

痛いよ！

金属と金属がこすれ合う嫌な音と共に、俺の体全体に痛みという名の振動が響き渡った。

これだよ、これが覚悟しないと耐えられないんだよ。

前に一度、不意打ちを食らって失神しかけた事もある。なので常に神経を尖らせていないといけないので、本当に疲れる。

それに比べて、人間様はいいよな。俺を振るだけの簡単な仕事だ。そりゃ技術も必要なのは認めるが、それも俺の我慢があつてこそなのだ。

「ふ、なかなかやるじゃないか。面白い！」

そんな俺の苦労をあざ笑うかのように爽やかな笑みを浮かべる黒い短髪の男が一人。

いつもそうだ、俺の持ち主であるライク・カインスは俺の苦労など露知らず、一人だけ戦いを楽しむ。

今回もそれは例外ではなく、目の前で挑発するかのように長い舌をチヨロチヨロと出し入れしている二足歩行の爬虫類にも、暑苦しい程の闘志をムキ出しにしている。

こいつは人間の間では確か『リザードマン』とか呼ばれていたかな。人間が勝手にそう呼んでいるだけで、本当は『ウルトラハチュウルイ』とか『シタチヨロリン』とかそういう名前かもしれない。俺的には『シタチヨロリン』をお勧めする。何か可愛い。

とにかく人間は何にでも名前をつけたがる。現に俺も

「燃えてきたぜ。行くぞサウザート、俺達の力を見せてやろうぜ」

「丁寧に名付け親が自己紹介してくれたので、俺からは割愛する。勝手に一人で燃えててくれ。というか、さっきからずっと燃えているじゃないか。俺は基本的にはクールなんだ。巻き込まないでくれ。」

「うおう!？」

「はあああ!」

そんな俺の切なる願いなど踏みにじるかのように、ライクはリザードマンめがけて無謀な突進を仕掛ける。俺は確信した。また来るな、と。。。

「くらえ、てりゃあああ!」

「ふしゆるるるる！」

突進の勢いを乗せた横払いを曲刀で受けられて痛い。

バックステップからの踏み込み斬りを同じ様に受けられて痛い。

諦めればいいのに、ムキになつて繰り出した力任せの縦の三連撃を全て受けられて、痛い痛い痛い！

そしてリザードマンのカウンターの一撃を、かろうじて受けさせられて痛い。そこでライクはやっと距離を取った。

「ち、リザードマンのくせに鮮やかな剣さばきだな。敵ながらお見事だ」

「ぶしゆるるるるううう！」

言ってる場合じゃないよ、いちいち痛いのよこっちは！ リザードマンも感化されて興奮するなよ、鬱陶しい！

ライクはそこそこの技術を持った剣士だと俺は思っている。しかし、こいつは力と力の正面衝突を好む傾向にある。常に全力のぶつかり合い。威力が上がればその分痛みも増すわけで、こちらとしては迷惑以外の何物でもない。

しかし、どんなひどい仕事にも喜びみたいな物は必ず一つか二つは存在するものだ、多分。

俺にだつてもちろんある。その喜びが訪れるかどうか、この脳みそ筋肉質、略して脳筋ライクの腕にかかっているというのが少々不満ではあるが。

「うーん、まだ戦っていたいけど日も暮れてきたし、そろそろ決めさせてもらうかなあ」

ライクは物足りなさそうにそんな戯言を言い放つ。もし今がまだ

俺の頭、要するに剣先が空を斬りながらリザードマンにぐんぐんと迫っている。リザードマンは不意を突かれて反応ができていない。来る、ついに来るぞ！ 俺の至福の時が！

柔らかくて気持ちいいいい！

俺は見事にリザードマンの胸を貫いた。それと同時に柔らかい肉の感触が俺の全身に押し寄せる。

皮膚は堅くて少しゴツゴツしているものの、いざ中に入ってしまったら極上のプリプリ肉が俺を待っていた。

これだよ、俺が求めていたのは。肉の感触ってやつはやっぱり最高だな。これがあるから俺は頑張れる。痛みにも耐えられるんだ。人間でいう所の食事と一緒に。無くてはならないものなんだ。

リザードマンはその場に倒れ込んで数秒悶えた後、人形のようにピクリともしなくなった。俺達の勝利の瞬間だ。

「ふん、ちよろかったな」

ライクは偉そうにそんな事を言う。何か無性に腹が立つ。

爽やかな顔しているくせに脳筋で派手な技好きな熱血漢。それがライクという男だ。

さっきだって三角飛びからの突き技などする必要は無いだろう。普通に敵の攻撃を受け流してからのカウンターで倒せたはずだ。こいつにはそれができる腕がある。

まあ何だかんだ言っても、ライクのそういう所は別に嫌いではない。ただもうちょっと俺の事を気にかけて欲しいのだ。しかし、そんな俺の不満は一切伝わらないので、いくら訴えても無駄なのが切ない。

そんなわけで俺は剣だ。視覚、聴覚、意思はもちろん、触れた物の感触を味わう事もできるが、痛覚だけは正直いらぬ。できれば嗅覚と代えて欲しい。

そんなそこら辺にいくらでもあるごく普通の剣、と俺はそう思っていた。だが、実は俺は普通の剣ではなく、魔剣という存在らしい。

その事実を知ったのは三日前の事だった。

* * *

俺達は街の酒場で仕事終わりの一杯を楽しんでいた。正確に言えば、俺は剣なので飲食はしない、というよりもできないので、実際に一杯やっているのはライクだけだ。

しかし酒は飲めないものの、俺は酒場という年中お祭り騒ぎなこの場所が好きだった。見ているだけでこっちも元気になれる。

ちなみに剣は皆そうだと思うけど、俺には目や耳など存在しない。でも見えるし聞こえる。

しかも、人間は目がついている方向しか見えないらしいが、俺達剣は違う。体のどこか一部分でも露出してさえいれば全方位、好きな方向を見れる。もちろん一度に見れる範囲はその半分以下だけだ。

どういう原理かなんて聞かれても分からない。そんなの知るわけないじゃないか、俺ただの剣だもん。

それにしても本当にここはオッサンしかいないな。他愛もない話を大笑いしながら喋るオッサン達、喧嘩を始める血気盛んなオッサン達、賭け事に人生を賭けるオッサン達。若いのはライクぐらいじゃないか、楽しいからいいけどさ。

でも一人ぐらい紅一点と呼べる綺麗な姉ちゃんを所望しても罰は当たらないだろう。

そんな事を考えていたら、酒場の扉が上部についている鈴を鳴らしながら開かれた。

げっ！ さっきの無し、撤回、罰当たった。オッサンばかりでいいです、オッサン最高！

開かれた扉の先には銀色の高そうな軽鎧をまとった、長めの金髪で気品溢れる美人な顔立ちをした女剣士が立っていた。女剣士は酒場に足を踏み入れると、きよろきよろと辺りを見回している。

頼む、こつちには来るな！

「あ、いたいた」

……ですよね、来ちゃいますよね。

女剣士はライクの存在を確認すると、女性の登場に沸き起こるオッサン達の汚い歓声に冷たい視線を投げかけながら、迷わず一直線にこちらに向かってくる。

ライクもそれに気付いていた様で、さっきから俯いて机とにらめっこをしている。

無駄だよライク、お前の風貌はこのオッサンの巣窟の中ではあまりにも目立ちすぎる。顔を隠す程度じゃ無意味だ。

「何、また一人で飲んどの？ 相変わらず寂しい奴ねえ。友達とかいないんでしょ」

昔、誰かが言っていた。人と人のコミュニケーションにおいては第一声が大事だと。それをこの女はある事か嫌味から入りやがっ

た。やめてあげて、それ凶星だからやめてあげて！

あと、断りも無しに横に座るな無礼者。

「うるさいなあ、酒がまずくなるからどっかいけよ」

「何よ、せつかく心配してあげてるっていうのに失礼しちゃうわ」

「失礼なのはどっちだよ。お前は心配って言葉の意味が分かって言ってるのか？」

「分かってるからこそ感謝しなさいって言ってるのよ。ほら、ありがとうは？」

この理不尽に感謝を要求している女の名前はアンナ・エクレール。ライクの同業者、いや商売敵だ。

ライク程ではないが、女にしてはかなり腕が立つ。そこら辺のやわな男剣士とかに比べたら断然強いのだが、とにかくこいつは口が悪い上に、事あるごとにライクにつつかかってくる。何か恨みでもあるのだろうか。

「……はいはい、ありがとうがとう。いいんだよ、俺にはサウザートがいるから。俺はこいつが側にいるだけでうまい酒が飲めるんだから。そんな心配しなくていいから放っておいてくれよ」

よ、よせやい！　こんな人の多い場所で突然何を言い出してんだよ、恥ずかしい！

……でも嬉しいぜ相棒、へへへ。

「サウザート？　ああ、腰のしょぼい剣の事ね。剣に名前なんか付けて気持ち悪いわよアンタ」

アンナは、俺に汚物でも見るかのような視線を投げかけてくる。

本当にこいつはいちいち俺の喜びを台無しにする。ここまでくると

不愉快の天才と言わざるを得ない。

「お前は何しに来たんだよ、俺に喧嘩売りに来たのか？」

ライクの不愉快ゲージもかなり上昇していたようで、アンナを鋭い目つきで睨みつけた。アンナは猫に睨まれたネズミの様な表情を浮かべている。いいぞ、その調子だ。

「ア、アンタなんか喧嘩売るほど私は暇じゃないのよ。折角、いい話持って来てあげたのに教えてあげないわよ？ いいの？」

アンナはオドオドしながらも強がって偉そうにしている。まったく、こいつは可愛くないんだか可愛いんだか分からんな。

それよりもいい話だと？ これは何やらお宝の臭いがするぜ。嗅覚ないけど。

「別にいいよ、興味ない。帰ってくれ」

おいおい、話ぐらい聞こうぜ、ライク。最近稼ぎが悪くて、ロクに俺を鍛冶屋で鍛えなおしてくれてないじゃないか。たまには高級な砥石で俺をピカピカにしてくれよ！

「ひ、ひどい。話ぐらい聞いてくれてもいいじゃない……」

アンナは目に涙を浮かべている。

ああ、これはいつものパターンに入ったな。これが俺達がアンナを苦手とする一番の理由。普段強がっているくせに、冷たくしすぎるとすぐ泣くんだよこいつは。それも嘘泣きではなく本気泣きっぽいから性質が悪い。こうなると女に免疫のないライクの行動は決まっている。

「わ、わかった。話を聞くから泣くなよ」

ライクは慌ててアンナをなだめる。うん、予想通り。

「もう、最初から素直にそう言えばいいのよ、馬鹿」

「はあ……」

アンナは泣き止むと同時に悪態をつく。俺も溜息が付きたいよ、ライク。でも口がないんだ。

「あのね、いい話っていうのはずばり魔剣の事なのよ」

アンナは鼻息を荒げて興奮気味に席から立ち上がった。

魔剣？ それはそんなにすごい物なのだろうか？

「魔剣ってあの意思を持つ剣ってやつのことか？」

「そうそう、意思だけじゃなくて人間の言葉も理解できるし、目がないのに視覚があったり、他にもいろんな感覚があったりするのよ！」

……え？ それって普通じゃないの？ 普通、剣ならそんなの当たり前前だろ？

「ふーん、そりゃすごい」

「ふーんってアンタね。剣が意思を持つてるのよ？」

ライクはまったく興味がなさそうだった。逆に俺は少し困惑している。俺って普通の剣だよな……？

「だって丹精込めて作られた剣には魂ぐらい宿るだろうよ」

そう、まったくだ。だから剣なら意思を持っていて当たり前のことなのだ。

「それは鍛冶屋さんの思いがこもっているって意味で、本当に魂を持っているわけじゃないでしょ！」

何言ってるんだ、こいつ。そんなわけが……。

「まあそりゃそうだけど」

あるのかよ！ え、じゃあ何か？ 俺はずっと普通の剣だと思っ
ていたが、実は魔剣だったって事なの？ 何じゃそりゃ！

という事はあれじゃないのか。普通の剣は痛みとか感じないって
事か？ 何それ、ズルいだろ。俺も普通でいいよ。意思とかななくて
いいから普通にしてください！

「もう！ ちょっとは興味持ちなさいよ。魔剣の中には他にも喋つ
たり、宙に浮いたり、炎が出たり色々すごいのがいるのよ！」

マジで！ それはすごい！ 俺そんな事できるのか！ ……いや、
できた試しがないんだけど。

アンナは興奮しすぎてテーブルに足を乗せだした。酒場の店主が
こちらを睨んでいる。まったくはしたない女だ。

アンナの言い分から察するに、そういう事ができる魔剣とできな
い魔剣がいるらしい。恐らく俺は後者の方だ。要するに魔剣の中で
も何もできない落ちこぼれという事だろう。

はあ、普通になりたい。溜息をつこうと試みたが、やはり息など
でなかった。

「わかった。わかったからテーブルから降りろ。な！」

「な、何よ。人が気持ちよく話してるのに……」

「魔剣がすごいのはよくわかった。だが、それが俺と一体どういう関係があると言っただ？」

ライクがそう言うと、アンナは待つてましたといわんばかりに胸を張る。

「ふん、聞いて驚きなさい。実は魔剣が秘密裏にこの街に持ちこまれているらしいのよ！」

ここにいますけど何か？

アンナは得意気な表情で言ったが、ライクは表情一つ変えずに至つて冷静な様子だった。それが気に食わなかったのか、頬が食事中的リスみたいになっている。

「何で驚かないのよ！」

「い、いや。そりゃちよつとは驚いたけど、だからどうしたっていう感じなんだが」

「欲しいと思わないの!？」

「俺にはサウザートがいるからどうでもいいよ」

ライクは冷めた口調でアンナを一蹴する。

そりゃそうだよ、魔剣を持っているのに魔剣を欲する理由が分からない。まあその事実をこいつは知らないだろうけど。俺も知りたくなかったよ。

「あっそう！ アンタに話した私が馬鹿だったわよ！ …… アンタには必要なくても私には必要なのよ、女の私には……」

「お、おいアンナ！」

アンナは思い切りテーブルを叩くと、ライクの呼び掛けを無視して酒場の外へと走り去っていった。

何やら思い詰めている様子だった。ライクもそれに気付いた様で心配そうな表情を浮かべている。

しかし、女に関してはまったくのダメ男なこいつは追いかける事もできずに、ぼーっと酒場の扉を眺めているだけだった。

酒場内では、オッサン達のライクに対するブーイングが沸き起った。

* * *

と、俺が魔剣という事に気付いた……気付かされた経緯はこんなもんだ。

その後、アンナとは一度も会ってないので、あいつがどうなったかは俺もライクも知らない。

俺は急に驚愕の新事実を突きつけられ、その夜はそりゃ一人で大泣きしたさ。涙なんて出ないけど。

でもいいんだ、自分が普通の剣じゃなくて、落ちこぼれの魔剣だったとしてもさ。

今まで嫌な事もそりゃたくさんあったけど、楽しい事もたくさんあった。それは俺が意思を持っているからだ。それに文句を言っただって普通になれるわけじゃないしな。

それにしても、一つ気になる事がある。俺がこの街に来て一年は経つが、何で今さら俺がここに来たとかいう情報が流れたんだ？

というよりも、一体誰が俺の事を魔剣だと知っているんだ？ 持ち

主でさえ気付いてないというのに。

まあ考えても答えなんかでないだろうし、考えるだけ無駄か。

そんな事よりも、今日は久しぶりにそこその上物を討伐した。

これでライクも久しぶりに鍛冶屋に連れて行ってくれるだろう。俺はそれが楽しみで仕方がない。

ああ、早く砥石で俺をピカピカにして！

1・天国に行ってきた

嫌だ。嫌だ嫌だ。断固拒否する。俺は絶対に嫌だからな！

「ねえ、お願いよ。もうライクくんしか頼める人がいないのよ。この通り！……駄目？」

赤い帽子と、それとセットの赤いエプロンドレスを着こなし、大人の魅力を醸し出している女性は、色っぽい上目使いでカウンター越しにお願いをしてくる。

この女の名前はエリス・クライベル。ハンターギルドの依頼受付担当だ。ライクが年下だからか、いつも結構無茶な依頼を押しつけてくる厄介な女だ。

俺達はリザードマン討伐依頼の報告と献上をしに、わざわざリザードマンをライクが所属しているハンターギルドまで担いで来た。もちろん担いだのはライクで、俺は何もしていない。

報告を終えて、報酬を貰ったらさっさと帰るつもりだった俺達に、エリスが良い儲け話があると持ちかけてきたのが事の発端だ。

「お願いよお、依頼主さんもライクくんを指名してるのよ。ギルドと私のために……ね？ いいでしょ？」

駄目だ！ そんな猫なで声と上目使いでお願いしても、駄目なものな駄目！ ライクよ、この女にはつきりと言ってやれ。そんな依頼はお断りだと！

「う、うーん。エリスさんにそこまで頼まれると困ったなあ」

……そうだ、こいつはそういう奴だった。

ライクは頬をリンゴのように真っ赤にしてモジモジしている。女に免疫がないのもここまでくると、もはや拍手を送るしかない。

でも頼む、今回だけはちゃんと断ってくれ。そうじゃないと俺折れちゃうよ？ 言葉通り俺の体、要するに剣身がな……。

折れた事ないから分らないけど、それは多分、死を意味しているだろう。嫌だ、まだ死にたくない！

「でも、アイアンブレイカーなんか俺一人でどうにかできるもんじやないと思うんだけどなあ。サウザートを失いたくないし……」

よくぞ言った！ それでこそ我が相棒だ！ エリスの顔色を伺っている風なのが少し情けない感があるが、まあ九十点をやるうじやないか、光栄に思え。

「はいはい、貴方達の仲は良くわかってますよ。こっちだってプロとして無謀な依頼は頼まないわよ。ちゃんと頼もしい助っ人を用意してるんだから」

エリスは鬱陶しいくらいラブラブなカップルを見るようなうんざりした表情で、俺達に交互に視線を配ってくる。俺達の名誉のためにも言っておくが、そういう仲では決してない。

「助っ人？ もしかしてアンナとか言わないですよね？」

おい、不吉な事を言うんじゃない。

「残念ながら違っわ。あの子も強いけど、この依頼には不向きすぎるわ。女性の力じゃあれはどうにもならないでしょ」

「うん、アンナには無理だよ。あいつが相棒だったら、俺はこの依

頼断るとこだったよ」

二人共、アンナの事を戦力外だと確信しているようだ。ここまではっきりと言われていると、少しアンナが可哀想に思える。ここに本人がいたら大号泣して、ハンターギルド水没の危機だっただろう。まあ本当の事だから仕方がない。

「じゃあ一体助っ人って誰なんです？ アイアンブレイカーに対抗できる奴なんて……もしかして魔術師ですか!？」

ライクは鼻息を荒くしながら、カウンターに身を乗り出してエリスを問いつめた。

「馬鹿ね、そんなレアなのが捕まるとでも思ってるの？」

「……ですよねえ」

だよな、そんなわけはないと思った。魔術師なんて、本当に実在するかも分からない幻のような存在だ。こんな辺鄙な街にいるわけがないだろう。まあ、本当にいたらアイアンブレイカーなんか魔法とやらで秒殺なんだろうけどな。

「もう来てもおかしくない時間なんだけど、遅いわねえ」

エリスはカウンター横にあるゼンマイ式の置き時計を見ながら、困った風に言った。どうやら今からここに助っ人が来るらしい。

その時、ギルドの外から「おつとすまねえ、姉ちゃん!」という豪快で元気いっぱいいな声が聞こえてきた。その数秒後、ギルド入り口の扉が勢いよく開かれた。

ついに助っ人のご登場か？

「ちわー！ 解体屋です！」

またまた豪快で元気いっぱいな挨拶と共に、何やら物騒な職業の方がずかずかとこちらへ向かってくる。はちきれんばかりの筋肉で身を包んだハゲ頭の大男。

こいつが助っ人か？ 確かにこの御方ならどんな難敵もあつという間に解体してくれそうだ。

……って、この人は。

「どうも、わざわざご足労ありがとうございます。そのリザードマンがそうです」

ノリツッコミしようとしたら、先にオチを言われて恥ずかしい。

このハゲ頭の大男はリザードマン討伐の依頼主で、モンスターを裁いて売りつけるモンスター専門の解体屋の店主だ。ちなみにこの街の解体屋は、このオッサンが経営する一軒のみで、店というよりは解体ギルドと言っていい程の規模らしい。

「おお、これは上質なりザードマンだ！ いつもありがとうございます。これが報酬です。またよろしくお願いしますぜ！」

解体屋は顔に似合わず丁寧な礼を言いながら、カウンターに金の入った袋を置くと、ライクが必死にここまで担いできたリザードマンを、余裕しゃくしゃくと片手で持ち上げた。本当にこの人を助っ人にした方がいいんじゃないだろうか。ぼったくられるだろうけど。

解体屋は見た目は怖いが、豪快ながらも常に低姿勢で、口調もそこそこ丁寧で好印象だ。しかし、それに騙されてはいけない。この男は中々のくわせ者だ。こいつは俺達ハンターから安い依頼料でモンスターを手に入れ、高額でその肉やら素材を転売するのだ。

そうやって俺達のおかげで儲けているくせに、こちらから解体依頼を頼むと、他に商売敵がないのをいい事に、高額な料金を要求してくる。特に現地解体はかなりぼったくられるので、解体料金は基本的に依頼主負担だからハンターが払う必要はないのだが、あまりに高いために依頼主が現地解体を頼むのを渋る事が多い。

だから、ハンター達はわざわざ重いモンスターを街まで担いで行かなければならない場合が多いのだ。俺は担いでいるのを見てるだけだから別に良いんだけどね。

「はう!？」

「おつとすまねえ、今日はよくぶつかる日だぜ。がはははは!」

解体屋はぶつかった相手をロクに確認もしないまま、上機嫌で豪快な笑い声を上げると意気揚々と立ち去って行った。俺達の目の前には解体屋とぶつかって尻餅をついている小さなおさげの女の子だけが取り残されている。

あまりにも華奢なその姿は、屈強な男達でいっぱいハンターギルドでは完全に場違いだ。まさか、こいつが助っ人とか言わないよな？

「やっと来たわね、遅かったじゃないシャーナちゃん。ライクくん、この子が例の助っ人よ」

……言っちゃうのね。ああ、目眩がしてきた。目なんか無いけど。シャーナとかいうちびっ子は慌てて立ち上がると、「す、すみません道に迷ってしまって。貴方がライクさんですか？ 私はシャーナ・イクスロットタつて言います。よろしくお願いします!」と深く一礼をしてきた。どこかの無礼な女と違い、礼儀正しい。好評価ではあるが……。

「おい、これは何の冗談だ？」

ライクはエリスを睨みつけている。

俺もライクと同意見だ。さすがにこの冗談は笑えない。今ならまだ間に合う、さっきの解体屋を呼び戻す事をお勧めする。

「あら、冗談なんて言ってないわよ？ この子が正真正銘の強力な助っ人よ」

エリスは至って真面目な様子だった。嘘をついていそうには見えない。帰ろう、帰ろうよライク。帰ってお前は整体屋で俺は鍛冶屋。日々の疲れを癒して今日の事はもう忘れてしまおうじゃないか。

「話にならないな。悪いけど、帰らせてもらおうよ」

俺の呼び掛けが通じたわけでは無いと思うが、ライクは俺と同じ結論に達したようだ。まあ、妥当な選択であろう。

「ふああ！」

「な、なんだ！？」

ライクが帰ろうとすると、シャーナとかいうチビツ子は無邪気な子供のように俺の事をキラキラした眼で見つめてきた。

惚れたか？ ふ、俺も罪な剣だぜ。でもなチビっ子、俺は剣でお前は人間。残念だが俺達は絶対に結ばれる事はないんだ。悪いが諦めてくれ

「お、おい。勝手に何してんだ！」

悲劇の主演気分浸っていると、いつのまにか俺は服、要するに

鞘から脱がされ全裸にされていた。どうやら悲劇じゃなくて卑劇だったらしい。

俺のグリップにはいつものゴツゴツした感触ではなく、リザードマンの肉並みに柔らかい感触があった。俺を握っているのはライクではなくシャーナの小さな左手だった。何やら様子がおかしい。

「ひゃあ！ この剣すごいですう！ 一見はシンプルな直剣ですけど、何ていうかすごい魂みたいなものを感じます！ ライクさんは話に聞いてた通り、サウザートさんでしたっけ？ この剣さんを本当に愛しているんですね！ すごいですう……うふふ」

ちよ、ちよっと待って。この子なんかやばい！ 俺を見て涎垂らしてるよ、助けて襲われる食われる！

しかしライクは苦虫をつぶしたような顔で傍観しているだけだった。この剣でなし！

「でも、ちよっと刃こぼれしてますねえ。最近手入れ不足なんじゃありませんか？ しょうがないですねえ、私がやってあげますよお」

遠慮します、今から鍛冶屋に行く予定なので間に合ってます。ねえ、やめて！ 本当にやめて！

よく見ると、シャーナの右手には内側に鉱石のような物がついた変なグローブが装着されている。それが俺の剣身に向かって伸びてくる。

間違いない、あれは俺を破壊するための道具だ。ライクよ、今まで楽しかったよ。天国に行ってもお前の事は忘れないからな、あばよ！

俺が死の覚悟を決めた直後、全身に電流が走った。

ぞくつ！ ぞくぞくぞく！
ああん！ 気持ちいいい！

「ほーら、今ピカピカにしてあげますからねえ」

シャーナは変なグローブで俺の剣身を優しく撫でていく。しかし、優しいだけではない。優しさの中に時々全身に響きわたる刺激感。これぞ正に飴と鞭。

もうだめ、俺どうにかなりそう。こんな快感初めて！ ああ神様、俺死んだのかな？ だってここ天国でしょ？ こんな快樂が地上に存在するはずないもの。こんなのがあるなら、もっと早くに死んでおけばよかった。ああ、気持ちよすぎて意識が薄れていく……。

「よし！ 完璧のピカピカですよお！ ……つて、すみません私つたらつい勝手に！ すみませんすみません、お返しします！」

……………。

「いやいいんだよ。すごいな……、まるで新品のようだ。行きつけの鍛冶屋のオッサンでもこうはできないぞ。そのグローブすごいね」「えへへ、これは『砥石グローブ』といって私のお手製なんですよ。手の平の砥石部分にはエンゴク鉱石を使ってるんです」

……………あれ、俺生きてる？ 天国はどこ？

「エンゴク鉱石だって！？ 超がつく程のレア鉱石じゃないか！ 失礼だけど、何で君みたいな小さな女の子がそんな高価な物を……？」

エンゴクじゃなくてテンゴクね。それに別に高価じゃないよ、天国は基本無料だよ、多分。

「ちょっと、ライクくん失礼よ。シャーナちゃんはこう見えてもレイテナ国お抱えの上級鍛冶師なのよ。わざわざ王都からこのために来てくれたの。普通ならお目にかかるのも難しいんだから、子供扱いしたら駄目よ。ねえ、シャーナちゃん？」

ちゃん付けなんかして、お前も子供扱いしているじゃないか。というか絶対まだ子供だろう。

そんな事よりも上級鍛冶師のシャーナだって？ その名前聞いたことがあるぞ。確か、いつもお世話になっている鍛冶屋のオッサンが、若い女性なのにすごい天才鍛冶師がいると言っていた事がある。その女の手にかかれば、どんな剣でもたちまち天国に誘われると。

その女の名前は確かシャーナだ。間違いない、この天国に一番近い女は真正正銘の天才シャーナ……いやシャーナ様と呼ばせて頂こう！

「そ、そんな。私なんてまだまだ未熟ですよ。身に余る称号貰っちゃって困ってるんですから」

シャーナ様は頬を桃のようなピンクに染めながら、あわあわと高速で両手を左右に振っている。か、可愛い。可愛すぎですシャーナ様。まるで天使様だ。ああ、その手でもう一度私を天国へ！

「ふーん、すごいんだな。それはすまなかつたな」

あ、こいつ何してやがる！

ライクはあるところかシャーナ様の頭をナデナデし始めたではないか。恐れ多いぞ無礼者、俺の鎧にするぞ！

そうすれば、またシャーナ様が「あらあ、鎧ついてますねえ。ピ

カピカにしましようね」とか言いながら、俺の全身をそれはもう丁寧
に優しく激しく……ああん、サウザート困っちゃう！

「はううう……」

「こちら、シャーナちゃんが困ってるでしょ。まったくライクくんは奥手なくせに、小さな女の子には大胆なんだから。もしかして少女好き？」

エリスは冷たい視線をライクに投げかけた。そうか、アンナに冷たいのもそういう理由からか。正直引いたぜ相棒。

「ち、違う！俺は少女に興味などない！」

見苦しいぜ、素直に認めちゃいなよ。

……ん？シャーナ様の様がおかしい。全身が小刻みに震え、険しい表情を浮かべている。まるで噴火寸前の火山……更に震えを増して……噴火した！

「もう、いい加減にしてくださいよ！さっきから少女少女って私は十八歳ですよ、大人の女なんですよ！？」

「そつだそつだ、お前らひどすぎるぞ。シャーナ様は立派な大人……え？」

「え？」

「え？」

俺達三人は綺麗にハモった。俺だけ声出てないけど。

シャーナ様は俺達の態度にご立腹で、おやつを貰えなかった子供のように頬を膨らませている。うん、仕方がないよシャーナ様。ど

ここらどう見てもお子様です。ちなみに、レイテナ国では十八歳以上は成人と見なされるらしい。

「エ、エリスさん！ それで結局、助っ人が鍛冶師ってどういう事ですか？ 彼女戦えないですよね？」

ライクは慌てて話を反らした。いい判断だ、悪くない。エリスも助かったと言わんばかりに、ライクの話に乗りかかってくる。

「だ、だからあれよあれ。戦うのはライクくんだけよ」

「え、それじゃあ意味無いじゃないですか。この依頼降ろさせて貰いますよ」

ライクの意見はもつともだ。鍛冶師が戦いで一体どんな役に立つというのだ。まさか傷ついた俺をその場で鍛え直す気じゃないだろうな。そんな重労働させられるぐらいなら、いつそ一思いにポキッといっっちゃってくれた方がマシだ。

「ちよつと、話は最後まで聞きなさいよ。いい？ アイアンブレイカーに対抗するのに必要なのは人数じゃないのよ。むしろ一人で正確に攻撃した方が効率いいの。そうなると必要なのは人数よりも剣数よ。それもとびきり頑丈な剣が大量にね」

「ああ、そういう事か。それで彼女か」

ライクはエリスの意図を理解したようだ。そして俺も理解した。今回の依頼に俺の出番はないという事を。

ひゃっほー！ やったね！ よしライク、この依頼受けようぜ。そして報酬で豪遊だ！

「そういう事なら尚更、俺は降ろさせてもらおうよ。俺はサウザート

以外の剣を握るつもりはないんでね」

「ちょよ、ちょつと」

ライクはエリスの制止を聞かずに酒場から出ようとする。

まったく、こいつはどれだけ俺の事が好きなんだよ。まあ、こいつのそういう所は嫌いじゃないし、むしろ好きだ。剣冥利に尽きるってやつだ。おいしい話だが、今回は諦めるか。

しかし、そう簡単には諦めさせてくれないようだ。シャーナ様が可愛らしい不満顔で俺達の行く手を遮った。

「それは私の作る剣じゃ不満って事ですか？ 私の剣なんか使う気にならないと!?!」

「い、いや。別にそういうわけではないんだけど……あの……その……」

「分かりました。三日、いや二日ください！ ライクさんが使いたくなるような剣を作ってきますから。二日後の朝に、ここに来てください。絶対ですよ!」

シャーナ様は挑戦状を叩きつけるかのようにライクを指差しながら言つと、颯爽とギルドの扉を開けて立ち去ろうとしたが、扉を出てすぐの五段だけの小さな階段に躓いて盛大に転けながら、俺の視界から消え去った。開きっぱなしの扉の向こうから「はううう、痛いよお」という可愛い声が聞こえてきた。

俺達はギルドを出ると、真っ直ぐ家路についていた。

ライクは死人のようにげっそりしている。リザードマンとの激闘ではなく、ギルドでの出来事で大分体力を削られたと見える。逆に

天国帰りの俺は身も心もリフレッシュしていた。

「エルトリル名物のエルガニまんじゅうはいかがー！ お安くしてくよー！」

露店の売り子の元気な声が聞こえてくる。

そういえば、俺がこの街の名前を初めて聞いたのはエルガニまんじゅうの売り子からだったな。

この街はある理由で他の街との流通があまり盛んでない上に、ほとんど観光客が来ないので、あまり街の名前を耳にする機会がない。日常会話で街の名前を言う事もほとんどないしな。

エルガニまんじゅうは近くの湖でとれるエルトリル特産のエルガニをふんだんに使ったまんじゅうだ。実は名物でも何でもなく、勝手に名物として売り出したため、最初はクレームが殺到したらしいが、今では本当に名物になっているからすごい。くそう、口さえあれば俺も絶対食べるのに。

しかし、そんなエルガニまんじゅうも今では少し売り上げを落としているらしい。人気落ちたからではなく、生産量が下がったのだ。理由はもちろんモンスターだ。

エルトリルのあるレイテナ国は他国が盛んに戦争を繰り返している中で、唯一中立な国家らしい。その理由は別に国王が平和主義とかそういう事ではなく、他国に比べると圧倒的にモンスターの生息数が多いのだ。そのため戦争をする暇もないし、他国もそんな危険な場所に攻め込もうとしないので、自然と中立になったそうだ。エルトリル周辺はレイテナ国の中でも屈指のモンスター生息数を誇っている。それが観光客が少ない理由であり、他の街との流通が困難な原因でもある。

モンスターの襲撃を防ぐための周囲を覆う外壁が、この街の閉鎖

的なイメージを更に強調している。だから、この街ではモンスターだろうと食える物はすべて食材にしないと生きていけないのだ。エルガニも実はモンスターだが、最弱の部類に入るために、他のモンスターに捕食され、数が減ってきているというわけだ。

まあ、そういう理由があるからこそ、ライクみたいな連中が仕事にありつけているんだ。皮肉なもんだがモンスター様々さ。

「よし決めた！」

うおう！？

突然ライクが街中で声を上げた。周りにいる人間達が何事かとこちらを凝視している。

おい、恥ずかしいぞ。この恥ずかしさに見合う程の決心なんだろうな。

「俺は絶対に断るぞ！ そのために今日から特訓だ！」

どうでもいいわ！ 普通に断れよ！ 何をどう特訓するんだよ！

……ああもう。折角リフレッシュしたのに疲労が溜まってしまふ。というわけで、俺はもうこいつを放置する。

家に着くまでライクは何やら一人でぶつぶつと呟いていたが、一切相手にしてやらなかった。

2・上級鍛冶師の本気

あの一件から二日後の朝、俺とライクはギルドでシャーナ様を待っていた。

気分は最悪だった。こんなに気分の悪い朝は滅多にないだろう。

この前の一件以降、ライクは家に引きこもり、本当に断る特訓をひたすらしていたのだ。

特訓と言っても、ただ延々とブツブツ言っていただけなのだが、それをずっと聞かされていた俺はノイローゼになりそうだった。ライクは真面目に断り文句を考えていたのだろうが、俺には呪詛にしか聞こえなかった。ちなみに今も特訓は継続中である。

今回ほど自由に動きまわりたいと思っただけではない。普通の剣ならこんな苦悩もしなくていいんだろうな。ああ、やっぱり普通になりたい。

「あの、ライクくん？ 気持ち悪いからやめてもらえる？」

エリスは嫌悪感を全面に押し出した表情をしている。

あれは確実にライクを人間ではなく、ゲテモノ料理か何かだと思っただけだ。やばいぞ、ゴミ箱に直行だぞ。

だが、そんなライクを俺は少しも可哀想とは思わない。なぜなら俺もエリスと同意見で、こいつをゴミ箱に放り込みたい気分だからだ。

しかしライクは、そんな事はお構いなしに依然として、ただひたすら繰り返し呪詛を呟いている。

こいつは一体誰を呪い殺すつもりなんだ？

そういえば先程、ギルドに来る途中にある広場が何やら騒がしかった。もしかしたら呪詛の犠牲者がすでに出ているのかもしれない。

警備兵さんここに人殺しがいます！ 早く捕まえて！

そんな事を考えているとギルドの扉が勢いよく開かれた。

俺は一瞬、本当に警備兵が来たのかと思っただが、残念ながら警備兵ではなかった。それどころか人間でもない。

俺達の目の前に現れたのは扉をギリギリ通過できるぐらいの巨大な鞆だった。ギルドの扉は小型・中型のモンスターを搬入できるように、かなり大きめに作られている。それをギリギリ通過なんて、俺はこんなに大きい鞆を見たのは今日が初めてだ。

これが噂の動ける魔剣……いや、魔鞆か！

「はううう、誰か助けてくださいいい……」

しゃ、喋った！？ こいつ動ける上に喋るぞ！ やめろ、落ちこぼれの俺にそんなの見せるな、鬱になるぞ……って、今の声どこかで聞いた事ある気がする。

「シャ、シャーナちゃん！？」

エリスが目丸くしながら言った。

そうだ、この声はシャーナ様の声だ。しかし、シャーナ様の姿は見当たらない。

「そ、そうですう、鞆の下敷きになってますう。助けてくださいよ
お」

どうやら今にも泣き出しそうな可愛らしい声は、鞆の下から聞こえているようだ。扉を開けて入ろうとした時に転んで、見事に押し潰されたらしい。

昨日から思っていたが、シャーナ様はドジっ子のようだ。童顔で

幼児体型でドジっ子とは狙いすぎではないだろうか？

俺がそんなどうでもいい心配をしている間に、ライクとエリスが急いで駆けつけ、巨大な鞆をどけると、人間に踏まれたネズミのようにはへろへろになっているシャーナ様がひよっこり姿を現した。

「ちよつと、シャーナちゃん大丈夫!？」

「大丈夫ですよ、ありがとうございましたあ……」

エリスの呼びかけに、シャーナ様は焦点の合っていない眼を向けて、感謝の言葉で返した。あまり大丈夫そうには見えない。

「そんな状態じゃ討伐に行くのは無理だな。残念だけど今回は諦めよう」

ライクはそう言うと、そそくさとギルドを後にしようとする。うまいぞ、どさくさ紛れにさらっと断りを入れるとはやるじゃないか、特訓の成果ありだな。ライクも心の中でガッツポーズをしているに違いない。だが、まだまだ甘い。

「だめです」

「だめよ」

うん、そりゃまあ向こうさんは納得してくれないだろうな。

シャーナ様だけではなく、エリスもライクをドスのきいた声で呼び止めた。ライクはエリスを裏切り者を見る眼で睨みつけたが、元々あいつはシャーナ様側だろう。依頼仲介人としては当然だ。

「剣を見ようもしないで逃げるなんて卑怯ですよ。ちゃんと私の剣を見てから決めてください!」

シャーナ様は真剣な眼差しでライクに訴えかける。その横でエリスがうんうんと相槌をいれていた。

正々堂々、真っ向勝負が大好きな脳筋ライクに対して、その挑発は駄目だ。効果的すぎる。

「逃げてなどいない！ よしわかった。お前のご自慢の剣を見せてもらおうか！」

ライクは完全にムキになっている。早くもこちら側の雲行きが怪しくなってきた。シャーナ様は計算通りといった感じで自信満々そうに鞆の蓋を開いて、こちらから中が見えるように鞆を向けてきた。

どれどれ、どんな剣が……え？

「どうぞ、好きなのを手に取ってみてください。どれも私の自信作ですー！」

「えっと、……これ全部、シャーナが作った剣？」

ライクは鞆の中身に釘付けになっている。かくいう俺もそうだが、巨大な鞆の中にびっしりと詰まっている同業者から目が離せない。

「そうですよ？ これが斧に見えますか？」

「いや剣にしか見えないが……、これ何本あるの？」

「えっと、時間がなかったので三十本しか作れませんでした。やっぱり少ないですよねえ？」

シャーナ様は自分の仕事っぷりに不満そうだった。

いやいや、ありえないだろ。たった二日で三十本？ もはや人間業ではない。よく見ると、シャーナ様の可愛いくくりくりした目の下にクマができています。

どうやら二日間徹夜で作ったみたいだが、それでも尋常ではない。上級鍛冶師というのはこんな化け物揃いなのか？

それよりも、よく三十本も入った鞆を背負って来れたな。実は力持ちなのだろうか？ カコブとか物凄いのだろうか？ やめる、俺のシャーナ様の可愛いイメージを壊すな！ 俺はそんな疑問を心の中で切り刻んだ。剣だけに。

「い、いや。そ、そんな事ないよ。十分な数だよ……うん十分……」

駄目だ、ライクは完全に圧倒されている。さすがにこれは俺でも予想外だよ。もう諦めるライク、相手が悪すぎる。そして無駄に俺をノイローゼ寸前に追いこんだ責任を取れコノヤロウ！

「そうですか？ じゃあ見てくださいよ、私のかわいい子達を！ 絶対使いたくなりますからあ！」

シャーナ様は子供のくせに親バカな母親のように、興奮気味に自分の作った剣達をライクに見せつけようとする。シャーナ様、そんなに頑張らなくても勝敗はもう目に見えております。

「ど、どんなにすごい剣だとしても、俺の相棒はサウザートだけなんだ。他の剣なんて考えられないんだよ！ 残念だけど諦めてくれ」

……感動した。感動したぜ相棒。

照れくさいけど、お前の気持ち、しっかり俺のハートに届いたぜ！ ハートなんてないけど。

しかし、これはまさかの反撃だった。悪いなシャーナ様、こいつの意志は堅いみたいだぜ。代わりに俺が貴女様の気が済むまで、その右手の餌食になるので許してくれないか？ もう一度、俺を天国に連れて行ってくださああい！

「何で……何ですか？ そんなに私の剣は駄目ですか？ 見る価値もありませんか？」

シャーナ様は今にも泣き出しそうな声をしている。

無理もない、自分が一生懸命作ったものを見ようとせせずに拒絶されるなんて鍛冶師にとって相当な屈辱だろう。俺だってロクに振られもせずに駄剣だと言われたら気分が悪い。

「いや、そういうわけじゃなくて。あの、その、あの、むおおおおおお！」

ライクはパニックを起こし、しどろもどろになったかと思ったら、変な奇声を上げた。その声が原因で、ハンターギルド内にいる全員が、何だ何だところらを訝しげに見ている。

折角優勢だったのに、泣きそうなのを見た途端にこれだ。これは振り出しに戻ったと言うべきか。いや違う、これはどちらかと言えば両方瀕死状態だ。先に決定打を出した方が勝つな。

シャーナ様は周りから見られているのに気付いたのか、いつの間にか泣きやんで涙を拭いていた。二人の間に沈黙が押し寄せる。観客が見守る中、緊迫した空気が漂う。

ふと思っただが、これ賭けたら儲かるんじゃないか？ 大体の予想はついてるし。

「あの、だからね、俺には……なあサウザート？」

先手を切ったのはライクだったが、これは果たして先手と言っているのか。

あるうことか俺に助けを求めてきたぞ。俺に今すぐ口とシャーナ

様以上の専属鍛冶師をくれたら助けてやらんこともないぞ。両方無理だろうけどな。

「……私の両親は二人共、皆さんと同じハンターでした」

そんなライクを無視して、シャーナ様が神妙な様子でゆっくり口を開いた。緊迫した空気が更に重くなる。

うう、息苦しい。息なんかしてないけど。

「でも腕はそんなに良くなって、二人でやっと一人前という感じだったので、報酬の良い依頼はほとんど受ける事ができずに、家計は火の車でした。なので、武器もロクに買う事も鍛え直す事もできずにポロボロの剣を使っていました」

周りの観客の大半以上が何度も相槌をうっている。シャーナ様の話に共感しているようだ。

実際、シャーナ様の両親みたいな一人ではロクに依頼をこなせないハンターは多い。むしろ一人で難易度の高い依頼を受けるライクのような存在の方が珍しい。だから大体、ギルド内の数人で組むわけだが、もちろん報酬は折半になるので儲けが少ない。裕福なハンターなんてほんの一握りだろう。そのため、ハンターのほとんどは新品の剣を買う事もできずに、戦死した物の遺品などを扱う中古武器屋で剣を買っている。

ああ、昔の事を思い出して鬱になりそうだ……。

「私は貧乏でも両親がいるだけで幸せでした。でもそんなある日、私の誕生日に豪華な食事を食べさせてやると言って、無理して難易度の高い依頼を受けたのです」

ライクを含め、ギルド内の全員が固唾を飲んでシャーナ様の一言

一言に集中している。しかし、エリスだけは片肘をついて適当に聞いている風だった。緊張感の無い奴め。

「他にも仲間がいるから大丈夫だと両親は言いましたが、二人が帰ってくる事はありませんでした。唯一の生還者の方に話を聞くと、こちらがかなり押ししていたらしいですが、両親の剣が二つともその激しい戦いに耐えきれずに折れてしまった事で、急に戦況が悪化し、両親は逃げる事もできずに無惨に殺されていったそうです……」

シャーナ様……、ああ、抱きしめてあげたい。その弱々しく華奢な体を優しく抱きしめて慰めてあげたい。くそ、何で俺には手が無いんだよ！

「もつといい剣が買えたなら両親が死ぬ事はなかったでしょう。だからその時、私決めたんです。鍛冶屋になろうって！ どんなモンスターにも負けない強い剣を作ってやるんだって。私はただ自分の作った剣を役に立てて欲しいんです。私みたいに両親を失った子供を増やさないためにもお願いします。私の剣でどうか戦ってください！ お願いします！」

シャーナ様は真剣な表情で何度もライクに対して頭を下げた。

……感動した。感動しましたシャーナ様。貴女様は鍛冶師の鑑だよ！ 先程のライクに対する感動なんてグシャグシャに丸めてゴミ箱に捨てましたさ！ 貴女様が世界一だよ。うう……。

ギルド内にむさい男達のむさい泣き声が反響する。その中で一番の大泣きを見せている男は泣き声で言った。

「しゃ、しゃーにゃ……。わかつたびよ、もれいらいぼつけるびよ……いっぴよにあいばんぶりゃいかーをたばそう、そびちえこによもたちのみらいをまひよるんだああああ……うびゃーんいいいはなし

だびゃ ああああ

泣きすぎていて何を言っているのかまったく理解できないが、多分依頼を受けると言っているのだろう。

そうだ受けてやれライク、これはもう男として受けるしかない。俺をノイローゼ寸前にした事は水に流してやる。だからシャーナ様を……シャーナ様を……シャーナ様ああああ！

「依頼受けるのね？　じゃあ契約書にサインして頂戴」

「ひゃ、ひゃい。しますみよしみやすともさ」

エリスはギルド内が感動の嵐に覆われている中で、一人だけ淡々と仕事を済ませようとしている。それどころか何か楽しんでいる風でさえある。契約が決まって嬉しいんだろうが、なんて冷たい女なんだ。剣の俺でさえ、お前よりも温もりがある自信があるぞ。

ライクがエリスに促されるままに契約書をロクに読まずにサインをすると、ギルド内でむさい男達の拍手喝采が巻き起こった。シャーナ様はライクに対して何度も頭を下げている。こんな奴に頭を下げる必要なんてないですよ！

契約を交わした後もライクの号泣はなかなか止まず、俺達がアイアンブレイカー討伐に出発したのは、それから一時間後の事だった。俺たちは今、街の南門を抜けて道に沿ってひたすら南下している。

「おいシャーナ。本当に大丈夫か、持つぞ？　というか街で待っててもいいのに」

自分の何倍もある巨大な鞆を背負い、その重さで腰が『く』の字に曲がってしまっているシャーナ様を、ライクは心配そうに見ていた。

「いえ、大丈夫ですよ。自分の剣に責任を持って最後まで付き合うのも鍛冶師の仕事ですから。それにライクさんが戦う前に疲れてしまったらどうするんですか……せえせえ」

さすがはシャーナ様だ。鍛冶師がそこまでする必要があるのかは疑問ではあるが、こういう仕事への姿勢が、彼女をこの若さで上級鍛冶師の称号を得るまでにしたのだらう。しかし、あまりにも危なっかしくて、逆に心労で倒れてしまいそうだ。

……あ、転けた。

「はうううう、助けてくださいいい……」

「ほら、だから言っただろ。俺が持つからシャーナは後ろからついてくるだけでいいよ」

「だ、駄目です。それは私のですよ、返してくださいよぉ！」

ライクが鞆を持ち上げて背負おうとすると、シャーナ様はオモチヤを取り上げられた子供のように、ライクの足にしがみついて足をバタバタさせている。

ライクが仕方がなく、わかったわかったとシャーナ様に鞆を返すと、彼女はそれを我が子のように、大事そうに抱きしめた。やはりどう見ても、可愛いお子様だ。

「ごめんなさい。でもこれはお母さんが私に買ってくれた物で大事にしてるんです」

「そうだったのか。何も知らずにすまなかった」

「はううう……」

こいつ、またシャーナ様の頭を！ やめろ、シャーナ様が嫌がつて……まんざらでもなさそうに頬を赤らめている。ま、まさかライクに恋を！？

「ライクさんってお父さんみたいですよね」

そっちな、納得。ライクは年が若いっただけで、どこか親父っぽい所がある。すぐ屁はするし、靴下をそこら辺に脱ぎ捨てるしな。

「な……、バカ言うな！ 俺はまだそんなに年を取っていない。シャーナの父親になろうと思ったなら最低三十以上の嫁がいないと駄目だろう？ さすがにちよつと年上すぎるよ」

「えへへ、ですよねえ……って、三十じゃ私十二歳って事になるじゃないですかあ！ もうライクさんの意地悪！」

レイテナ国では十八歳になるまでに子供を産む事は固く禁じられている。なので、三十歳なら最高でも十二歳の子供しかいないはずなのだ。

年の事を気にしているシャーナ様はすかさずその事に気付いたように、一人だけオヤツのケーキが小さく切り分けられた子供のようにな、拗ねてそっぽを向いてしまった。

失礼だぞライク、こんなに可愛い女性が十二歳のはずないじゃないか。どう見ても十歳以下だろう。

「す、すまん」

まあ、とりあえずシャーナ様がライクにたぶらかされずに済んでよかった。女性が苦手で恋愛下手のライクを好きになんかなったら

絶対シャーナ様が不幸になるに決まっている。

「この通りだよ、許してくれよ。後でお菓子買ってあげるから」

「……ひどい！ ライクさんなんて本当に知らない！」

「ええ……」

でも恋愛っていいよな、俺もしてみたいよ。そもそも、剣が恋する相手ってやはり剣なのか？ 俺は今までいくつもの剣を見てきたが、トキメキを感じた事など一度もない。

「ごめんなさい、許してください、お願いします……」

それ以前に剣に性別があるのかも怪しい。もしあるならば、俺は意志を持った時からこういう口調なので恐らく男だろう。という事は女の剣を探さないといけないわけだが、もしかしたら鍛冶師の性別で剣の性別も決まるのではないだろうか。

「うわーん、許して許して許してー！」

もしそうだとしたら、鍛冶師なんてほとんどが男だ。だから剣は大半が男という事になる。

トキメかないはずだよ。女が作った剣なんてそう簡単には……ある、あるじゃないか！ 目の前に三十本程！ 見たい、見たいぞ！

「そうだ、まだシャーナの素晴らしい剣を見せてもらってなかったよな！ 俺見たいなあ、見せてくれないかなあ」

「あ、そうですね！ 結局見てもらってないじゃないですか。ちゃんと見てくださいよ、ライクさんが使う剣なんですから」

俺が考え事をしている中、あの手この手で鬱陶しいぐらい謝罪を

繰り返していたライクは、正攻法じゃ無理と悟ったのか、話を切り替える作戦にでた。これが予想以上に効果てきめんで、シャーナ様は急にご機嫌な様子で鞆の中を探り始めた。

ナイス！ グッドタイミングだぞライク、やればできるじゃないか。お前は自分の恋愛はからつきしたが、他人の恋愛の助けをする才能はあるかもしれないぞ。これから恋のキューピットライクと呼んでやろうと一瞬思ったが、長いし気持ち悪いから呼ばない。

シャーナ様は鞆の中から皮製の鞘に納まった一本の剣を取り出し、鞘を外してライクの目の前に差し出した。

「はい、まずはバランスの取れた剣身が自慢のローラちゃんです」

ローラと呼ばれる俺と同サイズぐらいの両刃の剣は完璧なまでに左右対称で、洗練されたフォルムをしていた。

これが上級鍛冶師の女性の剣なのか。確かに今まで見てきた剣とは品格が違うように見える。ライクもその気品溢れる姿に感心したようで、羨望の眼差しを浴びせている。

しかし、まだまだ俺の心を揺さぶる程の女じゃないな。もっとだ、もっといい女はいないのか！

「次は頑丈さが売りの長剣、ユルフィちゃん。次は鋭さに重点を置いた、エストツクのエストちゃん。次」

シャーナ様は誕生日プレゼントを自慢したい子供のように生き生きとした表情で、次々と鞆から剣を取り出しては見せてくる。

俺の倍以上の剣身を持つ包容力のありそうな大剣アマンダ。鏢に小型のバックラーが取り付けられている堅実そうなシールドソードのガードナ。ちなみにシールドソードとはシャーナ様が勝手に考えた剣の種類だそうだ。

その他にも、なんと刃が二枚刃になっていて、シャーナ様の剣の中でもとりわけ異彩を放つエキドナなどと、どれも一見似てそう
で、実はまったく違う個性を持ついい女ばかりだった。

これがハーレムというやつか。俺は幸せすぎて天にも昇りそうな気分だった。でもやっぱり、どうせ天に昇るならシャーナ様に研がれて昇りたい。

確かに今までとは違い、トキメキのようなものを感じたような気がするが、これは素晴らしい剣を見た感動であって、恋愛感情とは少し違う気もする。そもそもトキメキという感情がよく分からない。やはりシャーナ様の力をもってしても、俺が惚れてしまうような女は作れないのだろうか……。

落胆した俺は次の瞬間、シャーナ様に土下座で謝りたい気分になった。

「さーて、次で最後ですよ。ついに今回の私の最高傑作、軽さと鋭い斬れ味が自慢の直剣エリザベルちゃんです！」

「おお、美しい！」

な、何て華麗さだ……。一見、華奢なように見えるが、極限まで研ぎぬかれた鋭い剣身は不思議な力強さを醸しだしている。他の剣も同様だったが、無駄な装飾は一切なされていない。

しかし、どんな宝石がちりばめられている装飾剣などよりも、シンプルな出で立ちのエリザベルの方が美しく思えた。真の美人には自分を彩るためのオマケなど必要ないという事を証明しているようだ。正に剣の女王と呼ぶにふさわしい女だ。

ライクも同じ事を思った様だ。エリザベルの姿を見た瞬間、いの一
番に感嘆の声をあげ、シャーナ様からエリザベルを奪い取ると、
熱い眼差しを送っている。

何だろう、この気持ち。何かモヤモヤした感情が俺の中を駆け巡っている。これが愛ってやつなのか？ 何か思っていたのよりもドス黒い感じだな。時に恋愛とは甘酸っぱいものから非常にドロドロしたもののへと変貌を遂げると誰かが言っていたが、こういう事なのだろうか？ 変貌も何も最初からドロドロなんだけど……。

何にせよ、ついに俺も初恋をしたわけだ。これで俺も大人……大剣の仲間入りだ！ といつても、本当に大剣になったわけじゃないからね。スリムな直剣のままだ。

「どうです、気に入ってくれましたか？」

「ああ、すごいよ、この剣。美しいだけじゃない、こんな軽くて鋭い剣を俺は持ったことがない」

ライクは俺の愛する女を勢いよく振り回す。ああ、振り回されている姿も優雅で美しいなあ。

……って、こら！ 俺の愛する女を乱暴に扱うな！ 今すぐ鞘にしまつて丁重に扱え！

「ふしゆるるるるる！」

ほら、リザードマンもあんなに舌巻いて怒ってるじゃないか！

……え？

「きゃあ！ 変な緑色の気持ち悪い生理的に無理なブサイクな爬虫類が出てきましたあ！」

シャーナ様が何気にひどい事を連発しながら、すごい速度で鞆の後ろに隠れて、突然現れたリザードマンの様子を片目でチラっと伺っている。大事な鞆を盾代わりにしていいのだろうか。

「くそつ、俺とした事がエリザベルに夢中で気が付かなかったぜ」

俺の女に夢中になるな！……どさくさに紛れて俺の女って言うちやった。

そんな事よりも早く俺を鞘から抜け。いくらエリザベルがシャーナ様の最高傑作であろうとも、慣れていない剣で対抗できる程リザードマンは甘くない。

しかしライクはそんな俺の意に反して、エリザベルを片手で構えると、地面を強く蹴ってリザードマンに突進を仕掛ける。それと同時に、鞘に納まったままの俺も巻き添えを食って疾走する。ああ、握られてないとこんな感じなんだな。痛みを感じなくていいという安心感からか、俺は迫りくる風を心地よく感じていた。

しかし、それは愛する女が代わりに痛い思いをするという事だ。シャーナ様の作った剣だし、まず折られるという事はないだろうが、それでも俺は最低だ……。

「でりゃあああ！」

ライクは勢いよくリザードマンの間合いに飛び込むと横切りの態勢に入る。駄目だ、リザードマンはすでに防御の構えに入ろうとしている、間に合わない。

すまない、許してくれエリザベル……！

しかし、事は俺の予想通りには運ばなかった。

疾風？ 稲妻？ どう表現すれば適当なのかが俺には分からない。剣など存在していなかったかのように、見えない程の剣速による斬撃が、リザードマンが防御するよりも早く、その腹部を捉えた。

刹那、リザードマンは真つ二つになり、その場にあっけなく転がった。もし俺に口があつたならば、ポカンと限界まで開いていただろう。

「すごい……、何て軽さと切れ味なんだ。エリザベルすごいよ！」

ライクは未知なる力を手に入れたように驚き、エリザベルに羨望の眼差しを向けている。

モヤモヤが何故か先程までよりも強くなっていく。苦しい、恋愛とは何て苦しいんだ。人間はしょっちゅうこんな苦しい思いをしているのだろうか。ああ、やっぱり普通の剣がいい。

「そうでしょ！ 私のエリザベルは最高なんですよ、エツヘンです！ あ、でもそんなに耐久性はないので、あくまで止め用として使ってくださいね」

シャーナ様は初めてのお使いを完璧にやり遂げた子供のように、誇らしげにポンと自分の胸を軽く叩いた。すみませんシャーナ様、今の俺には可愛いと思える程の余裕がありません。

「そういえば、シャーナも剣に名前つけてるんだな。エリザベルとかローラとか」

「ええ、そうですよお。皆、私の娘のようなもんですから！ 実はですね、ライクさんも剣に名前をつけていると聞いて、パートナーをお願いしたんですよ。そこまで剣を愛しているライクさんなら、きっと私の剣も大事に使ってくれると思っただので」

「そうだったのか。……ごめんな、そんな愛娘達を見ようとせせすに断ろうとして」

「そ、そんな別に……はうううう」

ライクはまたシャーナ様の頭をナデナデし始めた。

ああもう、何だこの甘い雰囲気は……はあ、今の俺にはツっこむ
気力などない。勝手にやってくれ。

「さて、ここに止まっていたら、またモンスターの襲撃を受けるか
もしれない。先を急ごうか」

「は、はい！ ……あ、ライクさん、そこを右にいけば採掘場です
よ」

3・アイアンブレイカーと三十本の女達

広大な土地に、巨大な隕石でも落ちて来たのではないかというぐらいにポツカリと空いた穴。深さはせいぜいライク五人分といった所だが、村がすっぽり入ってしまいそうな程の広さがある。

この穴の何がすごいって、人が作った人工物という事だろう。ここはエルトリル近辺で最大の採掘場で、本来ならば穴を埋め尽くす程の数の屈強な男達が、ツルハシを片手に一日中鉱石を求めて汗だくで掘り続けている。そんなエルトリル屈指のむさ苦しい場所なのだ、今は見る影もなく、いくら辺りを見渡しても屈強な男は一人として見当たらない。その原因は明らかだ。

「おいおい、これはまた大きなアイアンブレイカーだな……」

採掘場内の少し離れている場所からこちらを警戒している巨大なモンスターを、ライクはうんざりした様子でじっと見つめている。

熊の体にサイの頭をつけたような出で立ちをしているが、その大きさは熊とは比べ物にならない程大きい。四つん這いの態勢にも関わらず、背中が穴を飛び出してしまっている。その気になれば、この程度の穴なら簡単に飛び出してきそうだ。採掘場の上にいるのに、まったく安心感が得られない。

そして何よりも一番特徴的なのは、全身が硬い鉱石に覆われている事だろう。こいつこそが今回の討伐対象であるアイアンブレイカーだ。

名前の通り、どんなに頑丈な武器を持ってしても、傷一つ負わせる事すら非常に困難で、逆にこちらの武器が壊されてしまうという厄介な相手だ。

……よし帰ろうか。あんなの絶対倒せないだろ、でかすぎる。

「この鉱石は上質ですからねえ。あれでも小さいくらいかも……」

アイアンブレイカーの主食は採掘場の地下に眠る鉱石だ。上質な鉱石を食べば食う程、体は大きくなり、体を覆っている鉱石も硬くなる。

普通は地中でひたすら鉱石を食い散らかし、自ら地上に出てくるという事は滅多にない。しかし、採掘作業中に少しでも奴の体に触れでもしたら最後、自分の餌場を守るために地上に出てきて居座り、見た目通りの凶暴さを遺憾なく発揮する。なので、こいつを倒さない限り、エルトリルの資源不足は一気に加速するというわけだ。

でもやっぱり帰った方がいい気がする。何かまだモヤモヤするし。

「仕方がない、やるしか道はないだろう」

いや、あるだろ道。後ろを向いてごらんよ。ほら、果てしなく続いている……よおお!?

ライクは何を思ったのか、突然すぐ近くに設置されている採掘場に降りるための階段を駆け降りた。お前は何故いつもそうやってすぐ生き急ぐんだい？

「ラ、ライクさん!？」

「シャーナ、君は上から俺に剣を投げしてくれるだけでいい。手始めに何でもいいから剣をくれ」

おいおい、か弱いシャーナ様がそんな事できるわけないだろ。と
いうか、何で受け取る前に降りちゃったんだよ、この馬鹿ライク!

「わかりました！　じゃあローラちゃんを！」

シャーナ様は、穴の上からこちらに向かって声を張り上げると、鞆の中からローラを取り出して振りかぶった。無理だつて、シャーナ様！

ほら思った通りだ、投げられたローラは綺麗な弧を描きながらイクの手に……おみそれ致しました。

見た感じ、まだまだ余裕で飛距離を伸ばせそうだ。やはりシャーナ様怪力説は有力なのか……。

とにかく、こうしてアイアンブレイカーとの戦いの幕が切つて落とされようとしているわけだが、ライクの事だからどうせ……。

「うおおお！　勝負だ、アイアンブレイカー！」

だよな、そうだよな。ライクくんは本当に期待を裏切りませんなあ、悪い意味で。

ローラを鞘から抜くと、ライクは慎重の『し』の字も無い猛ダッシュでアイアンブレイカーとの距離を急速に詰める。それに答えるように、奴が大きな雄叫びをあげると空気がピリピリと震えた。

しかしライクは少しも動じない。正直、動じてほしかった。それにしても近くで見ると、更にでかいなこいつは。折り曲がっているからよく分らないが、腕だけでライク四人分かそれ以上の長さがあるぞ。よくこんなのが地面に埋まっていたな。

「ライクさん！　アイアンブレイカーは弱点部位を大きな鉾石で覆っています！　そこを重点的に狙ってください！」

「了解！」

弱点部位……あそこか。奴の背中突起物で、下から見上げても分かる程にひとときわ大きいのが一つ。あの鉱石の塊を破壊できれば、こちらの勝ちというわけか。

まあ、今回俺の出番は無さそうだから、高見の見物といこうじゃないか。ふんふふーん。

「グオオオオ！」

ぎゃあああ、避けてえええ！

アイアンブレイカーは突然大きな左手を振り上げた。直後、その手が俺達をペツチャンコにするべく、勢いよく振り下ろされる。

ライクは紙一重で右に避けたが、振り下ろされた衝撃で発生した突風で、バランスを崩して転びそうになっている。

だめだ、心臓なんてないけど心臓に悪すぎる。まったく高見の見物になっていない。ライク、俺を今すぐシャーナ様の元に投げてください。研ぎ研ぎされながら見てるから。

「うおおおお！」

だよね、そんな気の利いた事してくれないよね。

今回の戦いで、唯一の救いはアイアンブレイカーの動きがそれほど速くない事だろう。むしろかなり遅く、奴は今隙だらけだ。

ライクは瞬時に態勢を立て直すと、奴の振り下ろした左手をつたって、背中まで一気に登りつめた。

「よーし、ここだな。とりゃああああ！」

そして弱点の鉱石に狙いを定めると、息もつかない連続攻撃を…

……あ。

「ローラちゃん!? はうううう」

ローラアアアアア!

四度目の斬撃を入れた瞬間、彼女の洗練されたバランスのいい剣身が無惨にも碎け散った。うう、ローラ、俺が初めて出会った剣の女よ。俺は絶対にお前の事は忘れないぞ。

「グオオオオオ!」

「ちくしょう、ここまで硬いとは!」

アイアンブレイカーはライクを振り落とすべく、体をブルブルさせた。ローラを失ったライクはそれに素直に応じるように自ら飛び降りると、シャーナ様のいる方に駆け寄る。

「シャーナ、次の剣を!」

「えっと……えっと……」

まずい、シャーナ様がローラを折られたショックからか混乱している。

「シャーナ早く!」

「ど、どれを渡せば!?!」

あ、危ない! 避ける馬鹿!

「グオオオオオ!」

「ちい!?! そんなのまであるのかよ、聞いてないぞ!」

モタついているのを敵さんが悠長に傍観してくれるはずもなく、奴は猛ダツシユで近づいて来ると、右手の中指の爪先から巨大な刃を出現させ、それをライクめがけて振り下ろしてきた。

ライクは予想外の攻撃に慌てながらも、またしても紙一重で避けたが、態勢を崩して回避先でへたりこんでしまった。

しかし、奴は待つてはくれない。次こそ決めると言わんばかりに追撃の態勢に入ろうとしている。だが、ライクがそれを黙って見守るはずがなかった。

「シャーナ、盾だ。盾付きをくれ！」

「は、はい！」

シャーナ様は慌てて鞘からシールドソードのガードナを取り出し、ライクに投げ渡した。直後、アイアンブレイカーの横薙払いが俺達を襲つた。

「ぐあああ！」

ライクは真つ二つにされる寸前の所で、鞘に納まつたままのガードナに付いている剥き出しの盾部分で巨大な刃を受け止めたが、あまりにも力と大きさが違いすぎる。ライクは衝撃でぶっ飛ばされ、ガードナの剣身は鞘から抜かれることなく、盾もろとも砕かれた。

「ライクさん！ ガードナちゃん！ はうううう……！」

採掘場の上からシャーナ様の悲痛な叫びが聞こえてくる。

そんな中、俺は一人でぶっ飛ばされた時の気持ちのいい浮遊感の余韻に浸っていた。ライク、シャーナ様、ガードナ、すまない。だつて、ビューンって！ ビューンって！ …… 本当にすまない。

そんな事をしている間にもアイアンブレイカーはライクとの距離を詰めてくる。

……うお、立った。あいつ立ち上がりやがったぞ！？

「おいおい、嘘だろ……」

ただでさえ、でかい凶体をしているというのに、立つと更に山のように大きく見える。俺達は今、その巨体を作りだしている影の真ん中辺りにいる。

……あの、勘弁してください。何か倒れ込んで来てるように見えるんですけどおおお！？

「嘘だろおおおお！？」

ライクは慌てて巨体の足元めがけて駆け出し、頭から滑り込んで股下を抜けた。その直後、もの凄い衝撃音と共に巨体が地面にめり込んだ。良かった、俺、剣で良かった。もし俺が人間だったら確実に小便漏らしていた。

ライクは……大丈夫だ、濡れてない。やるな、ライク。

「大丈夫ですか、ライクさん！？」

「ああ、大丈夫さ。ちょっとびびったけどな。でも、おかげで突破口が見えたよ」

マジか？ 俺には股間ぐらいいしか見えなかったぞ。

そうか分かったぞ、突破口とは逃げ道の事だな。それなら俺にも見えているぞ、そこにある階段を昇ればいいんだ。さあ帰ろう！

「なるべく細い剣を二本くれ。あと別に二本、同じような剣を用意しておいてくれ」

「は、はい」

あら、戦う気満々なのね……。

シャーナ様から新しく二本の剣が投入される。エストックのエストとレイピアのピアンだ。どちらも斬るというよりは弱点を的確に突くタイプの剣。奴相手にはあまりにも脆すぎるぞ、どつするんだ一体。

「グオオオオオ！」

アイアンブレイカーは激しい雄叫びと共にゆっくりと起き上がると、こちらに振り向いた。

「さあ、アイアンブレイカーちゃん、こっちですよー」

ライクはエストとピアンを擦り合わせ、キンキンという耳障りな音を立てながら、イラっとくる口調と声でアイアンブレイカーを挑発している。

その挑発に乗せられたのかは分からないが、奴は低い唸り声をあげ、するどい目つきでこちらを睨んでいる。

そして、右手から先程の巨大な刃を再び出したかと思うと、猛然と俺達に向かって突進を仕掛け、器用に目の前で急停止をしながら、巨大な刃を振り下ろしてきた。

空間を斬りさく強烈な縦の一撃。並みのハンターなら恐怖で動けないだろう。しかしライクはそれを待ってましたと言わんばかりに、素早く避けると懐に潜り込む。

おい、懐に入っちゃったら背中に攻撃できないじゃないか、一体どうするんだ？

そんな俺の疑問はすぐに解消される事になる。

「まずはその邪魔な右腕から頂く！」

ライクの狙いは奴の右腕の関節部分、肘だった。肘を曲げるという動作をするために、鉋石と鉋石の間にわずかだが、隙間が生じているのだ。

さっきの一瞬でそれに気付いていたのか。我が相棒ながら恐ろしい奴だぜ。

ライクは勢いよく飛び上がると右腕にしがみついて、その隙間にエストを突き刺した。

「グオオオオオオ！？」

けたたましい轟音を鳴り響かせながら、アイアンブレイカーは右手の力を失い、その場に屈服した。

奴は硬い鉋石に覆われている代わりに、中の本体はプリンのように脆い。なので小さな剣でも、あの巨体に対して大ダメージを与える事ができたのだ。さすがだぜ、相棒。

奴は無理に動かそうとすればする程、余計に剣が食い込み、自爆している。ライクはこの機に乗じて、今度は左腕も封じにかかろうした。

また立ったああああ！

ただではやられんぞと言わんばかりに、アイアンブレイカーは再

び立ち上がる。これではさすがに届かない。

「ならば好都合、先に左足を頂く！」

なるほど、足も腕と一緒に膝に隙間が存在しているわけか。

ライクは木登りチャンピオンのごとく鮮やかに左足をよじ登ると、隙間にピアノを突き刺した。

再び轟音をあげながら、奴は膝から倒れ込んだ。

「ふう、これでしばらくは動けないだろう」

ライクは先の二回と同様に、左腕にはショートソードのベリ、右足にはロングレイピアのフランソアを突き刺し、完全にアイアンブレイカーの動きを封じる事に成功した。

「やりましたね、ライクさん！ きゃっほーきゃっほーですよお！」

シャーナ様は正義の味方を生で見た子供のように無邪気にはしゃいでいる。もし俺に手と足があるならば、一緒に勝利の舞でも踊ってあげれるのに。悔しい。

「喜ぶのはまだ早いよ。止めを刺さないと時間が経てば、また起き上がるだろう。問題はここからなんだよなあ」

ライクはアイアンブレイカーの背中に乗り、例の大きな鉱石のコ

ブをコンコンと叩きながら面倒くさそうな表情を浮かべている。ここからは完全な作業になるので、ライク的にはもう満足といった所だろう。

「人手を呼んでいる暇もないし、やるしかないな。シャーナ、一番丈夫な剣を貸してくれ」

「はい、どうぞ。ユルフィちゃんです」

ライクは頑丈さが売りの長剣ユルフィを受け取ると、呼吸を整えて集中している。アイアンブレイカーの鉱石破壊で一番大事なのは正確さだ。

ライクは十分に集中力を高めると、数ミリのズレもなく、的確に大きな鉱石の一点への集中攻撃を開始した。

さすが頑丈さが売りなだけあって、ローラの時以上の斬撃を繰り返しているにも関わらず、今だにユルフィは健在であった。

行けユルフィ、見事破壊できたら俺の愛人にしてや……あ。

「ユルフィちゃあああん！ はううう……」

ユルフィイイイイ！

え、俺のせい？ 俺が余計な事言ったから？ 違う違う！ 俺は何もしていない！

「くそつ、チマチマ攻撃しても駄目だ。シャーナ、大剣を貸してくれ」

「はい……」

淡々と破壊作業をこなそうとするライクに対して、シャーナ様は

泣きそうな顔をしながら、元氣無さげに大剣アマンドを投げ渡す。アマンドの重量でライクはバランスを崩して落ちそうになった。

お前みたいな鍛冶師と剣の気持ち分らない冷たい男は一度落ちてしまえばいいんだ！……あ、俺とアマンドも一緒に落ちてしまつから今のは無しで。

「よーし、てりゃああああああー！」

ライクが再度集中力を高め、アマンドを両手で構えると、気合いのこもった重撃を狙いの一点に命中させた。刹那、城壁に大砲が直撃した時ぐらいの激しい衝撃音と共に……

「……あ」

アマンドアアアア！

「アマンドちゃああああん！」

重さがあれば威力は増すが、その分衝撃も増す事になる。アマンドは自分自身の破壊力が仇となり、たった一撃で折れてしまった。しかし、そんな犠牲を払っても、アイアンブレイカーの弱点を覆っている鉱石を破壊する事は叶わなかった。

「くそつ、駄目か……。でも、確実にダメージは与えているはずだ。シャーナ、どんどん剣を渡してくれ、こうなったら数で勝負するしかない」

「はい……。曲刀のアリエルちゃんですう……」

子供の様にはしゃいでいたシャーナ様は、もうどこにもいなかった。

カレエエエエン！
ミラアアアア！
ユメエエエエル！
アイナアアアア！

もうやめろ……、もうやめてあげてええええ！

彼女達は何をしたっていうんだ！ こんな事のために彼女達は……、彼女達はあああああ！

「くそつ、もう少しのはずなんだ。次！」

そんな俺の訴えなど露知らず、ライクは次なる犠牲者をシャーナ様に要求している。

もう何本の剣が犠牲になったのだろうか……。しかし、一向に背中中の鉱石が碎ける気配はない。このままでは彼女達が無駄死になっってしまう。それだけは絶対にあってはならない。

「次はエキドナちゃんです……」

シャーナ様は最初の方は俺と共に、散り行く女達の名を呼んでいたが、今はただ泣きだしそうなのを唇をきゅつと噛んで我慢するしかできない様子だった。

彼女もこうなる事は少なからず覚悟してここに来ているはずだ。しかし、どんなに覚悟しようとも、自分が愛情を込めて作った、娘のような存在の剣達が次々と折れていつているのだ。理解していて

も、仕方がないと割り切れるはずがない。それでも彼女は涙を必死で我慢している。

今の彼女に可愛いなんて言葉は似合わない。今の彼女は誇り高き上級鍛冶師として、立派に仕事を全うしようとしているのだから。

それなのにライクときたら、そんな気も知らないで淡々と剣をただの道具みたいに……いや、こいつはそんな奴じゃないよ。そんな奴だったら俺をここまで大事にしてくれないよ。

一見気丈に振る舞っているように見えるが、プレッシャーに押しつぶされそうな追いつめられた表情を浮かべている。エキドナを握る手には尋常じゃない汗をかいている。こんなライクを俺は見た事がない。

傷ついているのは二人共一緒だ。二人共一生懸命戦っているんだ。それなのに俺は……。

「とりやあああ！ でええええい！ くらいやがれえええい！」

ライクの気合いを込めた三連撃が見事狙い通りの場所に命中する。その代償に異端児エキドナはその生涯を終えた。

だが、その死は無駄にはならなかった。

「やった、ついにやったぞ、今度こそもう少しだ。シャーナ、次だ！」

ついにアイアンブレイカーに異変が生じたのだ。ピシッという音と共に鉱石に亀裂が入った。やった、もう少しだ！

見てくださいよ、シャーナ様。貴女が一体どんな意図であんな変わり者作ったのかは知りませんが、その変わり者が自分を犠牲にしてやってくれましたよ！ 黙ってないで何とか言ってくださいよ、シャーナ……あ。

「ん？ どうしたシャーナ、次を……あ」

泣いていた。必死で止めようとしているが、涙は絶え間なく溢れだしていた。

震える両手で大事そうに剣を抱え込んでいる。それは俺の愛する女、エリザベルだった。

止めを刺すためにシャーナ様を作った剣、それがエリザベル。彼女がそれを手にしているという事はそういう事だ。彼女以外の剣は全て犠牲になつてしまったのだ。

「どうびよ……、えりざべりゅちゃんじゃ……おつかいくださいやい……ひっく……」

シャーナ様は震えた手で力無く、エリザベルをこちらに投げようとしている。あの状態では満足に投げる事もできないだろう。

もうたくさんだ、もうたくさんだよ！ もうシャーナ様が悲しむのはたくさんだ！ エリザベルも犠牲になる必要なんかない！ あるじゃないか、まだあるんだよ。そうだよな、ライク！

「シャーナ、エリザベルは必要ない。だってそれは止めのための剣だろう？」

「……え？」

「女王様は最後の最後までどっしり構えてるもんだ。これはナイトの仕事だ。いくぞ、サウザート！」

ライクに俺の思いが伝わった、わけではないだろうが、俺はそう思いたかった。

まったく、ダメ男のくせにかっこいい事言いやがって。でもお前の言うとおりで、ライク。俺とお前でエリザベルとシャーナ様の想

いを守るんだ！

ライクは俺を鞘から抜くと、今まで以上に深い深呼吸をして集中力を高める。

うっ、勢いでやる気だしたけど、やっぱり怖いな……。

「サウザート……、折ったらすまん。許してくれな」

いや許さん。許すはずがないだろ。……いやマジで！ ねえ本当に頼むよ！？

やっぱり帰るうっうっ！

「てりゃあああああ！」

。

「ち、やっぱり一撃じゃ無理か。耐えてくれよ、サウザート！」

いたあああい！

……え、あれ？ 俺どうしてた？ さっきの何発目？ 一発目？
一発目？ てか俺気絶してた？

「くそっ、もういつちよう！ くらえええええ！」

ちよ、ちよまっ……！

うぼあうえええけら

んへらっちよー！

何これ新感覚！　こんな痛さ初めて！　全身に響く響く！　あ、もう折れる。これ次折れるぞ、俺。嫌だ嫌だ、ライク気付いて！俺もう限界！　全身が悲鳴あげてる！

「うおおおお、これで終わりだあああ！」

ライクが勢いよく俺を振り上げる。

たしかに終わりだあああ、俺が終わりだあああ！

嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ！

たしかに辛い事もいっぱいあるけど、俺はまだこいつと……、ライクと一緒に居たいんだよおおお　！

……何だ？　体が熱い。

俺の体に何やら不思議な感覚が押し寄せる。でも嫌な感覚じゃない。どちらかという力が溢れてくる。いつの間にか痛みも消えている。

今なら行ける！

「とりゃあああああ！　……やった！」

ライクが俺を振り下ろすと、アイアンブレイカーの弱点を守る鉱石は、激しい衝撃音とともに砕け散った。どうやら俺は助かったようだ。剣身は折れずに健在だ。

そんな事よりも見てくれよ、砕かれた鉱石の奥に隠されていたアイアンブレイカーの中身を。

何だ、この高級な絹糸のように美しい純白の肉は。これが柔らかい事で名高いアイアンブレイカーの中身だというのか。もう見ただけで分かる極上感。リザードマンの肉ごときを極上などと言っていた自分が恥ずかしい。

さあ、やるんだろ？ やっちゃんんだろ？ やっちゃんよな！

「シャーナ！ エリザベルの出番だぜ！」

「は、はい！」

……え？ ちょっと待つてよ、エリザベルでいつちゃうの？ 俺も味わいたいよ、ああ何かまたモヤモヤした感じが強くなっていく。ライクはエリザベルを受け取ると、鞘から抜いた。

嫌だ嫌だ、お前の相棒は俺なんだ、俺を使ってくれよ！

「おっと、お前も頑張ったんだから止め刺したいよな、サウザート」
おう、それでこそ我が相棒だ。グサツとやっちゃんいな！
ライクは俺を右手で、エリザベルを左手で、それぞれ逆手で持つとアイアンブレイカーの弱点に同時に突き刺した。

うひょおおお、とろけるうつつ！ しもふりいいい！

突き刺さった瞬間、極上の油が絡みついたかと思うと、さらっと消えてなくなっただかと思うと、柔らかいプリプリの肉の感触が押し寄せてきたかと思うと、俺の事をきゅうつと締め付けてきたかと思うと、また俺を優しく包み込んできたと思う。何回思っつて言ったんだ、俺。

未知の感触すぎて説明は無理だ！ とにかく超気持ちいい、以上！

しかも今回は隣に愛する女までいる。これはあれか、初めての共同作業というやつか！ もうこれは結婚したも同然だな俺達。とうかしたたる、結婚。

「うがあああああ！」

アイアンブレイカーの断末魔が鳴り響く。ああ、倒したんだ俺達。一時はどうなる事かと思っただよ。

……ふあああ！？

ライクが俺とエリザベルを抜いた時、先程と同じ何もいえない感触が再び俺を襲った。これは病みつきになりそうだ。もうアイアンブレイカーさん無しでは生きていけません！

「ライクさん、ありがとうございませう！」

「うおう！？」

ライクが階段を昇ると、シャーナ様が抱きついてきた。うーん、やはり父子にしか見えないな、ライクが若すぎる気もするけど。そうなると、父親のくせに娘に抱きつかれて顔を真っ赤にしているライクはかなり危ない父親という事になるな。犯罪だけはやめてくれよ、俺が鍛冶屋に行けなくなる。

ほら、犯罪の臭いを嗅ぎ付けて怖い人達がいっぱい……あんたら誰！？

「ちわー！ 解体屋です！」

何だ解体屋か。……いやいや、何で解体屋がここにいるんだよ。解体はやめてあげて！ 逮捕だけで許してあげて！

「どうも、お疲れ様ですう」

「どうも、シャーナ様お疲れ様です！ ご依頼ありがとうございます。では早速解体にかからせてもらいます。それにしても大物ですなあ。では早速解体にかからせてもらいます！ おう、お前等行くぞ！」

解体屋は豪快な挨拶をすると、大勢の若い衆を連れて、アイアンブレイカーの解体作業に取りかかった。あんなのをどうやって解体するのだろうか。少し気になる。

「シャーナ？ これはどういう……」

話についていけないライクは、何とか状況把握をしようと必死そうだった。

「え？ 私が解体屋さんと呼んで待機してもらってたんですよ？」

「ふーん、そうなのか。それはあれか、今回の依頼主の意向か？」

「へ？ 意向も何も依頼主は私じゃないですか」

そうだぞ、ライク。シャーナ様みたいな偉い御方じゃなければ、解体屋にこんなでかい奴の現地解体なんて頼む金持ってるはずないだろ。何すつとぼけた事を……え？

「え？」

「契約書に書いてましたよね？ 依頼主は私で、目的はアイアンブレイカーの素材って」

ライクは思いたそうとしているが、恐らく無理だろう。こいつ泣いてて内容まったく見てなかったもん。

「え、じゃあ誰かのために自分の剣を使って欲しいと言っつのは……」
「んー、今回は例外で自分のためですねえ。あ、でも採掘場がまた使えるようになって、皆さん大助かりじゃないですかあ。ね？」

シャーナ様はあどけない笑顔を浮かべた。まあ可愛いから俺は許すわ。ライクは納得がいけないという顔をしているが、自分の確認ミスだから責める事はできないな。

「シャーナ様、解体なんですけど、ありやかなりの時間かかりますわ。一日や二日ではどうにかするのは無理そうですね。申し訳ない」

解体屋は俺達の所に戻ってくると、シャーナ様に対して頭を下げた。

「そ、そんな、いいんですよ。最初からそんなに早くできると思っつてませんし」

さすがシャーナ様は優しいな。どこかの気の強い毒舌女だったら、すごい剣幕で小一時間ぐらい怒鳴りつけていたに違いない。

「あ、ところでこの前、そこのライクさんにリザードマン討伐を頼んだんですけどね。その余りでリザードマンのなめし革を作ったんで、どうぞお母上にあげてくださいや。確か好きだったでしょ？
リザードマンの革製品」

へえ、そうなんだ。珍しいな、リザードマンの革好きだなんて。

変わってるんだな、シャーナ様の……何だって？

「わあ、いいんですか！ きっと母さん喜びますう、ありがとございますです……あ」

シャーナ様は恐る恐るこちらに振りかえってくる。どうやら自分の失言に気付いたようだ。さて、ライクはどうだ？

「……シャーナ、母さんが喜ぶってどういう事だ？」

気付いたようだ。よし、問いただせ。これは徹底的に問い詰める。俺が許す。

「あの、その……お、お供えですよ！」

「ほう、お供えねえ。リザードマンの革製品が実用され始めたのは、そんなに昔の事じゃなかったはずだが？」

「う……。そ、それはあ……」

いいぞ、ライク。さながら名探偵だ。もっと追い詰める。泣かせてもいい、俺が許す。

「じゃ、じゃあ私は続きがあるのでこれで！」

解体屋はまずい空気を感じ取ったのか、そそくさと作業に戻って行った。いい判断と情報に感謝の意を表しますよ、解体屋さん。

シャーナ様は去っていく解体屋に必死にすがりつくように手を伸ばしているが、そんな事をしても無駄なんだよ。大人しく白状しなさい！

「……どういう事が説明して貰おうか」

「はうう、……すみませんです。実はエリスさんに、ああ言えばライクさんは絶対に依頼を受けてくれるって言われて……本当にすみません！」

まあ、そんな事だろうとは思ったよ。今思えば色々おかしかった。ギルドでのエリスの反応もそうだし、後は貧乏なのにシャーナ様にあんな巨大な鞆買ってあげる余裕があったりな。

鞆に至っては、何で鍛冶師を志す前にあんな鞆を買って貰ったのかという疑問もある。もつと早く気付くべきだったんだ。

「はあ、やっぱりエリスさんの差し金か……。まあいいや、報酬がっぽり貰うしな。それに自分の剣を役立てたいという気持ちは本当だろう。これからも頑張れよ」

「はうううう……」

甘い、甘いぞライク！ そんな女の頭を撫でる必要などない！

エリスに誑かされたか何か知らんが、こいつが嘘をついたのは真実だ。お前やギルドの皆の流した純粋な涙を台無しにしたんだ！ 分かっているのか！

「あ、じゃあお詫びにサウザートさんをピカピカにしてあげますね」

例え神が許そうと俺は許さ……あはああああん、許すっつっつっつっつっつー！

どつと疲れが出ている様子のライクは、解体屋と話があるというシャーナ様と別れ、預けられている報酬を受け取るべく、憎つくきエリスのいるギルドに向かってとぼとぼと歩いていた。

逆に俺は、天国帰りでも心も体もリフレッシュされており、騙された事など、どうでもよくなっていた。

それよりも、ライクがエリザベルをシャーナ様に返してしまったので、俺は結婚初日から妻と別居状態になってしまったのが悲しい。しかし何だろう、このスッキリ感。モヤモヤが完全に消滅している。あれは本当に恋愛感情だったのだろうか……。

まあいい、それよりも俺にはもう一つ考えなければいけない事がある。

アイアンブレイカー戦での、あの不思議な感覚。あれは一体何だったんだろうか？ 急に体が硬くなった気がした。もしかしたら魔剣の能力の一つかも知れない。

そうか俺は目覚めたんだ、体を硬くする能力に！ ……地味な上に微妙すぎるだろ。どうせならもっとかっこいい能力に目覚めろよ……。

だがこれで一つの希望が沸いてきたぞ。俺はまだまだ魔剣として成長できるのかもしれない。もしかしたら、いつかは喋る事もできるかも。そしたら俺はライクに……。

「よし、決めたぞ！」

うお、びっくりしたなあ、もう。今度は一体何だ。

「今日こそは絶対、エリスさんにガツンと言っぞ！ そのためにギルドに着くまで特訓だ！」

ライクはまたブツブツと呪詛を唱え始めた。

うん、喋れるようになったら、こいつに女の扱い方を教えてやる
う。なんととっても、俺は既婚者だからな。別居中だけど。

4・ツリスキーよ、永遠に

アイアンブレイカーと死闘を繰り広げた翌日、俺達はエルトリル郊外西部にあるエルトリル湖で釣りをしていた。別に釣りが趣味というわけではない。

小さすぎず大きすぎず、といった感じの湖で、対岸の様子がはっきりとまではいれないが、充分に見えるぐらいの大きさだ。それでもここら辺では一番大きい湖らしい。

「あー……釣れない」

ライクがボヤク。もう五十回以上は聞いている気がする。いい加減やめろ、こっちまで気分が落ちこむだろうが。

「あー……釣れない」

「スーサー……」

だからやめろって。

「釣れない……あー」

「スーサー……」

逆にしても駄目だって。

「あー、ツリスキーさん俺に力を……」

「スーサー……」

だから誰なんだよそれ。頼むからその名前を出すな、腹立つ！

というか、さっきから寝息で相槌を打つな！ 肯定してるのか否定してるのか、まったく分からんぞ！

……たまに思うんだが、俺は何でいつも誰にも聞こえないのに律儀にツツコミを入れてるんだ？ 自分で言うのも何だけど明らかに変だろ。

「スースー……」

でも仕方がないんだ。どうしても勝手にツツこんじゃうんだ。それもこれも世の中が意味不明な事で溢れているせいだ。俺の存在も含めてだ。魔剣とか作った奴でてこいよ、俺を普通にしろ。

「スースー……」

とりあえず高望みしても仕方がないので、解決できそうな意味不明から地道に解決していこうではないか。

「スースー……」

例えばそうだな、さっきから俺の思考に割り込んでくる耳障りな寝息とかな。

寝息の発信源は、俺の横で気持ちよさそうに寝ている黒いローブの女だ。面識などまったくない。女の近くではエルガニが数匹、泡を吹いて意識を失っている。

「スースー……」

まずは何故こんな状況に陥ったかという事から考えようか。

あれは昨日、俺達がアイアンブレイカーを討伐して、ギルドにた

どり着いた時の事だった。

* * *

「エリスさんはいるか！ 俺は逃げも隠れもしないぞ！ 正々堂々、俺と勝負しろ！」

ギルドに入ると、開口一番でライクはエリスに決闘を申し込んだ。つかみが肝心という結論に達したライクが、考えに考え抜いた答えがこれだ。一体何の勝負をしようというのか。そりゃ自分から来ておいて逃げも隠れも普通しないだろう。

早くも駄目な気しかない。というか、誰も聞いてないし。

「な、何だ？ このお祭り騒ぎは一体……」

ギルド内は酒場並みに騒がしかった。その騒動はギルドの外にまで響いていたので、俺は大体の状況が把握できていた。

しかし、夢中でくだらない事を考えていたライクの耳にはまったく入ってこなかったようで、未知の生物でも見たかのような顔をしている。

「ついにこのギルドにも討伐者が出たかあ！」

「いや、本当にすげえよ！ 俺達の誇りだぜ！」

ごついハンター達の賞賛の聲が飛び交っている。

なるほどな、やはりそういう事か。ギルドがこんなに大騒ぎになる事なんて一つしかない。大物モンスターの討伐者が出たんだ。

普段は同業者であり、商売敵でもあるハンター達が手を取り合っ

て喜ぶ事などほとんどないわけだが、こういう場合は例外だ。大物モンスターの討伐はギルドの株を上げるからな。

俺達が倒したアイアンブレイカーも例外ではない。まさかもう討伐の情報が流れているとは、恐るべき情報網。さあライクよ、俺達がこの祭りの主役だぞ。胸を張れ！

「な、なあ。これは何の騒ぎだ？」

ライクは入り口の側にいた男に状況説明を求めた。こいつはまだ理解できてないのか、鈍い奴だなあ。

「おう、ライク。アンナがついにアイツを討伐しやがったんだよ！女なのにアイツを倒すなんてすげえよ！」

「そうだ、すごいんだぞ、俺の相棒は女なのに……え、アンナ？」

「あら、女なのについていうのは心外ね」

むさい男達の中から、場違いな育ちの良さそうな女が、その持ち前の気品を振りまいて颯爽と登場した。しまった、俺としたことが不覚にも美しいと思ってしまった……。

失言した男は申し訳なさそうにアンナに一礼すると、そそくさと男達の群れに隠れていった。俺も隠れたい。

「あら、ライクじゃない。アイアンブレイカー討伐に行ってたんじゃないの？尻尾巻いて逃げ帰って来たのかしら？」

相変わらずの嫌みっぷりだ。喋らなければ美人なのに本当にもつたない。ちょっとはシャーナ様を見習って欲しいものだ。

「……ちゃんと討伐してきたよ。報酬を受け取りに来たんだ」

ライクがそう言うと、ギルド内に歓声が沸き起こったが、アンナが暗殺者のような冷徹な視線を辺りに配ると、何事もなかったかのようにギルド内は静まり返った。

やれやれ、ハンターが聞いて呆れる。何て肝っ玉の小さい男達だ。

「ふーん、それはおめでとう」

俺はこんなに冷めきったおめでとうは、初めて聞いた。場の空気が一気に凍りつく。いつからここは氷山になったんだ。

「ああ、そりゃどうも。そっちこそ、おめでとう」

お、いいぞライク。目には目を、冷気には冷気をだな。なかなかの冷めっぷりだぞ。見る、アンナの悔しそう表情、最高だぜ。

「ところで、お前は一体何を討伐したんだよ？」

あ、馬鹿。確かに気になるけど、それを聞くのは判断ミスだぞ。

アンナは待ってましたと言わんばかりに怪しい笑みを浮かべている。ありや相当な大物狩ってるぞ……まあ、アイアンブレイカー程ではないだろうけどな。

「聞いて驚きなさい。ノゲホーフィッシュよ！ アンタみたいに子供の助けなんか借りずに一人でね」

シャーナ様の名誉のために言っておくが、彼女は見た目と言動が子供なだけで子供ではない。

そんな事よりもノゲホーフィッシュだと！？ しかも一人！？

「は？ お前がノゲホーフィッシュを！？ 嘘つけ、証拠を見せる！」

ライクは完全に取り乱している。驚くのも無理はない。何故ならライクは一度ノゲホーフィッシュに挑んで、命からがら逃げ帰っているのだから。こいつがモンスターから逃げたのは、後にも先にもその一度きりだ。

「ライクくん、アンナさんの言ってる事は本当よ。解体屋さんが出払っているから、ギルドの保管庫で預かっているわよ」

エリスが後ろのカウンターから横やりを入れてくる。それを勝ち誇った顔で聞いているアンナ。きいー、むかつく！

「お前まさか……毒殺か？」

ライクは真剣な表情で聞いている。さすがにそれはないだろう。確かにモンスターに対して毒は有効だ。しかし、毒を使ってしまうとは商品としての価値がなくなる。特に食材になるモンスターは致命的だ。モンスターも大事な資源であるエルトリルで、毒を使うハンターなんて、ほとんどいないだろう。

「ライク……本気でそんな事言ってるの？ ……ひどいよ」

アンナは顔を伏せて、今にも泣き出しそうな声を出した。それを見てライクはたじろぎ、周りからはブーイングが殺到している。

待て、お前等騙されるな。こいつ泣いてないぞ。今回ばかりは嘘泣きだ。俺には見える、アンナのニヤけた口が。皆、目を覚ませ！

「そういえばライクくん、さっき入ってくる時に私に決闘しろとか言ってたよね……？ ひどいよ、私ただの受付嬢なのに……」

エリスは場の空気に乗るように、ライクに追い打ちをかけてきた。聞こえていたのか地獄耳め。シャーナ様の件がバレたのに気付いたな。このタイミングでそんな事を言ってくるとは、したたかな女だ。

ギルド内は先程までよりも激しいライクへのブーイングが巻き起こっている。どうやらアンナよりもエリスの方が人気ようだ。アンナは何やら複雑そうな顔をしている。

「うるさいぞ、野次馬ども！ 少しは黙れ！」

ライクは叫びながら、威圧感溢れる鋭い目つきでハンター達に視線を配る。さっきのアンナと同じ手法だ。そうだライク、お前も立派に大物を倒した強者だ。こんな肝っ玉の小さい奴ら黙らせてやれ！

「お前が黙れ！ この馬鹿ライク！」

「何様のつもりだ！ 調子に乗るな！」

「この少女好き！」

……何だろっ、この違い。何か悲しくなってきた。ギルド内ではライクに対して帰れコールが巻き起こっている。

「お、お前等……覚えておけよ！ 絶対、あつと言わせてやるからな！」

ライクはそんな捨て台詞を吐いて、ギルドから逃げだそうとしている。アイアンブレイカーを倒した英雄のはずなのに、完全にやら

れ役の立場だ。

「ちょっと、ライクくん。報酬はいらないの？」

「あ」

あつと言わされちゃってるよ！ もう駄目だ、恥ずかしくて一生ギルドに来れないよ……こいつは気にせず来るんだらうけど。

ライクは報酬を奪うようにして受け取ると、依然として帰れコールが飛び交う中、目に涙を溜めながら「ちくしょおお！」と叫んで、昼の街へと消えていった。もちろん俺も一緒に。

ギルドからの逃亡後、俺達は釣り具屋に来ていた。何故かは俺が知りたいぐらいだ。

人が十人も入れないぐらいの狭い店内に、ぎっしりと釣り竿や釣り糸、気持ち悪い釣り餌のレイテナミミズやらがひしめいて、少し不気味な感じがする。

店内も店内なら、店主も店主だ。何で黄色の半袖の服に短パンで、おまけに麦わら帽子まで被っているんだ。釣りって何故かそんな感じするけどもさ、帽子ぐらい脱いだらどうなのかねと、紳士な俺は思うわけですよ。

「親父、一番良い釣り竿をくれ！」

ライクはすごい剣幕で店主ににじりよっている。店主は圧倒されて怯えているが、格好が面白すぎて同情できない。

「は、はい。一番良い釣り竿ですね……こちらなんてどうでしょう」
店主はオドオドとした様子で、一本の黒色の釣り竿をライクに差し出した。
うーん……、どこら辺が良いのが全く分からんな。

「これは釣りの神様と呼ばれたツリスキーという御方が使っていた物と色から材質まで全て一緒に、高級なエシヤの木を使用しております」

簡単な説明すぎるだろ。

ツリスキー……釣り好き……おい、本当に実在するんだろうな、そいつ。

「あのツリスキーが使ってたのか!? それなら間違いないだろう。いくらだい?」

お前、絶対ツリスキー知らないだろ! 何が間違いないんだよ!
お前の人生間違いだらけだろ、俺を買った事以外。

「はい、四万シャルーになります」

四万シャルー!? いくら何でも高すぎる。ちなみにさっき受け取った報酬は八万シャルーだ。要するにライクは今、報酬の半分をドブに捨てようとしている……。

「よし買おう。あと糸と餌も頂戴」

「へい! まいどあり、へへへ」

こいつ即決しやがったよ……。ああ、当分は仕事しなくていいと

思ったのに……。

店主はライクから金を受け取るとドス黒い笑みをこぼした。絶対、ぼったくられてるよ。変な格好してるくせにとんだ狸だぜ、こいつ。いや、もしかしたら格好はもちろん、オドオドしてたのさえも油断させるための作戦かも知れない。恐ろしい……。

しかし、ライクはそんな事は露知らず、上機嫌で四万シャルーの釣り竿を担ぎ、軽い足取りで家への道を歩いていった。

「よし、明日は絶対ノゲホーフィッシュを討伐してやるぞ！ 見てるよ、アンナめ！」

……ああ、やっぱりそういう事なのね。

* * *

そんなわけで俺達はノゲホーフィッシュを討伐するべく、生息地であるエルトリル湖で釣り場所を探している最中に、隣で寝ている黒いローブの女がエルガニにかじられているのを発見して救助した。ライクが何度呼びかけてもローブの女は一向に起きる気配がなく、仕方がないので隣で見張りながら釣りを始めたというわけだ。

……思い返してみても全く意味が分からない。というか今の回想必要だったか？ ローブの女全然関係ないじゃないか。

「あー……釣れない」

「スースー……」

まだやるか、こいつら。あー頼む、ノゲホーフィッシュよ、早く釣れてくれ。俺の精神が壊れそうだ……。

ノゲホーフィッシュとは名前の通り、一応魚の姿をしたモンスターだ。あくまで一応ね、一応。

魚型モンスターだから当然のごとく、水の中にいる。だから釣りをしているわけなのだが、はつきり言ってライクに釣りの才能はない。以前ノゲホーフィッシュに戦いを挑んだ時も釣り上げるのに丸二日かかった。釣った時にはライクはすでにへろへろで、それが敗北した原因の一つでもある。

そもそも一人で釣って狩るというのが無謀なのだ。ライク程の腕があれば、釣り役と戦闘補助役が数人いれば狩れない相手ではないだろう。しかしライクはタイマンを好む熱血馬鹿な上に、今回はアンの件があるため、完全に意地になっている。

というか、俺はアンナが釣りが上手いなんて話は聞いた事がない。あいつは一体、一人でどうやって釣って倒したというのか。運が相当よかったのか、それとも……。

「あー……釣れた！……らいいな」

「スースー……」

……はあ、この様子だと今回も大分かかりそうだな。憂鬱すぎて色々考えるのも面倒になる。

おい、頼むぞ四万シャルの釣り竿。お前には俺の数回分の鍛冶屋代がつぎ込まれているんだぞ。しっかり働いてもらわないと困る。

「やっぱり来てたわね。その様子じゃ釣れてないようね」

そしてお前は来てもらっては困る。今すぐ帰れ。

「……アンナ、何しに来たんだよ？」

「何よ、アンタがしんぱ……ノゲホーにボコボコにされるのを見に来たのよ！」

何しに来たか聞いただけで、何でこいつはムキになっているんだ。何か顔真つ赤だし。

「へいへい、そりゃどうも。じゃあ、さようなら」

ライクは適当に返事をする、これまた適当に手を振っている。俺なら手を振るんじゃないかと、しっしつてやるけどな。そういう所がまだまだ甘い。

「な、何よ！ 折角来てあげたのに……」

「……はいはい、わかったよ。とりあえず座れよ」

「スースー……」

ライクは仕方がなさそうに、右手で地面をぽんぽんと叩いた。そういう所はもつともつと甘い。その甘さは戦場では死を招くぞ。そしてローブの女、お前は返事をするなと何回言えば分かるんだ。一人だけ気持ちよさそうにしゃがんで。

「仕方がないわね、アンタがそう言うなら座ってあげるわよ」

「スースー……」

アンナは頼んでもいないのに恩着せがましく言うと、俺のすぐ隣に座って、髪をかきあげた。

こつこつ何気ない動作は上品で美しいんだよな、こいつ。横目でそれを見ていたライクは頬を赤らめている。少女好きのくせに。

「で？ どれぐらいこつこつしてるの？ 魚の一匹でも釣れた？」

「悪いが釣りをしてる時は時間は気にしない性質なんでね。魚は釣れてないが、水面から顔をだしている魚となら何回か目があったぞ」

その魚に逆に釣られて湖に飛び込もうとしたなんて、恥ずかしくて絶対言えないよな。

「何それ、アンタ、魚にまで馬鹿にされてるじゃない。ダサいわねえ……その腰の剣ぐらいダサいわよ」

うつさいわ！ 何でこいつはいちいち俺にまで精神的ダメージを与えようとするのか。

「サウザートと一緒にあ、それはそれで悪くないな」

悪いわ！

「はいはい、アンタの気持ち悪い程の剣好きはもう分かったわよ」

「何だよ、お前だって剣が好きだから剣士になっただんじやないのによ？」

「わ、私が剣を使い始めたのは……そんなのどうだっていいでしょ！」

何だこいつは、また顔を真っ赤にして。素直に『私は女のくせに剣が大好きな野蛮な毒舌女です』って言えばいいのに。

「へいへい、じゃあ代わりにもう一つ聞いていいか？」

「な、何よ？」

「お前どうやってノゲホーフィッシュを倒した？ まあ、お前は素早いから俺よりはまともに戦えるんだらうけど」

ライクがそう質問を投げかけると、アンナは急に表情を暗くし、「アンタには関係ないでしょ」と一言呟いて、そのまま黙ってしまった。

二人の間に沈黙が生まれる。

「……………」

……………。

い、息苦しい……………息なんてしてないけど。誰か、誰か助けてくれ。

「スースー……………」

「……………ねえ、ところでその女は誰？」

アンナは気持ちよさそうに寝息を立てている人物を指差した。

……………あれ、おかしいな。黒いローブの女が白いドレスを来た女神様に見えてきたぞ？

というかつつこむのが遅すぎだ。どう考えても存在感バツグンだろう。

「知らないよ、俺が聞きたいぐらいだ。俺が来た時には、もうそこで寝ていたんだ」

「あらそう。それで、どこから連れてきたの？」

「だから連れてきてないって」

あ、あのー……………ライクさん？

「……………つれてる」

「連れてない」

おーい、ライクさーん！

「つれてる」

「しつこいぞ、連れてないって！」

ライクウウウウ！

「釣れてるってばー！」

「あ？……うおう！？」

ライクが手に持っている四万シャルーの釣り竿が、人間なら背骨が折れてそうなくらいにしまっている。この力は間違いない、奴だ。何故こんなに引っ張られているのに気付かないんだよ、鈍感ライク！

「もっと早く言えよ！」

「ずっと言ってたじゃない！」

「こついう場合は釣れてるじゃなくて引いてるって言うんだよ！」

どっちでもいいから早く釣り上げる！ この奇跡を逃したら、次はいつになるか分からないぞ！

「むおおおお！ ツリスキー先生、俺に力をおおおおお！」

ライクは血管が破れそうな程に顔を真っ赤にさせて、釣り竿を思い切り引いた。

その時。

四万シャルウウウウ！

折れた……四万シャルーの釣り竿が折れた。しかし、その代償に水面から巨大な物体が飛び出てきた。折れたものの、その最後の力を振り絞って見事釣り上げたのだ。

ありがとう、君のおかげだよ。でも最後に一つだけ言わせてくれ、四万の価値はまったくないと。

5・ノゲホオオオオ!

「ちくしょう、やはり強い……!」

ノゲホーフィッシュを釣り上げたまでは良かったものの、俺達は苦戦を強いられていた。

やはり認めたくはないが、こいつは強い。何でこんな奴がこんなに強いんだよ!

ライクと同等か、それ以上の体格を有する銀色のとぼけた顔をした巨大魚。ここまでなら、ただでかいだけの普通の魚だ。しかし、こいつには足があるのだ。人間のような足が。

銀色の足に黒い毛がいつぱい生えてるよ……ああ、気持ち悪い。しかも、この足が気持ち悪いだけではなく、非常に厄介だ。

「ぎよぎよぎよおおお!」

ノゲホーフィッシュは勢いよく地面を蹴ると、超スピードで俺達に接近し、大剣のように鋭い刃のついた左右の大きなヒレで連続攻撃を繰り出してくる。

痛い! 痛い! いたたたた!

ライクが持ち前の反射神経と洞察力で、俺にヒレを受け止めさせてきて痛い。

だが、あまりにもスピードが違いすぎるため、全てを受ける事ができずに、ライクの体にじわじわと生傷が刻まれていつている。このままではまずい。何が一番まずいって、こんなのが周りに何匹も見えるのがまずい。

「調子に乗るなああ！」

ライクは苛立ちを爆発させ、無謀にも俺で斬りかかる。俺の剣身は見事にノゲホーフィッシュを捉えたかに見えたが、目の前にいたはずのノゲホーフィッシュは何の手ごたえも残さずに霧のように消えてなくなった。

その直後、背後からライクは強烈な蹴りを入れられ、派手に転がりながら吹っ飛んだ。うう、視界がぐるぐるする。

俺が斬ったのは奴の分身、いや残像か。奴のあまりにも速いその動きは、動いたたびに点々と幻を残している。

「まだまだ！」

ライクは諦めずに立ちあがると、ノゲホーフィッシュに突進しながら、俺を勢いよく横に振る。その瞬間、奴の姿がまた消えた。

また残像か？ いや違う、消えたんじゃないやなくて飛んだんだ。

「ぎよっぎよっぎよぎよ！」

ノゲホーフィッシュが放った、空中で一回転しながらの回し蹴りがライクの顔を捉えた……と思いきや、ライクは奴の尾ビレによる強烈なビンタで吹き飛び、近くの大木に背中からぶつかって悲痛の声をあげた。それに付き合された俺も地面にぶつかって、ただならぬ衝撃を受けて全身が痛い。足の長さが足りないなら最初から回し蹴りなんかするな！

駄目だ、やはり相性が悪すぎる。ライクはパワー型であり技巧派でもあるが、スピードに関しては並といった所だ。逆にノゲホーフ

イッシュはスピード重視の技巧派、一発当てれば逆転もあり得るが、その一発がまったく当てない。むしろ、この速度についていける人間など存在するのだろうか……。

いつもは戦いを楽しんでいるライクも、ここまで力の差を見せつけられては、そんな事も言っていられない。少し悩んでいる様子を見せた後、悔しそうにしながら、アンナの方を向いて叫んだ。

「アンナ、すまない手伝ってくれ！」

「……………」

「アンナ！ ……くそっ！」

ライクはプライドを捨ててアンナに助けを求めたが、アンナは返事をせずに小刻みに震えながら呆然と立ち尽くしている。

ノゲホーフィッシュは、よそ見をしているライクを見て、チャンスだと言わんばかりに接近しての前蹴りをお見舞いしようとしてきた。ライクがそれを紙一重で避けると、奴は背後の大木に足跡をくつきりと残した。

「おいアンナ、どうしたんだ。返事をしてくれ！」

ライクは再度アンナに呼びかけたが、やはり返事はない。その代わり、対岸から何やらライクを呼ぶ叫び声が聞こえてきた。

「ライク、俺にまかせろ！」

「…………え？」

対岸を見ると、顔までは分からないが、緑色の帽子に緑色の服を着た、男と思われる人物が弓らしきものを構えていた。

ライクの事を知っているという事はギルドの人間なのだろうか？ まあ助けてくれさえすれば、こちらとしては誰でもいい。さあ、

その弓でこいつを射抜いてくれ！

「狙いが定まった！」

弓使いは過去形で決め台詞を吐くと、ノゲホーフィッシュめがけて弓を放った。幸いにも奴は余裕を見せて突っ立っている。これはいけるか！？

そんな俺の淡い期待は、淡いまま消えてなくなった。

弓矢はノゲホーフィッシュどころか、陸地に到達する事すらできずに湖の上にプカプカと浮いた。

おいおい、いくら対岸までそこそこ距離があるといっても、さすがに届かない距離ではないだろう。どんだけ貧弱なんだよ！

「狙いが定まった！ 狙いが定まった！ 狙いが定まった！」

弓使いは何度も弓矢を放つが、結果は全て同じで、湖を無駄に弓矢で汚しているだけだ。狙いを定める前に射程を定めろ！ というよりも、まずは筋トレしてこい！

……ん？ ノゲホーフィッシュの様子がおかしい。湖の方を見て体をプルプル震わせている。表情は相変わらずポーっとしているのでよく分からないが、何やら怒っている様に思える。

「ぎよおおおおお！」

俺の読みはどうやら正しかったようだ。けたたましい叫び声を上げながら、ノゲホーフィッシュは湖の方に勢いよく跳躍すると、激しい水しぶきと共に水中へと姿を消した。

「逃げたのか……？」

「やったぞ！ 俺がやったんだ！」

ライクは弱りきった体に鞭打って湖へと近づいて行く。

俺にはどうしても奴が逃げたとは思えないし、ましてや対岸で一人喜んでいゝる弓使いがやったワケでは断じてない。瀕死の獲物をみすみす手離すモンスターなど俺は聞いた事がない。絶対に何かしてくる。ライクよ、そんな無暗に近付くな。

俺が疑惑を抱きながら注意深く湖を見てみると、俺達と弓使いを結ぶ直線上の真ん中よりも少し手前側に、黒い大きな魚影が浮かんで来た。

その影はだんだん大きくなっていき、先程の倍以上の水しぶきが、天を貫かんばかりの勢いで真つすぐに舞い上がる。

その頂点にはノゲホーフィッシュの姿があった。奴は俺達に背を向け、弓使いの方を向いている。

何をするのかは分からないが狙いは弓使いのよう……そうか、奴は自分の住処を弓矢で汚されたと思つたんだ。実際そうだから文句は言えないが、一体どうやってそんな離れた所から弓使いを狙うつもりなんだ。そういえば、俺の見間違いでなければノゲホーフィッシュのサイズが先程までよりも一回り大きくなっている気がする。

それに気付いた時にはすでに遅かった。

奴が口から大量の水を放水すると、それが弓使いに向かって高速で伸びていく。

腹でそれをもろに受けてしまった弓使いは「あーれー！」と、情けない声を上げながら吹っ飛び、一瞬で視界から消えてしまった。

「ああ、知らない人が！」

知らない人なのかよ！ あいつは一体どこの誰で何をしに来たんだ。

その答えを追求している暇は俺達には与えられなかった。

ノゲホーフィッシュは先程よりも少ししぼんでいる体を、器用にも降下しながらこちらに振り向かせると、今度は俺達に放水を仕掛けてきた。どうやら奴は二発分の水を体内に貯えられるようだ。

ライクは放水を難なく避ける。いくら高速といえども、足を使つた超スピードによる連続攻撃に比べれば、亀と兎ぐらいの差がある。ライクに避けられないはずがない。

「よし、どんどん来いよ。全部避けてやる！」

一度避けた程度で気分を良くしたライクは完全に調子に乗り、尻をペンペン叩きながら挑発をしている。今時そんな古風な挑発は子供でもしないぞ。

それにあの攻撃が続く限り、俺達には成す術がない。どんどん来られては困る。

こちらが困る事を知ってかどうかは分からないが、ノゲホーフィッシュはライクの要望通り、飛び上がって二度の放水をすると、また潜つての繰り返しをライクに仕掛けてくる。

終わったな……。俺が最悪な展開に絶望している側で、ライクはさっきまでボコボコにされていたのをすっかり忘れたかのように、生き生きとそれを華麗に全て回避している。

何だろっ、何かすごい不愉快だ。そう思っているのは俺だけではなかったようだ。

「アンナ危ない！」

ノゲホーフィッシュはライクの数倍賢かったようで、ライクに当てるのは諦めてアンナへと目標を変更して放水してきた。

突然の目標変更で狙いが定まらなかったようで、一発目はアンナの近くを素通りするだけだったが、二発目は完全にアンナを捉えて放水される。

うひょおおおおお、飛ぶうっうっうっうっ！

ライクは瞬時に反応してアンナを突き飛ばすも、代わりに放水の直撃を受けてしまい、豪快に吹っ飛ばされてしまった。中々、良い浮遊感だった。

「うっ……ア……アンナ……」

アンナは死の危険に立たされたにも関わらず、未だガタガタと体を震わせているだけだった。

もう諦める、アンナの助けは期待できない。そんな事よりも、次に放水が来たら俺達は終わりだぞ。

「ぎよっぎよぎよー！」

しかし俺の予想に反して、ノゲホーフィッシュは何故か放水をせずに陸へと上がり、こちらに近づいてくる。こいつも脳筋かよ。ライクの数倍賢いと言った俺が一番馬鹿だったようだ。

「くっ……、やられてたまるかよ！」

奴は止めを刺さんとばかりに、左右のヒレで猛攻を仕掛けてくる。

それに対して、ライクは満身創痍の体を奮い立たせて、俺で迎撃を試みる。

痛い。痛い。痛い。痛い。痛いよ！

幸いな事に、勝利を確信して油断しているのか攻撃が単調になっ
ていて、今のライクでも何とか防ぐ事ができている。でもそれは、
あくまでライクにとって幸いであって俺にとっては別にそうでもな
い。防いでいるのは俺……痛いってば！

今ふと思ったんだけど、体硬くすればいいんじゃないのか？ 昨
日みたいに。

よし、早速やってみようじゃないか。えーと……確か全身に力を
込めるような感じで……そうそう、こんな感じで、後は強く念じれ
ば……。

俺の体よ、硬くなれ！

昨日と同じ熱い感覚が俺に押し寄せてくる。どうやら成功したよ
うだ。さあ来い！

「うぎよおおおおお！」

「な、なんだ！？」

やった、やったぞ！ 俺が奴の右のヒレを受け止めた瞬間、ヒレ
についている刃が砕けた。しかも痛くない！ 意外に使えるぞ、硬
くなる力！ 地味とか言っでごめんね。でもやっぱり地味だわ。

ノゲホーフィッシュは砕かれた刃の痛みを紛らわせるかのように、
単調な左足での蹴りをライクの胴めがけて放った。さすがにそれは
ライクを舐めすぎだ。

ライクは冷静に、その蹴りにかぶせるようにして、右足の裏で奴の左足のスネあたりを思い切り蹴った。力ではライクが勝っていたようで、奴は「ぎよおおおお！」と声をあげながらバランスを崩した。

そこにすかさず、俺が奴の体めがけて振り下ろされる。

あ、柔らかか……うーん微妙。

「ぎよおおおおー！」

「ちっ、かすっただけか」

おいおい、頼むよライク。折角、俺がチャンスを作ったっていうのに。

まあいい、また硬くなって、もう片方のヒレも……ん？ 何だか様子がおかしい。ノゲホーフィッシュが突然後ろを向いて力み……まずい！

「しまった！ アンナ、鼻を……ノゲホオオオオ！」

「ノゲホオオオオ！」

ライクとさつきまで放心していたアンナは、仲良く鼻を押さえながらその場に屈服している。

そう、これこそがノゲホーフィッシュが、ギルド内で討伐例の無かったモンスターである最大の理由であり、名前の由来でもある。

こいつは尾ビレの下辺りにある小さな穴から悪臭、要するに屁を出すのだ。聞いた話では、その悪臭は湖を飛び出してエルトリルの街近くまで飛来し、通行人も被害を受けるといって極悪非道な屁らしい。

その臭さは凶悪で、この二オイを完全に遮断できる頭防具は存在

せず、嗅いだ者は必ずノゲホーと叫びながら屈服するのだ。

正確に言つとノゲホーではなく、ノゲホオオオだが。ちなみにノゲホーという言葉自体には何の意味もない。何故かそう言つてしまつらしい。

俺は自分に嗅覚がない事を心の底から喜んだ。剣に生まれてよかったああ！　つて、そんな事を言つてる場合じゃないよ、やばいぞ！　おい、アンナどうにかしろよ、お前はあいつを倒したんだから、何か対抗策持つてるんだろ？

「うう……うう……ノゲホオオオ！」

……駄目だ、完全に臭いにやられている。本当にあいつは奴を倒したんだろつか。

ライクも同様で、鼻を押さえて微動だにしない。ノゲホーフィッシュは相変わらず、すつとぼけた顔でこちらにノツシノツシと歩いてくる。そして右足でライクの顔を踏みつけた。

「ぐあああ……ノゲホオオオオ！」

ライクは踏まれたせいで鼻を塞いでいた手が外れ、痛みと臭さのダブルな苦痛にとんでもない表情を浮かべている。こんな顔、人様にお見せできないよ！　誰か、ライクを助けて　！

そう願つた直後、謎の物体がノゲホーフィッシュに超スピードで接近したかと思つと、「ぎよおおお！？」という叫びと共に、奴は数メートル先までぶっ飛んだ。

謎の物体は足元で全身をピクピクさせている奴を見降ろしながら呟いた。

「うるさい、臭い。……ノゲホー」

とってつけた様なノゲホー発言をした謎の物体の正体は、先程まで幸せそうに寝息を立てていたローブの女だった。

身長はアンナとシャーナ様の中間ぐらいで、薄緑色のショートヘアが幼さを感じさせるが、顔は整っていて少し大人びている。見た目からはまったく年齢が読めない。右手にはどこから出したのか、木製の杖を持っている。それでノゲホーフィッシュをぶっ飛ばしたのだろう。大人しそうな顔してとんだ暴力女だ。まあ、その暴力のおかげで助かったわけだが。

「何してるの？ はやく止めをさして」

ローブの女はこちらを睨みながら冷静な口調で、ノゲホーフィッシュを指差しながら言った。

暴力現場を呆然と見ていたライクは慌てて軽く頷くと、フラフラな足に鞭打ちながら近付いて、ノゲホーフィッシュに俺を突き刺す。

ふおおおお、柔らかか……うーん、やっぱり微妙。

駄目だな、そんなに悪い肉ではないのだが、アイアンブレイカーの後では劣りすぎる。それどころか、リザードマン以下かもしれない。まあ、普通だな。

数秒後、ノゲホーフィッシュのピクピクは止まり、完全に息を止めた。

予想外な結末だったが、無事生還できてよかったよ。とりあえず、俺についてる血を拭いてくれないかな。ベトベトしてて気持ち悪いぞ、こいつの血……おわ！？

「な、何だ!？」
「……別に」

ビックリした。いつの間にかローブの女が俺の事を、鼻が当たりそうなくらい接近して見つめていた。何だこいつ、俺についている血に興味があるのか？ 血マニアか？

ライクが気付いて一歩後退してくれなかったら、今頃俺はペロペロされていたかもしれない。

「そ、そうか。とりあえず君のおかげで助かったよ、ありがとうな名前は？」

「ミエル・フォンブルー」

「ミエルか。俺の名前はライク・カインスだ。ライクでいい、よろしくなミエル」

「うん」

おいおい、『うん』だけかよ。こういう時はちゃんとよろしくって返すもんだ。まったく礼儀がなっていないな。

「貴方の……」

「ちょっと、一体どうなったのよ。……何、さっきの女起きたの？ アンター一体何者よ！ それよりもノゲホーフィツシュはどうなったの？」

ミエルの数百倍は礼儀がなっていない奴が起きた早々、偉そうにミエルの発言に割り込んでくる。こいつは初対面の挨拶すらも怒鳴るのか。ここまでくると逆に尊敬するぞ。

「どうなったのじゃねえよ、お前こそどうなってるんだよ!」

珍しくライクが強気でアンナにつつかかっている。

「な、何よ……」

「お前、本当にノゲホーフィッシュを自分で倒したのか？ それにしては震えているだけだったじゃないか！」

おお、ライクかつこいいぞ。

アンナは完全にライクの猛攻に圧倒されている。これは口喧嘩での初勝利もあり得るぞ。

「ほ、本当に自分一人で倒したわよ！ 今日はあるよ……アノ日なのよ！」

「ア、アノ日！？」

これはまた予想外な言い訳が飛び出したもんだ。アノ日ってあれだろ、女にしか来ない特別な日だって誰かが言ってたぞ。例え、本当にそうだとしても年頃の女性が言っているいい事なのだろうか。

アンナは自分の失言に気付いたようで顔を赤らめている。

「そ、そうか……。アノ日なら仕方がないな」

ライクもまた顔を赤らめていた。あっさりとアンナの言う事を信じてしまっている。はあ、また完敗か。誰か代わりにこいつを倒してくれ。

「な、何よアンタ！？」

いつの間にかミエルがアンナに近付いて周りをぐるぐると回りながら、鼻をヒクヒクさせている。お前は犬か。

「アノ日というのは嘘。ニオイがしない」
「な、なななな!?!」

アンナは噴火した火山のように顔を真っ赤にして動揺している。
どうやらミエルは本当に犬だったようだ。それよりもアノ日って臭うのか。リザードマンのメスは発情期に魅惑のフェロモンを発すると聞くが、人間もそうなのだろうか。

「おい、アンナ! 貴様、俺を騙したな!」

ミエルの犬的行動により、ライクは先程の勢いを取り戻している。
よし、期待してないけど頑張れ。

「な、何よ! 大体、アンタは一人であいつを倒しにここに来たんでしょ? それなのに私の助けが貰えなかったからって怒るのは筋違いじゃないの!?! あと、ニオイなんてしないんだからね、馬鹿!」
「う……」

うん、期待しないで良かった。ライクは一番痛い所を突かれてしまった。それを言われてはどうにもできないだろう。もういいじゃないか、とつととノゲホーフィッシュをギルドに持って行って、その後鍛冶屋に行こう、そうしよう。

「おい、アンナ。こんな所で何をしている」

……今日は一体どうなっているんだ。今度は謎のキザったらしい金髪でチリ毛長髪の男が出てきた。爆睡暴力犬女だけでもお腹いっぱいなのに、これ以上登場人物を出さないでくれ。どうせ出すなら、シャーナ様二世とかシャーナ様三世とかそういうので頼む。

「兄様！ 何故ここに……？」

兄様だと？ 道理で性格の悪そうな顔をしているワケだ。いつも勝ち気なアンナが完全に萎縮している。これは嫌な予感がする。

「ああ、今日エルトリルで人と会う約束をしていてな。向っている途中で、こちらから何やら刺激臭がしてきたので何事かと思いつてみたら……お前は女のくせにまだモンスターとオママゴトしているのか？ まあ、オママゴトは女の遊びではあるがな。いい加減、子供は卒業したらどうだ」

うわあ、嫌な予感的中だよ。妹も妹なら兄も兄だ。なんだこの毒舌兄妹。アンナの男版なんて、本当にただの嫌な奴じゃないか、勘弁してくれよ。

「オママゴトなどではありません！ 私は真剣にハンターの仕事をしています！ 今日だって……そこに倒れているノゲホーフィッシュを倒したんですよ！」

アンナはノゲホーフィッシュの死体を指差しながら、兄に必死で訴えかけている。気持ちは分らんでもないが、手がらを横取りするのは駄目だろう。

ライクよ、ここはビシッと……こいつ、関わりたくなくて目を逸らしてやがる。くそ、誰か俺の代わりにガツンと言ってくれぬ奴はいないのか！

「その人、何もしてない。倒したのはライク」

居た。そういやミエルも手がらを横取りされたんだよな。よし、

やっちまえミエル。兄の前で大泣きさせてやるう。

「ちょ、ちよつと適当な事言わないでよ。アンタ寝てたじゃない！
関係ない人は黙ってて！」

「……言えって言われたから」

ノゲホーフィツシユ討伐の真相を知らないアンナは、一番の功勞者に偉そうにしている。どちらかと言えば部外者はアンナの方だ。というか、ミエルは言えって誰に言われたんだ？ 何、急に怖い話なの？ 幽霊でもいるの？

「はあ？ 言われたって誰によ！」

ちよつと待って、まだ答えないで！ まだ怖い話聞く準備できてないから！

「……」

「ちよつと黙ってないで、何とか言いなさいよ！」

「……妖精」

メルヘンだったー！ ただの夢見がちな女だったー！

……どいつもこいつも頼りなさすぎてうんざりするぜ。

「はあ？ 妖精ってアンタふざけてるの？ そんなのいるわけないでしょ！」

「やめないか、アンナ。レディがみつともない」

すごい剣幕で怒鳴るアンナを兄が静止する。お、まさか兄はこちらの味方か？

「どちらが本当の事を言っているかなど、一目瞭然だ。ライクくん
って言ったかな？ 彼の剣には血がついている。それに比べて、お
前は剣を抜いてすらいない。これはどう考えても、お前は側でガタ
ガタ震えていたという証拠じゃないか？ お前は手から横取り専門
のハンターだったのか？ どちらにしても、まだまだだな」
「う……」

さすがアンナの兄、相手の荒を探し出してネチネチ攻撃するのが
うまいぜ。正直むかつくけど、こんなに頼りになる味方はいない。
奇跡だぞライク、お前に味方ができるなんて。

「ライクくん、すまないね。妹の無礼を許してくれ」

「いえ、俺は別に……」

「では、私は忙しいので失礼するよ。アンナ、帰るぞ」

「はい……」

アンナは兄の後ろについて、ハンター試験に落ちた受験生のよう
にトボトボ歩いていった。やったぞ、初勝利だぞラ……ライクは神
妙な顔つきでそれを見送っていた。何か考え事をしているようだ。

「ねえ、この魚どうするの？」

「え、ああ。ギルドに持って帰るよ」

ミエルに話かけられてライクは我に帰った。

「うわ、まだこいつの周りは若干臭うな……ノゲホー」
「ノゲホー」

二人はノゲホーフィッシュに近付くと、仲良く鼻をつまんだ。

……何か義務的に言っていないか？ ノゲホーって言う決まりでもあるのだろうか。というか、一体どんな臭いがするんだ。そこまでされたら気になって仕方がない。怖い物見たさってやつだ。見るんじゃないなくて嗅ぐんだけどな。

あーいいなー、嗅ぎたいなー、俺もノゲホーって言いたいなー！

……ん？ 何だこの感覚？ 全身を突然正体不明な刺激が支配してくる。何だこの嫌な感じ……だんだん強くなっている……。

ノ……。ノゲ……。ノゲホオオオオ！

……ああ、これは言っちゃうわ。

6・何でも鍛えればいってもんじゃない

くんくん。

くんくんくんくん。

くんくんくんくんくんくん。

「エルトリル名物、エルガニまんじゅうはいかがー！ 安くておいしいよー！」

「わぁ、良いニオイ！ お母さん、これ食べたーい」

「仕方がないわねえ。すみません、一つ貰えるかしら」

「へい、まいどー！」

エルガニまんじゅう屋の店員と、その客である親子のそんな会話が聞こえる夕方のエルトリルの一角。俺はエルガニまんじゅうの匂いを嗅ごうと必死だった。

うーん、まったく匂わないな。やはりくんくん言うだけでは駄目なのだろうか。でも、たまに全身にビリッと刺激を感じる事があるから、嗅覚の能力が備わったのは確かだと思っただが、なかなか制御ができない。

まぁ、覚えたてだから仕方がないよな。そのうち慣れるさ、うん。

そんなわけで俺とライクは、ノゲホーフィッシュを買い手が決まるまでギルドの保管庫に預け、家路につこうとしているわけだが…。

「ライク、私もあれ欲しい」

「…………自分で買えよ」

「ぶっ」

ぶつじゃないよ、お前は豚か。ライクの無駄遣いのせいで、家計は火の車なんだぞ。これ以上、俺の鍛冶屋代を無駄に減らさせるな。ミエルは何故か俺達の後をついてきていた。さつきから周りをきよるきよると物珍しそうに見渡している。完全に田舎から都会に来たおのぼりさんだ。みつともないからやめろ。

「珍しい物いっぱい。リサーナにはこんな古風な家とか露店とかない」

違った逆だった、都会から田舎に来た都会者だった。やめて、もうそんな見下した目で見ないで！ 惨めになっちゃう！

「へえ、ミエルはリサーナから来たのか。じゃあ金持ちなんだな。それなら余計、自分で買えよ」

うむ、正論だぞライク。

リサーナはレイテナ国最大の商業都市であり、富裕層ばかりが住む金持ちの街でもある。その理由はレイテナ国で一番モンスターの生息数が少ないため、金持ちが大金をはたいてでも移住したがるからだ。

そんな所に住んでいたのなら、エルガニまんじゅう程度、何千個、いや何万個でも買えるぐらいの金は持っているだろう。それなのに貧乏人にたかるとは、金持ちはケチばかりというのは本当だな。

「……私はそんなにお金持ってない。金持ちだったのは師匠だったから。私、破門された」

「ああ、そうなのか……、それはすまなかったな。ところで何を習っていたんだ？」

「秘密。でもあれ買ってくれたら教えてあげてもいい」

「む、そう来たか」

やめとけ、その情報とエルガニまんじゅうじゃ絶対釣り合わない
って。どうせ杖による暴力術とかだろ。聞くだけ損ってもんだ。

「仕方がないな、一つだけだぞ」

ライクがそう言うと、ミエルはこくりと頷いた。お人好しもここ
まで来ると病気だな。

「いらつしゃい」という店員の元気の良い声が聞こえてくる。だが、
ライクがエルガニまんじゅうを買おうとしたその時、更に元気よく
可愛らしい声が聞こえてきた。

「ライクさーん！ こんにちは。先日はお世話になりましたあ！
ペコリです」

あれは何だ、天使か、女神か、少女か、いやシャーナ様だ！
ペコリですとか言っちゃって、その意識してない子供ぶりっ子が
最高っす！ もうナデナデしたいっす！

「よう、シャーナじゃないか。元気してたか？」

「はううう……」

ライクは俺の一生叶いはしない秘めたる願望をいとも簡単にやつ
てのける。ちくしょおおお、誰かこいつを俺の代わりに殴ってくれ
！ ああ、神様お願いします。

「いつっ…！」

そんな俺の願いが通じたのか、ミエルが杖でライクの後頭部を殴打した。

まさかミエル……お前は神の使いか!?

「何すんだよ!」

「まんじゅう」

胃袋の使いだった。

ライクが頭をさすりながら不満そうにエルガニまんじゅうを買い与えると、ミエルはそれをはむはむと、ハムスターのように熱心に頬張り始めた。ハムスターがはむはむ食うかは知らんけどな。ちなみにハムスターとは、ハムハムモンスターという手乗りサイズの愛玩用モンスターの略称だ。少しネズミに似ている。

ライクの「うまいか?」という問いかけに対して、ミエルは食べるのをやめずにコクリと頷いた。本当に礼儀知らずなやつだな。

「あ、ごめんな、シャーナ……あれ、どこいった?」

ライクはシャーナ様がいた方を振り向いたが、そこにはシャーナ様の姿はなかった。まさか誘拐……あ、いた。

「あのう、ライクさん。そちらの方はどちら様ですか?」

シャーナ様は近くに置いてあった樽の後ろに隠れて、チラッと片目だけ覗かせていた。

「ああ、こいつはミエル。一応俺の恩人だ。怖くないから出ておいで」

シャーナ様はライクの言葉を聞くやいなや、急に無邪気な明るい表情を浮かべ、サーカスを見てはしゃぐ子供のように走り寄ってきた。もう、何でいちいちそんなに可愛いんですか。

「ライクさんの恩人なんですかあ。私はシャーナと言います。よろしくですう、ペコリです」

「私はミエル。ペコリ」

もうシャーナ様ったら、またペコリとか言っちゃって可愛いんだから。

おい、ミエル。お前はいい年こいてペコリとか言って恥ずかしくないのか、反省しろ。

……あれ、俺何か睨まれてる？ 気のせいだよな、うん。

「シャーナはな、上級鍛冶師で偉い人なんだぞ」

「ちよつとライクさん、私別に偉くなんかないですから！」

またまたご謙遜を、ちゃんと挨拶とかお礼とかできるだけで、ライクの関係者の間ではズバ抜けて偉いです。どこかの誰かさんは人に物を貰っても礼の一つもしないからな！

「ライク、まんじゅうありがとう」

「え？ あ、ああ。どういたしまして」

遅いわ、今更お礼したって遅いわ。見る、シャーナ様が噛み合わない会話に困惑していて可愛いじゃないか。

「ミ、ミエルさんは何をしている方なんですか？」

「そつだ、まんじゅう買ってやったんだから教えるよな」

「ミエルは少し困ったような表情をしているが、こちらの要求は正当なものだ。さあ答える、爆睡魔か？ 暴力魔か？ 犬女か？ 血マニアか？ それとも礼儀知らずの天才か？」

「……ライクの愛人」

「そうか、ライクの愛人だったのか。……ええ！？」

「はわわ、愛人さんですか！？ 愛人という事は相手に奥さんがないと駄目だから………ライクさん結婚してたんですか！」

「シャーナ様、つつこむ場所が若干ズレてます！ そんな所も可愛いですけどね。」

「し、してないしてない！ 結婚してないし、愛人でもない！」

「そんな、ライクさんが結婚してたなんて………」

「シャーナ様は何やら一人の世界に入り込んでしまっているようだ。ライクが揺さぶっているが戻ってくる気配がない。」

「おい、俺の話を聞くんだシャーナ！ ミエル、お前も何か言え！」

「ちわー！ 解体屋です」

「解体屋？ お前、解体屋だったのか？」

「………言ったの私じゃない」

「ミエルは首を小さく振りながら否定した。ライクは完全に浮き足立っている。かくいう俺もさすがに混乱してきた。」

「愛人だけでも大変なのに、殺気のオーラを纏ったハゲモンスターこと、いつもの解体屋が指をポキポキ鳴らしている。やばいぞ、何か怒っているぞ。」

周りでは人だかりができて始めている。見ないで、恥ずかしい。

「ラーイークーさああん。お前も解体してやろうかあああ？」
「な、何故!？」

状況は掴めないが、とにかく解体屋はすごい剣幕で怒っている。本気でライクを解体する勢いだ。まるで城壁のような筋肉がライクに押し迫ってくる。

「ライクさんよお、シャーナ様という者がいながら愛人を作るとは良い度胸だ。今日の解体屋の一押しメニューはライクさんの豚骨スープですよお、皆さんいかがですかあ？」

人間なのに豚骨とは一体どういう事なんだ。周りの野次馬達にも怪訝そうな顔をしている者が何人もいるが、誰一人としてこのハゲモンスターにツっこむ勇氣のある者などいるはずもなかった。

「待つてくれオッサン！俺はアンタのお得意様だぞ。お得意様にそんな事をしていいのか！」

「悪いがシャーナ様の方が大事なお得意様なんでね」

「お、お得意様を差別するのか！」

「そりゃあ、ライクさんはこちらが金を払う立場で、シャーナ様はこちらが金を頂く立場。差別して当たり前だと思えますけどねえ？」

残念だが、解体屋の言う事は正論だ。素材を調達して来てくれるハンターの代わりなんて他にいくらでもいるが、大金を出してくれる上客はそうはいかない。

しかし、それを堂々というのはどうかと思うぞ。

「ちょ、ちょっと待つてくださいよ、解体屋さん！私は別にライ

クさんとそういう仲じゃないですよ！ だからライクさんに愛人がいようと関係ありません！」

そう言うシャーナ様はどこか不機嫌だった。というか戻って来てたんですね、おかえりなさい。

「そ、そうなんですかい？」

シャーナ様の一言で解体屋の纏っていた殺気がふっと消え、周囲からは安堵の溜息が漏れる。

「だから愛人じゃないって！」

「え、そうなんですか？」

全員の視線が、騒動の発端であるミエルに向けられたのは言うまでもないだろう。しかし、ミエルは表情一つ変えずに至って冷静な様子だった。

「……………間違えた、恩人」

……………。

周囲の時間が再び動き出したのは、数十秒後の事であった。野次馬達はつまらなさそうな顔をしながら解散し、再びエルトリルの街の一角に平穏が取り戻された。

「ところで、解体屋のオッサンはここで何を？」

「おお、忘れる所だった。実はシャーナ様とライクさんに話があっ

たんですけど、一緒に居てくれて手間がはぶけましたよ。気の強い姉ちゃんも一緒にいてくれりゃ、もつと良かったんだけどね、ガハハハハ」

解体屋は一人だけご満悦そうに豪快な笑い声をあげている。気の強い姉ちゃんとはアンナの事だろう、不吉な事を言わないでくれ。

「俺とシャーナとアンナに用？」

「はい、まずはシャーナ様に今日分です」

解体屋が大きめの布袋を渡すと、シャーナ様は目を輝かせながら、「ありがとうございます！」とお礼を言った。そういえば、シャーナ様は解体屋にアイアンブレイカーを解体して貰っていたな。多分その一部だろう。

「すみませんなあ、それだけで。作業が難航しております……」「いえいえ、いいんですよ。実はこちらで少し仕事ができまして、しばらく滞在する事になったんです」

マジか、やったね！ これでまたシャーナ様の研ぎ技が堪能できる！ シャーナ様に仕事をくださった人ありがとう、本当にありがとう！

「それで、俺への用は？」

「ああ、実はアンナさんのノゲホーフィッシュを買い取ってくれる方に明日引き渡す事になったんですけど、ライクさんの分も引き取ってくれる事になりましたんで、その報告と確認をね。金額は一万シャルーだけ引き取ってもらいますかい？」

「おお、それは助かる。是非頼むよ」

「了解、まいどー」

確かにそれは吉報ではあるが、それだと釣り竿代にも遠く及ばない。苦勞して倒してもそんなに高くないのが、ノゲホーフィツシユが今まで討伐されなかった理由の一つでもある。

「では、アンナさんにも報告しないといけないし、またごひいきに！」

解体屋は言いたい事を言うと、豪快な足取りで去っていった。やっぱりあの人を怒らせてはいけないなと実感したよ。

ミエルが何か言いたそうに、去っていく解体屋を見つめている。惚れたか？

「じゃあ、俺もそろそろ帰ろうかな。じゃあまたな」

「あ、ライクさん。もし暇でしたら、私の工房に来ませんか？」

シャーナ様は帰ろうと歩を進めるライクを引き止めた。ライクにくる女性からの誘いつていうのは大抵、嫌な予感しかないのだが、何故かシャーナ様なら大丈夫な気がする。

「工房、この街にあるのか？」

「はい、借りているだけですけどねえ。実はさっき解体屋さんから受け取ったのはアイアンブレイカーの肉なんですよ。私が調理するので、食べて行きませんか？ 一人じゃ食べきれなさそうなので。

あ、ミエルさんもどうぞ一緒に」

「おお、アイアンブレイカーの肉か。是非行くよ」

「私も行く」

二人はシャーナ様の誘いに二つ返事で答えた。

アイアンブレイカーかあ、あれは良い物だったなあ……。ああ、

思い出しただけで幸せになれる。きつと食べても絶品なんだろうな。でも、俺は一つ前言撤回させてもらう。シャーナ様の料理……何だか嫌な予感がしてきたぜ。

まあでも、俺は食べれないから関係無いし、どうでもいいか。二人の明暗を観客席から拝ませて貰おうじゃないか、はははは！

そして、俺は後悔する事になる。そんな楽観的な考えをしていた事を……。

俺達は啞然としていた。もつともミエルは表情の起伏が乏しいため、単なる俺の予想だが、この状況で啞然としないはずがない。

俺達は今、シャーナ様の工房に来ている。レンガ調の家の中には俺の大好きな空間が広がっていた。真ん中にでかかど置いてあるのは鉄を鍛えるための台で、その上には色々な種類の槌が散乱している。その奥には鉄を熱するための火炉が置いてある。他にも俺の大好きな砥石やら作業台やら仕上げ台やら様々な鍛冶に必要な道具が置いてあるが、今回の惨劇は最初に紹介した台と火炉を使用して行われようとしていた。

解体屋の持ってきた袋の中には、アイアンブレイカーのぷりぷりとした肉がステーキにするのに最適な大きさに切られて入っていた。

「な、なあ。本当にそれで焼く気か？」

「はい、そうですよ。おいしく焼くので期待してくださいねっ」

ライクの勇気ある発言は笑顔で一蹴された。こんな満面の笑みで自信満々に言われたら、もうどうしようもないだろう。例えば右手に持っている鍛冶屋箸で肉を掴み、左手に槌を装備しているとしてもだ。

火炉の中では、すでに高温の炎が暴徒と化している。さすがのアイアンブレイカーでも無事では済まない気がするが、まあそれはいいでしょう。問題はむしろ左手の槌だ。

「じゃあ、その左手に持っている槌はなんだ？」

ライクが意外に食い下がる。まあ命の危機もあり得るからな。

「へ？ 焼いたら、これで鍛えるんですよ？」

ちょっと言ってる意味がよく分かりません。

しかしシャーナ様は至極当然の事ように言う。逆にライクの方が変な人を見る目で見られている。大丈夫、お前はまともだ。

「いやいや、剣じゃないんだからおかしいだろ！」

うん、正論だよライク。今回だけはお前の味方だ。鍛冶バカのシャーナ様に鍛冶と家事の違いを教えてやれ。

「何ですかあ！ 剣も料理も愛情を込めるのは一緒じゃないですかあ！」

シャーナ様も独自の理論で迎え撃ってくる。さすが上級鍛冶師、考え方がひと味違う。

「確かにそれは一緒だ。でも込め方は鍛冶と料理じゃまったく違う
だろ？ 同じ武器でも剣と弓だと作り方がまったく違うだろ？ そ
れと一緒にだよ」

「う……、それは確かにそうですけど……」

いいぞ、冷静な良い切り返しだ。鍛冶師にとって、こんなに解り
易い例えは他にないだろう。シャーナ様は返す言葉がない様だ。

「そうだろ？ だから料理だって、ちゃんとそれに合った方法でし
ないとだめなんだ」

「で、でも。私にはこれしか……」

「でもじゃない。それなら俺が調理するよ、それでいいだろ？」

ライクはここぞとばかりに調子に乗ってまくしたてる。

いい感じだが、これはやりすぎな気がするぞ。見る、シャーナ様
が泣きそうじゃないか。泣かれたらまたいつものパターンになる可
能性大だぞ。

フォローだ、フォローをいれる！

「大丈夫、貴女は間違ってるわ」

お、何故かミエルが動いたぞ。そうか、こいつもこのままではま
ずい事に気付いたんだな。

「ミエルさん……」

「貴女はちよつと……外道なだけ。この外道」

「げ、外道！？」

ナイスフォロー……なわけあるか！ 淡々と何言ってるんだ、こ
いつは。

見る、シャーナ様がプルプル震えて泣いているじゃないか。ん？
いや何か違うな。これは泣いてるんじゃないやなくて。

「も……も……も……」

「シャ、シャーナ……？」

「もうっ！ いい加減にしてくださいよおお！ 私には私のやり方があるんですから、放っておいてくださいよおお！」

シャーナ様は怒鳴ると、勢いにまかせて肉を火炉に投入してしまった。アイアンブレイカーの肉の油によって、暴徒だった炎は暴君へとパワーアップしている。

「さあ、おいしく焼いてあげるですよお！」

もうそこには可愛らしいシャーナ様はいなかった。上級鍛冶師としての真剣な誇り高き姿がそこにはあった。

「仕事の邪魔です！ どこか行っててください！」

というわけで、シャーナ様に工房を追い出された俺達は、奥にある八人掛けのテーブルがあるだけの応接室で、肉が無事であるように祈っていた。

俺は食べないからどうでもいいんだけどな。祈りを捧げているライクを尻目に、俺はテーブルの上でのんびりしている。

それにしても何も無い部屋だな。そう思いながら部屋の中を見回していると、一本の剣が壁に飾られているのを発見した。

あ、あれはまさか！

間違いない、俺が見間違っわけがない。鞘に納まっていても分かるシンプルな上品さと美しさ。あれは俺の妻のエリザベルだ。

おい俺だ、サウザートだ、今帰ったぞー。とりあえず飯の前に研ぎ研ぎしてくれー。

「ぎゃー！ 真っ黒ですう！ 早く鍛えるですよー！ ……………ふう、よし次の肉ですう」

エリザベルは何も言ってくれない。代わりに何やら不穏な声が聞こえたが、俺は気にしない。

わかったぞ、久しぶりの再会で照れてるんだな。ふふふ、シャイな奴め。かくいう俺も再会に感動して、先程から体を刺激が駆け巡って……………刺激？ なぜ感動して刺激が……………ノゲホオオオオ！？

ノゲホーフィッシュの時と同じ様な感覚が俺に押し寄せてくる。これはあれか、臭いってやつか！

しかし、ライクとミエルは平気な様子だ。え、俺だけ何かノゲホー的な何かを感じてる？ 何か焦っちゃって何かって何か二回も何か言っちゃったよ！ ……落ち着け、俺。

「ライクさん、ミエルさん、できましたよおー」

ノゲホオオオオ！

シャーナ様が入ってきた瞬間、俺に更なる刺激が押し寄せる。やめてノゲホオオオオ！

よく見ると、シャーナ様は鼻に洗濯バサミをしているではないか。

そしてライクとミエルも鼻をつまみだした。

ですよね、やっぱり臭いですよね！ よかった、俺だけじゃなくて。いや全然良くないノゲホオオオオ！

「はい、いっぱい召し上がれ」

「……シャーナ。これは一体なんだ？」

「炭？」

「ち、違いますよ！ これはアイアンブレイカーの焼き肉ですよ！……ちよつと焼きすぎちゃいましたけど、テへ」

テヘじゃありませんよ、シャーナ様。テーブルに置かれた大きな皿、その上には砕かれた炭のような物体が山のように盛られているノゲホオオオオ！

折角、解体屋がステーキサイズに切ってくれた意味がまったくないノゲホオオオオ！

「あの一……、洗濯バサミいります？」

「いる」

「いる」

いる。

二人はシャーナ様から洗濯バサミを受け取ると素早く鼻を挟む。何だこの集団ノゲホオオオオ！

あれ……俺には？ 俺にも洗濯バサミくれよ！

このままじゃずっと語尾が『ノゲホオオオオ』になって、大分鬱陶しい感じになっちゃいますけど、いいのかノゲホオオオオ！

普通は『ノゲホオオオオ』って使わないんだろうけど、俺は臭い時の表現をこれしか知らないノゲホオオオオ！

「ぶ」

「ん、ミエルどうした？」

「……何でもない」

「お、見た目はあれだけど、意外とカリカリしててうまいかもしれない」

何の躊躇もなく食べたノゲホオオオ！

「でしょでしょ！ ほら、私の調理方法に間違いなど無かったのですよー！」

さすがにそれはないですノゲホオオオ！

「はは……」

何かちよつと苦笑いしてないかノゲホオオ！

「そつね、素材の味を台無しにしてる割にはおいしい」

言っちゃったよノゲホー！

……はあはあ、やっと刺激に慣れてきたぞ。

「はう……」

こつちがはう……ですよシャーナ様、マジ勘弁してください。

二人の感想から察するに、腐ってもアイアンブレイカーだという

事だろう。しかし、そうなると思しやないのは俺だけって事か。はあ、もう俺は疲れたよ、エリザベル。

そして俺はもう一つ疲れる事実が判明した事に気が付いた。それは俺の新たな能力がどうやら嗅覚ではないという事だ。なぜなら、俺が感じるのは臭いニオイだけで良いニオイは一切嗅ぐ事ができないからだ。

となると、俺の新たな能力は臭いニオイを刺激として感じる能力という事になる。しかも、どうやら人間よりも臭いニオイを広範囲で感じる事ができるみたいだ。

……何なのこのイジメ。地味とかそんなレベルじゃなくて、ただの嫌がらせじゃないか！

「ぶ」

「ん？ どうした？」

「……何でもない」

ぶって何だよ。口から屁でも出たのか？ はいはいノゲホー。

「ところで、シャーナはいつまでここにいるんだ？」

「えっと、最低二週間はいると思いますよお」

ライクとシャーナ様は、炭をカリカリという音を立てながら食べつつ、会話を始めた。

二週間か、長いようで短いなあ、悲しいなエリザベル。

「それはさっき言ってた仕事ですか？」

「そうなんですよ。はあ……」

シャーナ様は溜息をついて、あからさまに嫌そうにしている。二

日で三十本作る化け物が二週間もかかる仕事なのだから、相当大変な仕事なんだろうな。星を真つ二つにする剣でも作る気なのだろうか。

「何だ、嫌そうだな？」

「はい、そりゃ嫌にもなりますよあ……。剣としての性能はどうでもいいから、とにかく装飾を派手にして世界一美しい剣を作ってくれとか言われたんですから。あの人は一体剣を何だと思ってるんですかねえ！」

「な、なるほど」

シャーナ様は、まったく興味のない学書を誕生日にプレゼントされた子供のように机をバンバン叩いている。

怒るのも無理はない。鍛冶師の仕事は良い剣を作る事であつて、剣を着飾る事ではないのだから。それに宝石をつければ美しくなるというわけではないだろう。見る、我が妻を。着飾らなくても、どこかの国の王女様みたいではないか。そんな事もわからない奴が、シャーナ様に剣を作ってもらおうなんて百万年早いわ！

……俺さつきそいつにすごい感謝してたような気がする……。気のせいだな。

「それで今日ちよつと具体的な事を決めるのと、シンプルでも素晴らしい剣があるという事を説明するために、エリザベルちゃんを持つて会いに行くんですけど、憂鬱で……。お世話になっている方の息子さんなので断るに断れないんですよええ……」

シャーナ様は深く溜息をついている。

俺の妻の素晴らしさが分からない奴なんて、この世にいるはずがないじゃないですか。心配しなくても大丈夫ですよ。

「ついて行ってやるのか？」

「いえいえ、大丈夫ですよ。お言葉だけ嬉しく貰っておきますです」

「やーい、フラれてやがるぜ。見なよエリザベル、これがモテない男ってやつだよ。惨めだよね。」

「実は後で護衛さんが迎えに来るのですよ」

「護衛？」

「はい、ライクさん知らないんですか？ アイアンブレイカーを討伐した前日の夜中に、中央広場で通り魔事件が起きたんですよ」

俺はふと、アイアンブレイカー討伐の日の事を思い出した。朝、ギルドに向かう途中で、確かに広場が騒がしかった記憶がある。あれはそういう事だったのか。

「通り魔ねえ、被害者は女か？」

「いえ、男ですよ。鋭利な刃物で無惨に切り刻まれていたらしいです。怖いですねえ……」

シャーナ様は怪談話でもするようにゆっくりとした口調と神妙な顔つきで言ったが、やはり可愛いだけだった。

「男か……、そうになると愛憎のもつれとかでは無さそうだな。犯人が女でもない限り」

「そうとも限らないぞ、ライク。犯人は男色家のオカマで、うふーんとか言いながら襲ってくるかもしれない。おー怖い。」

「当たり前」

「え、何がだ？」

「……女」

「お前、犯人が誰か知ってるのか!？」

「……知らない」

ミエルの返答に、残りの二人は目を見合わせて困惑している様に見えた。

さつきからこいつは一体何なんだ。何も喋らないと思いきや、急に突拍子もない事を言い出す。本当に妖精でも見えているんじゃないだろうか、危ない薬の飲み過ぎで。

あ、もしかしたら今のは自白じゃないのか？ 薬の飲み過ぎでおかしくなっただけで周りにいた男を……！

警備兵さんここに犯人がいますよ！ 捕まえて！

そんな事を考えていると、ミエルが勢いよく立ち上がり、椅子が大きな音を立てて倒れた。

「ど、どうしたミエル？」

「帰る」

一言そう告げると、ライク達の制止を振りきって立ち去ってしまった。本当に謎だらけな奴だな。

「私、何か怒るような事したんでしょうか……?」

「いや、シャーナは何もしてないよ。あいつは少し変なんだ。気にしないでいいよ」

ライクは呆れた様子で椅子にもたれかかっている。シャーナ様はオドオドして相変わらず可愛い。

ライクはもたれかかったまま、「女か……」と呟いた。
気にするなと言いなから自分が気になっているじゃないか。

「なあ、シャーナ。魔剣って知ってるか？」

「え、魔剣ですか？ 少しくらいなら知ってますけど……」

シャーナ様はライクの突然の質問に面喰らっている。知ってるも何も、シャーナ様は魔剣である俺を二度も天国に誘った御方だぞ。知らないはずがないだろう。

「でも知っていると行って聞いた事があるだけで、見たことはないですよ」

えー、ひどいよシャーナ様……。

すぐそばにいるのに！ 気付いて！ そしてピカピカにして！
最悪、気付かなくてもいいからピカピカにして！

「そうか、そうだよなあ。どついう風に聞いている？ やっぱり勝手に動いたり、喋ったりするの？」

「うーん、具体的な事は聞いた事ないですけど、自分の願望と魔力を込めて作ると、それに合った力が備わるって聞いた事がありますよ」

なるほど、それはあれか、俺を作った奴は硬くなって臭いニオイを嗅ぎたかったのか。……変態じゃないか。

「ふーん、魔力ねえ。……本当にあるのかね、そんなもの」

「どうでしょうねえ。でも夢ですよ、自分が作った剣とお喋りができるなんて。ちょっとオシャレなお店で、ハーブティーを飲みな

がら二人で流行の鉱石について語り合つたのですよ。そして帰りは革洋品店に行つて、可愛い鞄と一緒に選ぶですよ。はわわ、夢のようですよ」

シャーナ様は完全に一人の世界に入り込んでしまった。さすがに魔剣でも紅茶は飲めないと思います。あと夢のようじゃなくて夢です。

「そして一緒にお風呂に入つて、寝る前には好きな武器の種類について語り合つたですよ、ぼわわあああん」

やめて、お風呂はやめてあげて！ 錆ちやう！

「そ、そうか。それは良かったな。じゃあ俺はこれで……」

ライクは苦笑いをしながらテーブルの上の俺を掴むと、妄想世界に迷い込んだシャーナ様を置いて、逃げるようにして工房から立ち去つた。

世の中、シャーナ様みたいな人ばかりなら平和なんだろうな。

昔の記憶……。

俺はこの街に来てライクに出会うまでは、ここまではずきりとした意思を持っていなかった。

本当にぼんやりと聞いていた会話などから言葉を覚えていただけだ。古ければ古いほど、その記憶は薄れている。

でも少しだけ覚えている。俺を作つた奴は、作り終えた時に何か願掛けみたい事をしていた様な気がする。思いだそうとしても思いだせない。

でも俺は無理に思い出そうとするのはやめようと思う。

何故なら、本当に作り主が変態だったら嫌だから。

7・感情を殺す理由

「うおー！ 今日こそはぐっすりと寝るぞ！ 死人のごとく寝るぞ！」

ライクは燃えている。それはもう消えかけのロウソクのように、無駄に最後の力を振り絞って燃えている。どうやら永眠したいらしい。

まあ、最近ほとんどまとまと寝ていないので、気持ちは分からないでもない。と言っても、その原因は依頼を断る特訓だったり、ノゲホーフィッシュを釣るための特訓だったり、はつきり言って自業自得だ。

むしろ、それに付き合わされた俺の方が安らかな休息が必要だろう。早く俺を解放しろ！

「サウザートもお疲れ」

突然、浮遊感に襲われたかと思うと、俺は部屋にあるベットに着地した。

何ともあっけなく解放されたのはいいが、相棒を投げ捨てるとはけしからん奴だ。いつもはちゃんとベッド横の木製の剣立てに丁寧に置いてくれるのにな。それ程疲れが溜まっているという事だろう。

ライクは一軒屋に住む金など持っていないので、四階建ての集合住宅の一室を借りて住んでいる。ちなみに三階だ。

安いだけあって室内はシンプルで、部屋は玄関を開けてすぐの部屋と風呂場ぐらいしかない。部屋の右手前には簡素な台所が設置されていて、奥には俺が投げ捨てられたベッドが部屋の三分の一ぐらゐを占拠している。あとは二人用の小さなテーブルと棚がいくつ

かあるぐらいの、何の面白味もない部屋だ。

所詮、家など休息するための物なので、無駄な飾り付けなど無い方が落ち着けて良い。」

「ふう、寝る前に風呂でも入るか」

ライクとミエルはテーブルとセットの椅子に腰掛けて水を一杯飲み干すと、一緒に風呂場へと消えて行った。

……ん？ ミエル？

「のわああああ！？」

程なくして、風呂場からライクの悲鳴が聞こえてきた。

「何でお前がここにいるんだ、ミエル！」

「ずっと部屋にいたけど」

悲鳴に続いて、二人の会話が聞こえてくる。

うん、確かに居た。一緒に水飲んだ。あまりにも自然だから何も思わなかった。もはや影が薄いかそういう次元ではない。空気が、あいつは。

「そついえは居たような……いやいや、だから何でいるんだよ！」

「お風呂入りたいから」

「おい、何脱ごうとしてるんだ！」

おいおい、何か楽しそうだな。何だこの疎外感、俺も混ぜろ。

「貴方は服着てお風呂に入るの？」

「脱ぐわ！　そういう問題じゃないんだよ、風呂は今から俺が入るんだよ」

「却下」

「却下だと……！」

何だ、このくだらない夫婦喧嘩みたいなもの。俺もエリザベルとこいうのやりたい。どちらが先にシャーナ様に研いでもらうかでもめたい。俺、愛妻家だから最後はちゃんと譲ってやるんだ。

「ふざけるな、ここは俺の家で俺の風呂だ！　出ていけ！」

ライクはどうやら亭主関白なようだ。すぐに逆転されそうだがな。

「じゃあ一緒に入る？」

「え、いいの？」

「命が惜しくないならだけど」

「失礼しましたー！」

ほら、逆転された。

敗北したライクは風呂場から出てくると、大きな溜息をついた。そして疲れが限界を突破し、抑えてきたものが抑えきれなくなつたのか、ついに爆発した。

「もう女なんて嫌だあああ！　俺はオッサン達に囲まれてくるうっうー！」

待て、早まるな！

ライクは乱暴に玄関の扉を開け放つと、外へと消え去って行った。去りに、再び乱暴に扱われた扉が、大きな音を立てて閉まる。

やばい、このままでは相棒が遠い世界に行ってしまう。おいミエ

ル、お前の責任だぞ、何とかしろ！

お、風呂場から出てきた。よし、今すぐライクを追いかけるんだ。俺を持って早く行け！

……そうそう、持ったら地面に投げつけて足で何回も……痛い痛い！ 何故、急に俺を踏む！

「何とかするのは貴方の口の悪さよ」

……え？

「爆睡して悪かったわね！ 助けてあげたのに暴力女とか言いやがって！ 誰が血マニアよ！ 誰が犬女よ！ 誰がメルヘンよ！」

え？ え！？

「私は豚じゃない！ ハムスターでもない！ 貴方には礼儀知らずとか言われたくない！ 口から屁なんかでない！ 私なりに本気でフオーしたつもりよ！ このっこのっ！」

……ちょ、ちょっと待って。どういう事なの！？

「ここまで私を不快にさせたのは、貴方が初めてよ！」

やめろ、痛い！ 悪かった。俺が悪かったから！

「分かればいいの。思わず感情を出してしまったじゃない。……この外道」

俺が謝罪をすると、物静かなミエルが帰ってきた。
どうなってるんだ。何故ミエルは俺が思った事を知っている。

「聞こえているから知っている。当然の事」

当然の事って……。じゃあ何か？ 今も俺が考えている事が筒抜けだっていうのか？ じゃあミエル、お前に問う。シャーナ様は？

「可愛い」

筒抜けてるー！ やめて恥ずかしい！ 魔剣にはプライバシーもないというのか！

「基本的にはない。私の前ではね。一応聞こえないようにもできるけど面倒くさい」

俺のプライバシーを面倒くさいの一言で済ませやがった……。泣くぞら。

お前は一体何者だ？ もしかして……魔術師か！？

「違う、私は魔具師」

違いが分からん。長剣と直剣の違いぐらい分からない。

長剣って俺みたいな直剣に比べて、そんなにすごい長いわけでもないのに何で長剣とか呼ばれてるんだらうな。

って、そんな事はどうでもよくて、結局、魔具師って何する人なんだ？

「魔具師は魔力を使って、物に力を与えて魔具にする者」

うーん、魔力を使って武器を作る鍛冶師って事か？

「大体合ってる。でも鍛冶師とは根本的に違う。あちらは素材から武器を作る。魔具師はその完成した武器に力を与えるだけ」

なるほど、じゃあ俺も魔具師ってやつに魔剣にされたって事か。いい迷惑だ。

……もしかして、お前が俺を魔剣にしたんじゃないだろうな？

「私はこんな口悪いの絶対に作らない」

そうですか、悪かったな、口悪くて。

「それに貴方からは魔具師の力を感じない。人は誰でも微弱ながら魔力を持っている。何も知らずに魔力を使っている人は少なからずいる。貴方はそちらの類。でも魔具の意思を聞くことができるのは魔具師だけ」

ふーん、俺は偶然の産物って事か。そんな奇跡いらなかったぜ、ちくしょう。

「そんな事を言っただけは駄目。魔力を使うのに大事なのは想い。貴方はとても想われながら生を受けたの」

なるほどね、そういうえばさっきライク達が話してたな。作った者の願望がなんちゃらって。

「そう、魔剣は魔具師の性格や願望・想いによって性能が大きく左右される。だから貴方の作り主はきつと性格の悪い変態」

はつきりと言つなあああ！ はあ、やっぱり普通が良かった。作り主も含めて。

「冗談。作られた後の環境によつても性格は変わる。それに、私の師匠が作った剣よりは余程マシ」

はあ、そりやどうも。師匠の剣は一体どんな変態なんだ？

「言うのも嫌。とにかく私はその剣を追つてここまで来た。その剣は私の家から全財産と一緒に盗賊に盗まれたの」

ああ、だから金持つてなかったのか。その責任を取らされて破門になったのか？

「それは違う。破門にされたのはもつと前」

ああ、そうなの。とにかくお前の目的は分かったよ、剣と金を取り戻しに来たんだな。

「金はそう。でも剣は違う。剣は破壊する」

破壊！？ 何故そんな事をする。魔剣には人……剣権もないというのか！

「危険だから」

危険つて、魔剣といつても所詮は剣だろ？ それだけで何がどうなるとは、自分の能力を見る限りは思えないんだがな。

「……一緒に来て。魔剣がどれ程恐ろしいか教えてあげる」

ミエルは俺を持ち上げると、ベッドのすぐ側にある窓を開けた。あの、夜風が入って寒いんですけど閉めてもらっていいですか？ おい、何で窓に足をかけている。もしかして窓から外にでるんじゃないだろうな？ というか、どこに行く気なんだ？

「墓参り」

ミエルが一言そう告げた直後、俺の体を気持ちいい浮遊感が襲う。ミエルは窓から向かいの家の屋根に飛び移った。軽くこいつの四人分ぐらいの距離はあっただろう。

お前、すごい跳躍力だな。

「私がすごいんじゃない。この靴がすごい。これも魔具」

ほう、魔具っていうのは靴でもできるのか。じゃあ、この靴も意思を持っているのか？ どうも、サウザートです。はじめまして！

「この靴は意思なんか持っていない」

何だよ、それならそうと早く言えよ。挨拶とかしちやって恥ずかしいじゃないか。

「魔具に意思なんかいらない。必要な力だけあればそれでいい。意思がなければ勝手に力を発揮することもない。だから私の魔具は私にしか使えない」

こいつ、さらっと俺の存在を否定したぞ。冷めた奴だな、ちよつとはシャーナ様みたいに一緒にお茶飲みながら会話したり、買い物したりしたいとか言えないのかね。

「そんなの駄目！」

ミエルは突然、再び感情を露わにして怒鳴った。いきなりビク
リするじゃないか。

「ごめん、でもそんなの駄目なの」

ミエルは悲しげな表情を浮かべている。昔何かあったのだろうか？

「ところで、貴方は何でそんなに説明口調なの？」

む、癖なんだよ、悪いか？ 今まで意思を読まれるなんて事な
かったしな。急に変わると言われても無理だ。

「そのままでもいい。貴方の意思、喜劇の台本でも読んでもみたく
ない。悪口以外は」

そりゃどうも。お前だって顔は可愛いんだから、その淡々とした
口調やめたらモテるぞ。

「大きなお世話」

ミエルはエルトリルの西門を大跳躍で飛び越えると、道から外れ
て草原をひたすら走っている。確かこの先には。

「着いた」

俺とミエルの目の前にはいくつもの墓が立っている。そう、ここは墓地。ある一件で命を落とした者達の墓地だ。

辺りを照らしているのは月の光のみ。それが墓地の不気味さを悪い意味で最大限に引き出している。エルトリル周辺で夜に来たくない場所、ダントツの一位だろう。

「ここはリザードマンキングによって、命を落とした者達の墓」

リザードマンキングか……。

俺がまだこの街に来る前の話だからよくは知らないが、突然一匹のリザードマンが強大な力を手に入れ、他のリザードマンを引き連れてエルトリルを襲ったんだよな。

「そう、そしてここが戦場」

そうだ、ここで多くのハンターが死んで行ったんだ。

ハンター達が束になってかかっても、リザードマンキングにはまったく歯が立たなかった。

そんな時、突如黒いローブを纏った人物が現れて、奴の剣をへし折ったんだっけか。

「そう、そしてリザードマンキングは力を失い、ハンター達によって倒された」

一体どんな奴なんだろうな、黒いローブ……ん？ 黒いローブ？

……もしかして!?

「私」

ミエルは表情一つ変えずにそう言つと墓場の奥へと進んでいく。
一番奥にあったのは立派な墓ではなく、土が少し盛り上がり、そこに木の枝が一本立っているだけの墓なのかもよく分からない物だった。

「これは墓。ちゃんとした墓。私の大事な物の墓」

ふーん、誰の墓だ？ ハンターが恋人だったとか？

「違う。これはハンターの墓じゃない。剣の墓」

剣？

「リザードマンキングが持っていた剣。私が最初に作った魔具」

なんだって！？ じゃあ奴が持ってたのは魔剣だったって事か？

「そう、私が作った魔剣アリエッタはエルトリルのハンターに渡るはずだった。でも、運んでいる途中で奴らに襲撃されて盗られてしまった」

ミエルは表情を変えないが、声が少し低くなっている。思い出して悲しくなってきたのだろう。

「そして私の魔剣は、リザードマンキングへと渡った」

俺に言われたからか、声の調子を上げている。無理すんな。

「……ちょっと黙ってて」

はい。

「……私はアリエッタに持ち主の役に立てる剣になってという想いを込めた。それが災いして、アリエッタはリザードマンキングに強大な力を与えた。だから、私はこの手でアリエッタを折った」

……………。

「その時決めたの。私は魔具に無駄な想いを込めないって。だから普段から感情をださないようにしている。魔具の力は本当に強力。だから誰でも使っていいなんて代物じゃないの」

なるほどね。だからお前はずっとそんな感じだったんだな。

「そう、普段から感情を殺していれば、魔力を込める時に必要な能力だけを引き出しやすいの。特に意思を持たせない様にするのに効果的」

そんな事してまで魔具を作る意味はあるのか？ お前はそれで楽しいのか？

「ある。これはアリエッタへの償い。私はもう、彼女のような魔具を生み出さないうちに戦うと決めたの。そのための意思を持たない魔具。楽しいとかそういうのは関係ない」

それで師匠の魔剣を破壊するって言うてるのか。折ってしまった剣のためにか、泣かせる話だな。

でもそれでアリエッタは本当に喜んでいるのか？ 自分を作ってくれた人の、こんな苦しむ姿を見て喜ぶと思ってるのか？

「私は苦しんでなんかない」

「いや、苦しんでるね。さっきから平然な振りをしてるけど、手が震えてるぜ。本当は泣きたいんだろ？ 悲しいんだろ？」

「黙りなさい、貴方に何が分かるの」

「分かりたくもないし、分かってやる義理もない。剣の気持ちがこれっぽっちも分からない女の気持ちなんてな。」

「……私がアリエッタの気持ちを分かかっていないっていうの？」

「そうさ、お前のしている事はただの一人よがりだ。自分勝手な思い込みをアリエッタに押しつけているだけだ。」

「うるさい！ あの子はね、私が折る直前に『私は母さんのために一生懸命、役に立ってたよ』って言ったのよ。あの子は気付いてなかったの、自分の力が人を困らせているということに。ただ純粹に私の想いを受け入れていただけなのよ。私はそれなのに……この手で……この手で……愛するわが子を……何も知らないあの子を……」

「ふん、やつと感情を出したか。確かにアリエッタは何も分からないまま死んでしまったかもしれない。でもちゃんと最後に自分の想いを言っているじゃないか。」

「自分の想い……？」

「そうさ、『母さんのために』ってな。あいつが本当に役に立ちたいと思っていた人は他でもない、お前なんだよ。お前を心から愛し

ていたんだ。そのお前が自分のせいで苦しんでいる。そんなの喜ぶはずがないだろ！

「そんな、アリエッタが私を……？」

……。

「そんな……そんな……そんなはずはない……」

ミエル、お前は芝居が下手だな。

「芝居？ 私は芝居なんかしていない」

しているじゃないか。本当は気付いているんだろう？ それとも本当にあいつが何も知らなかったと思ってるのか？ そうだとしたら、お前は大馬鹿女だよ。

「大馬鹿女……！」

だってそうだろう？

お前は自分が愛情を込めて作った魔剣を信頼していないって事じゃないか。落ちこぼれの俺だって善悪の区別ぐらいつくんだ。誤った道を進んでしまった愛剣を、自ら折る事で正すような正義感溢れる女が作った剣が、リザードマンキングのしている事が悪いかどうかなんて分からなかったはずがないだろう。

それでもあいつは、お前の愛情に応えるために悪にすら手を染めたんだ！

「知った風な事を言わないで！」

ああ、確かに全部俺の予想さ。でもな、お前が俺と同じ考えだつて事は確信してるぞ。お前気付いてないのか？ 自分が流している涙にな。その涙は凶星をつかれたからだろう？

「な、泣いてなんかない！」

ははは、今更慌てて拭き取っても遅いぜ。というか、凶星をつかれたって所は否定しないんだな。勘で言っただけなのに。

「だ、黙れ、この性悪魔剣！ だったら何だって言うのよ！」

そうそう、素直が一番だぜ。

ここまで言えばもう分かるだろう。お前はアリエッタを折った罪悪感から少しでも逃げ出したくて、あいつの愛情から逃げだしていたんだよ。

だから受け止めてやればいいんだ。それだけでいいのさ、償いなんて大層な事してくれなくても、作り主や使い手に愛情を注いで貰えるだけで剣冥利に尽きるってもんだ。

「何よ、剣の分際で偉そうにして、黙りなさいよ……黙れ……」

……。

「……ああ、ごめんなさい。ごめんなさい、アリエッタ……愛してる……愛してるよ……」

ミエルは泣きながら、今まで閉じこめていたものを全て解放するかのようになり、アリエッタの墓の前で何度も謝っている。

やり方を間違っていたかも知れない。でも、それはアリエッタを愛するが故の事だろう。愛してなけりゃ、こんなに綺麗な涙は流せ

ないさ。

ミエル、お前の想いはあいつに届いているよ。そして許してくれるさ。だって、自分がこんなに愛されてるって事が分かったんだからな。

「黙れって言ってるでしょ！ ……うわあああん！」

はい、すみません。黙っておきます。

「もう大丈夫、ありがとう」

どういたしまして。

ミエルは泣くだけ泣いてスッキリした様だ。これで、こいつが感情を閉ざして生きる事もないだろう。良かった良かった。

「勘違いしないで。私は一度決心した生き方を変えるつもりはない。師匠の魔剣も必ず破壊してみせる」

そうですか、まったく強情な奴だな。それにしてもシャーナ様といい、お前といい、女は剣に名前をつけて愛情を注ぐ奴が多いのだろうか。

「あんな子供と一緒にしないで」

おいおい、シャーナ様はあんな姿はしているが、立派な十八歳の大人なんだぞ。

「……………！」

ん。ははは、驚いてる驚いてる。感情隠せてませんよ、ミエルちゃー

「うるさい！ それに愛情を注いでいるのはライクだって一緒ですよ。何よ、サウザートとか言ったださい」

！ まあな、あいつは俺が大好きだからな。……って、ダサイ言うな！
！ かつこいいよ、サウザート！

「言っつて恥ずかしくない？」

恥ずかしいです。

「でも、大事にする事ね。あの人なら貴方を間違った道には進ませないでしょう。だから私は貴方をどうこうするつもりはない」

それは有難い、まだ死にたくないんでね。まあ、例え誰かの手に渡ろうとも、能力が能力だけに何の役にも立たないさ、俺なんか。

「それは分からない。貴方の作り主がどんな想いを込めたかは知らないけど、後で能力が目覚めるなんて初めて聞いた。この先、どんな能力が身に付くかは私にも分からない。だから気を付けて」

そうなのか、じゃあもしかしたら世界中のムサイ男達を全員シャーン様に変える能力なんかも身に付くかもしれんな。ああ、夢のよ
うだ。

「そんな能力に目覚めたら、夢のまま終わらせてあげる。貴方の人
生」

い、いやだなミエルさん、冗談ですよ冗談。……うう、目が本気
だ。

そういえば、ふと気になったんだが、俺の意思ってどんな感じで、
お前に伝わってるんだ？

「耳から聞こえるんじゃないかと、直接頭に響く感じ。だからたまに、
貴方の意思を自分の意思と間違えてしまう時があって困る」

ほう、なるほどな。そういえば思い当たる節がいくつもあるな。
お前の突拍子もない行動は俺の意思をそのまま実行していたからか
ふふふ、これは良い事を聞いた。

「良い事ってどういう事？」

脱げ脱げ脱げ脱げ脱げ、服を脱げ！

「……………！」

ぎゃはははは！ こいつ本当に脱ごうとしてロープに手をかけて
やがる。これは面白い！ いい玩具を手に入れたぞ！

「ここで朽ちろ、このクサレ外道！ ……帰る。今度こそお風呂入
る」

お、おい。俺を地面に刺してそのまま帰ろうとするな！ 俺も連
れてけ……連れて行ってください、ミエルさああああん！

「しめんなさいは？」

しめんなさい……。

8・謎の掛け持ち稼業

俺達が墓地から家に戻ると、ライクの姿はそこにはなかった。どうやらまだ帰ってきていないようだ。

まさか本当にオッサンにその身を捧げてしまったのでは！

「何か楽しそうね」

えへへ、分かります？ いや嘘だよ、ちゃんと心配しているよ。やめて、そんな目で見ないで。

だって、ライクが行く所なんてどうせ酒場だろう。放っておいても、その内酔っぱらって帰ってくるぞ。

「そうね、あの感じだと相当飲んでるでしょうね。一体どれくらいお金使って帰ってくるかしら」

……行こう。早く迎えに行こう！ ライクを助けに行くんだ！

「貴方、本当に面白いわね」

そりやどうも、でもそんな感情のこもってない誉められ方しても嬉しくないぞ。

そんな事よりもミエル、いやミエル様、今すぐ俺を酒場に連れて行ってください。お願いします。

「いいわよ」

あら、あっさり。

「私も情報が欲しい。酒場なら何か聞けるかも」

ああ、例の師匠の魔剣か。

そういえば最近、俺は魔剣がこの街に持ち運ばれたって話を聞いた気がするぞ。あの時はてっきり俺の事だと思っていたが。

「誰に聞いたの？」

ミエルは再び完璧に無表情の仮面を被ってしまっている。ちっ、驚くと思ったのに。

「いいから早く答えて」

はいはい、お前も知ってるアンナだよ。覚えてるだろ、あの毒舌女。

「貴方がそれを言うの？」

はい、すみません。私が一番毒舌です。舌嚙んで自分の毒である世に行ってきます。舌なんかないけど。

「そうね、ないわね。そう、やっぱりあの女がそうなのね」

はあ、折角会話できる奴ができたかと思ったらこんなに面白味のない奴だなんて……痛い痛い、蹴るな！

「もういい、行きましょう」

お、おい。まだアンナが何なのか聞いてないぞ。

「貴方が遮るからでしょ。移動しながら話す。ライクの財布が空になってもいいの？」

今すぐ行きましょう、ミエルさん。

うひょう、ミエルが再び開けっ放しだった窓から屋根に向かって跳躍すると、また気持ちいい浮遊感が俺を襲う。

やばい、この感癖になりそう。跳躍するたびにフワアって！フワアって！

「楽しんでる所悪いけど、酒場はどこ？」

えーと……、今通り過ぎた。

「……………」

ミエルは無言で引き返し始めた。

あ、そこですミエルさん。怒らないでください、エルガニまんじゅうあげるから。

「それよりも折らせて」

それは勘弁してください。

そんな事をしている間に、結局アナの事は聞けないまま酒場についてしまった。

ミエルが酒場の扉を開くと、中はいつもと変わらずお祭り騒ぎだった。やっぱり酒場はいいな、心が踊るぜ。

見てるだけで酔っぱらってきた。きゃっほー！

「頼むから、貴方はこれ以上騒がないで。うるさい」

む、俺が折角楽しんでるのに水を刺しやがって。ほら見る、女性の登場に周りのオッサン達が盛り上がってるぞ、サービスしなきゃな！

「は？」

逃げ逃げ逃げ逃げ！ 服を脱げ！

「……………！」

「おおおお！ 何だ姉ちゃんストリップか！？」

「うーん、いい太モモしてますなあ。太すぎず細すぎず」

「いやあ、まったくですな。特に内モモのホクロがエロくてたまらんですなあ」

「いいぞー！ もっとやれー！」

ぎゃははは！ 俺が念じると、ミエルは下着が見えそうなギリギリの所までローブを捲りあげた。どうせなら見せちゃえよ、ミエルなだけに見えるってね。ぎゃははははは！

さあ、会場は大盛り上がりだ。どうする、どうしちゃっ！？

「お前等、全員殺す」

……………。

「お前等、全員殺す」

……そ、そんなミエルさん。二回も言わなくてもいいじゃないですか……。さつきまでお祭り騒ぎだった酒場の中が、葬式会場のように静まりかえってますよ。

「特にお前は二回殺す」

ミエルはオッサンの一人ににじり寄ると、無表情でそう告げた。その無表情が女性のものとは思えない驚異的な威圧感を醸し出している。そこら辺のリザードマンよりも数倍恐ろしい。

オッサンは「許してください、許してください」と目に涙を浮かべながら何度もミエルに懇願している。

そのオッサンは、ミエルのホク口を発見したオッサンだった。恐らく恥ずかしかったのだろう、女らしい所もあるじゃないか。

痛い！ 地味に剣先を地面にぶつけないで！ 鞘越しても痛いんだぞ。

「私の質問に答えたら、一回だけで許してあげる」

結局殺される運命のオッサンは、返事をしていいものか分からず困っていたが、観念して首を縦に振った。

オッサン、アンタの死は無駄にはしないぜ。

「ライクはどこ？」

ミエルがそう質問して、俺はライクが見当たらない事に初めて気付いた。まさか、すでにオッサンにお持ち帰りされた後なのだろうか。

「ライクなら俺がアンナをさつき裏通りの方で見かけたって言った

ら、行ってみるって言って、酒場から出て行っただぞ」

目の前のオッサンとは違うオッサンがそう答えた。

またアンナか。ライクがあいつに自ら会いに行くなんて余程の事だぞ。俺が知らない内に一体何が起きているんだ。

ミエルは一言、「ありがとう」とだけ言うと、酒場を後にした。

酒場の中から安堵の溜息の合唱が聞こえてくる。

ああ、今日は夜風が身に染みるぜ。しかし、何だろうこの感じ。

夜風にしては冷たすぎる。全身に嫌な感じが広がる。これはもしか。

「私の殺気」

で、ですよ。だ、駄目ですよ、ミエルさん。感情を押さえないと鬼のように怖い魔具ができてしまいますよ。

「次はないから」

はい。

「やっぱり、アンナが怪しい。ライクも気付いているのかも知れない」

なあ、いい加減話してくれないか？

「いいけど、時間が惜しいから歩きながら。裏通りはどっち？」

裏通りはその四つ角を左に曲がって真っ直ぐ行っただ所だ。今回は屋根を飛び回らないのか？

「意思のない魔具は私の魔力を使って命令する事で動くの。その魔力にも限りがある。だから温存しておく。何か起こるかもしれない」

ミエルは裏通りに向かって歩みを進めた。

なるほどな、意思のない魔具にはそういう欠点があるわけか。

……ん？　じゃあ俺の様な意思を持っている魔剣は、魔力無しでいくらでも能力を使えるのか？

「それはない。意思を持っていても魔力は原動力だから必要。能力どころか意思の維持にもね」

え、じゃあ俺の魔力はいつか尽きるのか！？

「そういえば知らないのね。人間も魔具も方法は違うけど、魔力を回復する手段があるわ」

ほう、人間の方はいいから魔具の方だけ教えてくれよ。そんな難しそうな事、二つも聞いてられないからな。

「魔具の魔力の源は使命感」

……使命感？

「そう、込められた想いというのは魔具にとって絶対的な使命なの。その想いを達成しようとする使命感が魔力を生み出すの。形はどうあれ、自分が使命を果たしているという感覚が得られれば、魔力は生み出されるわ」

おいおい、それじゃあ何か？　魔具は永遠に作り手の想いに縛ら

れるって事か？ 一気に自分の存在が不幸に思えてきたぞ……。

「その想いの内容を忘れている癖に何を言ってるの」

えへへ、やめるよ照れるじゃないか。

……ちよつと待てよ、俺は想いの内容を忘れてるのに何で大丈夫なんだよ。

「忘れてるといっても、ちゃんと体は覚えているはずよ。だから貴方は知らない内に、ちゃんと想いの通りに動いているという事ね」

要するに俺の魔力が尽きていないのは、偶然的に使命を果たしているからなのか？

「そうね、だから貴方は今とても不安定な状態。早く思い出す事ね」

うう、ついさっき思い出さなくてもいいやって思った所なのに……。

「安心して。意思を持っているというだけで、僅かだけど使命感を感じているはずよ。それだけじゃ、うっすらと意思を維持する程度の魔力しか生み出せないけどね」

うっすらと意思を維持って、ライクに会う前の俺そのままじゃないか。それはそれで嫌なんだが……。

くそう、変態かもしれない奴の想いなんかどうでもいいよ。俺を自由にしてくれ、俺を解放しろ！ というか普通にしろ！

「そうね、解放して欲しいわよね。……アリエッタもそう思ってたに違いないわ」

……あの、落ちこみたいのは俺の方なんですけど？　というかアリエッタはこの事知ってたのか？

「……そういえば、言うの忘れてた」

そんな大事な事を忘れるなよ、無責任だな。

それだったら、アリエッタは解放して欲しいなんて思う事すらなかっただろう。どっちにしろ、お前のために一生懸命やってたはずだぜ。

「そうだといいわね。少なくともアリエッタはその可能性がある。でも作り主のためだなんて、これっぽっちも思っていない奴がいる」

もしかして、師匠の魔剣の事か？

「そう、あいつは自分のためだけに想いを実行している。とても危険」

うーん、結局その師匠の想いつてのは何なんだ？　後、アンナが一体どうしたんだ？　そして俺に込められた想いつて何だ？　ごめんね、質問ばかりで。

「あの女の二オイを嗅いた時に微弱だけど師匠の魔力を感じた。あれは多分、魔剣の物。一つ目の問いは答えたくないし、三つ目は知らない」

そういう事か。アンナは魔剣の存在を知っていた。ライクに誘いを断られた後も、一人で探して見つけてしまったというワケか、まあ予想だな。

というか、できれば最後の問いに是非答えて欲しかったんですけどね、こちらとしては……。

ん、どうした？ いきなり止まって。

「裏通りってこの先？」

ミエルは暗闇の先を指差しながら俺に聞いてきた。そうだよ、そこから裏通りさ。

エルトリルは街の至る所に街灯が設置されていて、夜でもそこそこ明るい。しかし、貧乏人達が住む裏通りは街灯など一切なく、月の光と家から漏れるわずかな光だけが、頼りなく道を照らしているだけの不気味な場所だ。

どうした、早く行けよ。まさか怖いのか？

「怖くなんかない」

ミエルは平然そうに裏通りに入って行ったが、俺のグリップを握る手が汗ばんでいる。これはビビっている証拠だろう。

あ、こいつグリップから鞆に握り直したぞ。凶星だったな。たしかに鞆ごしなら汗ばんでるかは分からないが、それはもう手遅れつてもんだ。

なんだ、可愛い所あるじゃないかミエルちゃん、ハハハ！ ……痛い痛い、俺を地面にぶつけるな。

もう、俺のデリケートな体がピリピリしているじゃないか、やめてよね！

……違うな、この感じは地面にぶつけられたものではない。これ

はノゲホーだ。俺の体が臭いニオイを感じているんだ。

ノゲホーフィッシュやシャーナ様の料理に比べたら圧倒的に弱いけどな。大砲と投石ぐらいの差があるぞ。

「どこから？」

そんなのは分からない。俺は刺激を感じるだけだ。臭いニオイの元がどこかなんて分からない。だが、どんどん刺激が強くなっていくのは分かる。このまま真っ直ぐでいいと思うぞ。

俺の考えは正しかった。ミエルが真っ直ぐ進んで行くと、臭いの元らしき物が見えてきた。

「……死体？」

俺達の目の前には数人の男達が血を流して倒れている。

なるほど、臭いニオイの正体は血だったのか。そんなニオイまで感じ取れるとか敏感すぎじゃないか、俺。

そんな事はどうでもいいとして、さすが裏通りだな。こんな所に死体が転がって……ん？

違うぞ、こいつら死んでいない。血を流してるといつても、これ鼻血じゃないか。あまりに大量の流血だったので一瞬分からなかった。全員例外なく、顔がへこんで気絶している。どんな怪力で殴られたのだろうか。

しかし、こいつらは一体何の集団なんだ？ 全員黄色の半袖の服と短パンのズボンを着ている。待てよ……、どこかで見た事あるぞ、この格好。どこだったかな……。

「こいつらよ、私のお金と魔剣を奪った盗賊」

こいつらが盗賊？ こんな少年のような格好した盗賊がいるわけ

ないだろ。何かの間違いじゃないのか？

「いいえ、間違いない。逃げる後ろ姿を見た時に私も同じ事思ったから」

それなら間違いないな。こいつら以外にこんな変な集団いてたまるか。

「う、うう……」

奥の方から弱々しいうめき声が聞こえてくる。どうやら誰か気がついたようだ。

「だ、誰だお前は……」

ミエルが静かに近づくと、盗賊の男は怯えた様子でこちらを見ている。盗賊のくせに女に怯えるとは情けない。お前は本当に男か！

「私は女」

「そ、それは見たら分かるが……」

何故、お前は性別を答えたんだ。あ、また俺の意思に影響されたのか。

「そう」

「そ、そうだ……」

おい、話が進まないぞ。いちいち俺の意思に返答するなって。

「じゃあちよつと黙ってて」

「……………」

……………。

「貴方達、盗賊でしょ？」

「な、何故それを！？ ……てめえ、あの女の仲間か！」
「違う」

「嘘つくんじゃねえ！ あの犬男といい、お前といい、俺達はいいつから盗られた剣を奪い返そうとしたただけだ！」

「その剣は魔剣？」

「ほらやっぱり、あいつの仲間じゃねえか。ちくしょう！」

やはりアンナがこいつらから魔剣を奪ったのか。犬男っていうのはライクの事か？ あいつは犬男という程ではないと思うが、こいつから見たら大きい部類に入るのだろうか。

「二人はどこへ？」

「知らないし、知ってても誰が教えるか！ 釣り好き盗賊団を舐めんじゃねえぞ！」

いやいや、舐められたくなかったら今すぐ名前を改名しろ！

…………… 待てよ、釣り好きで半袖短ズボン…………… ああああああああ！

「な、なんだ！？」

男が突然驚きの声を上げたので何事かと思つたら、ミエルが目を大きく見開いて、驚きの表情のまま硬直していた。

…………… こいつ、俺が急に心の中で大声出したから驚いたんだな。そ

りや突然こんな顔されたら男も驚き返すわ。

そんな事よりも、こいつどこかで見た事あると思ったら、釣り具屋の店主じゃないか！ まさか盗賊だったとは……やはりぼったくりだったんだな、くそ！

おい、ミエルよ！ こいつから今すぐ四万シャルーを奪い返すんだ。おい、聞いているのか？

「……………」

駄目だこいつ、さっきので安心してやがる。こつなったら……！

脱げ脱げ脱げ……

「折るわよ」

「ひい！ わかった言う、言うからここだけはやめてくれ！ 気絶する前に聞いたんだ。二人が女の方の家に行こうって話してるのを！ 何か慌てている様子だった。俺が知っているのはそれだけだ。ほ、本当だ！」

男は何を折られると思ったのか、必死に股間を守りながら自白を始めた。

そんな事よりも、四万シャルーを取り返すんだ！

「そう、わかった。ありがとう」

おい、どこへ行く。聞いているのかミエル。ミエル、ミエルさーん！
ぐぬぬぬ……！

脱げ脱げ脱げ脱げ脱げ、服を脱げ！

……駄目だ、こいつ俺の意思を聞かないようにしてやがる。ああ、
どンドン遠のいていくよう……。四万シャルウウウウウ！

「いい加減、機嫌を直して」

……。

「もういい、折る」

わ、わかった。わかったから俺を振りかぶるな。

「急がないといけない。アンナの家はどこ？」

知らない。

……だから振りかぶるなって、本当に知らないんだよ。

「じゃあ、誰か知っている人は？」

うーん、知ってる人が、そうだなあ……。その時、俺は一人の女性を思い浮かべた。

「そういう前置きいらない」

……へいへい。エリスだよ、エリス。ノゲホーフィッシュ預けに行った時にいただろ、ギルドの受付のあいつだよ。

「なるほど、ギルドならハンターの情報ぐらい把握しているという事ね」

そういう事だ。行くのか？

うおう！？

ミエルは俺の問いに答えないまま、大跳躍で一気に近くの家の屋根に飛び乗った。ああ、気持ちいい。

「嫌な予感がする。なるべく節約しながら急ぐ」

そう言ったミエルはもの凄い勢いで屋根から屋根へと飛び移る。

これはもう気持ちいいと言っていていられない。痛い、空気が痛い！
これのどこが節約してるというんだ！

「そっいえば一つ質問」

お前よくこの状況で喋れるな。何だ？

「さっきの奴の店は何ていう名前なの？」

さっきの？ ああ、釣り具屋か、そんなの知らんよ。そこら辺でツリスキーさんの釣り竿が売っている店はどこ？ って聞いたら誰か知ってるんじゃないか。

「ツリスキー……安直ね」

同感だ。

「あら、貴女は確か、昼にライクくんと一緒に来た……」

「ミエル」

「そうそう、ミエルちゃんと……あら、サウザートちゃんも一緒なのね」

俺までちゃん付けにするな。

エリスは俺達がギルドに足を踏み入れたのを見るやいなや、カウンターの向こうから話かけてきた。

……ああ気持ち悪い、ミエルの超スピードのせいで完全に酔ったわ。動いてないのに視界がフラフラする。

酒に酔った時もこんな感じなんだろうか。それなら俺は酒なんか飲みたくないな……うえっぶ！

「ど、どうしたの！？ 気分でも悪いの？」

突然、口を押さえて気持ち悪そうにするミエルを見て、エリスはカウンターから慌てた様子で飛び出してきた。俺の気持ち悪さが伝わった様だ。本当に難儀な奴だな。

「お前が言っな」

「え？」

「……何でもない。それよりも聞きたい事があるの」

ミエルの不可解な言動にエリスは困惑の表情を浮かべている。そ

して俺はミエルに足で小突かれて痛いというよりは、ちょっと気持ちいい。

「アンナの家はどこ？」

「ミエルちゃんもアンナさんに会いに行くの？ あ、そうか、ライクくんを追いかけてるのね」

エリスは左手の平を右手でポンと叩いてスッキリした顔をしている。逆に予想外にライクの名前が出てきて俺はモヤっとしている。

「何故ライク？」

「え？ さっきライクくんもアンナさんの家の住所聞いてきたから、てっきりそうなのかと」

エリスは首を傾げながら言った。俺が自由に動く首を持っていたなら、その三倍は傾げていただろう。

ライクとアンナは一緒にいるはずなのに、何故ギルドに住所を聞きに来る必要があったんだろうか？ 途中ではぐれたのか？

「ライクは何か言ってた？」

「うーん……。あ、アンナさんの討伐したノゲホーフイッシュを見せて欲しいって言われたから見せたわよ。見た途端、血相変えて出て行っちゃったけどね」

「それ、私にも見せて」

「え……、別にいいけれど、あまり女の子が見るものじゃ……」

エリスは何やら見せるのを躊躇しているようだ。

確かに足の生えた魚なんて女が見て喜ぶ物ではないが、ミエルはその気持ち悪いのを倒した一人だぞ。何を渋る必要があるんだ？ もしかして、つまみ食いでもしたんじゃないだろうな。

「いいから見せて」

ミエルはお得意の無表情でエリスにせまった。その圧倒的威圧感にエリスは困りながらも、俺達を倉庫へと渋々案内してくれる事となった。

ところで今気が付いたが、ミエルはまた俺の声を聞かないようにしているな。先程からまったく反応がなくてつまらない。まあ、その方がこちらにも気楽でいい。俺は自由だー！

「ここがギルドの保管庫よ」

そんな事を考えている間に着いたらしい。ギルドのカウンターのすぐ奥だから、すぐ着くのは当たり前だが。

目の前には大きな鉄製の扉が立ちはだかっている。エリスが扉の取っ手下にある鍵穴に鍵を差し込んで程なくすると、ガチャリという音が聞こえた。

エリスはどっこいしょと言いながら、重たそうに必死な形相でゆっくりと扉を開いていく。こいつも、もう年だな。そろそろ結婚相手を探した方が良さそうだ。

「真つ暗」

「あ、ごめんね。今明かり付けるから」

エリスは扉の近くの台からランタンを取ると、火を灯した。

中はひんやりしている。左右にいくつも設置されている棚には何かよくわからないホルマリン漬けやりザードマンの頭など、とにかく怪しい物だらけだ。

そんな中で、一際異彩を放つ物体が俺の視界に飛び込んできた。それは棚ではなく、中央の広い空間に置かれている二体のノゲホー

フィッシュだ。問題はそのうちの一体……。

「……バラバラ」

ミエルの言う通り、アンナが倒した方のノゲホーフィッシュは、無惨に切り刻まれてバラバラだった。こんなに趣味の悪いパズルを見たのは初めてだ。

「そうなのよ、アンナさんは手数が多いタイプだから、モンスターの傷はいつも多い方ではあるんだけど、こんなにバラバラなのは初めてだったから私も驚いちゃって……ノゲホーフィッシュは見た目があったから、どうせバラバラにするからいいんだけどね」

俺もアンナが討伐したモンスターはいくつも見た事がある。しかし、明らかに質が違う。アンナの軽い攻撃でいくら斬りつけても絶対にはならない。これはもう決まったようなものか……。

「さあ、いつまでも見ている物じゃないわ。アンナさんの家までの地図書いてあげるから出しましょう」

ミエルは無表情のまま、バラバラのノゲホーフィッシュをじっと見つめていたが、エリスが呼びかけると、こくりと頷いて素直にそれに従った。

俺は聞き逃さなかった。ミエルが保管庫を出る時に小さな声で、「間違いない」と呟いたのを。

9・魔剣つてすごいんだな……

おい、本当にここなのか？

「ここで合ってる」

俺はミエルの二倍近くはある鉄の柵と、その先に広がる広大な庭を見て呆然としていた。

「自分で呆然としていたって言うのは変」

うるさいな、俺の説明口調にいちいち横やりを入れるなよ。別に
お前に話かけているわけじゃないんだから。

「わかった。聞かないようにするから勝手にして」

ああ、そうしてくれ。

……………ミエルの爆睡暴力血マニア犬女。

「折る」

聞いてるじゃないか、この嘘つき！

「絶対言うと思ったから」

もういいよ気にせずやるから、勝手に聞いてる。この盗聴魔！
…………返事がない、聞いてないみたいだ。

そんな事よりも、この大豪邸がアンナの家だったとはな。庭だけでもライクの部屋が何十個も入りそうだ。

この街に住んでいて、この大豪邸の事を知らない奴はいないだろう。全体を白い壁に覆われたこの大豪邸は、俺が歩いたわけではないが、周囲を一周するだけでも結構な時間を費やす。

しかも聞いた話によると、この大豪邸は別荘らしい。それもあって住民の妬みの的となっている。

しかし、数人の警備兵がいつも周囲を徘徊しているので、落書き一つするのも困難だ。何もできないのと、別荘のくせに警備兵を雇っているというのが、更に住民の妬みを助長させる結果となっている。

その妬みの対象がアンナというわけだ。確かにお嬢様育ちという感じはしていたが、ここまでの金持ちだったなんて。何故ハンターなんかしているんだ。

うお！？

突然、俺はまた浮遊感に襲われた。ミエルが何の前触れもなく、鉄の柵を飛び越したのだ。

おい馬鹿！ そんな事したら警備が……そういえば警備が一人も見当たらないな。

……嫌な予感しかない。

そんな俺の予感はすぐに的中する事となる。

広大な庭の奥には二階建ての宮殿のような白い屋敷が、どっしりと構えている。

ミエルがそこに向かって警戒もせず堂々と近付いて行くと、俺の全身をノゲホー的な刺激が襲った。

刺激は先程の盗賊の時よりも少し強いぐらいだろうか。しかし、

刺激の種類的にはさつきとまったく一緒だ。恐らく、これは血の二オイだろう。

おい止まれ、ミエル。屋敷内で何かが起こっているぞ。そんな堂々と正面突破するな。

おい、俺の話を聞けえええええ！

俺が声にならない叫びを上げると、ミエルは目を見開いて周りをきよろきよろ見渡し始めた。

俺だ俺、俺の話を聞くんた。もう聞いているか。

「……もういいと思って聞き始めた瞬間、何なのよ一体」

ミエルは無表情を装っているがイライラが少し眉間にでている。そんな事よりも中から血の二オイがするんだよ。

「また鼻血？」

違う、さつきよりも強い血の二オイだ。多分、中で斬り合いでもしてるんじゃないか？

とにかく正面から行くのはやめておけ。

「わかった。じゃあ、あそこから行く」

ミエルが指差した先には二階のベランダがあった。ちょうど玄関の真上だ。ベランダの奥にはガラス張りの扉が見える。

なるほど、あそこからなら中の様子が伺えそうだ。

「じゃあ、行くわよ」

ミエルは俺の返答を待たずに、ベランダめがけてウサギの様に跳躍すると、見事に着地……せずに高さが足りなくて手すりに腹からぶつかり、くるっと回転しながらベランダに転げ落ちた。

何をしているんだ。ドジっ子なのはシャーナ様だけでいいぞ。

「……………」

ミエルは俺の憎まれ口は何の反応もよこさなかった。何か考え事でもしているのか？

「もうやめてええええ！」

代わりに屋敷の中から女の悲痛な叫びが響いてきた。この声はアナンだ。やはり中で何か起こっているのか。

「ここからじゃ見えない」

ミエルはガラス張りの扉から中を覗いている。たしかにここからじゃ見えないな。天井にある豪華なシャンデリアが見えるだけだ。声が出た方向からして、恐らく一階だろう。

ミエルは扉の取っ手を握って回した。運良く鍵はかかっていなかった様で、扉を半分ぐらい開くと、警戒しながら中に侵入した。

屋敷の中は外観に負けず劣らず豪華だった。人が三人程並んで歩けるぐらいの通路を四方に残して吹き抜けになっていて、一階の玄関ホールが丸見えになっている。

通路には落ちないように金色の手すりが備えられている。はつきり言って悪趣味だ。

ミエルが姿勢を低くして、手すりの隙間から下を覗き始めたので、

俺も便乗した。

視界の一番奥には一階と二階をつなぐ大きな階段があり、高級そうな真っ赤な絨毯が敷かれている。

その中段辺りで、絨毯よりも高級そうな白と金の服を纏っている金髪チリ毛の男が、今にも泣きそうな怯えた表情を浮かべて座り込んでいる。あれは確かアンナの兄だ。どうやら怯えたまま気絶しているようだ。器用な奴だな。

よく見ると、奴の股間辺りを中心に絨毯の色が濡れて濃くなっている。あいつ、あんな偉そうな服着てるくせに漏らしてるぞ。服は関係ないか。

「ある。服がもつたいない」

そうだね。あのさ、わざわざ小声にしてまでツツこまなくていいからね。

「アンナさん、下がっててください！」

玄関ホールの真ん中から、男の豪気な大声が聞こえてきた。見ると、ハゲたマッチョの男が両手で剣を構えていた。その後ろではアンナが、その男を心配そうな目で見ている。

あれって……解体屋じゃないか！ 何故ここに！？

周りを見ると、警備兵と思われる青色の制服を着た男達が血を流して倒れていた。

体にはいくつもの剣によるものと思われる傷を負っている。まさか解体屋がこの騒ぎの首謀者なのか……？

いや違う、解体屋はアンナとお漏らし男を守っている様に見える。恐らく盗賊が言っていた大男というのは、ライクではなく解体屋の事だったのだろう。それならあの顔面のへこみ様も合点がいく。

「あーら、まだやる気なのねん。いいわあ、貴方みたいな往生際の悪い男、嫌いじゃないわよお。顔が不細工なのが残念だわん」

何やら男が女がよくわからない気持ち悪い声が、どこからともなく聞こえてくる。

しかし、今まともに喋れそうなのは、見える限りではアンナと解体屋しかない。

後は解体屋と対峙する様に全身が真っ赤な剣が宙に浮いているぐらいだ。……剣が浮いてる!?

「マンズブラッド」

ミエルが突然聞いた事のない単語を口にした。マン何だって？

「マンズブラッド。師匠の魔剣。ちなみに喋っているのもあいつ」

ミエルは浮いている剣を指差しながら言った。どうやらあれが例の魔剣らしい。

最初は返り血で真っ赤なのかと思ったが、よくみると元々真っ赤な様だ。何て悪趣味な剣なんだ。

しかし、そんなことがどうでも良くなるぐらいにオカマ口調のインパクトが凄まじい。

オカマ……魔剣……オカマ魔剣……。

「ぶ」

あ、笑った。

「笑ってない」

あっそう。

「まあいいわん。その強気な姿勢に免じて、貴方も私の物にしてあげる。とりあえずは顔をどうにかしなきゃね！」

「…………ぬおっ!？」

マンズブラッドとかいうオカ魔剣は気持ち悪さを全面に押し出しつつ、自らの体を解体屋の顔面めがけて勢いよく突進させた。

奴の剣先が解体屋の顔面を貫かんとした刹那、解体屋は持ち前の怪力と、手に持っている剣で、迫りくるそれを紙一重で弾いた。素晴らしい反応だ。ただの解体屋とは思えない。

弾かれたマンズブラッドは、ブーメランのように弧を描きながら元の位置に戻った。

「解体屋ハイネ・ブライネル。そう簡単にはやられんぞ！」

解体屋は気合い十分に剣を構え直した。

…………今ハイネって言った？ そんな顔して、そんな可愛らしい名前だったのかオッサン！

「ハイネ…………やっぱり…………」

ん？ 何だ、知り合いだったのか？

「…………違う、何でもない」

そうか？ ならいいが。どちらにせよ、今はそんな事よりも高らかに笑っているオカマが気になってしょうがない。

「ホーツホツホツホ、その顔でハイネちゃんなんて可愛らしい名前なの？ 面白いわあ」

不覚にもあんなオカマと同じ事を思ってしまった俺は、自分で自分を折りたい気分になった。……おい、地面に叩きつけようとするな、音でバレルぞ。

あいつは一体何なんだ、何故オカマ言葉なんだ？

「師匠がオカマだったから。ちなみに込めた想いは世界中の良い男を自分の物にする事」

そのまんまかい！ 剣にそんなおぞましい願いを込めるな！ そりゃ口に出したくもないわ、気持ち悪い。

「だから壊すの」

うん、是非そうしてくれ。魔剣の名誉のためにもな。でもこれで、お前が破門にされた理由が分かったよ。お前が女だったからなんだろう？

「違う。師匠は同性の方が教えやすいって言ってた。むしろ歓迎されたぐらい。他に魔具師なんていなかったから教えてもらう事にした」

そういうものなのか、同性ではないけどな。じゃあ何で破門されたんだ？

「あまりにも気持ち悪くて、ある日我慢できなくなって、あそこ蹴り潰した」

それ破門されたんじゃないやなくて破壊したんじゃないか！

……あそこがどこかは聞かないでおく。ちなみに師匠は今何をしているんだ？

「魔具師を引退して、どこかの田舎でオカマバーを経営してるって聞いた」

良かったじゃないか、天職に転職できて。

「……………」

違う、今のはギャグじゃない。決して違う。

そういえば、お前にはあのオカマの意思も頭に入ってくるんだよな？ あいつに感化されてオカマ言葉になったりしないでくれよ？
気持ち悪いから。

「大丈夫、喋っている分、心の中ではそんなに考えてないみたい。というよりも、貴方が心の中でベラベラと喋ってるせいで、まったく聞こえてこない。はっきり言って、貴方のお喋りは異常。狂ってる。こんなにいるさい魔具は他にない」

……悪かったね、うるさくて。一人で騒ぐのって結構悲しいんだぞ、ちくしょう。

「……言うな……言うな……可愛いって言うなああああ！」

そんな暢気な俺達のやり取りを遮る様に、硬直状態にあった二人が再び動きを見せる。

沈黙を破ったのは可愛い名前の解体屋の方だ。やはり気にしてい

るらしい。それにしても怒るまでに大分溜めたな。

「やあねえ、甘すぎるわ。私甘いのは好きじゃなくってよ！」

解体屋の怒りに任せた大振りはマンズブラッドにあっさり避けられ、逆に右腕めがけて斬撃を入れられるが、超反応で再び避けた。だが、完全に避けれずにカスリ傷を負ってしまった。

「くっ、速すぎる……」

「んー……貴方の血も肉もおいしくないわあ。やっぱり筋肉ムキムキは駄目ね。はあ、ガツカリ」

マンズブラッドは口がないのに溜息をついている。もちろん息など出ていない。

……どうしよう、あいつの言う事にちょっと共感してしまったよ。俺はそんな自分を……だから叩きつけようとするなって。

「もういいわ。最後の一本の様だったから遊んであげてたけど、飽きたから終わらせてあげるわぁん」

最後の一本とは解体屋が持つ剣の事だろう。

玄関ホールには綺麗に真っ二つにされた剣がいくつも散らばっている。切断面はくっつけたら元通りになるんじゃないかというぐらいに美しく鋭い。これを全部マンズブラッドがやったとしたら尋常ではない切れ味だ。

まずい。俺がそう思った時にはすでに遅かった。

「はい、これで終わり。もう諦めなさい」

マンスブラッドは足の裏、要するに柄頭から解体屋に突っ込むと、目の前で制止した。そして続けざまに体を回転させると、奴の刃が解体屋に襲いかかる。

解体屋はそれを剣で受け止めたが、犠牲者が解体屋から剣になっただけだった。真つ二つになった剣身は音を立てて地面に転がった。この間、約一秒。一瞬の出来事だった。

「ハイネさん……もういい……もういいから逃げて……」

アンナは泣きそうな声を必死に絞り出して解体屋に逃げるよう促したが、解体屋はまだ諦めていない様だ。

「ちくしょう！ ……まだだ。あの剣に比べたら、お前なんか大した事などない！」

解体屋は威勢のいい声を上げながら、盗賊の顔面をへこませた大きな拳を構える。

まさか本当に魔剣相手に拳でどうにかできるとは思っていないだろう。俺には精一杯の強がりを見せているだけにしか見えない。

「あらあら無理しちゃってえ。アンナちゃんの言う通りに逃げた方がいいと思うわよお？ 一分だけ待ってあげる。といっても一分なんてよく分からないから、飽きちゃったらすぐ斬り刻んじやうけどね、オホホホホ！」

マンスブラッドは完全に勝ちを確信しているようで、余裕の笑い声をあげている。どこまでも気持ちの悪い奴だ。おいミエル、いつまでこうしているつもりだ。早く魔具で何とかしろよ。

「無理」

即答かよ。お前は一体ここに何しに来たんだ。修羅場を覗く趣味でもあるのか？

「ない。でも無理なの。魔力が尽きた」

魔力が尽きた！？　もしかして、さっき跳躍に失敗したのは魔力が尽きたからなのか？

「そう」

こんな肝心な時に何をしているんだよ！　節約してたんじゃないのか！

「貴方の意思を聞かないようにするには魔力が必要な。意思が強ければ強い程、魔力を多く消耗する」

はあ！？　何でそんな事に魔力を使っちゃうんだよ！

「私のせいなの？」

はい、俺が騒がしいせいです。本当にすみませんでした。

「人には魔力が回復する時間が一日に一回だけある。私の回復時間は多分もうすぐ」

ミエルはガラス張りの扉越しに空を見上げながら言った。月の位置から大体の時間を割り出したのだろう。

つまりそれは、お前の魔力が回復するまで何もせず待っていると言っわけか？

冗談じゃない、解体屋が死んだらギルドへの依頼が減ってしまうじゃないか！ ライクの仕事が無くなって、俺が鍛冶屋に行けなくなったら、どう責任取るつもりだ！

あと、魔力の回復方法が魔具に比べて簡単すぎるだろ。ずるいぞ！

「な、何だこれは！ 何があつたんだ！」

「け、剣が浮いてる！？」

俺がミエルに対して苦情を訴えていると、一階の玄関の方から驚きの声が聞こえてきた。

誰か入ってきたようだが、ここからでは死角になっていて姿が確認できない。

……あ、わざわざすみませんね、ミエルさん。

ミエルが玄関を覗ける位置までこそそと移動してくれたので、確認する事ができた。

入ってきたのは、そこら辺に倒れている男達と同じ格好をした二人組だった。こいつらも警備兵なのだろう。

「もう何よ、お雑魚ちゃんはお腹いっぱいよん。二人とも良い男じゃないし……消えなさい」

マンズブラッドは剣先を解体屋に向けたまま、興味無さそうに言った。やはり俺と同じで全方位を見渡せれるようだ。

「な、なんだ、この気持ちの悪い声は！？ まさか、あの剣が喋っているのか！？」

二人の内の一人が叫んだ。あーあ、言っちゃったよ……。

「おい、てめえ……。今何て言ったあああああ！」

オッサンだった。その野太い声はオッサン以外の何者でもなかった。

オッサン化したマンズブラッドは強風時の風車のように自身を高
速で回転させると……。

消えた！？……と思った次の瞬間、回転を終えた奴が、何事も
なかったかのように元いた場所で浮いていた。同時に玄関で何かが
倒れる音がした。

倒れているのはさっきの二人組だ。倒れた体の下から血がジワジ
ワと溢れてくる。まさか、消えている一瞬の間に二人を斬り刻んだ
というのか。いや消えたんじゃないだろう、速すぎて見えなかった
んだ……。

解体屋とアンナは口をだらしく開けて呆然とし、ミエルはしき
りに目をこすっている。大丈夫だミエル、お前の目は正常だぞ。

「良かった」

いや、良くはないだろう。魔剣が危険というのを今初めて実感し
たよ。浮いてるし、喋るし、見えない速度で動くし、魔剣ってすご
いんだな。魔剣ってあんな事できるんだな……魔剣って……。

「貴方にもすごい能力があるじゃない」

何だよ？

「人を不快にさせる能力」

何それ、俺ってあのオカマより不快なの？ 泣くぞこら。

「あらいけない、つい地がでちゃったわん。さて今度こそ……」
「おい、どうした！ 大丈夫か!？」

マンスブラッドの声を遮る様に、玄関から声が聞こえてくる。また警備兵かと思っただが、俺はこの声に覚えがあった。

聞き間違えるはずがない。毎日聞いている声、毎日見ているその姿、それはライ……

「ライクさん、どうしました？ ……はわわ、警備兵さん達が倒れているです！ ……はわわ、剣が浮いてるです！」

シャーナ様だああ！ 何という事だ、地獄に女神が舞い降りたぞ。しかも手には俺の愛妻を持っているではないか。そうかエリザベル、俺が心配でここまで来てくれたんだな。愛してるぜ！

「ちよつと黙って」

はい。

「……次から次へと何なのよお。あら、貴方なかない男じゃない。もうハゲの相手も飽きたし、貴方で遊んであ・げ・る」

……だめだミエル、一言だけ言わせてくれ。気持ち悪い。

「はわわ、剣が喋ったです！ ライクさんの言う通り、本当に魔剣がいたですよ！」

「感動してる所悪いが、下がっていてくれ、シャーナ」

「は、はい。じゃあライクさん、エリザベルちゃんを使ったださ

い
「

シャーナ様はライクにエリザベルを手渡そうとする。

駄目だ、エリザベルじゃ到底太刀打ちできない。だからと言って、
そこで倒れている警備兵二人の剣では、余計に話にならないだろう。
今この中で奴に対抗できるのは俺だけだ。

ミエル！

「分かってる。少しでも気を抜けば真つ二つよ、気を付けて。とにかく時間を稼いで、倒す必要はない」

ああ、そんなの百も承知さ。できる限り頑張るよ。

ミエルは俺の返答にこくりと頷くと、勢いよく身を起こした。

「ライク受け取って！」

ミエルがそう叫ぶのと同時に、俺はライクめがけて投げられた。

10・俺は、俺はここにいる！

「ミエル、何故ここに!？」

ライクは、突然投げられた俺を慌てて受け止めると、二階を見上げながら問いかけたが、ミエルはもうその場にはいなかった。

あいつ、時間稼げとか言いながら逃げたのか!？

「あの女、何でここにいるのよ……!？」

マンズブラッドはミエルの姿を見て動揺している様に見えた。

ああ、あいつが逃げた理由が分かった。ミエルとマンズブラッドは見知った仲だ。

という事は、奴は自分を破壊する力をミエルが持っている事も当然知っているだろう。

そうなれば、真っ先に狙われるのは目に見えている。だから、魔力が回復するまで身を隠す事にしたんだ。そう願いたい。

「待て、どこに行ったのよ!？ 逃がさないわよ!！」

マンズブラッドは自身の剣先をミエルがいた方に向けた。まずい、ミエルを追いかけるつもりだ。あいつがやられたら、俺達は終わりで。

そう思った直後、俺の視界が猛スピードで移り変わった。

「お前の相手は俺だ!！」

ライクはマンズブラッドめがけて疾走し、その勢いに乗せて、鞘に入ったままの俺で抜刀斬りを仕掛けようとしている。

またいきなりかよ!? くそつ、俺の体よ、硬くなれ!

俺とマンズブラッドの剣身が、火花が散りそうなくらい激しくぶつかり合い、奴は宙に浮いたまま後ずさった。

俺の全身に痛みが響きわたる。いくら急すぎて硬くなるのが不完全だったとしても、こちらからの攻撃にも関わらず、この衝撃。こいつは予想以上だぞ……。

「ちよつとお、邪魔しないでよね。貴方関係ないでしょ? 状況分かかってやってんの?」

「そうだな、確かに関係ないし、状況もあまり分かっていない。だがな、お前が悪者って事ぐらいは分かるさ」

ライクは俺の剣先を奴に向けて、気合い十分にそんな事を言う。さすが脳筋ライク、何も分かっていないのにこの行動力、素晴らしいと言えない。

「あらやだ、悪者とは心外だね。私はアンナちゃんの願いを叶えようとしただけよ?」

「アンナの願い……?」

アンナに視線が集中する。

急に話を振られてアンナは驚いた様子だったが、程なくして慌ただしく口を開いた。

「ち、違う! 私はこんな事望んでないし、アンタなんかにも願ってない!」

「ふん、よく言うわね。私が倒してあげた醜い足付きの魚を、さも自分が倒したかのように自慢気にしてたくせに。釣りも満足にできない貴女の代わりに、わざわざ湖に潜ってまで倒してあげたのに薄情な女ね。今回だって気に入らないって言うから、私が貴女の兄さんを殺してあげようとしているんじゃない」

「ち、違う。私は、私は……違うの……違うの……」

アンナはからくり人形のようにひたすら左右に首を振りながら、ライクを懇願するような目で見ている。

やはりノゲホーフィッシュ討伐には裏があつたか。

しかし、ライクは初めから知っていたかのように表情一つ変えなかった。

正直、俺も誰がノゲホーフィッシュを討伐したかなんてどうでもいい。そんな事より、あいつ泳ぐ事もできるのかよ。どんだけ俺との差を広げるつもりだ。本気で泣くぞ。

「違うわいわ。貴女は名誉のためにプライドを捨てたクズ女よ！」

「違う。私は……私は……」

アンナは耳を塞いでその場に座りこんだ。その体は震えていて、俺はこんなに弱々しいアンナを見たことがない。

「もうやめろ！」

ライクもそんなアンナを見ていられたのか、再びマンズブラッドに斬りかかろうとする。俺はすでに体を硬くして準備は万端だぞ、いつでも来い！

しかし、そんな意気込み虚しく、奴を捉える事ができずに俺は空を斬った。俺はこの展開を知っているぞ、ついさっき見たからだ。

ライク避ける　　！

「ぐわっ！」

俺を軽く避けたマンスブラッドは、そのままライクの右腕に斬りかかった。ライクは寸前で後ろに下がったが、完全には避けられず、カスリ傷を負ってしまった。

先程の怒りにまかせた解体屋の行動と苦しくも同じ結果になってしまった。

しかし、先程とは決定的に違う事がある。

「いやああああん、この感触最高よおおおん！　柔らかすぎず、硬すぎず、最高の質感よ。血も新鮮で、とてもおいしいいん！」

「な、何だ……！？」

マンスブラッドはダンスでも踊るかのように、その身をぶんぶんと振り回し、狂喜乱舞している。

はつきり言って気持ち悪いが、俺もおいしい肉に出会った時あんな感じかもしれない……ああ、憂鬱で力が抜けそうになる。

だが、俺には力を抜いている暇などない。奴の狂気じみたダンスはここからが本番だったからだ。

「もつと、もつと味あわせて、貴方の血と肉をもつと私に頂戴！」

「ちい！？」

ライクの血と肉に完全に酔いしれている様子のマンスブラッドは、ミエルの事などこれっぽっちも覚えていない様子で、一心不乱にライクを求めて襲いかかってくる。

ライクも必死で応戦しようとするが、奴のつかみ所のない、あまりにも自由すぎる連続攻撃に俺を一回も当てる事ができないまま、

次々と体に生傷を刻まれていく。

正面から突きに来たかと思いきや、素早く後ろに回りこんでの斬撃。

上方から斬り込んできたかと思いきや、直前で軌道修正しての横払い。

こんなの反則すぎる。人間に扱われるという、剣にとって最大の制約から解き放たれたマンズブラッドの攻撃は全てが予想外だ。

ライクは本来、相手の武器だけではなく、持ち手の体全体の動きから次の攻撃を察知するタイプの剣士だが、その持ち手が不在では察知するもくそもない。

その上、ノゲホーフィツシュ同等かそれ以上のスピード。駄目だ、勝てる可能性がまったくない……。

「うう……」

マンズブラッドはライクを弄ぶように、致命傷になり得ない小さな傷を刻みつけてくる。いくら軽傷といえど、ここまでされたら、さすがのライクでも耐えられないだろう。

最初は何度も悲痛の声を上げていたが、次第に悲鳴さえも出す事ができない程の痛みで顔を歪めていく。俺の握る手にはもうほとんど力が入っていない。

ライクはついに膝から崩れていき、その場にへたり込んだ。周りからはライクを呼ぶ三人の声が聞こえてくる。このままではライクが死んでしまう……！

「ああん、最高よお。こんな良い男の血が飲めてシ・ア・ワ・セ……」

……

「ちい、悪趣味な奴だ……」

！
ライクは弱々しく憎まれ口を叩く。いいから無駄な体力を使うな

「ふん、仕方がないじゃない。これが私を作った人の想いなんだから」

「想いだと……？ 人を切り刻む事が……？」

「そうよん、厳密に言つと良い男を切り刻む事だけだね。そりゃ私だつて最初は戸惑つたわよ。いきなり世界中の良い男を手に入れるとか願われながら、意思なんか持っちゃってね……」

マンスブラッドは迷惑そうに言っているが、声の調子は何故かうキウキしているように思える。

「でもね……、最初に良い男を斬った時に分かったのよ。自分の体に響きわたる幸福な快感。ああ、こういう事なんだなって。私は世界中の良い男を切り刻んで、その血と肉を体に染み込ませて一つになつていけばいいんだって。だから、貴方も私と一つになりましょう？。」

狂っている。こいつは最高に狂つていやがる……。

しかし、こいつも犠牲者なんだ。ミエルの師匠に自分の欲望を押しつけられた犠牲者なんだ。

もし、俺がこいつと同じ境遇になったとして、同じ事を考えないかと言われたら、はっきりと断言はできない……。

でも、それでも間違っているんだ。そんなのは間違っているんだ！

「ふざけるんじゃないねえ……、確かにお前もそんな意味不明な事を急に言われて、悩んで苦しんだのかも知れない……。でもな、お前は間違ってる。そんな事をして、剣と人は一つになんかなれない」

「じゃあ、どうしろっていうのよ？」

「剣つてのはな、愛情を込めて何度も振るう事で、唯一無二の信頼できる相棒になっていくんだ。それが一つになるって事だ。だよな？ サウザート！」

ライクはふらふらな体に鞭打って立ち上がり、再びマンズブラッドに向かって俺を構える。

ああ、そうだ。ライク……俺の相棒の言う通りだ。俺と相棒、揃ってこそそのハンターなんだ。どちらが欠けても戦う事はできない。それをあいつに教えてやるうぜ。あいつはもう剣でもなければ魔剣でもない、ただのモンスターだ。意思を狂気に食われてしまった悲しいモンスターだ！

「ふーん、そう……。剣に向かって、偉そうに剣を語るなんて大した男だわ。でもね、そんなやり方じゃ世界中の良い男を手に入れるのに、一体どれだけ時間がかかると思ってるのよ。手に入れる前に錆ちやうわよ！」

「そんなの……知らん！」

知らん！

「こいつ、堂々と無責任な……。はあ、もういいわん。どうしても私を受け入れないのね。仕方がないわねえ、ちよつとお灸をすえてあげなくちゃ。貴方のその大事な剣を真っ二つにしてね！」

マンズブラッドは怒り混じりの殺気をバラ撒きながら、柄頭を向

けたまま急接近してきた。これは解体屋の剣を破壊した時の！

あああ！ 痛い痛い！

ライクは急停止からの回転攻撃を俺で受け止めた。俺の体に激痛が走る。今度は完全に体を硬くできていたはずだ。それなのに、この体を引き裂かれるような激痛……くそっ、化け物め。

「あらん？ ……へえ、私の攻撃を受け止められる剣がこの世にあるなんてね。面白い、面白いわ。もっと私を楽しませてよ！」

あああああああ！

マンスブラッドは楽しげに声を上げながら、執拗に回転攻撃を仕掛けてくる。傷口をえぐるような激痛が何度も何度も俺を襲う。このままではおかしくなってしまうそうだ。

でも、これでいいんだ。俺が耐えてさえいれば、ライクはもう傷つかなくて済むんだ。耐えてさえいれば、そのうちミエルが何とかしてくれるはずだ。落ちこぼれの魔剣にだって、できる事はあるんだ。俺にだってライクを守る事ぐらいできるんだ。俺はライクに救われたんだ。俺はあの時の借りを……返すん……だ……。

もっただ……もっと……硬くなれ……俺の……体……うわあああああ！

俺は限界を感じ、死を覚悟した。今までの出来事が雪崩のように思い浮かんで次々と消えていく。これが走馬灯ってやつなのか……。

そんな時、突然ライクの叫び声が聞こえてきた。

「いい加減にしろ……、俺のサウザートを傷付けるなあああ！」

「何!？」

「そんなに斬り刻むのが好きなら柱でも斬り刻んでろ！」

「ちよつと、それ斬るんじゃないやなくて刺し………ひぎゃあああ、抜けないわあ！」

ライクは柄頭から突っ込んでくるマンズブラッドのグリップに手を伸ばして見事にそれを掴むと、近くにあった二階の通路を支えている柱に向かって思い切り奴を突き刺した。

奴は自身の切れ味が仇となり、深く柱に刺さっている。必死に抜け出そうともがいているが、そう簡単にはいかない様子だ。

何て事だ、守ろうと思ったのに守られてしまった……。

それよりもこれはチャンスだ。この気持ちの悪いオカマモンスターに俺達の力を見せてやるんだ！

「このっ！ このっ！」

「ちよ、ちよつとやめなさいよ！」

蹴るんかい！ 足で蹴るんかい！ 一つになるのはどうなった！ そりゃ確かにちよつと蹴りやすい位置に突き刺さってはいるが……何か複雑だ。

「痛い、痛い痛い！ やめなさいって！」

意外にも奴は痛がっている。この際、俺のこの切ない気持ちなんて関係ない。もっと蹴ってやれ、ライク。

「痛い痛い！……あ、でも何だか気持ちよくなってきちゃったわん。ああん、何この感じ、すごく新鮮。癖になりそう……ああん！」

……おい、やっぱりやめる。こいつにこれ以上おぞましい感情を抱かせるな。

「こいつめ！こいつめ！」

しかし、ライクはそんな事はお構いなしに夢中で蹴り続けている。その間、気持ち悪い喘ぎ声が延々と聞こえてきていたが、しばらくすると急にピタリと止んだ。

何か様子が変だ。

ライクもそれに気付いた様で、蹴るのをやめて後ろに下がろうとしたが、もうその時には手遅れだった。

「気持ちいいけど……、やっぱり私は攻めるのがいいのよ！」

「……ぐっ！？」

マンズブラッドは体を縦回転させて柱を斬り裂きながら抜け出してきた。その際に回転した勢いで、ライクの右足に深めの傷を残した。

直後、痛みからか、俺はライクの手から投げ出されて地面に転がった。

「くそっ……サウザート……」

ライクは右足を引きずりながら、俺を拾おうとにじり寄ってくる。しかし、それを奴が親切に待ってくれるはずもなかった。

何を思ったのか、マンズブラッドはすでに息絶えている警備兵を何度も突き刺しては、ただでさえ真っ赤な体を更に真紅に染めている。

ここまで胸くその悪い光景を見たのは初めてだ。シャーナ様達は絶句して、その場で硬直している。誰一人として、ライクの代わりに俺を拾おうという考えを抱ける余裕はなさそうだ。

それに対して幸か不幸か、必死で俺の方に向かっていているライクはまったくマンズブラッドの奇行に気付いていない。しかし、奴はそれを逆に利用してきた。

「ライクちゃああああん、後ろ向いてていいのかなあ？ 殺しちやうわよあー！」

ライクはマンズブラッドの怒声に対して反射的に振り向いたかと思つと、「うわああ!？」と悲鳴を上げながら、その場で悶え始めた。

何が起きたんだ？ 俺にはライクの背中しか見えない。

「あははは！ 引つかかった！ 引つかかった！」

マンズブラッドは気持ち悪い声で喜んでいる。

一体何……真っ赤だった。チラつとこちらを向いたライクの眼には血がベッタリとついている。

どうやら奴は、自分についた血を飛ばしてライクの目を見えなくしたんだ。ちくしょう、そのための奇行だったのか。

「くっ……サウザートどこだ……」

ライクは必死に手探りで俺を探している。俺はここだ、もうちよつと後ろだ！

「無様ね、ライクちゃん。私に快感を与えた罰、とくと受けてもら
うわよ。じっくりねっとりとね……」

快感を与えた罰とは一体どういう事なのか、などと考えている場
合ではない。このままではライクがオカマの餌食になってしまう。
誰か、誰か助けてくれ……。

「ライク、俺にまかせろ！」

「はわわ!？」

玄関から頼もしい声とシャーナ様の可愛い驚きの声が聞こえる。
声の主は緑色の帽子を被った……なんだ、ノゲホーフィッシュの
時の弓使いか。顔は見えないから分からないが、声と服装からして
間違い無いだろう。期待して損した。というか、何故ここにいる。
弓使いが「狙いが定まった!」と叫びながら弓矢を放つと、矢が
マンズブラッドの剣身に見事に命中したが、カンツという音を立て
て情けなく地面に落ちた。

「……あん?」

「し、失礼した!」

弓使いは一礼すると、逃げるように去って行った。お前は一体何
しに来たんだよ!

「アンナ、すまない……助けてくれ」

ライクは俺の事を手探りながら、弱りきった声でアンナに助けを
求めているが、アンナは猫に睨まれたネズミのように怯えながら、

無言で首を左右に振るだけだった。

無駄だ。ノゲホーフィツシユの時と同じで、あいつは戦う意志を完全に無くしている。

「あら、助けを求めるなんて男らしくないわね。さっきまでの威勢はどうしたのかしら。それに、こんな小娘に助けを求めたって無駄よ。何もできないわよ、オホホホ！」

「そんな事はない！ 俺は弱いと思う奴に助けなど求めない。アンナは俺が認めている立派な剣士だ！ 俺が知っている中で最高のハンターだ！ アンナを侮辱する事は俺が許さない！」

「ライク……！」

「アンナさん、エリザベルちゃんを使ってください！」

アンナはシャーナ様が投げたエリザベルを受け取った。

しかし受け取ったものの、アンナはまだ迷っている表情を浮かべている。だが、こうなればもうアンナとエリザベルに頼るしかない。頼む、ライクはお前を剣士として、ハンターとして認めているんだ。応えてやってくれ！

「私は……私は……」

「あははは、無理しないでいいのよ？ アンナちゃんは弱いんだから」

「アンナ、自分を信じる。お前にしかやれないんだ。勇気を出せよ、この口だけ女！」

「私は……口だけ女なんかじゃない！」

アンナはエリザベルを鞘から抜いて構えた。その目にはもう迷いは無い様に見える。

今、俺の目の前にいるのは、勇気のない口だけ女などではなく、いくつものモンスターを討伐してきた誇り高きハンターだ。

「……ふん、雑魚が粹がりやがって。いい加減鬱陶しいんだよ、てめえらあああ！ 斬り裂いてやるわあああ！」

マンズブラッドは野太い地の声を張り上げると、自身を高速回転させ始めた。

まずい、あれは警備兵二人を一瞬で倒した技だ。無理だ、さすがにあれを受け止めるなんて不可能だ。逃げるアンナ！ ……だめだ、アンナは憚然としてエリザベルを構えて対峙している。

程なくしてマンズブラッドの姿が忽然と消えた。

俺は終わったと思った。

……が、事態は予想外の決着をみせた。

「な、何だとおおおお！？」

マンズブラッドは驚愕の声を上げた。

俺が人間だったら、目を百回はこすった事だろう。

確かに奴は宣言通りに斬り裂いた。しかし、斬り裂かれたのはアンナではなく、エリザベルの柄の部分だった。

マンズブラッドの剣身は、エリザベルの柄頭からギリギリ剣身の手前までを斬り裂き、先程の柱のように食い込んで身動きが取れなくなっている。

アンナはいつの間にか、マンズブラッドにエリザベルの柄頭を向けて待ち構えていたのだ。両手でエリザベルの左右の鍔を掴んでいたので、アンナは奴に手を斬られるという事はなかった。

き、奇跡だ……奇跡が起きたんだ。

けてくれた時のように。

一年前、俺はこの街に中古武器屋の商品として運ばれてきた。何故、俺がそういう事になったかは今いち覚えていないのだが、多分前の持ち主が戦死したからだった気がする。

中古武器屋のため、他の武器もボロボロの物が多数あったが、店内の鏡に映る俺は、その中でもかなりくたびれていた。そのため、武器屋の中でまったく見向きもされない日々を数ヶ月送っていた。

そんなある日、一人の若い剣士が俺の事を見るやいなや目を輝かせて、「お前すごい良い魂がこもってるな。ついに見つけたぞ、今日からお前は俺の相棒だ、サウザート！」と言ってきた。それがライクだった。

最初は変な奴だと戸惑いもしたが、俺は本当に感謝しているんだ。あの時、お前が見つけてくれたから、俺は今こうして、お前と共に戦える喜びを得られているんだ。だから、俺はまだお前と離れたくないんだ……離れたくないんだよ！

見つけてくれ。俺は、俺はここにいます！

そう念じた瞬間、俺の視界がいきなり小刻みに揺れる。いや、視界だけではない。俺の体自身がカタカタと揺れている！？

「な、何だこの音は……サウザート！」

振動によって鳴った音を頼りに、ライクは俺を見つけてくれた。また会えたな、相棒！

「あああああん、そこおおおお……っていい加減にしなさいよ！」

時を同じくして、マンズブラッドが三人と剣一本の包囲網を無理矢理振り払い、玄関ホールのだ真ん中へと脱出していた。ライクはその隙を見逃さなかった。

奴の声を頼りにしたのか、気配を頼りにしたのかは分からないが、ライクは目が見えないにも関わらず、完全に奴を捉えている。

傷付いた右足を無理矢理奮い立たせて、猛ダッシュで近づくと、俺を力強く振りかざした。

硬くなれ。今までで一番硬くなれ、俺の体！俺と相棒の全ての力を奴にぶつけるんだあああああ！

「そこだ、くらええええ！」

「……な！？」

不意を突かれたマンズブラッドは避ける事ができずに、最高に硬くなった俺とぶつかり、激しい衝撃音とともに地面にひれ伏した。

その直後、アンナの叫び声が聞こえてきた。

「ライク、後ろに逃げて！」

ライクが訳も分からずに後ろに飛びのいた直後

「ぎゃあああああ！」

ガラスの割れる爆音とマンズブラッドの悲鳴が、玄関ホール全体に響き渡った。

11・罪深き女の決意 孤独な女的笑顔

先程までの騒動が嘘のように、玄関ホールは静まりかえっていた。

ライクは必死で目をこすっている。

血はすでに十分拭えて視界も回復しているだろうが、それでもライクは、目の前に映る幻を消すかのように夢中でこすっていた。

しかし、残念ながらそれは幻じゃない。いや、残念ではないな。むしろ幸運だ。

「一体、何が起きたんだ……」

ライクはまだ信じられないという様子で、突如落下してきて無惨にも砕け散ったシャンデリアと、その下敷きになって剣身が粉々に砕け、柄だけになったマンズブラッドを呆然と眺めている。

ライクだけではなく、未だ気絶しているアンナ兄を除いて、その場にいた誰もが状況を把握できてない様子だった。だが、俺だけはしっかりと見ていた。

落下してきたのはシャンデリアだけではなかった。シャンデリアにはミエルが乗っていたんだ。

左手には末端部分の一部が無くなった杖を持ち、右手にはその末端部分が柄になっている剣を持っていた。ミエルの杖には剣が隠されていたのだ。あれが仕込み剣というやつか、初めて見た。

シャンデリアと天井を繋いでいた鎖も、その剣で斬ったのだろう。シャンデリアが邪魔でよく見えなかったものの、ミエルがマンズブラッドをその剣で突き刺しているのだけは何とか見えた。

その後、ミエルはマンズブラッド並みの高速移動でどこかへ去って行ってしまった。正に嵐のようだった。

突き刺しただけで粉々にしてしまうとは一体どんな威力なんだ……。
あれも魔剣なんだろうな。魔具を破壊する事に特化した魔剣……
多分そんなところか。
やばい、俺そんな物持っている物騒な奴に色々悪態ついてしまっ
たぞ……。急に自分の身が心配になってきた。誰か、俺に良い警備
兵ギルドを教えてください。極力、安い所で頼む。

「……やったのよね？」

「た、多分やったんでしようなあ……」

「うーん、やったんだろうな見る限りは……」

「えーと……。とりあえず喜んでおきます？ わ、わーい……です
う」

「そ、そうだな。……わーい」

俺はこんなにぎこちのない喜びの宴を見たのは初めてだ。あまり
にもあつけない終わり方で困惑しているのは分かるが、喜ぶならち
やんと喜べ、顔がひきつっているぞ。

「いやあ、何にせよライクさん達が来てくれて本当に助かりました
ぜ」

「そういえば、アンタ達、何でここにいるのよ？」

アンナの疑問はもつともだ。といっても、俺はライクがここに向
かっている事は知っていたし、むしろ先に着いていると思っていた。
それなのに、何故か遅れて来た上にシャーナ様と一緒にだった。さ
あ、どういふ事が説明して貰おうか。

「え、いや、あの、その……」

ライクは何故かモジモジしている。お前は女か！
そんなライクを見かねてか、シャーナ様が代わりに口を開いた。

「えつとですねえ、ライクさんとは街で会ったんですけど凄かったですよお」

「凄かった？」

「お、おいシャーナ！」

楽しそうに話し出すシャーナ様をライクは慌てて止めようとするが、逆にアンナに首根っこを掴まれて止められてしまう。

アンナはシャーナ様に手を突き出しながら「どうぞ、続けて」と促すと、シャーナ様はより楽しそうな表情を浮かべて話を続けた。

「私がライクさんに声をかけると、すごい勢いでこっちに来て、『アンナが事件の関係者かもしれない！ サウザートとミエルが誘拐された！』って何度も同じ事を言いながら取り乱してて本当に困りましたよお。最初、アンナさんが誘拐犯なのかと思っちゃいました」

シャーナ様は終始、笑顔だ。とても困った話をしているようには見えない。

しかし、これでライクが俺とミエルよりも遅く到着したわけが分かったよ。ライクは俺を取りに一度家に戻ったんだ。そしたら俺とミエルの姿がない上に、窓が開きっぱなしになっていて、誘拐されたと思っただろうな。まったく恥ずかしい奴だ。

……でも嬉しいぜ、ありがとうな相棒。

「おい、もうその辺……」

「それで、それでどうしたの？」

ライクはアンナに突き飛ばれて、「おい、俺は怪我人だぞ！」と抗議をしたが、まったく相手にされなかった。代わりに解体屋が心配そうにライクに駆け寄って来る。

ライクも大好きなオッサンに介抱されて幸せそうに……してないな。

「それですねえ、私がここに用事があるって言ったら『サウザーとミエルも心配だが、今はアンナが優先だ。俺も行く』って言われたので、一緒に来たってわけですよ」

「ええ！？　ライクがそんな事を！？」

こちらの方がええ！？　だよ……。

ひどいぜライク、俺よりもこんな女を取るなんて相棒として見損なったぜ！　ありがとうとか言って損した！

アンナは顔を赤らめて、モジモジしている。俺は何かモヤモヤしてきた。これはエリザベルに恋をした時と同じ感情だ。何で今そんな感情が……。

「か、勘違いするなよ！　俺はお前が話をしていた魔剣と通り魔が、何か関係あるんじゃないかと思っただけだ。本当にここに魔剣があった時は驚いたけどな」

「そう……、そうだよね……」

「ま、またまたライクさんは素直じゃないんだから。心配だったって言ったらいいじゃないですか！」

今にも泣き出しそうなアンナを見て、解体屋が慌ててフォローを入れる。

「ごつい顔して気が効くじゃないか、さすが可愛い名前しているだけの事はあるな。しかし、それが仇になるとは思っていなかっただろ。」

「し、心配なんてしていない！……それよりも解体屋こそ、こころで何をしているんだよ。後、何でこうなったかも説明しろよ」

玄関ホールが一気に凍り付いた。ライクだけは理解できていないようで、辺りをしきりにキョロキョロ見回している。

ああ、聞いちゃったよ。何でここでそれを聞いちゃうかね。こいつは本当に気を使うという事ができないな。

アンナの辛そうな顔を見るよ、さすがに俺でも可哀想だと思っぞ。あの優しいシャーナ様までもが、鋭いのにか愛らしい目つきで睨んでいるじゃないか。これはもう土下座ぐらいじゃ済まないぞ。

「あ、あの。それはですね、ライクさん……」

「いいの、ハイネさん。ちゃんと私が話すから、話さないといけなから」

「アンナさん……」

アンナは意を決した様で、毅然とした態度を取っているが、どこか無理しているようにしか見えなかった。

だが、アンナは持ち前の高貴さを失う事はなく、上品な口調で語り始めた。

「酒場でライクに魔剣の話をした後、私は一人で魔剣の在処を調べていたの。そしたら、ある盗賊団の盗品である事が分かったの」

それが裏通りで気絶していた釣り好き盗賊団ってわけか。

「私はいつらのアジトに忍び込んで、あいつを……マンスブラッドを盗みだしたの。それが全ての始まりだった……」

アンナの表情に次第に陰りが見え始めたが、誰も話を止めようはしなかった。アンナが必死に自分の犯した過ちについて語るうとしているのだ。誰が止められるものか。

「私が剣にいくつも貼られていた紙をすべて剥がすと、突然喋り始めたの。……あのオカマ言葉でね」

うわあ、いきなりあれとかきついな。今初めてアンナに同情した気がする。

それよりも、やはり何か封印みたいな物を施していたんだな、ミエルのやつ。そりゃそうか、あんなのと毎日一つ屋根の下とか考えただけでゾツとする。そんな事ができる奴など、この世にいるはずが……。

「私が盗んだのは、ノゲホーフィッシュを討伐する前の日だから二日間だけだったけど、あいつといる時間は本当に苦しかった。今日だってライクの所に行ったのは、あいつと一緒に居たくなかったから」

いたよ、ここに暮らしちゃった奴がいたよ。二日でも十分だよ。俺は初めてお前を尊敬したよ、アンナ。お前はすごい奴だよ！

「通り魔事件の事を知ったのはライクと湖で別れた後だった。私はすぐに犯人があいつだって分かった。夜中に一度、勝手にどこかに行ってたのに気付いて注意したから。あの時は『だって私オカマだもん』って言われて妙に納得しちゃって……」

それは仕方ない。そりゃ納得しちゃうわ、まったく意味は分からないが納得しちゃうわ。ライク達も皆、それは仕方がないという表情をしている。

「それで、家でモメ事になったら兄もいるしまずいと思って、裏通りに連れて行って問いつめたの」

なるほど、それでアンナは裏通りになんか行ったのか。

「そしたらあいつ、平然として自分がやったって……何が悪いって……。私、あいつがノゲホーフィッシュを一瞬で切り刻むのを見たから怖くなって、足が震えて……。そうしてる間にあいつは『あれだけで満足してないなら、もう一仕事してあげるわ。貴女の大嫌いな奴を私と一つにしてあげるわん』って言って飛んで行ってしまつて……。それで私……私……」

「そ、その後、アンナさんは盗賊に見つかってしまつて、私が囲まれている所を見つけて助けたんですよ」

アンナはついに涙を流してしまった。

解体屋が慌てて続きを話始めたが、ライクはそれを良しとしなかった。

「解体屋、悪いが黙っていてくれないか？ 俺はアンナに聞いているんだ」

「な……！？ ライクさん貴方……いや、何でもありません」

解体屋は反論をしようとしたが、ライクの真剣な態度に威圧されて、途中で口ごもった。

その様子を見た後、ライクはアンナの方にその真剣な眼差しを向けて口を開いた。

「アンナ、これはお前がした事だ。だから、お前が話せ。涙を拭いてちゃんと話せ。お前がハンターだっていうなら、自分のやった事

に責任を持つんだ！」

「……はい！」

アンナは涙を拭いて背筋を伸ばすと、ライクをじっと見つめた。まるで鬼教官とそれに必死でついていく訓練兵みたいだ。

「あいつが飛んで行ってすぐ、私はあいつに兄が嫌いって、つい愚痴をこぼしていた事を思い出したの。それで、私はハイネさんと一緒に家に急いだ。そしたら見ての通り、警備の皆が倒れていて、兄とマンスブラッドが対峙していたの。……対峙していたと言っても、私達が来た時には兄はもうあんな感じだったけど……」

アンナの目線の先には、無様に股間を濡らしながら気絶している滑稽な兄の姿があつた。

あんな化け物に襲われたのでは、ああなるのも仕方ない気が少しはするが、どうしても同情よりも先に面白さが来てしまう。

「……あまり見ないであげて。あれでも私の兄なの」

すまない、それは無理ってもんだ。代わりにお前がノゲホーフィツシユの着ぐるみでも着て、エルトリル一周してくれるなら考えてもいいが。

「……良かったよ」

「……え？」

突然何を言い出すんだ、ライク。良いわけないだろう。大の男が漏らしてるんだぞ。一大事だろ！

そりゃアンナも鳩が豆鉄砲くらったような顔にもなるってもんだ。

「お前が通り魔じゃなくて良かったよ。酒場でお前を裏通りで見たって聞いたから行ってみたら、変な服装の奴らが気絶してるし、ギルドに行ったらノゲホーフィッシュがすごい状態だったんで、俺はつきりお前が、あのオカマを使って悪さでもしてるんじゃないかと思っただけだよ」

何だ、そつちか。そりゃ確かに良かった。毒舌で通り魔なんて性質が悪すぎる。まあ、オカマで通り魔よりはマシな気もするけど。

「盗賊の盗品を盗んだって大した罪にはならないだろう。お前が捕まりでもしたら、うちのギルドの戦力がガクンと下がってしまう。お前はギルドに必要なハンターだからな」

ライクはお世辞でも何でも無く、純粹にそう思っているのだろう。脳筋ライクにそんな器用な事できるはずないしな。

しかし、アンナはそれに俯きながら首を左右に振って答えた。

「ライク……ありがとう、でも私はもうハンターではいられない」
「……何故だ？」

ライクは再びアンナに真剣で厳しい眼差しを向けている。

「……いくら私がやっていないと言っても、原因を作ったのは私なの」

「確かにそれはそうかも知れない。でもそれは、これから償っていかばいい。何もハンターを辞める事はないだろう？」

「ううん、それだけじゃない。私はノゲホーフィッシュを自分が倒した事にしてしまった。私怖かったの、女である私自身の限界が。どんなに頑張っても強がっても、男にはどうしても舐められる。だから、とにかく手柄がほしかったのよ……うう……」

アンナはその場に座り込んで、再び泣き始めてしまった。

アンナがライクにつっかかってくる理由が分かった気がする。あいつはただ、ライクに認めて欲しかっただけなんだ。しかし、脳筋ライクはそんな事には全く気付いていなかった。

「誰だよ、お前を舐めてかかる様な奴がギルド内にいるのか!？」

お前だよ。

「アンタよ!」

「お、俺!？」

ほら当たった。ライクは本気で驚いている様だ。どこまで鈍感なんだ、こいつは。

「私、聞いたんだからね。アンタがアイアンブレイカーの討伐依頼を頼まれている時に、女の私じゃ無理って話してたのを!」

ああ、あの会話聞いてたのか。……そういえば、解体屋がギルドに入ってくる前に誰かに謝っていたな。あれはもしかしてアンナだったのかもしれない。結構大きな声で喋っていたので、外まで聞こえていたのだろう。

「違う、俺は確かにお前には無理だと言ったが、女だからなんて言っていない! 女だからって言ったのはエリスだろう? 俺は力が必要なアイアンブレイカーに対して、お前は向かないと単純に思っただけだ!」

「力がないって、それは私が女だからって事でしょう!」

「だから違う! 俺はお前を女として見たことなんて一度もない!

俺はいつでも一人のハンターとして扱っている。悔しいならもつと努力しろ！ 女なんて理由であきらめるな！ お前はまだまだ伸びる。正直、怖いのは俺の方だよ。お前がノゲホーフィッシュを討伐したって聞いた時、ものすごく焦ったんだからな！」

ライクは泣きじゃくるアンナの手を掴んで熱く語った。ライクにしては大胆じゃないか。だが、今の発言にはちよつと問題があったぞ。

「ライク……」

「アンナ……」

「……女として見た事ないってどういう事よ」

「へ……？」

「どうせ、私はガサツで口が悪くて女つぽくないわよ、馬鹿ー！」

「いや、それはあくまで仕事上での話でしてね……というか、お前女に見られなくなかったんじゃないのかよ！」

「それとこれとは別よ、馬鹿馬鹿馬鹿！」

「痛い痛い、俺は怪我人だぞ！」

アンナはライクをポカポカ殴っている。これは明らかにライクが悪い。でも、その殴っているアンナの表情は怒りではなく、喜んでいる様に見えた。何か吹っ切れた感じさえする。

「ねえライク……、私本心言えばハンターやめたくない……、でも本当に続けていいのかな……？」

「……ああ、続けていいさ。文句言う奴がいたら俺に言え。ぶっ飛ばしてやる」

「ちよ、ちよつとやめてよ！ ……はふう」

ライクはアンナの頭をナデナデしている。

アンナも最初こそ嫌がったが、まんざらでもなさそうだった。ああ、また何かモヤモヤしてきた。ふとシャーナ様の方を見ると、彼女もまたモヤモヤしてそうな表情をしている。俺とシャーナ様は今、同じ感情を抱いているのだろうか？

俺がそんな疑問を抱いていると、階段の方から怒声が鳴り響いた。

「良いわけないだろう！」

声の主は、さっきまで無様に気絶していたアンナの兄だった。あんな醜態を晒しておきながら、何でそんなに強気なんだ、お前は。ライク良かったな、いきなり文句言う奴が現れたぞ。斬るつもりなら力を貸すぜ！

「兄さん……」

「こんな騒ぎを起こしおつて！ お前は我が家系の面汚しだ、恥を知れ！ お前は本家に連れて帰る。二度と剣など握らせないぞ！」

こいつはどの面……いや股間を下げたそんな事を言っているのか。アンナの表情はまた暗くなってしまった。

「ふざけるな！ お前にアンナをどうこうする資格なんてないはずだ！ 兄だからって調子に乗るな！」

「調子に乗っているのはお前の方だ！ 高貴な家系には色々あるのだ！ 貧乏人が口を挟むな！」

「くっ……!!」

まずいぞ、向こうさんが一体どれ程偉いのかは分からんが、地位の事を出されては勝ち目がないのは目に見えている。

ライクは反論できずにいる。くそ、あいつに意見できる奴はいないのかよ……!!

「どうも、お久しぶりです」

「ん？ ……こ、これはこれはシャーナ様ではないですか。おお、そういえば今日お会いする約束をしていましたな」

いたー！ こっちにも偉い人いた！

どうやら、シャーナ様に装飾剣を依頼したのはアンナの兄だったらしい。

上級鍛冶師は貴重な存在。そうならば、もちろん位も高いはずだ。でも、どこかの誰かさんと違って、そんな事を一切鼻にかけない。

やはり貴女様は女神様だ！ 私をピカピカにしてください！

「アンナさんのお兄様だけあって、家の事をよく考えておられて偉いですねえ」

「いやあ、長男としては当たり前の事ですよ！ ははは！」

「じゃあ、私が今日ここで見た貴方の勇姿、すべてお父上に報告しますね」

「……え？」

「面汚しと股汚し……、貴方のお父上は一体どちらを恥さらしだと思えますかねえ……うふふです」

……こえええ！ シャーナ様こえええ！ 貴女は女神なんかじゃない、悪魔だ。小悪魔だ！ だって、女神様は股汚しとか言わないもの！ ……多分。

「そ、そんなあ……」

アンナの兄は力なくその場に崩れ落ちた。その様子を見ていた全員が唾然としている中、シャーナ様だけが無邪気な笑みを浮かべていた。

* * *

「本当にごめんなさい。安らかにお眠りください」

アンナは墓の前で深く頭を下げながら、祈りを捧げていた。ライク達もそれに見習うように祈りを捧げた。

マンズブラッドとの死闘の二日後、アンナの兄を除く、あの場にはいた者達はアンナが住む大豪邸の庭に集まっていた。

前日、アンナは死んでいった警備兵の遺体を遺族の元へと運んで回っていた。

その際に簡単に説明もしたらしいが、魔剣の存在は無闇に広めないう方がいいと思っただけらしく、うまく濁して説明したそうだった。

アンナの話が聞かずにひたすら泣きじゃくる者、悲しい顔をしながらも許してくれた者、怒りを露わにして物を投げつけてきた者など色々いたらしい。

しかし、アンナは投げ出さずにやり遂げた。立派なもんだ。

更にアンナは、独り身で引き取り手がなかった者に対して、屋敷の庭に私財を投げうって立派な墓を作った。ここに作ったのは自分がした過ちを忘れないためだそうだった。

「ライク、話があるの」

アンナが突然、真剣な表情でライクに話かけた。その目には、何か決意が込められているような気がした。

「ん？ どうした？」

ライクもアンナのそんな雰囲気気付いたのか、真面目に聞く姿勢を作っている。

「私ね……、一度あのギルドを抜けようと思うの。あ、勘違いしないでね。別にもう剣を握らないとかじゃないから」

「……どういう事だ？」

「実は国営の警備兵ギルドに入ろうと思うの」

アンナがそう言った瞬間、周りから驚きの声上がる。俺もかなり驚いた。

警備兵ギルドには大きく分けて二種類ある。

主に用心棒やイベント事の警備、街から街への移動の護衛など、比較的簡単な警備依頼を莫大な依頼額を取って成り立っている民営と、国からの依頼で街中を警備したり、時には街の平和を脅かす危険なモンスターの討伐までを、一手に引き受ける国営だ。

国営は賃金が安い上に危険な仕事もさせられるので、希望者がほとんどいないと聞く。どうせ危険なモンスターと戦うなら、警備兵よりもハンターの方が儲けが遙かに多いからな。

何故、アンナはあえてそんな所に行くと言い出したのか？ もしかして……俺がミエルから身を守るために警備兵を探しているのを聞きつけて！？

もちろんそんなはずはなく、本当の理由はすぐにアンナの口から語られる事となった。

「謝って、お墓立てて、そんな事で償いできたなんて私は思っていない。いえ、どんな事をしても償いきれるなんて思わない。だから

らせて、私は残された遺族の方達を全力で守りたいの。せめて、あの人達には平和に暮らしてほしい」

「おいおい、だからってそんな自分を犠牲にする必要は……」

「ううん、別に自分を犠牲にしようなんて思っただけ。私は絶対強くなる。ライク、アナタを絶対超えてやるから覚悟してよね！」

そう言ってアンナはライクの胸辺りを軽くこづいた。

……良い話だ、良い話じゃないか。アンナ、俺は感動したぞ！

俺はお前の事をただの毒舌女だと思っていたが、違っただんな。お前は良い奴だ！

俺に目があれば号泣してやるのに。ああ、泣きたい思いきり泣き……やめておこう、体から水が噴き出す能力とかに目覚めたら洒落にならない。

「そうか……、まあせいぜい頑張れよ」

「だ、だからやめなさいってば！……はふう」

ライクは一瞬寂しそうな顔をしたが、すぐに笑顔でアンナの頭をナデナデし始めた。

シャーナ様はその様子を、友達がプレゼントを貰っているのを羨ましく見ている子供のように指をくわえて、じっと見つめている。相変わらず可愛いです。

「というか何だ？　ライクのナデナデってそんなに気持ちいいの？　いいなあ……ああ、また何かモヤモヤしてきたぞ。」

「国営の警備兵となると、私から依頼する事は無いかもしれませんが、何か機会があれば、また頼みますよ！」

「私もいつでもアンナさんの剣をピカピカにするですよ！」

シャーナ様は何もない空間を必死に研ぎ研ぎしている。ああ、あそこに飛び込みたい！

「うん……、ハイネさんもシャーナさんもありがとう」

アンナは目を潤ませながら感謝をしている。いいな、感動の場面ってやつだな。

そんな感動の場面を見事にぶち壊す一人の男がいた。

「なあ、ずっと思ってたんだが……ハイネさんって誰？」

ライクがそう聞くと、アンナは素早く解体屋を指差した。そういえば、ライクはあの時まだいなかったんだよな。

しかし、ライクが目を丸くしているのは分かるが、解体屋と前から付き合いのあるシャーナ様も驚いているのはどういう事なんだ。

「え、解体屋ってハイネっていつの？ その顔で!？」

あーあ、言っちゃった。

解体屋の顔が今まで以上に、名前に似合わない顔になっていく。これは死んだな。

「ラーイークーさああああん！ 三枚おろしと千切り、どっちが好みだあああああ！」

是非、千切りをお願いします。

「ちょ、ちょっと待って！ シ、シャーナも今驚いていたぞ！」

あ、こいつシャーナ様を売りやがった。最低だ！

「ああん？ シャーナ様はカモだからいいんだよおおお！」

「カ、カモ！？」

もつと最低なのがいた！

解体屋は怒りのあまり、完全に言葉選びを誤っている。今は廃業ものだろう。

「うわあああ！ 助けてえええ！」

逃げるライク、追いかける解体屋、それをみて笑うアンナ、そしてシヨックを受けて複雑な表情をしているのに可愛いシャーナ様。

少し騒がしすぎる気もするが、俺はこんな騒がしい日常が嫌いじゃない。

俺はふと、ミエルの事を思い出していた。あいつは一体どこに行ってしまったのか。魔具師という事を知られなくなっただののかも知れないが、何も逃げるように去らなくても良かったのにな。

あいつは今までそうやって、人になるべく接触しないようにして感情を抑えて生きてきたんだろう。あいつの前では恥ずかしくて言えなかったが、俺はあいつの事をすごい奴だと思っし、尊敬している。

誰にも素の自分を出せず、誰にも自分の気持ちを打ち明けられない悲しさはよく分かる。俺は剣だからそんなに困る事もないが、あいつはそうはいかなかっただろう。今までどんな苦労してきたかなんて想像もできない。でも、あいつはそれに耐えながらここまで来て、目標を果たした。本当にすごいやつだよ。

ミエルはそうでもなかったかも知れないけど、俺は初めて自分の意思を他人に伝える事ができて本当に嬉しかったし、楽しかったん

だ。だから、あいつの人生にも少しでも喜びを与えられたらな
思う。せめて、笑顔ぐらいは忘れないで欲しい。

そんな事を考えながら、ライクが走る反動で常時ブレている視界
をポーッと眺めていると、大豪邸の屋根の上に人影を発見した。

……おい、あれミエルじゃないか。まずい、もしかして今の読み
とられてたか!? 恥ずかしいんですけど!?

俺の予想通り、意思は届いていたようで、ミエルは何やら怪しい
笑みを浮かべて、どこかへ去ってしまった。

……ちゃんと感情隠せよ、馬鹿あああああ!

12・そして彼女は剣を取った

俺は今までにくいつもの痛い思いをしてきた。

時には同業者である剣とぶつかり痛がって、時にはとんでもなく硬いモンスターを斬らされて痛がって、時には剣の形をしたオカマとぶつかり痛がったりしてきた。

俺はありとあらゆる痛みを体感してきた。いわば痛みマスターだ。

少なくとも、俺はそう思っていた。だが、世の中にはまだ見ぬ未知の痛みというものが存在していた。

いや、これは痛みというよりは……むにゅううううう！

「おいアンナ、早くしてくれ！ このままじゃ保たないぞ！」

「無茶言わないでよ！ こっちは六匹相手にしてるのよ！？ そっちこそ一匹ぐらいどうかしなさいよ！」

「くそっ、そう言われてもなあ……」

ライクは大イノシシの突進を受け止めながら、弱音を吐いた。イノシシは受け止められても、そんなのはお構いなしに足をバタバタさせて前進を止めない。ライクはじりじりと後退していつている。

ちなみに、俺はライクにイノシシの突進を受け止めさせられて、挟み撃ちに合っている。

両方から襲いくる力に俺は、痛みよりも圧迫感を感じて……むにょおおおお！

ふざけるなよライク、明らかにこれは剣の仕事じゃないだろ！ 受け止めるなら自分の体で受け止める。何のために毎日鍛えているんだよ。

しかも、俺の体の位置がちょうどイノシシの鼻の下で、さっきか

ら生温かい息が……むによおおお！

「 やつと二匹。もう、しつこいわね！」

頼みの綱であるアンナは、六匹いたりザードマンの内、まだ二匹を倒した所だった。

華麗な素早い動きで対複数にも関わらず、安定した立ち回りで相手を翻弄しているが、決定打に欠けているため、まだ時間がかかりそう。その間、俺はこの一人と一匹に『むにゅおおお！』されなければいけないむによおおお！

「負けてたまるかつ！」

ライクが負けじと力を込めると、相手も息巻いて足をよりバタバタさせる。そして俺は、更に『むによおおお！』される。

駄目だ、早くこの負の連鎖を断ち切らなくては……。

俺は決心した。認めたくなくて、ずっと現実逃避していたが、今こそ向き合う時なのだ。

あの力を再び使う時が来たんだ！

ここだ、俺はここにいます！

「な、何だ！？」

ぶおおお！？ 視界がブレてイノシシの鼻がいつぱいあるように見えて気持ちわるいいいいい！

「ぶぶゆづづづづづ！？」

イノシシは鼻の下をブルブルされてくすぐったかったのか、その巨体を悶えさせてクシャミと思われる動作を行った。その瞬間、イノシシの鼻から大量の鼻水が飛び出してきた。

ぎゃあああ、汚い生温かいノゲホオオオオ！

ライクが「うわっ、汚い！」と、叫びながら右に飛びのくと、イノシシはそのまま一直線に爆走していき、その進行方向上に存在している大岩に激突して動かなくなった。

おいこらライク、最初から飛びのいておけば良かったんじゃないのか？

どうせまた力まかせの真っ向勝負を楽しんでいたんだろ。この脳筋馬鹿ライク！

まあいい、とにかく今は一刻も早くイノシシの鼻水でベタベタの俺を拭いてくれ。

……お、おい。何鞘にしまおうとしてんだ。

や、やめ……ああ、俺のお気に入りの鞘がベチヨベチヨになってしまった。最悪だ……。

最悪といえば、やはり俺に新しく備わった第三の新能力は、小刻みに震える事らしい……もう俺、折れてもいいよね？

しかも発動させるのにいちいち、俺はここにいて念じないといけない。はつきり言って、ここに居たくないんだが。

できればもう田舎で野菜でも斬りながら暮らしたいよ、はあ……。

「おい、アンナ大丈夫か？」

「ええ、そっちこそ大丈夫そう良かったわ」

アンナの周りには六匹のリザードマンが力なく倒れていた。それに対して、アンナはカスリ傷ひとつ負っていない。さすが、マンズブラッドの超高速攻撃を受け止めただけの事はある。凄まじい俊敏性と動態視力だ。

アンナもすごいが、これはあいつだけの力じゃない。優秀な剣があつたからこそ成し得たのだ。

そう、俺の妻……いや、元妻であるエリザベルがいたからこそだ。

マンズブラッドにより傷物にされてしまったエリザベルだったが、幸い剣身に損傷が無かったため、シャーナ様の手により見事に復活を遂げた。

その後、「アンナさんなら、エリザベルちゃんをきつと幸せにしてくれるですよ」と、シャーナ様からアンナへと授けられたというわけだ。

ちなみに何故、元妻かというと、そりゃもちろん離婚したからだ。理由は簡単、俺は勘違いしていたんだよ。この前の一件で、俺は謎のモヤモヤ感が恋愛感情ではなかったということに気付いたんだ。モヤモヤ感の正体は、認めたくないが嫉妬だ。俺はライクを取られるんじゃないかって嫉妬していたんだ。

俺はライクが好きだ。もちろん相棒としてだぞ、恋愛感情なんてない。まあ、剣なら持ち主が好きでも当たり前だよな、普通だ普通、俺は普通だ。魔剣だけど。

そんなわけで、俺が勘違いして一方的に結婚しておいて何なんだが、一方的に離婚したわけだ。

……ああ、そんな悲しい顔をしないでおくれ、エリザベル。大丈夫、君にはもつと素敵な剣が見つかるさ！

「ねえ、このイノシシどうするの？」

「うーん、美味そうだし持って帰って食べるか」

おい、俺とエリザベルが感動の離婚劇を繰り広げているというのに、食い物の話なんかするな。雰囲気ぶち壊しじゃないか。

そんな俺の文句などそっちのけで、二人は話を続けている。

「お、いいわね。イノシシの肉なんて久しぶりだから涎がでそう！」

もう出てるぞ。

ちなみに今回、イノシシは依頼対象ではないので、煮て食おうが焼いて食おうが自由だ。

本来の目的はリザードマンの群れの討伐だったのだが、リザードマンの一匹が予想外にも、そのイノシシにまたがって登場してきたのが全ての始まりだった。

イノシシはライクを見るやいなや、リザードマンを振り落とすしながら突進をしてきて、先程のような状況になったわけだ。

「うーん、でもイノシシを調理できる知り合いなんていないぞ。解体屋に頼んだら、ぼったくられそうだしなあ」

「あ、それならシャーナは？」

え？

「え？」

「昨日、エリザベルを受け取りに行った時にお喋りしてたんだけど、仲良しになっちゃってね。それでシャーナが今度、料理を作ってくれるって事になったんだけど。ちょうど良かったわ、肉焼くのが得

意って言ってたし」

それは肉焦がすの間違いではないでしょうか！
そもそも、あれは調理と言えるのでしょうか！

俺はあの時のノゲホー的な刺激を思い出してゾっとした。

おいライク、何とかして止め……ん？　ライクがいつになく真剣な顔をしている。

「アンナ！」

「は、はい！」

アンナはライクの気迫に押されている。

「お前はもうすぐ抜けるといっても、まだモンスター討伐専門のギルドに所属するハンターだよな！？」

「そ、そうであります！」

アンナはピシッと姿勢を正すとライクに向かって敬礼をした。
…何だこの茶番。

「その誇り高きハンターが罪のない動物を、自分の欲のために取って食おうなどと、何たる体たらく！　反省しろ！」

こいつは何を言っているんだ。お前も持って帰って食べようとか言ってたじゃないか。

しかし、完全に気迫に圧倒されているアンナは、ただ敬礼するばかりだった。

「分かったならいい。よし、ではリザードマンを縛り上げて直ちに帰るぞ！」

なるほど、普通に言い争っては負けるので勢いでごまかす作戦だったわけだな。成長したな、ライク。

だが、そんなにつまきくと思うなよ。

「はい！ …… って何で私が怒られてるのよ！」

アンナの怒声がエルトリル西部の平原に響き渡る。ああ、今日も平和だな。

「うー……肉……イノシシの肉……肉、肉……」

おい、誰か後ろで延々と唱えられている呪詛をどうにかしてくれ。結局あの後、長時間に及ぶイノシシをどうするかという会議が行われ、例によって例のごとく、ライクが敗北しようとしていた矢先に、イノシシが目を覚まして逃亡した。

結果的にはライクの逆転勝利となったわけだが、そのおかげでアンナは呪術に手を染めてしまったというわけだ。

ライクといい、アンナといい、ハンターの間では呪術が流行っているのだろうか。

「なあ、いい加減に機嫌を直せよ」

「……いい加減に機嫌を直したら、イノシシが良い焼き加減で戻ってくるんでもいいの？」

アンナはうらめしそうな顔でライクを睨んでいる。
イノシシの肉は美味いが、お前の言い回しは別に上手くないぞ。
食べた事ないというか食べれないけど。

「もう許してくれよ。悪いと思ってるからこうやって、一人でリザードマン六匹も引きずっているじゃないか」

ライクは先程から重たそうに引っ張っているロープの先の、ギユウギユウに縛り付けられているリザードマン達を、全部お前等が悪いと言わんばかりに睨んだ。完全に八つ当たりだ。

「あら、それで恩を着せてるつもり？ アンタが付いて来てっ泣きついてきたんだから、そんなの当たり前でしょ。ああもう、最後だったのに最悪よ！」

こいつは最初からライクに全部運ばせるつもりだったのか。

一度でも、こいつを見直した俺が馬鹿だった。この性悪女、最後だからってそんなワガママが通ると思うなよ！ ……いや、通ってるんだけどね。

アンナの言う最後とは、ハンターとして最後の仕事という事だ。
アンナはすでに警備兵ギルドの加入試験に合格し、明日から晴れて国営警備兵となる。

なので、最後の記念という名目で、ハンターギルドで脱退手続きをしていたアンナを、無理矢理リザードマン討伐へ駆り出したのだ。しかし、これには実は裏がある。ふふふ、アンナめ、その仏頂面をいつまで保ってられるかな……。

「わかったわかった、イノシシの代わりに美味しい物食べさせてやるから。ほら着いたぞ、俺はこれを運ばないといけないから先に入れ

「アンナ、今までありがとう！」

ライクが右手を高らかに上に掲げると、ギルド内からいくつもの感謝の言葉と拍手が重なり合い、一つの衝撃波となって俺達に押し寄せた。アンナは驚きのあまりか、その場にへたりこんだ。

ギルド内には所属ハンターのほぼ全員が集結していた。

エリスのいるカウンター上の、いつもは『ギルドカウンター』と書かれた看板には大きな紙が貼られ、それには『アンナの新しい門出を祝う会』と、でかでかと書かれている。

ライクがアンナをリザードマン討伐に誘ったのは、これの準備をするためだった。

昨日の内に、ライクはハンター達に声をかけて回っていたのだ。

予想外にも、そのほとんどが二つ返事で参加を承諾してくれた。皆知っていたんだよ、アンナが女ながらに必死であがいて努力して頑張っていた事をさ。

そして普段は他人のように振る舞っているものの、内心では同じギルド内のハンターとして認め、尊敬していたんだ。今、目の前にある光景こそがその証明だ。

「アンナ、警備兵になっても頑張れよ！」

「アンナちゃん、いつでも戻ってきていいんだよおおお！」

ギルド内には別れを悲しむ声や激励の声が飛び交っている。

まるで引越しをする子供のお別れ会みたいになっているが、俺はこの雰囲気嫌いじゃないぜ。

見るよ、アンナのあの照れてる顔。いいねえ、可愛いじゃないか。

シャーナ様には負けるけどな。

「ア、アンタ達馬鹿じゃないの！ こんな事してる暇があったら依頼の一つでも……うう、ありがとう……皆ありがとう……私……私嬉しいよう、うわああああん！」

アンナは照れ隠しに悪態をつこうとしたが、すぐに込み上げてくるものを押さえきれなくなったようで、泣き出してしまった。

まったく、泣き虫なんだから最初からそうやって泣いてれば良かったんだよ。ライクを含めるギルド内にいる全員が、アンナが泣きやむまで優しく見守っていた。

「どうだ、美味しいだろ？ 皆がお前のために取ってきた食材を、近くの料理屋さんに頼んで作って貰ったんだぞ」

「……まあまあね」

アンナはそんな事を言いながら、泣いてお腹が減ったのか、目の前のテーブルに置かれた料理の数々を、すごい速度で胃の中に放り込んでいった。まったく、こいつは最後の最後まで素直じゃないな。

「しかし、この前お前の家に行った時は驚いたよ。まさかあの豪邸がそうだったなんてな。お前、何でハンターになろうと思ったんだ？」

ああ、それは俺も是非聞きたいな。もし俺が金持ちなら一生鍛冶屋に囲まれて暮らすがね。

「……うぐっ!？」

「お、おい大丈夫か!? 水飲め、水!」

「……はあはあ。ありがとう、もう大丈夫」

アンナはライクの突然の質問に驚いた様子で、喉を詰まらせてしまったようだ。

「……理由、聞きたい？」

「あ、ああ」

アンナは何故か照れている様子だった。そんなに恥ずかしい理由なのだろうか？

しばらく俯いて何やら考え事をしている様子だったが、突然「よし、話すわ!」と大声で気合を入れだすと、ギルド中の人間がアンナに注目した。

しかし、そんな事はお構いなしにライクをじっと見つめながら、アンナはゆっくりと口を開いた。

「私ね、子供の頃から父に、家にふさわしい女になるためって色々習わされていたの。習い事だけじゃない。私はどこに出かけるにしても家の規律に縛られていたの」

アンナが喋るたびにギルド内に重い空気が流れ始めた。ああ、何となくわかったぞ。こいつは父親に反発して剣の道に進んだんだな。

「でもね、私がそれを重荷に思っているとね、父がそれに気付いてか、私に一つだけ自分でやりたい事を探せ、それに関しては自分は何も文句は言わないって言ってくれたの」

全然違った。いい親父さんじゃないか、兄とは大違いだ。俺、感動しちゃったよ。

「でも私、そんな事を急に言われても、何をすればいいか分からなかった。でもそんなある日、父と一緒にエルトリルに来ただけ、その時に広場で楽しそうに木刀を振るう少年と出会ったの。その少年は木刀に名前までつけちゃって、それはもう本当に楽しそうだったわよ」

ん？ 木刀に名前？

「だから私、近付いて楽しいか聞いてみたの。すると、その少年は私の頭をナデナデしながら、楽しいからお前もやってみるよってすごい笑顔で言うのよ。その笑顔が私にはすごく輝いて見えた。その時の事が忘れられなくて、剣術を習おうと決めたの」

おいおい、それってまさか……。

「それで何年も経ってから、またエルトリルに来た時に、その少年がハンターになった事を知って、私もハンターになろうって思ったの。もちろん周りからは反対されたけど、父だけは賛成もしなかったけど反対もしないでくれたの。だから、私は今こうしてここにいます」

間違いない、その少年はライクだ！ こいつ、ライクに惚れてたのか！

……という事は今のって遠回しではあるが、告白って事になるのでは！？ そうか、だからアンナは話す前に決心をしていたのか！

ギルド内のほぼ全員がそれに気付いたようで、歓声が巻き起こっ

た。
アンナはその様子を受けて、顔を真っ赤にしながらライクを見つめている。

さあ、どうするライク！　ここで答えなきゃ、男じゃないぜ！

「へえ、良い親父さんだな。そういえば奇遇だな、俺も子供の頃はよく木刀に名前つけて一人で稽古してたぜ。その少年も俺と一緒にかなりのやり手に育っているに違いない。一度手合わせしたいもんだぜ」

「……は？」

……男以前の問題だった。何を言ってるんだ、こいつは？　冗談だとしても笑えないぞ。見ろよ、この周りの冷えきった空気。

しかしライクは本気で言っているようで、何が起きたか分からない様子で辺りを見回している。

その動作が更に場を凍り付かせるが、そこに一つの起爆剤が投げ込まれた。

「……ラ……ライクの馬鹿ああああ！」

「ええ！？」

アンナの怒声を皮切りに、ギルド内はライクの馬鹿コールで埋め尽くされた。

ライクはまったく意味が分かっていない様子だ。さすがに今回は全面的にお前が悪いぞ。

この後、こいつが取る行動は予想がつく。

「お、お前等覚えてろよ！」

ライクは目に涙を溜めながら、ギルドから逃げる様に走り去った。

あの、一人で行ってくれないませんか？ 俺、まだあそこにいたいんですけど。

13・振り回される日々の中で

人は言う。死ぬと天国か地獄のどちらかに連れて行かれると。人は言う。どちらに連れて行かれるかは、生きている間の行いで決まると。

俺は知っている。どちらも嘘だということ事を。何故なら、俺は身を持って思い知らされたからだ。死ななくても天国と地獄には行けるといふ事を。そして日頃の行いに関係なく、両方に行けるといふ事を。そう、俺は今日、天国と地獄の両方に行ってきたんだ……。

* * *

理性を失う程の快楽を与えられると、人は顔で表現できる中で最もだらしなくて、他人に見せてはいけない『アへ顔』というのになると、酒場のエロオヤジ達が楽しそうに話していたが、もし俺に顔があつたなら、今まさにその表情を浮かべ……はああん、そこはだめええええ！

「ふんふんふん。どうですかあ、気持ちいいですかあ？」

気持ちいいです、気持ちよすぎて意識が飛びそうで……はふううん！

「うーん……よし、完璧のピッカピカですー！」

シャーナ様は鑑定士のように俺をじろじろと値踏みすると、満足

そつに可愛らしい笑みを向けてくださった。

さすがシャーナ様、加減が分かってらっしゃる。あれ以上されていたら俺は完全に昇天して、天国から戻ってこれなくなっていただろう。

やめられてもジワリと全身に浸透していく、この刺激と快感……。優しく包み込んでくる砥石グロブ。絶え間なく絶妙な刺激を与えてくる据え置き型の砥石。

この二つの合わせ技による極上の飴と鞭に、俺の体は完全にそれの虜となっていた。ああ、ゾクゾクする！

「それにしても、ライクさんはどこに行っただんですかねえ」

いいですよ、シャーナ様。あんな奴は放っておきましょうよ。

ライクは何やら用事があるからと言って、俺をシャーナ様に預けてどこかへ行ってしまった。

相棒を置いて行くななんて薄情な奴だぜ。まあ、そのおかげでシャーナ様にピカピカにして貰えたから、むしろ喜ばしい事だ。

もう二、三日帰って来なくてもいいよ。俺はその間、シャーナ様と研ぎ研ぎウフフしとくから。

ライク、お前は今や招かれざる客なのだよ。

「こんにちはー、シャーナいる？」

げっ、ライク以上に招かれていない奴が、工房の入り口を勝手に開けて入ってきやがった。

ノックぐらいしろ、無礼者。

「あ、アンナ。こんにちはですよ」

こんな奴に丁寧な挨拶なんか返さなくてもいいですよ、シャーナ様。

そういえば、この前のリザードマン討伐の時から思っていたが、二人はいつの間にか呼び捨てにする仲になってきているようだ。仲良しになったって言ってたしな。

こんなにタイプの違う二人が仲良しになるなんて、人というのは奥が深い。

「どうですか？ 新しい仕事には慣れましたか？」

「慣れるも何も、新米だから街の中を見回ってるだけだし、暇でしようがないわ。釣り具屋が何者かに襲撃される事件は起きたけど、そこも私の管轄外だし……あーあ、早くモンスターの監視とか討伐とかやらせてくれないかなあ。この鎧もダサイし……」

アンナは自分が装着している鎧を見ながら不服そうにしている。

その鎧はいつもアンナがしていた無駄に高そうな鎧ではなく、何の装飾もされていない平凡な、国営警備兵に支給される鎧だ。

たしかに見た目こそ地味ではあるが、それなりに耐久性のありそうな作りをしていて、鎧としての性能は十分そうだぞ。剣が言うのだから間違いない。まったく、これだから金持ちは困る。

「駄目ですよ、アンナ。何事も初歩が大事なのですよ。それにその鎧だって無駄無く急所をがっちり守っていて良い鎧ですよ」

シャーナ様は駄目な母親を叱るしつかり者の子供のように、アンナを叱りつけた。

さすが、その年で上級鍛冶師になっただけあって分かっているらしいや。アンナも見習えよ。

おいこら、気安く頭をナデるんじゃない。

「はいはい、シャーナは真面目でいい子ですねえ」

「はうう……うーん、やっぱり違いますねえ」

「やっぱり？ 私にもやってみてよ」

二人は互いの頭をナデ合っては、怪訝な表情を浮かべて溜息をついた。

「……やっぱり違うわね」

「ですよねえ、ライクさんは特殊な訓練でも受けているのでしょうか」

どうやら二人は、ライクのナデナデと自分達のナデナデを比較しているらしい。

そんなにライクのは特別気持ちいいのか……べ、別に羨ましくなんかないぞ！

……ああ、またモヤモヤしてきた。

もう一人、モヤモヤしてそんな奴がさっきからチラチラと視界に入ってきているが、俺は気にしない。

「ところでアンナ、そちらの方は……？」

そんな俺とは裏腹に、シャーナ様は気になって仕方がなかった様子だ。

聞いてしまうのですね、俺的には指一本も触れないまま、お帰り願いたかったのですが。

「そうそう、忘れる所だったわ。今日ここに来たのは他でもない、

こいつの事だよ」

他にもないこいつを忘れるんじゃない。

アンナは工房の入り口で、ロープで縛られて不貞腐れている男を、シャーナ様の前につきだした。

その人物を見たシャーナ様はハツとした表情を浮かべた。

「あ、この人。アンナの屋敷に突然現れた弓使いの方じゃないですか！ 何故ここに？」

緑色の帽子に緑色の服、そのセンスのない服は間違いないく、ノゲホーフィツシュ戦とマンズブラッド戦で、突如現れては何の役にも立たなかった謎の弓使いだ。

「実は街を巡回中に、革用品店の前でずっと中を覗いている怪しい人物を見つけたから、話しかけてみたの。そしたら、こいつだったのよ。何である日、私の家にいたのかも気になるし、シャーナと一緒に尋問しようと思ってるね」

そんな物騒な事をお茶に誘うような感じで言うな。

シャーナ様は目を輝かせて「きゃっほー尋問ですう！」と、休みの日に遊びに連れて行ってもらえる事になった子供のようにしゃいでいる。この人は尋問の意味が分かっているのだろうか？

そんな俺の疑問などそっちのけで、弓使いへの尋問が始まってしまった。

「まずは貴方の名前と職業は？」

「俺には名前も職業もない。ただの弓使いだ」

「名前と職業は共に弓使いね……年は？」

「俺に年などない。春の息吹を三十回ほど感じたがな」

「ふむふむ、三十歳か。結構年とってるのね。何で革用品店を覗いてたの？」

「理由などない。愛しき者が存在するのに理由などないだろう？」

「なるほど、革用品店に好きな人がいたから覗いてたわけね」

……黙って聞いてれば、これは一体何の喜劇だ？ シャーナ様が笑いをこらえようと必死じゃないか。

ただでさえ、尋問を楽しいものだど勘違いしてそうなのに、余計勘違いしてしまうだろうが。尋問好きにでもなってしまったらどうするんだ。ちゃんと答える、この緑男！

「うーん、結局貴方は何者なの？」

「俺はライクの追っかけだ」

「……え？」

「……ほえ？」

だからちゃんと答え……いや、ちゃんと答えているな。というか、そこは弓使いじゃないんだな。

「えーと、ライクの追っかけという事は……貴方はライクの事が好きって事？」

「そうだ、俺は世界で一番ライクを愛している。俺の夢は得意な弓で、ライクのハートを射ぬく事だ」

聞いてもいないのに夢まで語り始めたぞ。ライクの追っかけなのか、命を狙う暗殺者なのか、一体どっちなんだ。

色々とツッコミ所が満載ではあるが、あまりにも正直にライクへの愛を宣言されて、アンナとシャーナ様は二つ一組のチェリーのように仲良く顔を真っ赤にしている。

そんな二人に追い打ちをかけるように、弓使いはライクへの愛を更に語りだした。

「いいか、俺のライクへの愛はお前等なんかより、もっともつと深いんだ。目に入れたって、耳に入れたって、尻の穴に入れたって痛くないし、血も一滴すら出ない」

出るだろ。

「それにライクも俺を愛しているはずだ。何といっても、あいつに初めて頭をナデナデされたのは俺なんだからな！」

「ええ!?!」

チエリーな二人組は、明日エルトリルが爆発するとも告げられたかのように、大きな驚きの声を上げた。そこまでの事じゃないでしょう。

しかし、まさかこいつもライクのナデナデに魅了された一人だったとは。しかも初めてを奪ったときたもんだ。

ん？ でも確かアンナは……。

「ちょ、ちょっと待ちなさいよ！ 初めてって私、子供の頃にしてもらっているのよ!?!」

そうだ、アンナがナデナデしてもらったのは、ライクが一人でハラハラ笑いながら木刀を振るっていた残念な子供の頃だ。お前はそれを超えるというのか!?!

「ふん、それがどうした。俺がナデナデしてもらったのは、ライクが赤ちゃんの時だぞ！」

「あ、赤ちゃん……!?!」

あ、赤ちゃんだと！？ それはさすがに勝てないぜ！

……ところで何なの、この程度の低い争い。もう飽きてきたんだけど。

「あの時の事はよく覚えている。俺が広場に遊びに行ったら、ベンチに座っている母親に抱かれたライクがいた。それはもう可愛いかったさ。そして俺が近付くと、あいつは小さな手で俺の頭を優しくナデナデしてくれたんだ。それはもう凄かったぜ」

弓使いは気持ち悪い思いだし笑いを浮かべている。

こいつの話が本当なら、ライクが赤ちゃんの頃からずっと追いかけて回しているという事になる。

狂ってる……こいつ最高に狂ってやがる。マンスブラッド並みか、それ以上だぞ。

「そ、そんな赤ちゃんだなんて、うらやましい……」

「ライクさんの赤ちゃん時代……。さぞ可愛らしい手だったんでしようねえ……」

チエリー二人組は膝と手の平を地面につけ、完全敗北のポーズを取っている。

さすがに大袈裟すぎるだろ。どんだけナデナデ話を引っ張るのさ。何かモヤモヤするのも馬鹿らしくなって来ているんだが、こっちはもうこの人達帰ってくれないかな。

「ただいまー。シャーナ、預かってくれてありがとう……ん？」

……俺は帰れと言ったはずだ。何故来るんだよ、このタイミングで。

ライクは元気よく入って来たものの、場の状況が飲み込めないように、目を丸くして首を傾げている。

それを見た三人は、獲物を見つけたリザードマンのごとく走り寄ると、ライクの周囲を取り囲んだ。

「な、何だよお前ら。どうしたんだよ!？」

ライクは詰め寄る三人に完全に圧倒され、扉を背にして逃げ場を失っている。

お前は良い奴だったよ、安らかに眠ってくれ。

三人は互いに目配せをした後にこくり頷くと、アンナが一步前にでた。どうやら代表者が決まったようだ。

「ねえ、ライク選んで」

「え、選ぶって何を……?」

ライクは尋常じゃない汗をかいている。

「誰が一番ナデナデしたいかに決まってるじゃない!」

「ナ、ナデナデ!？」

ライクは困惑と驚きが入り混ざった、何ともいえない微妙な表情を浮かべている。

そりゃ、いきなりそんな事言われても困るだろう。しかし、こんな真剣な三人を見ては無碍にする事もできない様で、ライクは困惑しながらも三人の顔を交互に見ながら考えに考えた結果、意外な名前を呼んだ。

「んー、サウザート!」

俺かい。三人は部外者の俺が選ばれて呆然としている。

そんな事はお構いなしに、ライクは俺が剥き出しのまま置かれて
いる作業台に向かってくると、俺を手に取った。

直後、俺の剣身が温もりに包まれる。鞘に納められたんだ。

でも何かが違う、いつもの鞘の感触じゃない。これはもしてか
して。

「この前、鞘をイノシシの鼻水で汚しちゃったからな。新しいのを
買ってきてやったぞ。どうだ、サウザート、嬉しいか？」

ライクは俺の柄頭をナデナデしながら、そんな事を聞いてくる。

嬉しい……嬉しいに決まってるじゃねえか、ちくしょう。お前は
最高の相棒だよ！そして鞘の感触も最高だよ！

正直いつも握られているせいか、ナデナデはそれ程気持ちいいと
は思えない。

だが、ライクを独占しているという感じがして、俺は今とてもい
い気分だ。見る、あの三人組の悔しそうな顔。ライクは俺の相棒だ。
お前等なんかに渡さないぜ！

あ、でもシャーナ様にはたまになら貸してもいいよ。

ああ、こんな幸せを味わえるのも俺が魔剣として日々頑張ってい
るからだな。

魔剣に生まれて良かったあああああ！

俺とライクは不満そうな三人を工房に置いて、家路についていた。

今日は俺の人生の中で最高の日だと言っていていいだろう。

シャーナ様の極上の研ぎ技は堪能できたし、新しい鞆は買ってもらえたし、落ちこぼれの俺が優越感に浸る事さえできた。

まあ、自分が魔剣という事を知ってから色々ありすぎて、気を休める余裕も無かったし、これぐらいのご褒美はあって当然だろう。

と言っても、悪い事ばかりじゃなかったけどな。

今まで毒舌なだけだと思っていた奴の良い部分を知る事ができたり、俺と会話できる奴が現れたり、そして何よりもシャーナ様と出会えた。

あと、おまけ程度に三つの魔剣としての能力に目覚めた事も良いといえは良い。硬くなるのはそれなりに便利だが、正直残り二つが目覚めた日の夜は一晚中泣きあかしたけどな。涙なんてでないけど。

でも、それでいいのさ。俺はゆっくり成長していけばいいんだよ。それが俺を作った奴の想いだからな。

マンズブラッドに折られそうになって、走馬灯を見た時に思い出したんだ。

俺を作ったやつが最初にかけてきた言葉を。

奴は言っていた。「一生、共に歩いていける相棒を見つけて、そいつと一緒にゆっくりでいいから、立派な剣に成長していつてくれ」ってな。変態じゃなさそうで良かったよ。

これで俺が何故、ライクに出会ってはっきりとした意思を持ったかが分かった。ライクに出会う事自体が使命の一つだったからさ。

それで魔力が生み出されて意思がはつきりしたんだ。

俺ってさ、実は最強の魔剣なんじゃないか？

だって俺はライクに文字通り、振り回されて色んな事を経験するだけで、いくらでも魔力が湧いてくるんだぜ？ 更にパワーアップするっていうオマケ付きだ。

そのかわり、俺はこいつに一生振り回されないといけないんだけどな……。

まあ、先の事なんて考えても仕方がないさ。

とにかく今はこいつと一緒に、せいぜいゆっくり振り回される日々の中で成長させてもらおうじゃないか。

だから、今は落ちこぼれでもいいのさ。

「なあ、サウザート」

ぬお！？ いきなり話かけるなよ、ビックリするだろ。あと独り言だと思われるからやめた方がいいぞ。ライクからすれば実際、独り言なんだけどな。

「もし、お前が魔剣で喋る事ができたら、一体どんな奴なんだろうな」

こんな奴です。少なくともオカマじゃないから安心してくれ。

「でも喋れなくても、俺達の心は通じ合ってるからいいよな」

よ、よせやい。こんな街中で照れる事言っんじゃねえよ！

でも、そんな事を剣に言ってくれる奴なんかお前ぐらいだよな、ありがとうな。

いつか俺が喋れる能力を手に入れたら、真っ先にありがとうって

言おう。そして次に、これからもよろしくなって言うんだ。これが俺のささやかな夢さ、へへへ。

そんな事を考えていたら、俺達は街中を流れるエルトリル川にかかっている橋にさしかかっていた。

まったくこの川はいつ見ても汚いな。たまにゴミが浮いてたりするし。こんな川に落ちるのだけは絶対にごめんだ。

「ん？ あそこにいるのは……」

ライクは橋の真ん中辺りで急に立ち止まると、向こう岸に誰かいるのを見つけたようだ。

あれはミエルだ。何故か物陰に隠れて、片目でチラッとこちらの様子を伺っている。お前はシャーナ様か。

「おーい、ミエル。そんな所で何してんだよ」「来ないで。来るならそこに剣を置いてきて」

は？ あいつは一体何を言っているんだ？

「え、何でだよ？」

「いいから早くして」

「仕方がないな……」

ライクはミエルの言う通りに、橋に俺を置いてミエルの方に歩いていく。

おい、そんな簡単に相棒を地べたに放置するな！ 盗まれたらどうする！

……ん？ 何かノゲホー的な刺激を感じるな。血の臭いに似てい

るが少し違う。

俺は色々とノゲホーな刺激を感じる内に、近場なら大体の刺激の発生源が分かるようになった。

この臭いの発生源は間違いない。あそこで顔をほのかに赤らめているミエルだ。しかし、この臭いは何だ……あ、もしかしてこれがノゲホーフィッシュの時に言っていた例のアノ……

「うわっ、何だ!？」

え、何？ ミエルさん、そんなに急いで俺の所まで来て、俺を持ち上げて何をするつもりですか!？

「川の藻屑となれ、この腐れ外道」

あーれー!

突然、俺は投げ飛ばされて浮遊感を感じたと思ったら、今度は急降下して川へと……いやああああ!

「お、おい何するんだよ!？」

「……これ」

「え?」

「四万シャルーある。臨時収入が入ったから世話になったお礼」

「え!？ そんな大金受け取れないよ!」

「いいの、臨時収入が入ったのは貴方のおかげ。これは正当な取り分」

「そ、そうなのか？ 何だかよく分からないけど助かるよ。ありがとうな」

「はっ!？ ……頭撫でるのはやめて」

「ああ、すまない……ってそんな事よりサウザート！ サウザート

大丈夫か！？ サウザートオオオオ！」

* * *

そんなわけで俺は今、下水道への入り口の鉄格子にゴミ達と一緒にひっかかり、必死でノゲホーを我慢している。

……ねえ、俺が一体何したっていうの？ 落ちこぼれのくせに調子に乗って最強とか言ったから？ 落ちこぼれには前向きに考える資格すらないの？

それとも、俺が一方的にエリザベルと離婚したから？ 一方的っていつても結婚も離婚も俺の妄想だよ？ もしエリザベルにも意思があつたら、絶対俺みたいなしよばい剣相手にされてないよ？ 夢ぐらい見たっていいじゃないか！

ああ、こうなったのも全部俺が魔剣だからだ。俺が魔剣じゃなければ、こんな事にはならなかったんだ……。

やっぱり普通が良かったよおおおお！ ノゲホオオオオ！

「おい、サウザートどこだー！」

どこからともなく、ライクの俺を呼ぶ声が聞こえてくる。

もう放っておいてくれよ。俺はもう魔剣な自分が嫌なんだ。ここ

で静かに朽ちさせてくれ……。

「ミエルから貰った金で綿入りの高級鞄買ってやるから出ておいで」

……何だと？

綿入りの高級鞄だと……ライク、ここだああああ！

ここだ、俺はここにいる！

下水道への入り口で、俺は小刻みに震えて水面をバシヤバシヤする事により、見つけてもらえるまでライクに精一杯のアピールを試みる事にした。

まあそんなわけで、今日も俺は魔剣として元気にやっています。

エピソード

エルトリル郊外西部の墓地の一番奥。魔剣アリエッタの墓の前で祈りを捧げている男の背中を、ミエルはじっと見つめていた。

この前来た時はゆっくりできなかつたため、彼女は花束を片手に、再度アリエッタの墓参りに訪れたのだが、予想外にも先客がいる事に、無表情のまま驚いていた。

ツルツルの頭が日光を反射させて迷惑なその男は、解体屋のハインであった。

ミエルはすでに確信をしていたが、その確信が更に強まっていく。

間違いない。あの人はアリエッタの持ち主になるはずだったハインさんだ。

ミエルは、アリエッタの持ち主となるはずだった人と面識はもちろん、顔さえも知らなかつた。知っていたのは、その男がエルトリルで一番のハンターで、名前がハインという事だけだった。

また、リザードマンキングとの戦いで負傷して引退をしたという事も、風の噂で聞いていた。

解体屋がハインである事を知ったのは最近の事だったが、実はミエルは大分前にハインを見た事があつた。

というのも、アリエッタの墓を作ったのは他でもない、目の前にいるハインだからだ。

リザードマンキングが討伐されたあの日、アリエッタを折つたミエルは、何もする事ができずに、遠くからぼーっとアリエッタの残骸を眺めていた。

そこに松葉杖をつきながらやって来た男が、折れたアリエッタを拾い、簡素ではあるが墓を作ってくれたのだ。

ミエルはその時からずっと、何の確証もなかったが、その男がハインなのではないかとずっと思っていた。

いくら簡素といえども、敵が使用していた剣の墓を作るなど普通ではない。当然、周りはそれを良しとしなかっただろう。それでも彼はアリエッタのために墓を作ってくれたのだ。そんな事をしてくれる人物はハインぐらいしか、ミエルは思い浮かばなかった。

「あれ、貴女は確かライクさんと一緒にいた……」

ハインはふと後ろを振り向くと、ミエルの存在に気付いて話しかけてきた。

ミエルは無表情のまま、「ミエル」とだけ言葉を返しながら会釈をすると、ハインも丁寧に会釈を返してくれた。

「ミエルさんもお墓参りですかい？」

「そう。……その墓は誰の墓？」

ミエルはアリエッタの墓を指差しながら質問をした。もちろんアリエッタの墓という事は重々承知していたが、何となく聞いてみたくなったのだ。

「ああ、これはね。私の相棒になるはずだった剣の墓でね。結局、私の手には渡らず、リザードマンキングに奪われてしまいましたね。私も必死で取り戻そうとしたんですけど、まったく歯が立ちませんでしたわ」

ハインは何もない頭をぼりぼりと掻きながら、悲しそうな表情を

浮かべた。

「……リザードマンキングは強かった？」

「んー、奴が強かったわけではありませんな。あれは剣自体の力ですわ」

ミエルは自分の心臓の鼓動が速くなるのを感じた。

ハイネには、ただ単に特別に作った剣としか伝わっていないはずなので、魔剣である事は知らないはずだった。しかし、ハイネは剣に魔力が宿っていた事を知っている様子だ。

ミエルは表情に出すまいと必死だったが、逆にその必死さが、ハイネには困惑しているように見えたようで、彼は慌てて言葉を続けた。

「あ、剣の力って言ってもオカマ言葉で喋ったり、自由自在に動き回るわけじゃありませんよ。うーん、何ていうのかな……強いて言うなら、愛情でしょうか」

「愛情？」

「私は今までいくつもの剣と交えてきましたかね。そんな事をしてるうちに交えた剣の気持ちみたいなのが感じ取れるようになったんですよ。あの剣は愛情に満ちていました。作り主から剣への愛情、そして剣から作り主への愛情。もうそれがあまりにも強大すぎて、勝てる気がしませんでしたわ。その愛情の中には、私もリザードマンキングも入る隙がないって感じでしたなあ……」

ハイネは切ない表情を浮かべながら墓の方を向いたが、ミエルの方に向き直った時には、すでに普段の表情に戻っていた。

「あ、じゃあ私は仕事があるのでここら辺で失礼します。今日も元気に解体ですわ、ガハハハハ！」

ハイネは言いたい事を一方的に全て吐き出すと、豪快に手を振りながら去っていった。

ハイネの言葉は不思議と説得力があった。そのおかげで、ミエルは心に背負っていた物が少し減って、体が軽くなったような気がしていた。

サウザートとかいう口の悪い魔剣に言いたい放題言われて、少し気が楽にはなっていたものの、まだ本当にアリエッタが自分を許してくれているのか、少し不安が残っていた。

しかし、ハイネの言葉で自分が愛されていたという事に自信を持って、そんな不安はどこかに飛んで行ってしまったようだ。

ミエルはアリエッタの墓の前に立った所で、自分が用意していた物よりも一回り大きい花束の存在に気付いた。恐らくハイネが用意した物だろう。ミエルは、アリエッタへの想いがハイネに負けているような気がして悔しかったが、折角買ってきたし捨てるのはもったいないので、ハイネの花束の上に遠慮なく置いた。

そして目を閉じて祈りを捧げ、そのままミエルはアリエッタにゆっくりとした口調で話しかけた。

「アリエッタ、この街は変な所ね。……剣好きの馬鹿達がいっぱいいるわ」

それに答えるかのように、一瞬心地よい風がどこからともなく吹いてきて、ミエルの髪をふわっとなびかせた。

エピローグ（後書き）

第一章はこれで終わりです。

こんな作品をここまで見てくださった方、お気に入り登録をしてくださった方、本当にありがとうございます！ 感激です！

第二章からは、書き溜めが少ない＆見直しがまったくできていないため、少し不定期になるかもしれませんが、できるだけ間隔を空けないようにしたいと思いますので、良かったら第二章からも読んでやってください！

評価・感想・意見・要望・誤字指摘、何でも受け付けていますので、よろしくお願いします！

プロローグ

ミエルは薄れゆく意識の中で、しきりに辺りを見回し、ローブのポケットをまさぐり、無駄だという事は百も承知で、「助けてー」と、まったく感情のこもっていない救援を求める声を上げてみたりした。

私とした事が迂闊だったわ。まさかあそこであんな邪魔が入るなんて……。しかもこんな物まで……。

ミエルは自分の失敗と不運を悔いたが、今はそんな事をしている場合ではない。

上からの強襲者は気まぐれに気まぐれな場所に攻撃を仕掛けてくる。いつそれが彼女に牙を向けるか分からない。

しかし、この状況を打開できる力を持つ魔具が、彼女には思い当たらなかった。

「誰か助けてー」

やっぱり、駄目か。こんな場所に人など来ない。来るとしたら迷子になった動物ぐらいね。……動物？

ミエルはそこまで考えると、八つとした表情を浮かべて、黒いローブの内側にあるポケットを探り始めた。

「……あつた」

彼女が見つけたのは魔具だ。

それも何かしら意図があつて作った魔具ではなく、気まぐれに遊

びで作った魔具だった。

魔具の恐ろしさを誰よりも知っているミエルが、遊びで魔具を作る事など今まで一度もなかったのだが、今回は珍しく感情を抑えきれず、衝動的に作ってしまったのだ。

いつものミエルなら、そんな魔具はすぐにでも破壊してしまいうなものだが、極微量の魔力で作った本当に役立たずの魔具だったため、とりあえずは破壊せずに持っていたのだ。

しかし、今のミエルにはどんな大型モンスターや超強力な力を持つ魔具よりも頼もしく思えた。

ミエルはその魔具をそつと握りしめると、散らばって消えてしまいうそつな意識を必死で拾い集めながら、手に魔力を集中させて願った。

「お願い……誰でも……いいから……人を……連れて……来て……」

ミエルの意識は魔具が自らの願いを受け入れたのを確認すると、息を吹きかけられた口ウソクの火のように、ふっと消えていった。

そして、話は数日前へと遡る。

プロローグ（後書き）

第二章スタートしました。

プロローグは謎だらけにしたかったので、かなり短くなってしまいました。

なので、今日の夕方か夜に、もう一話投稿したいと思います。

1・ハンターの本能？

名前はサウザートで、職業は魔剣です。

年は……よく分かりません。

ここで、何をしてるって貴女様に砥石で……あはああああん！

「それじゃあ結局、貴方は何者なんですかあ？」

だから、サウザー……トおおおおん！

シャーナ様は俺に研ぎという名の拷問を仕掛けながら、容赦なく問い詰めてくる。

「こ、こんなの無理だよ。こんな事されたら俺は何でも……はいいいい、私は毒舌落ちこぼれシヨボシヨボ魔剣のサウザートどえええすううううん！

「うふふー、ここがいいんですかあ？　ここがいいんですかあ？」

シャーナ様、それはもうただのエロおや……そこがいいですうううううう！

「ふう、尋問終了ですっ！」

……はあはあ、やっと終わった。

先日の緑男の一件以降、シャーナ様はすっかり勘違いしたまま、尋問というものにハマってしまい、俺はその被害者にされている。でも別に嫌ではなく、逆に言葉責めをされながらの砥石による快

感に俺は……やめよう、認めては駄目だ。毒舌で落ちこぼれの上にマゾな魔剣なんて笑い話にもなりはしない。

シャーナ様もその内、勘違いに気付いて尋問するのもやめるだろう。だから、今日あった事は全て忘れてしまおうじゃないか。

「へえ、さすが上級鍛冶師の研ぎつてのは一味違うな」

おい、忘れようと言ってる側から勘違いの輪を広げようとするんじゃない。

無実の俺が尋問される様を興味深そうに眺めていたライクは、関心した様子でそんな素っ頓狂な事を言い放つ。

上級鍛冶師連合から訴えられるぞ。そんな連合あるかは知らないけど。

「俺も今度こいつを磨いてやる時、色々話しかけてみようかな」

勝手にしてくれ、全部の問いに黙れの一言で答えてやる。

「いいですねえ、恋愛の話とかオススメですよっ！」

シャーナ様はマセガキのように目をキラキラさせて言った。

その話題だと、結婚した数日後に離婚したっていう重い話しかできませんが、よろしいでしょうか？

「い、いや。それはちょっと……」

俺に言ったのか、シャーナ様に言ったのかは知らないが、ライクは顔をひきつらせながら、申し訳なさそうに断りを入れた。まあ、俺の意思は聞こえないからシャーナ様に言ったんだろうな。

「ちえ……つまらないです」

シャーナ様は頬をパンパンに膨らませて、目を細めながらライクを睨んでいる。ああ、やはり何をしてても可愛いな。

でも、この可愛い姿を見れるのもあとちょっとなんだよなあ……。

「そういえば、シャーナは三日後には首都に帰っちゃうんだっけ？」

具体的な日数を言うな！ 泣くぞこら。

……駄目だ駄目だ、泣いちゃ駄目だ。最近何かもうヤバイから泣いちゃ駄目。

「はい、そうですねえ。アイアンブレイカーの解体もほとんど終わりましたし、あちらでやらないといけない仕事も山ほどありますからね」

「そうか、寂しくなるなあ……」

「はううう……」

シャーナ様は、己の頭を無断でナデナデしているライクの手を、名残惜しそうに見つめている。

ナデナデしてもらえなくなるのが相当悲しい様だ。いつ斬り落として自分の物にしようとしてもおかしくはない。

手伝いますよ、シャーナ様。こんなナデ癖の悪い手は斬ってしましましょう。

「だ、大丈夫ですよ。そんなに悲しまないでくださいよお。また会えますよ、きつと。ライクさんもナデナデですう」

子供が泣き虫な大人をなだめるように、シャーナ様の右手がライクの頭へと伸びていく。ライクはそれを受け入れるように体を屈め

……え、右手!?

「ぎゃああああああ! いてええええええ!」

「はわわ! 私のグローブがあ……………」

俺が気付いた時には、すでに惨劇は始まり、一瞬で終わりを迎えていた。

ライクはうずくまって必死で頭をさすり、シャーナ様は激しい地獄の業火が渦巻く火炉の中を、眉を八の字にして泣きそうな顔でじっと見つめている。

……えーと、何が起きたか整理してみよう。

まず、シャーナ様が右手でライクの頭をナデナデした。砥石グローブを装着したままだな。

当然、人間の軟弱な頭で砥石の威力に耐える事ができるはずもなく、ライクは悲鳴を上げて現在に至るわけだ。

次に、シャーナ様が何故火炉を見つめているかだが……。

ライクはあまりの痛さに、防衛本能が過剰に反応したのだろう。

あいつは悲鳴を上げながら、シャーナ様の右手を素早く掴むと、装着されている砥石グローブを乱暴にひっぺ剥がして、火炉に投げ入れたのだ。

自分の身を脅かす危険因子を迅速に排除するのはハンターの基本であり、体に染み着いた習性とも言える。なので、ハンター的には悪くない反応ではあるが……今回はどちらの味方もしかねるな、両方アホだ。

……って、あのグローブがないと俺が天国に行けないじゃないか! どうしてくれるんだよ、アホ馬鹿ライク!

俺を焼死させようとするライクを、シャーナ様が腕にしがみついで必死で止めてくださった。

ああ、生きてる、俺まだ生きてるよ。ありがとう、女神様。この恩は絶対に返しますよ。

「エンゴク鉱石は熱に非常に弱いんですよ。なので、加工する時も弱火で細心の注意を払わないと駄目なんですよお」

何てデリケートな鉱石なんだ。まるで俺みたいだ。

ライクはその情報を聞かされ、顔をひきつらせている。

「え、じゃ、じゃあ、もう完全に手遅れという事か……?」

「はい、残念ながら。でも本当に気にしないでいいんですよ」

シャーナ様は再び聖母のような優しさで、慈悲深い言葉はかけてくださったが、もうライクの耳には届いていないようだ。

「高価な上に……手間がかかって……そんな物を俺は……俺は……そんな金、俺には……」

「ラ、ライクさん?」

「俺は……俺は……取ってくる……取ってくる! 俺、エンゴク鉱石取ってくる!」

「ええ!?!」

行ってらっしゃい。

シャーナ様はライクの言動に驚いているようだが、俺はライクの馬鹿で責任感が強いという性格を知っているので、この展開は容易に予想できた。

「心配しないでくれ、パパッと取ってくるから！ 行くぞ、サウザート！」

嫌だ、断る。お前一人で行け。俺を焼死させようとした奴に貸してやる刃など俺にはない。

しかし身動きの取れない俺は、ライクの思うがままになるしかなかった。

「ライクさん、本当に大丈夫なんですよー！ だって今日」

ああ、シャーナ様が遠ざかっていく……嫌だ、離れたくないよ、シャーナ様ああああ！

「エンゴク鉱石？ こんな所で採れるわけないじゃないですか」

「何だよ！ ここはエルトリル周辺で最大の採掘場だろ！？ ここで採れないはずないだろう！」

必死で反論するライクに対して、解体屋のハイネは呆れ顔でため息混じりに言い返した。

「あのねえ、ライクさん。いくら最大の採掘場って言っても、何でも採れるはずないですよ。広大な畑だって全種類の野菜が採れるわ

「けじゃないでしょ？」

「むむ……確かにそれはそうだが……」

そりゃそうだ、レアで高価な鉱石がこんな所にあるわけがない。

そんなわけで、俺達は先日アイアンブレイカーとの死闘を繰り広げた採掘場の前に来ていた。

採掘場である巨大な穴の中では、ハイネ率いる解体屋集団がアイアンブレイカーの解体作業に精を出していた。

と言つても、解体作業はほぼ終わりかけで、アイアンブレイカーの体を覆っていた背中の鉱石が少し残っているぐらいだった。解体作業初日は数十人のハイネの部下がいたのだが、今では三人しかない。

そんな事よりも、俺は今日初めてハゲモンスターこと解体屋店主の事を名前でハイネと呼んでみたのだが、意外に違和感がない事に驚いた。

「そうですねあ、ここら辺でエンゴク鉱石が採れるといつたら……ステイシル火山ぐらいでしょうな」

俺がどうでもいい事で驚いていると、驚かれている当人であるハイネが更に驚きの発言をしてきた。

「おいおい、ステイシル火山だつて？ 冗談はやめてくれよ、エンゴク鉱石は……」

「ステイシル火山？ エンゴク鉱石は熱に弱いつてシャーナが言ってたぞ？ そんなのが火山で採れるはずがないだろう！」

さすがのライクでも気付いたようで、すごい剣幕でハイネを問い

ただした。

こいつの言う通りだ。ステシル火山はいつ噴火してもおかしくない獰猛な活火山だ。

山の至る所から熱気を帯びた蒸気が吹き出していて、山はおろか、その近辺さえも草木一本生えない程の熱気に包まれている。

そんな場所で俺並みにデリケートなエンゴク鉱石が無事でいられるはずがないだろう。

だが、ハイネの真面目な表情からして、嘘をついているとは思えなかった。

ハイネはライクの問い詰めに圧倒される様子もなく、ため息を一回ついで口を開いた。

「だからこそ、レアで高価なんじゃないですか。発見できてもドロドロに溶けかけている物が多くて、実用にたまるエンゴク鉱石は本当に希にしか採れないんですよ。火山以外でもたまに採れるらしいですが、場所が特定できない上に、そっちもそっちで色々と問題があるんですわ。とにかく面倒くさい鉱石なんですよ。……もういいですか？ 私は今からちよつと用事があるので、これで失礼しますよ。まあ、頑張ってくださいよ。がははははは！」

ハイネはエンゴク鉱石以上にライクが面倒くさくなった様で、豪快な笑いと共に街の方へと歩き去って行った。

火山で採れるのに熱に弱いとはな。それは確かに面倒くさい。エンゴクよ、お前は何故わざわざ自分を追い込むようにして生まれてくるんだ。マゾなのか？

ちなみに俺はサドだ。デリケートなマゾとデリケートなサド……うわぁ、どっちも面倒くさすぎる。何で俺達、普通になれないんだろうな。悲しいな、エンゴク。

「うーん、ステイシル火山か……。さすがに一人じゃ厳しいかなあ」

ライクは頭をポリポリかきながら困った表情を浮かべた。
「やったよ、エンゴク。悲しみを背負った俺達にも安息の時がきそ
うだよ。そつだ、そのまま諦めて帰れ。」

「おい、お前！ さっきの話は本当なのか！？」

「本当だよ本当。だからさっさと……。ん？ あんた誰？」

「え？」

「だから、さっきのエンゴク鉱石の話だよ。ここで採れないって
うのは本当なのかって聞いてるんだよ！」

短髪で男勝りな顔立ちをしていて、下半身には重々しい鎧を装着
しているくせに、上半身は胸を隠す下着のような物が一枚のみ。そ
して、手には布に包まれた自分の身長よりも長い謎の物体が握られ
ている。

そんな怪しい格好をした女は、語尾が独特な訛り口調でライクを
問い詰めてきた。こいつは一体どこの田舎者だ。

「な、何だよいきなり！ お前は誰なんだ」

「私はタイガーマンのディアナ、よろしくな」

「タイガーマン……。虎男？」

「おおっと、田舎者どころか人間ですらないのかもしれない可能性
が出てきたぞ。」

「タイガーマン？ お前そんな立派な胸してるのに男なのか？」

ライクはディアナの布一枚で隠された豊かな胸を指差しながら言った。失礼な上に少しツっこみ所がズレてるぞ。

「ち、違ウよ！ 私は真正正銘の女だよ！ タイガーマンが名字なんだよ。私の部族では、名前はさっきみたいな呼び方をすルの」

部族？ 部族って何だ？ 怪しい宗教か？

「何だよ、紛らわしいな。いいか、郷に入れば郷に従えだ。ここら辺じゃ、名前の後に名字を言うのが普通なんだ。だから、それに従ってもらおうか」

「むー……私はディアナ・タイガーマン、よろしく」

「そうだ、やればできるじゃないか。俺はライク・カインスだ。よろしくな」

ライクはそう言いながら、ディアナの頭に手を伸ばし始めた。こいつはまた初対面にも関わらず、頭をナデナデするつもりなのか。女に免疫ない癖に、何でナデるのだけはそんなに積極的なんだ。

「何のつもりだ！」

ディアナはライクの手が自分の頭を捉える寸前の所で、豊かな胸を荒々しく揺らしながら後ろに飛び退いた。当然の行動だろう。

「す、すまん……」

おい、謝る時は相手の目を見る。お前が凝視しているのはディアナの豊かな揺れ乳だぞ。

見る、それに気づいたディアナが顔を真っ赤にしながら、下着泥棒でも見るかのような目でこちらを睨んでいるぞ。

「お前はどこ見ながら謝ってるんだよ！」

「え、いや、あの、その……に、二個あるから間違えたんだよ！その……目と胸を……」

ライクの口から近年最大級の最低な言い訳が飛び出した。酒場のエロオヤジ達でもそんな言い訳はしないだろう。

「……お前、それ本気で言ってるのか？ ……そういうのやめた方がいいと思ウぞ？」

「はい、すみませんでした……」

ディアナはしょんぼりしているライクに、怒りを乗り越して哀れみの視線を投げかけている。

怒りを消し去ったという点においては最適な言い訳だったと言えなくもない。最低なのに変わらないが。

「はあ……目的が一緒みたいだから連れて行ってやるうかと思ったけど、こんな変態と一緒にだと逆に危険でならないな」
「……すみません」

ディアナはライクが変態だと分かった途端、急に偉そうに上から目線になった。ライクはそれに反論できずに、ただ一言謝って俯いている。

ふざけるなよ、誰が何時お前に一緒に来て欲しいと言った。そもそも、誰が火山に行くと言った。

帰れ、ディアナもライクも家に帰れ。むしろ、俺を家かシャーナ様の所に帰らせろ。

「あー！ やつと見つけたわよ！ やっぱりアンタだったのね！」

……ねえ、何で俺が帰れって言うのと、逆に誰か来るの？ 俺呪われてるの？ 呪われた魔剣なの？ …… ちょっとかつこいいな。

「何だよ、アンナ。何の用だよ？ お前、警備の仕事じゃないのかよ」

ムカツク程に気品を振りまいている癖に地味な鎧を装着している新米警備兵のアンナに、ライクはうんざりした様子の表情を浮かべて言葉を返した。

それに対して、アンナは眉間にシワを浮かべながら、怒り口調で更に言葉を返してきた。

「何の用じゃないわよ！ 仕事中にこんな所に来てるのはアンタのせいでしょー！」

「はあ？ 何で俺のせいなんだよ！」

ライクも負けじとアンナに言い返すが、アンナは相手にするのも面倒くさそうな表情を浮かべ、無言でライクの右手に持たれている俺を指差してきた。

おい、気安く剣を指差すなよ失礼……ん？ 今気付いたが、何で俺は鞘の中じゃなくてライクに持たれているんだ？

「あん？ サウザートがどうか……あれ、何で手に持ってんだ？」

こっちの台詞だ。

「私が街の中を見回りにしていたら、住民の人からアンタらしき人物

が、血に飢えているかのように剣を振り回しながら、踊り狂っていたという通報があったの。だからわざわざ、ここまで来たのよ、この変質者!」

ああ、そういえば工房で焼死させられそうになってから鞘にしまわれた記憶がない。

確かに街中を、抜いたままの俺を持って走ってたら、通報されてもおかしくない。それにしても立派な尾ビレがついたもんだ。変質者どころの騒ぎじゃないだろ。

ライクもやつと事態が飲み込めたようで、慌てて弁解を始めた。

「ち、違うぞ。俺は血に飢えてないし、踊り狂いもしていない！ちよつと焦ってて鞘にしまい忘れただけだ!」

「ふーん、そうなんだ……じゃあ、逮捕していい?」

どうぞどうぞ。

「良いわけないだろう!」

何でだよ、お前は牢獄で臭い飯を食って、俺はシャーナ様に預かってもらって研ぎ研ぎウフフ。それでいいじゃないか。それで全て平和的に解決だろう。

そんな俺の平和論にすごい剣幕で意義を唱える無礼な女がいた。

「おい、お前はいきなり現れて逮捕とか言い出して、一体何なんだよ! 私を無視して話を進めるナよ!」

「……ライク、誰なの? この露出狂、こいつも逮捕していいの?」

アンナは目を細めて、上半身がほぼ裸同然のディアナに向かって、

辺りが氷河期に突入しそうなぐらいの冷ややかな視線を送った。

初対面に対しても毒舌を振りかざすのは、警備兵になっても健在らしい。アンナはライクに惚れているので、ライクに近づく女が気に入らないのだろうか、それにしても酷すぎる。

しかし、敵ならば鬱陶しい事この上ないが、味方となれば、こんなに頼もしい奴は中々いないだろう。

お前に頼るのは少々しゃくではあるが、今俺に平和をもたらす事ができるのはお前だけだ。二人とも逮捕しちゃってくれよ、頼むぞアンナ。

「だ、誰が露出狂ダよ！ いきなり失礼な奴ダな！」

「ふん、失礼なのはどっちよ、そんな男を誘惑するような格好しちやって。同じ女だと思われたくないわ、はしたない。大体、何で下はそんなにガツチリ守っちゃってるのよ。男は誘惑したいけど、そんな簡単に差し出す軽い女じゃないわよって事？ 露出狂のくせに中途半端に清純きどってるんじゃないわよ！」

「だ、だから違うつてば！ この格好にはちゃんと意味があるんだよ！ そういうお前だって金持ちそうな出で立ちしてるくせに地味な鎧着ちゃって、本当は貧乏なのに金持ちぶってるんだろ！」

「残念、これは警備兵に支給される鎧であって、私の家は本当に金持ちよ。ていうか、何でいきなり貧乏とか金持ちとかそんな話をし始めたの？ …… ははーん、なるほどね、アンタが貧乏だから妬んでるんでしょ。格好の意味が分かったわ。お金が無くて鎧が買えなかったんでしょ？ 露出狂とか言ってゴメンね、貧乏人さん」

「ち、違う…… 私は鎧も買えない程お金に困ってなんかナイよ！」
「いいのよ、無理しなくて。どこの田舎から出てきたのかわらないけど、変な訛りしちゃって。どうせ、男たぶらかして金を手に入れるためにエルトリルに来たんでしょ？ 正直に言いなさいよ」

「ち、違うもん……！」

「いいえ、違わないわ。大体アンタはね」

うわぁ……何だろう、味方なのにまったく応援したいと思えない、この不快感。

俺でも言わないような事を平然と乱発している。ディアナも必死で食い下がろうとしているが、相手が悪い。何か言うたびに軽くあしらわれている。

アンナの奴、警備兵になってから余計に口悪くなってないか？
これは相当ストレスが溜まっていると見える。

国営の警備兵ともなると、色々規律とか厳しくて、ハンターのように自由にできないんだろうな。

まあ、あいつが自分で選んだ道なので文句は言えないがな。

「……おい、ライク……お前も黙ってないで何か言えヨな！」

アンナの猛攻に耐えきれなくなったディアナは、ついにライクに助けを求めた。

言葉自体は偉そうだが、涙目で怯えた声色な上に全身がプルプルと震えているため、強がっているのが手に取るように分かる。もはやタイガーマンというよりもハムスターマンだ。

もちろん、アンナがそれを見逃すはずがなかった。

「あら、男に助けを求めるなんて情けない。アンタ、それでも女なの？」

俺の知る限りでは、女は男を頼るのが普通なはずなのだが、毒舌鬼と化したアンナにはそんな道理は通じそうにない。

「ラ、ライクウ……あいつ、あんな事言ってるよ……」

ライクに頼るのを馬鹿にされても尚、ディアナはライクに涙目で救助を求めた。

藁にもすぎる思いだったのだろうが、頼る相手が間違いだったな。ライクは突然話を振られて、ただアワアワするだけだった。

ああ、もう限界だ。これ以上の一方的なイジメは見るに耐えない。味方とか敵とか関係ない。俺がもし喋れたなら、こんな小娘ヒイヒイ言わせてやるのに……くそっ、誰か俺の代わりにあの毒舌鬼を黙らせてくれる奴はいないのか！

「だからライクに頼るなつての！ これはアンタとわた……し……」

ん？ 何だ？ 突然、アンナが黙ったぞ？

……まさか、目覚めちゃった？ 俺、アンナを黙らせる能力に目覚めちゃった？

きやつほー！ 今までで一番嬉しい能力なんですけどー！

そんな俺の喜びはすぐに打ち砕かれた。

「危ない！ 避けて！」

アンナが採掘場とは反対の方角を見ながら叫んだ。その目線の先には、こちらに向かって猛ダッシュで近付いていく大きなイノシシの姿があった。

顔には何かと衝突してできたと思われる大きな傷があった。間違いない、あいつはこの前リザードマン討伐の時に対峙した巨大イノ

シシだ。

どうやら、ブサイクな顔を余計にブサイクにしたライクを見つけて、怒りを抑えきれずに襲いかかってきているようだ。

しかし、アンナに見つかったのが運のつきだったな。そんな一直線の突進など分かっていれば、避けるのは容易だ。すでにアンナとライクは突進の軌道上から外れて……おい、あいつ何してんだ！

「ディアナ、危ないぞ！ 避ける！」

ライクが叫んだが、ディアナはイノシシの軌道上に自ら立ちふさがり動こうとしない。

イノシシはそんな事はお構いなしに更に突進スピードを上げて……だめだ、ぶつかる！

「ぶほおおお！」

……何だ、俺は夢でも見ているのか？

俺の視界にはイノシシにぶつ飛ばされて無惨な姿になったディアナではなく、額に更に大きな打撲跡を残して気絶したイノシシと、満足気に奴の背中に腰を下ろしたディアナがいた。

ライクとアンナもその様子をだらしなく口を開いて呆然と眺めている。

それは一瞬の出来事だった。ディアナはイノシシの突進の餌食になる寸前の所で、手に持っていた謎の物体で奴の顔面めがけてフルスイングの一撃を食らわせたのだ。

結果は御覧の通りだ。ライクでも抑えきれなかったイノシシをたつた一撃で倒してしまうとは何というパワーだ。地面にはディアナが思い切り踏み込んだ時にできた足鎧のめり込み跡が残っている。

「へへん、ドウだ。これが私がこんな格好をしている理由ダよ。下半身は踏み込みの力を上げるために重く、上半身は少しでも武器を早く振るために軽くしているんだ。わかっただか！」

なるほどな、それがどれ程の効果があるかは分からないが、確かに理にかなっている気はする。

「いや……恐れ入ったよ、ディアナ。お前、すごい強いんだな！」

ライクはディアナに羨望の眼差しを向けている。力と力の真つ向勝負を好む脳筋ライクにとって、これほど理想的な勝利の仕方はないだろう。

ディアナはその様子を見て、調子に乗って胸を張りながら偉そうに言った。

「そつだろつそつだろつ！ おいアンナ、お前も見ていたダろ？ 露出狂とか男あさりとか言った事謝れヨな！」

「そつだぞ、アンナ。お前が悪いんだから、ちゃんと謝れよ」

何故かライクまで調子に乗ってアンナを責めている。むむつ、一気に犯罪者二人組が優勢になってしまった。まあ、これは仕方がないな、もう謝るしかないぞアンナ。

ん？ アンナの様子が変だぞ。

……どうやらアンナが口を開いて呆然していたのは別の理由からだつたようだ。

「肉……肉……イノシシの肉……」

「……」

「……」

アンナはディアナなど眼中になく、食材と化したイノシシを、涎を垂らしながら見ているだけだった。

こいつは一回このイノシシを食い逃しているからな。執着するのは分からんでもないが、これはさすがにディアナが可哀想だ。

「……はあ、もういいよ。ライク、とつとと火山に行こうぜ」

おい待て、何故そうなる。ちょっと同情したら調子に乗りやがって、お前はライクと行くのを嫌がってたじゃないか。駄目だ、絶対に行かないからな！

「え、あ、うん。行こうか」

行かないってば！ 嫌だ嫌だあんな所、絶対行くの嫌だー！

「ちょっと、火山って何よ。アンタ達は今から私に逮捕されて警備兵ギルドに行くのよ！」

アンナはライクの事となると、すぐさま我に返り、二人を睨みつけた。

「きゃー、アンナさんカツコイイ！ 早くこいつら逮捕しちゃってー！」

「ア、アンナ頼むよ、行かせてくれよ。これはシャーナのためでもあるんだよ」

「え、シャーナのため？ ……うーん、分かったわ。じゃあ、私もついて行く」

……何故そうなる。

2・我慢の限界

ノ……ノゲホ……あつううううい！

「あちい！」

「ちよつと、そこらじゅうに蒸気穴あるんだから気を付けなさいよ、馬鹿ね」

まったくアンナの言う通りだ。マジで気を付けろ、また俺を焼死の危機にさらす気か。さすがに蒸気ぐらいじゃ溶けたりはしないだろうが、熱いものは熱い。だからこんな場所来たくなかつたんだよ。

採掘場から体感で小一時間程歩いた所に、それは存在していた。

草花一本生えていない荒廃した斜面が延々と続くだけの、何の面白味もない殺風景な山。

あるのはまったく整備されていない道無き道と、断続的に蒸気が噴き出す小さな穴が、辺り一面に点在しているのみ。しかも、その蒸気が熱いだけではなく、ノゲホー的なニオイを帯びているから性質が悪い。

正に火山といった感じのココこそが、俺がエルトリル近辺で一番来たくない場所であるステイシル火山だ。

それにしても暑い。いつもは俺にポカポカ感を与えてくれる綿入りの高級鞄も、今は俺に不快感を与える原因にしかかっていない。

「あー……それにしても暑いわね……」

言つな、余計暑くなる。

「おい、勝手について来たくせに弱音吐くナよ。こっちまで暑くなるダろ」

いいぞディアナ、アンナが暑さでへろへろになっている今がチャンスだ。さっきの借りを存分に返してやれ。

「うるさいわねえ……アンタはいいわよね、露出狂が幸いしてそんな涼しげな格好してて」

「何言ってるんだよ。この重たい足の鎧を見てくれよ。もう中は蒸れて蒸れて汗だくのたっぷんたっぷんで、くるぶし辺りまで汗の海が出来てるぞ」

「……はいはい、分かったわよ。それは悪かったわね」

良かったね、アンナに勝てたね。

でももう、お前はこれ以降一言も喋るんじゃないぞ、気持ち悪い。想像しただけで吐きそうになる。

吐く口ないけ……あつうううう！

「あちい！」

「暑い言うな！」

「言うな！」

またしても蒸気の直撃を受けたライクは、二人から理不尽なまでに怒声を浴びせられてシヨンポリしているが、同情の余地はない。一番文句を言いたいの俺なんだからな。

こいつは何回俺を巻き込むと言わせれば気が済むんだ。本当にいい加減にしてくれ。大体お前はな。

俺が不満を爆発させていると、いつの間にか山の中腹辺りに差し掛かっていた。

目の前には今まで斜面ばかりだった山に、初めて広めの平地が存在していた。まるでオアシスのようだ。湖も木も草も無いけど。

この平地は獰猛な火山の一握りの良心と言ってもいいだろう。

しかしステイシル火山よ、お前に本当に良心があるなら、今すぐ迅速に速やかに全速力で死火山になってくれないだろうか。

自分のために俺に死ねと言うのか、と、お前は言うかもしれないが、残念ながらその通りだ。

「ここなら休めそうね。ちょっと休憩しましょう」

そう言ってアンナは、近くのちょうど椅子にするのに最適な大きさの岩に腰掛けた。

お前もたまには良い事言っじゃないか。さすがにライクでも動かなければ蒸気に触れる事もないだろう。

「私もそれに賛成だよ。足に溜まった汗も捨てたいシな」

駄目だ。

「駄目よ」

「えー、何でダよ!」

気持ち悪いからだよ。

「気持ち悪いからよ」

「むー、気持ち悪いのはこっちの方だよ。さっきから生暖かい汗が足に絡まってグチヨグチヨなんだっテば！」

知らん、もう喋るな、大人しくしてろ。

「知らないわよ、もう喋らないで、大人しくしててよね」

あら、やけに今日は気が合いますね、アンナさん。毒舌同士、通じるところがあるんですかね？

……まったく嬉しくない、というか虫酸が走るから勘弁してください。
さい。

「……何、何か急に寒気が……」

「さムけ？ おいずるイぞ！ 一人だけ涼しくなるなヨな！」

「大丈夫よ、アンタのおかげで元に戻るどころか、三度は上昇したわ。お願いだから、黙っててよ」

俺の意思など伝わってないはずなのに、アンナは持ち前の敏感な五感で俺の虫酸を感じとった様だ。さすがは腕利きの元ハンターと
いったところか。

ディアナはアンナに軽くあしらわれて、膨らませた頬が溶岩のよ
うに赤くなっている。

まったく喋っても黙っても暑苦しい奴だな。ちょっとはライクを
見習えよ。見るよ、さっきから清々しい程に空気と化しているぞ。

「な、なあ、ちょっと思った事があるんだけどさ……」

……こいつは何で寝めた途端、喋りだすんだ。頼むから、もうア
ンナを刺激しないでくれよ。

「何よ？」

「俺達あてもなくひたすら登ってるけどさ、エンゴク鉱石ってそんな上の方にあるのかな？」

「……どういふ事？ レアな鉱石なら採りにくい火口付近にあるんじゃないの？」

「いやだって、エンゴク鉱石は熱に弱いんだぞ？ 火口に近づけばもっと暑くなるし、溶岩が流れている所だってある。そんな所にエンゴク鉱石があるとは思えないんだが……」

ライクは自信無さ気に言ったが、確かにそれは一理ある。

例えあったとしても、ドロドロに溶けていそうだとすると、むしろ怪しいのはこの中腹より下、要するに俺達が登ってきた道中というわけだが……もっと早く気付けよ！ 俺もだけど！

「はあ！？ 熱に弱いって何よ！ そんな事聞いてないわよ！」

アンナはライクに対して、鬼の形相で怒声を浴びせた。あまりに激しい怒りに感化され、周りの蒸気穴から一斉に蒸気が吹き出した……気がした。

そういえば、こいつは俺達がハイネの話を聞いている時いなかったんだよな。

「お前、そんな事も知らないの力よ。馬鹿だなー。ハハハ……何でもナイ……」

ディアナはアンナを笑いとばそうとしたが、暗殺者のような鋭い眼光で威圧され、タイガーマンなのにタイガーに睨まれた時のように、怯えて縮こまってしまった。本気でハムスターマンに改名した方がいい。

「はあ、もういいわ。怒ると余計に暑くなっちゃう。仕方がないから、下山しながら探しましょう。……ところで、アンタ達ツルハシは？」

あ、そういえば忘れてたな。と、即座に気付けたのは俺だけだったようだ。

アンナの質問にライクとディアナは、首を傾げて純粹に理解できなさそうな表情を浮かべている。

見える、見えるぞ！ 俺にはこいつらの頭の上に浮かんでいる巨大なハテナマークが見えるぞ！

……やばい、暑さで幻覚が見え始めている。水だ、誰か俺に水をぶっかけてくれ。

「……アンタ達、ここに何しに来たのよ？」

アンナが呆れた表情で二人に質問すると、何故か二人はニヤけた表情を浮かべた。

「何しにつて、エンゴク鉱石採りに来たに決まってるだろ？ もう忘れたのか？ アンナちゃん暑さでボケちゃったのかなあ？」

「ほほほ、ライクさん間違いありませんわ。この女、ついに頭がおかしくなってしまったようでスわ。可哀想ですワね。おほほホほ！」「まったくですな、ディアナさん。おほほほほ！」

……うざい、おかしくなったのはお前らの方だろう。

馬鹿二人は、アンナの事を日頃の恨みを晴らすかのように嘲笑しているが、アンナは表情一つ変えなかった。

「……じゃあ、その鉱石を探るために必要な道具って何？」
「はあ？ 鉱石探すっていったら、ツルハシに決まって……あ」
「そうだぞ、ツルハシに決まってるダろ。……あ」
「そういう事よ、この馬鹿共」
「すみません……」
「すみません……」

馬鹿二人はどうやら本気で気付いていなかったようで、俯いてア
ンナから必死で目を逸らしている。

そんな事よりも、俺は嫌な予感がしてならないんだが……。

「もう！ 落ち込んでる場合じゃないでしょ。一体どうするのよ、
一旦戻ってまた来るなんて嫌だからね！」
「だ、大丈夫だよ！ 俺にはサウザートがいるさ！」

そう言ってライクは俺が纏っている鞆を脱がせた。剣身が一瞬、
スウッと涼しい感覚にとらわれたが、今はそんな事はどうでも良い。
予想通り、ライクは俺をツルハシの代わりにしようと考えているよ
うだ。

お前が俺の事を信頼してくれて頼ってくれるのは嬉しいが、何で
もかんでも俺を使えばいいってもんじゃないだろう。

イノシシを受け止めさせられたり、火炉に突っ込まれそうになっ
たり、そして次はツルハシ代わりだと？

いい加減にしろよ！ 俺は剣だぞ！ モンスターと戦ったための道
具だ。決して便利道具なんかじゃないんだ。

ライクが俺を好きでいてくれるのは嬉しいよ。でも、俺にだって
剣としての誇りってものがあるんだ。

それなのに……それなのに……。

「アンタねえ……ちょっとは剣の気持ちも考えなさいよ。そんな事するために剣は作られたんじゃないのよ」

おお、アンナ……お前は他人の気持ちは考えなくせに、剣の気持ちは分かってくれるんだな。少し見直したよ。

でも悪いが、お前にまで同情されるなんて余計に何か惨めで悲しくなってきたよ……駄目だ駄目だ！ 我慢しろ……我慢するんだ、俺。

「うーん……確かにそれもそうか。すまなかったな、サウザート」

……。

「そつだぞ、物は大切にしないトな。昔、母さんからそう言われただ口う？」

「ん？ いや、言われた記憶はないな。孤児院の先生になら言われた事ならあるけど。そういえば、最近行ってなかったな、孤児院」

……孤児院？ お前がたまに行っているエルトリル孤児院の事か？
ライクは何故か、たまにエルトリル孤児院に行つては、子供の相手をしたり、ボランティアみたいな事をしている。

俺がシャーナ様に対して、すらすら子供の例えを出せるのはそのせいだ。

「孤児院？ アンタ、孤児院にいたの？」

「そつだよ、言つてなかったか？」

聞いてない。

「初耳よ！ 一体いつから孤児院に？ 両親はどうしたのよ？」

さすがアンナだ。聞きにくい事をさらっと聞いてのける。そういうところ、尊敬……せずに軽蔑するけど、今はナイスだと言っておこう。

「俺が物心つく頃には親父はもういなかったよ。理由は聞いてない」「え、じゃあお母さんは？」

「母さんは俺の六歳の誕生日に木刀をプレゼントしてくれた後、すぐにどこかに行ってしまったよ。俺が最後に母さんから聞いた言葉は、『いっぱい木刀を振るって、立派な剣士になっただね』だった。その次の日、母さんが連絡をしていたようで、俺は孤児院に拾われたんだ」

「……え、それ本当の話？ マジかよ、こいつにそんな過去があったなんて……」

「え……じゃ、じゃあ、アンタは母親に捨てられたのに、律儀に言う事を聞いて、毎日広場で木刀を楽しそうに振るってたの？」

「な、何でお前がそんな事知ってるんだよ！？」

ライクはまったく覚えていないようだが、アンナとライクの初めて出会いは、エルトリルの広場でライクが木刀を一人で楽しそうに振るっていた、寂しい子供の頃だ。

つまりライクは、自分を捨てた母親の想いのままに木刀を振り続け、想いのままに剣士になったという事か……こいつも魔具と同様、作り手の想いに縛られて生きてきたのか……。

「はあ……、何で知っているかについては自分の胸に聞いてご覧なさいよ。言いたくない」

アンナは深く溜息をつきながら、眉間に複雑なシワを作った。まるで、顔の中にもうひとつ顔があるようだ。ギルドで告白した時の事でも思い出しているんだろう。確かにあれは酷かった。

その様子を見たライクは、それ以上追求する事ができずに、自分の胸の辺りをトントンと叩きながら何やらブツブツと呟いている。どうやら本当に胸に聞いているようだ。

「そんな事より、何でアンタは自分を捨てた母親の言う事を律儀に守ってるのよ？ 馬鹿なの？」

アンナはイライラを鋭い刃に変えてライクの古傷を更にえぐる。しかし、ライクにはさほど効果が無いようだ。

「いいだろ別に、俺の勝手だ。言われたからとかじゃなくて、純粹に木刀を振るのが楽しかったんだよ。それにこれは試練なんだよ」「試練？」

「そうだ、俺は母さんに試されているんだ。ほら、ライオンは子供を谷底につき落とすって言うだろ？俺が立派な剣士になって最強のハンターになれば、きつと会いに来てくれる。だから、俺は母さんに捨てられたなんて思ってないよ。それにハンターになったおかげで、俺の一生の相棒にも出会えたしな。なあ？ サウザート」

「……馬鹿だこいつ。でも良い馬鹿だ。純粹な馬鹿だ。気持ちいい馬鹿だ。偉い馬鹿だ。尊敬できる馬鹿だ……うおおおお、ライクお前って奴はああああ！」

ライク、お前は最高の相棒だああ！ うわああああん！

「ライク……アンタ馬鹿よ、大馬鹿よ……うう……」

「らいくう……お前偉いよ、尊敬すルよ……ひっく……」

「お、おい、お前等何泣いてるんだよ。やめるよ、何か恥ずかし… つめたああああい!？」

……ああ、ついに出ちゃったよ……。

ライクは突然自分に押し寄せた冷たいという感覚に驚いたようで、その場で飛び跳ねた。

原因は分かっている。ずばり、俺だ。嫌な予感がしててずっと我慢してたのに、ついに目覚めてしまったんだよ……泣くと全身から水が吹き出る能力、要するに涙を流す能力に……。

水ぶっかけてくれとは言ったが、誰も身体から溢れ出してくれなんて言っていない……。

「な、何だ!？ サウザートが水でビチョビチョになってる!？」

ライクは、ビショ濡れで変色してしまっている鞆を俺から脱がすと、何が起きたか分からないという表情を浮かべて、焦り気味に色んな角度から俺に視線を投げかけてきた。

俺の全身から水滴がとめどなく地面に流れ落ちては、熱気で即蒸発している。

ああ、ついにこの時が来たか。

鈍感なライクでも、さすがに俺が普通の剣ではないという事に気付いただろう。

実のところ、まだ俺はライクに自分が魔剣である事は知られなかった。理由はもちろん俺が有する魔剣としての能力だ。

一つ目は自身を硬くする能力。

二つ目は臭いニオイを刺激として感じる能力。

三つ目は小刻みに震える能力。

そして四つ目が涙を流す能力だ。

俺、こんな能力持つてるんだぞ、すごいだろ！

……言えない言えない。俺が持ち主だったら、三秒も待たずに最寄りのゴミ箱に投入するぞ。俺だけじゃないだろう、誰だってそうするぞ。

……嫌だ、嫌だ嫌だ。捨てちゃ嫌だよおお！ うわああああん！

「な、何なんだ一体。おい、どうにかしてくれよ。サウザートどうなっちゃったんだよ！」

「し、知らないわよ！ ど、どうすればいいのよ……」

簡単だびよ、俺を泣きやませたらいいんだびよ……何か楽しい話してくれびよ……馬鹿話してくれびよ……。

「そうか、分かつたぞ。ライク、お前さつき蒸気に当たってたヨな？ その時にその剣が蒸気を吸い込んで水分を溜めちゃってたんだよー！」

そんなわけあるか！ 俺を雑巾みたいに言うな！

確かに馬鹿話しろとは言ったが、俺の求めている馬鹿話はそういうのじゃないんだよ。

おい、お前等もこの馬鹿女に何とか言ってやれよ。

「へえ、剣ってそんな特性があったんだな」

「な、何よライク、アンタ知らなかったの？ け、剣士の間じゃ有名よー！」

そんなわけあるか！ ……こいつらに期待した俺が馬鹿だった。アンナに関してはデマカセを信じるだけではなく、知らなかった事を悟られないように、デマカセにデマカセを塗りたくって痛々しいにも程がある。アンナ、お前だけはまともだと思っていたのに……何で俺の周りは馬鹿しかいないんだよ……。

脳みそ筋肉質の馬鹿。可愛いらしい馬鹿。ハゲた馬鹿。無口な馬鹿。訛ってる馬鹿。毒舌な馬鹿。

ああ、また何か悲しくなってきた……ん？ そういえば、いつの間にか泣きやんでいるな、俺。

……どうやら俺には楽しい話よりも、ツツコミ所を提供される方が慰めになるらしい。

結局、俺もツツコミ馬鹿という事か。まあ何はともあれ、魔剣だと気付かれなくて喜ぶべきか……何か複雑な気分だ。

「お？ 水が止まった」

「おめでとつ」

ありがとう。

「おお、良かったな。おめでとつー！」

ディアナもありがとう。

「グルルルル……！」

崖の上から見下ろして、こちらを威嚇している真っ赤な獣さんもありが……たくない！？

「何だ、あそこに何かいるぞ！」

俺の次にその存在に気付いて声を上げたのはディアナだった。その声に反応してライクとアンナも獣の方を向いた。

3・史上最低の攻撃

「ちょっとあれ、フレビーじゃない……厄介な奴に見つかったわね」

アンナがあからさまに嫌そうな顔で呟いた。

全身を真っ赤な炎で包み、一年中歩く火事現場をやっている奴の名前はフレームビースト、略してフレビーだ。

数多く存在するモンスターの中でもトップクラスの変わり者で迷惑者だろう。

一見、犬のような容貌をしていて可愛い気もするが、体格がイノシシぐらいあるので、やはり可愛いとは思えない。

「グルルルル！」

一番動きが鈍そうと踏んだのか、あまりにも薄着なので暖めてあげようという善意からは分からないが、フレビーは崖上で跳躍すると、重力に身をまかせてディアナへと急降下してきた。

「ディアナ危ない！ 逃げろ！」

ライクが叫ぶ。しかし、その必要はなかった。

一番最初に警戒していたディアナが、ただ飛び降りてきただけの攻撃に当たるはずもなく、ライクが叫ぶよりも前に反応し、フレビーは簡単に後ろ飛びで避けられてしまった。頼むよ、せっかく騒がしいのを一人減らすチャンスだったのに。もっと頑張れよ、フレビー。

そんな俺の激励を受けてか、華麗に着地したフレビーは間髪いれずに俺とライクめがけて、自慢の右手の爪を振りかざしながら襲い掛かってきた。

ライクがそれをかろうじて避けると、奴の振り下ろされた右手は勢い余って崖下の壁と衝突し、激しい衝撃音と共に、一人人がすっぽり入るぐらいの穴が壁に刻まれた。

や、やだなあ、フレビーさん。本当に頑張る必要なんかないんですよ、もっと力を抜いてふにゃふにゃと戦いましょうよ。

見てくださいよ、貴方が本気出すから三人共ドン引きしてるじゃないですか。

「に、逃げましょう。こんな相手にしてられないわよ」

アンナがドン引きついでに本格的に引く事を提案してきた。さすが普段は偉そうにして毒舌を振りまいているが、実はハムスターのように臆病なアンナだ。

いや、ここは引き際を知っている女と褒めておこうではないか、ナイス臆病だ。

さあお前等、今すぐ撤退だ！

「いや、こんな大物逃す手はない。ここで討伐してやる」

「そうだ、売られた喧嘩は買わないトな！」

……ですよね、脳筋に撤退なんて二文字ないよね。しかも二人に増えてるし。

「……はいはい、やればいいんでしょ、やれば」

アンナもこの展開を予想していたようで、特に反論する事もなく、腰の鞘から俺の元嫁であるエリザベルを抜いた。

無駄のない洗練されたフォルムは相変わらず美しく、アンナの外見と同じで高貴さと気品を感じる。うーむ、離婚したのは間違いだ

ったか。

「それでこそ元ハンターだぜ。よし、行くぞ！」

ああ、あと五分見させて！

俺がエリザベルに見とれていると、お邪魔虫のライクは気合い十分な声と共に、俺の剣先をフレビーへと向けた。

見たくもないのに視界が移り変わり、俺はフレビーと見つめ合う事を余儀なくされた。

俺は全周囲、好きな方向に視点を変える事ができるので、別にエリザベルの方を見る事も可能なわけだが、どうやらそんな事をして
いる場合では無いようだ。

「グルルルル……！」

フレビーは俺の剣先を向けられて警戒態勢に入ったようだ。心な
しか、先程までよりも全身を覆っている炎が激しくなっている気が
する。シャーナ様がアイアンブレイカーの肉を炭と化した時ぐらい
の暴君っぷりだ。ああ、思い出しただけでノゲホーしそうだ。ノ…
…ノゲ……あつうつうつうい！

「あつう！」

突然、地面から熱気とノゲホー的刺激を帯びた蒸気が、俺とライ
クの手めがけて噴きあがった。

気を付けると何度言えば分かるんだ！

ライクが体勢を崩したのをフレビーが見逃すはずがなかった。も
のすごい勢いでこちらに向かってくる。ライクはまったく反応でき

ていない。

ぎゃあああ、来ないでええええ！

刹那、俺達とフレビーの間に謎の影が乱入してきた。

「馬鹿、何やってんだ！」

それはディアナだった。布にくるまれたままの謎の物体を振り回したが、フレビーはあっさりと避けた。

でもそれでいいよ、俺達を助けるっていう目的は果たせたんだからな。ありがとう、お前は良い奴だな。それに比べて、あの女は……。

「アンタ達、ご苦労さん！」

アンナはフレビーの回避先に後ろから回りこみ、猛スピードで突進突きを放とうとしている。

こちらの労をねぎらっているが、騙されてはいけない。アンナは俺達をただの囷としか見ていない冷徹な女だ。しかし、ハンターとしては良い判断だ。だが、お前は警備兵だと言う事を忘れるな！人命第一、それこそが警備兵じゃないのか！？

「あちっ！……無理よ、こんなの」

アンナの一撃で終わると安心しきって、悠長に文句を垂れていた俺のあては見事に外れた。

もう少しでエリザベルがフレビーの尻に突き刺さるという所で、アンナは奴の纏う炎の熱に耐えきれなくなったようで後ろに飛び退いた。

おい、何やってんだ！ こっちは命を懸けてお前にチャンスを作
ってやったんだぞ、それを無駄にしやがって！

……でもこれは逆に幸いだったかも知れない。元嫁が尻に突っ込
まれる姿なんか見たくもないからな。良かったね、エリザベル。

そこからは完全なジリ貧だった。

フレビーの動きは素早いものの、ノゲホーフィッシュやマンズブ
ラッドに比べたら圧倒的に遅い上に、正面から襲いかかってくるだ
けの単調な攻撃を繰り返すばかりなので、三人は難なく避けていた。
しかし、逆に奴にもこちらの攻撃が当たらない。当たらないとい
うよりも、ライクとアンナは何度も奴を捉えていたが、その度に熱
さを我慢できずに……あつううううう！

「くそ、やっぱり駄目だ……」

あのさ、駄目ならもう斬りかからないで？ お前よりもフレビー
に接近させられている俺はもっと熱いんだぞ、分かっているのか！

「次こそは絶対に斬る！」

分かってよおおおおおおお！

どうせいつかは熱に耐えられるようになるか思っているんだろう
が、そんな根性論に俺を巻き込まないでくれよ！

ああもう、ライクはもう頼りにならない。

俺の焼死の危機を救えるのは、あいつしかいない。頼む、何とか、
何とかしてくれ！

「どりゃああああアあ！ ……もう、避けるなよ！」

ディアナの一撃は虚しく空を斬った。

今、フレビーに唯一まともに攻撃ができるのは、炎の外からでも届く謎の物体を振り回すディアナだけなワケだが、まったく当たる様子がない。上半身布一枚の効果がるで生きていないじゃないか。というか、掛け声まで詛るなよ。

ああもう、どいつもこいつも役に……あつうううう！

「やっぱり駄目だ。これ以上は近付けない……」

これ以上に近付かされている俺は一体どうなる。

ライク、お前と俺は相棒で一心同体で二人でハンターではなかったのか？ 何で俺を自分のように扱ってくれないんだ？ マンスブラッド戦での言葉は嘘だったのか？

ああ、また何か悲しくなってきた……また泣いちゃうよ俺……あ、そっだよ、泣けばいいんだよ！

炎には水。至極当たり前の事だ。そして俺は泣く事で水を出す事ができる。

今だ、今しかない。今を逃しては、この能力が役に立つ機会など一生こないだろう。

やれ、やるんだ俺、今こそ水を出す時だ！ 名付けて『淚水剣』だ！

……いいぞ、あまりにも技の名前がダサすぎて悲しくなってきたぞ。もつとだ、もつと今までで悲しかった出来事を思い返すんだ。

中古武器屋にいた時、いつも隣の剣と見比べられては俺の方が戻

されていた事。

中古武器屋にいた時、間違えてゴミ箱に捨てられそうになった事。酒場で酔っぱらいのオッサンにゲロの直撃を浴びせられた事。

ある日突然、魔剣という事を知らされた事。

嗅覚に目覚めたと思ったら、臭いニオイを感じる能力だった事。

無口な無愛想女にドブ川に投げ捨てられた事。

いいぞ……もう俺の全身は負の感情でいっぱいだぞ……でも、まだあと一押しが足りない……ないのか、何かないのか……。

というか、悲しい事を必死で思いだそうとしてる自分が一番悲しいわ！ うわああああああん！

「グオオオオオオオオオオオン！」

火山とは不釣り合いの冷たい感覚というが、俺の全身に押し寄せろ。水だ、俺から涙という名の冷水が溢れ出したんだ。

俺は火山のオアシスだ。この枯れた大地に潤いをもたらし、忌々しい炎を消し去る湖だ。

今の俺に炎の熱など何の意味ももたない。見ろ、フレビーが俺に恐れをなして断末魔を……え、断末魔？

「やった、やったぞ！ 見たか、斬って駄目なら投げダよ！」

何それ……ひどい……俺頑張ったのに……あんまりだよおおおおおおおお！

「お、やっと止まったぞ。随分蒸気を吸い込んだなあ」

あーすつきり、もう泣きつかれたよ。

でもやめてくれ、お前の馬鹿発言を聞いていると、まだまだ涙が流れそうだ。

「はっはっは、まったく面倒な奴だな。お前の相棒ってヤツは」

ディアナがイラっとくる高らかな笑い声を上げながら、俺を見下してくる。お前にだけは面倒だなんて言われたくない。

大体、誰のせいで俺が号泣したと思っっているんだ。お前とあそこで息絶えたフレビーに刺さっているアレのせいじゃないか！

長棒の先に扇状の大きな刃が左右についた黒塗りの無骨な両刃斧。俺が涙水剣を繰り出したとほぼ同時に、ディアナが持っていた謎の物体をフレビーに向かって投げると、それが見事にフレビーの胴体に突き刺さると同時に、謎の物体を覆っていた布が焼かれ、黒光りしたアレが姿を現したというわけだ。

ああ、腹が立つ。ただでさえ斧と剣は犬猿の仲なのに、さっきのでエルトリルどころかレイテナ国全土を呑み込む程の溝ができたぞ。

大体、あいつらは野蛮なんだよ。

剣はその鋭き刃で美しき軌道を描きながら、必要最低限に押さえられた美しい傷跡を残す。それに比べて、斧連中はデカさと破壊力にかこつけて、相手に無必要な大きく無惨な傷跡を残す。

あそこで皮一枚でくっつき、もう少しで真っ二つにされていたフレビーが良い例だ。まあ、フレビーの近くで偉そうにふんぞり返っ

ているド田舎娘には、ピッタリな相棒だろう。

「しかし、斧ってのはもの凄い威力だな、ただ投げただけでここまで斬り裂くなんて。いい相棒を持つてるじゃないか」

「相棒？ 違う違う、アレはただの武器であって相棒なんかじゃないよ。私にはちゃんと他に相棒がいるんだ。何が何でも守らないといけない相棒かな……」

ディアナはそう言って、生き別れた姉妹の事を思い出しているかのような、悲しげな表情を浮かべた。

例え憎つくき斧だとしても、同じ武器として、ただの物の様に扱われているのは少し同情はするが、余程その相棒とやらが大事なのだろう。

それに比べて、お前は何をさつきから相棒を粗暴に扱っているんだ。

「ふーん、そうなのか……ところでアンナ、お前はさつきから一体そこで何をしているんだ？」

アンナはあろうことか、我が元嫁エリザベルで、フレビーが刻みつけた壁の穴をコンコンと小突いている。やめろ、美しい剣身が汚れてしまうだろうが！

「んー？ いや、穴の奥の壁が何か変なのよ」

「変？ ……何だこれ、溶岩か？ いやそれにしては熱くないな…

…」

アンナに促されてライクは壁の中を覗きこんだ。確かに中には溶岩のように真っ赤でドロドロした物がベツトリと引っ付いている。

しかし溶岩とは違い、まったく熱気が感じられない。これは一体……。
俺がマジマジと中を覗いていると、急に俺の視界にゴツゴツとした大きな手が侵入して来た。

「ん、真ん中に何かあるな」

その手はライクの物だった。

おい馬鹿、熱気を感じないからって熱くないという保証は……ライクはドロドロの中に手をつっこんだが、眉一つ歪めなかった。どうやら本当に熱くないみたいだ。

「これは鉱石か……？」

「ちよつと、それってもしかしてエンゴク鉱石じゃないの!？」

ライクが中から取り出したのは、ライクの大きな手でも半分ぐらいしか覆えない程度の石の固まりで、表面が溶けかけている。

間違いない、これはアンナの言う通り、俺達が捜し求めていたエンゴク鉱石だ。見たところ、溶けているのは表面だけで、シャーナ様の砥石グロープを作れるぐらいの大きさはありそうだ。

やった、これぞ怪我の功名というやつだ。これでまた俺はシャーナ様と研ぎ研ぎウフフができる!

ライクとアンナも偶然の目標達成に喜びの声を上げている。しかし、それを全て無かった事にするかのように、空間を震わす程の叫び声が鳴り響いた。

「ライク、アンナ、大変だああああああアアア!」

叫び声の発生源はもうお馴染みとなってしまうた訛り口調のディ

4・熱く痺れる男？

気が付くと、目の前には楽園が広がっていた。

周りには俺に快楽を与えてくれる様々な道具が備えられており、壁には美しい天使のような女達がいくつか飾られている。

そして、ここが楽園である一番の理由にして世界で一番可愛い俺の女神様が、眼前で無邪気な笑顔を浮かべておられる。そう、ここは俺と女神様の二人だけの聖域なのだ。

というわけで、そこに無礼にも土足で足を踏み入れている馬鹿と毒舌女とハゲは、今すぐここから立ち去れ！

「あ、ライクさん！ 急に出ていくから心配してたんですよ！ ハイネさんから聞きましたけど、もしかして本当にステイシル火山に行つて来たんですか？」

そう言つて、女神様ことシャーナ様は慌てた様子で、工房の玄関で突っ立っている俺達の方へと近寄つてきた。

気絶していたので状況が全く分からないが、どうやら俺達は楽園ことシャーナ様の工房に今入つたばかりのようだ。

心配かけましたね、シャーナ様。お詫びに僕の体をピカピカにしていいですよ！

「それよりも、何でライクさんは縛られているんですかい？」

どうでもいいよ、そんな事。すでにピカピカな奴は黙っておいてくれ。ずるいぞ、自分だけ太陽光を反射して迷惑な程に頭を磨いてもらつて。

「趣味だ」

ハイネのハゲ頭とは逆で、まったく磨かれていない思いつきのボケと思われる発言が、ライクの口から飛び出した。

冗談なのか本気で言ってるのか判断に苦しむ。現にシャーナ様とハイネは苦笑いしながらも、ライクの性癖を必死で受け止めようとしている様子だった。

そんな自分で撒いた種を、ライクは慌てて摘みにかかった。

「お、おい！ 冗談だよ、嘘に決まってるだろ！」

「え、違うの……？ 真剣な顔で頼んできたから、てっきりそんなのかと……」

アンナは全身から、無理矢理縛る事を強要された被害者オーラを醸し出している。

何という演技力、思わず一瞬信じそうになった。いや、俺は気絶していたので嘘かどうかは分からないわけだが。

まあ、流れからして、街中で俺を振り回した危険人物として逮捕されたんだろう。

その経緯を知らない女神様とハゲは、アンナの迫真の演技に惑わされ、ライクに疑惑の眼差しを送り続けている。

「誰がいつ縛ってくださいなんて言った！ お前が勝手に縛ってきたんじゃないか！ ほ、本当だぞ。俺にこんな趣味はない！」

「……ライクさん、いいんですよ。人は皆、一つは人に言えない事があるもんですよ。何なら、もっと力強く縛ってあげますよ、ガハハハハ！」

「そうですね、気にしなくていいですよ。私、頑張ってライクさんが満足できるようにロープの縛り方を勉強しますから！」

ライクが必死で弁解すればする程、怪しさは倍増していった。その結果、二人は疑惑を通り越して何故かライクを応援している。

ハインはともかく、シャーナ様をまた変な道に迷い込ませるのはやめろ。どうするんだ、俺がグローブで縛られ逆さ吊りにされて尋問されながら研ぎ研ぎされたら……一度ぐらいならされても……いや、駄目だろ。しっかりしろ、俺。

「よし、そうと決まれば、早速サウザートさんで練習しますかねえ。新しい砥石グローブも試したいですし」

だから駄目だつてえええ！

……え？ 新しい砥石グローブ？

「……おいシャーナ、その手につけているのはもしかして……」

「え？ 見ての通り、新品ピカピカの砥石グローブですよ？」

ライクの問いに対して、シャーナ様は首を傾げながら答えた。何でそんな当たり前の事を聞くの？ とでも言いたげな、きよとんとした表情がまた可愛い。

「それは見たら分かるが、何で新品の砥石グローブがあるんだよ。エンゴク鉱石はどうしたんだ？」

「いえいえ、これはエンゴク鉱石は使ってませんよ。これは何とアイアンブレイカーから採れた鉱石を厳選して作られているのです！ さすがに自分で加工するのは難しかったので、ハインさんに頼んでいたのが今日できたのですよ」

シャーナ様は買ってもらったオモチヤを見せびらかす子供のように、砥石グローブを俺達の眼前につきだしては自慢気にしている。

そんな様子のシャーナ様も可愛いが、お前はムカつくから良い仕

事をした事をアピールするようなドヤ顔をやめろ、このハゲモンスター。

「ハイネさんには本当に感謝ですよ。まあ、またカモられたんですけどねえ」

シャーナ様は終始笑顔だったが、それが逆にただならぬ威圧感を醸し出している。

この前、ハイネにカモ呼ばわりされた事をまだ根に持っているようだ。先程までのドヤ顔からうってかわって、ハイネは顔をひきつらせ、その巨体をハムスターのように縮みこませて可愛くない。

「おいおい、じゃあ俺がエンゴク鉱石を取りに行ったのは無駄だったって事か？ まじかよ、苦労したのに……」

そついうのは見事取って来れた奴が言う台詞だぞ。

ふと、アンナの方を見ると、ツッコみたそうな、でも面倒くさそうな煮えきらない様子だった。

そつだよ、いちいちこいつにツッコんでたらきりがないよね、分かるぞ。でもせめて俺ぐらい構ってあげないと可哀想じゃないか。

そんな俺の母性本能をよそに、ライクを構ってくれる人物がもう一人いた。

「あー、そういえばライクさんは、私の話を聞かずにエンゴク鉱石を採りに行ってきてたんですよね。ありがとうございますです」「う……すみません」

シャーナ様が例によって例のごとく笑顔で言うと、ライクもまたハムスターのように縮こまって可愛くない。

こういう遠回しな言い方が一番きついんだよな。

俺も中古武器屋にいた頃、『この剣しよばい』とストレートに言われるよりも、『良い剣だけど俺には扱えそうにないな』とか、遠回しに拒否される方が悲しかった。

もつとも、あの頃の俺にははつきりとした意思はなかったもので、今こうして思い出して悲しくなつたわけだが……駄目だ、俺はもう悲しい事を思い出す事さえしてはいけない悲しい剣なのだ。

何故なら、神が俺に授けた禁断の力、『淚水剣』が暴発でもしたら、エルトリル周辺は強大な水流の餌食となり、レイテナ国土からエルトリルが消滅する事になるからだ。

とまあ、そんな世迷い言は置いておいて、さすがにシャーナ様の前で涙を流したら魔剣という事がバレてしまうだろう。

アンナ邸でのアンナ兄に対する発言もそうだったが、シャーナ様はあんな外見をしているくせに、あの若さで上級鍛冶師になつただけあつて結構黒い部分がある。だから俺が魔剣と知られば、何かされる可能性も否定はしきれない。薄々感づいてはいたが、やはり彼女は女神の皮をかぶつた小悪魔なのではないだろうか……。

そんな俺の疑惑を裏付けるように、正真正銘の悪魔がシャーナ様に絶賛の言葉を送つた。

「あらシャーナ、男の扱い方が分かつてるじゃない。兄の件の時から思っていたけど、中々素質あるわよ、アンタ」

そういつお前はエングク鉱石といい、シャーナ様といい、何か発掘する素質があると思うぞ。……などと言っている場合ではない。

こいつは一体シャーナ様をどうするつもりなんだ。

これ以上、俺の女神様を邪悪な道に連れ込むのはやめてくれよ……誰か、誰か助けてくれ！

そんな俺の願いを神が聞き入れたかのように、工房の入り口が突如、勢いよく開かれた。

「素質？ お嬢さん、それは見込み違いってもんだぜ。そいつに素質なんてねえさ。あるのはただの運、そいつは運だけで上級鍛冶師になった、ただのラッキーガールさ！」

……ああ、そうだった。俺が助けを求めるとロクな奴が現れなかった。

誰もシャーナ様が上級鍛冶師になれた理由など聞いていない。ちくしょう神様め、俺が剣だからつてもて遊びやがって！

「……アンタ誰よ？」

「ふ、俺の事が気になるかい？ ならば教えてあげ」

「うげっ、ロック！？ 何故ここにいるんですか……？」

「サブライ！ これは一本取られたぜ。人の自己紹介に割り込んだ上に、そんな嫌そうに紹介されるなんて、俺の大剣のように大きくて頑丈なハートも少し刃こぼれしてしまっただぜ！」

どうやらシャーナ様の知り合いの様だが、決して仲が良いというわけではなさそうだ。

さっきまでアンナに褒められて照れ顔を浮かべていたシャーナ様が、今では目を細め、眉を八の字、口をへんの字に曲げて、お世辞にも可愛いとは言えない表情を浮かべている。誰にでも可愛らしい笑顔を振りまいてくれるシャーナ様が、本気で嫌悪している様子だ。

このロックとかいう男、ただ者じゃないぞ。……まあ、格好を見ただけで普通でない事は分かるけど。

髪は剣山のように鋭くガチガチに固められ、顎も負けず劣らず鋭い。

服は上下ともピチピチの謎の黒皮の服で、動物の牙と思われる物体が服の至る所に装飾されている。こいつに抱きしめられでもしたら、たちまち穴だらけにされるだろう。正に歩く凶器といった感じだ。どう考えても、ライクよりもこの男を逮捕したほうがいい。仕事しろよ、警備兵。

「アンタねえ……サブライって何？」

俺の職務怠慢に対する怒りが届いたわけではないと思うが、アンナはロックとかいう凶器男に対して尋問を開始した。それ自体は良い事なのだが、何で最初の質問がそんな一番どうでも良さそうな事なんだ。

「ふん、お嬢ちゃんはそんな事も知らないのかよ。いいか、サブライってというのは驚きを表す俺が創造した偉大で痺れる言葉なんだぜ！」

「はあ、そうですか。要するにサブライズを少し変えて……」

「ノーノー！ 何も分かってねえな、お嬢ちゃんよお。サブライはサブライだ。サブライズなんてダサイ言葉とは何の接点も血の繋がりもねえ。サブライズとサブライを一緒にしちゃう、お前の脳味噌がサブライだぜ！」

ウ、ウザい……このウザさはディアナの訛り口調の比ではない。さすがのアンナも己のした質問に後悔をしている様子で、背中に透明なりザードマンでも背負っているかのようにうなだれている。これは相当うんざりしていると見える。

登場してたった数分でアンナの戦意を喪失させるとは……こいつ

強いぞ！ きつと名高いハンターに違いない。もちろん武器は全身を覆う大量の牙だろう。

「ねえシャーナ、こいつ一体アンタの何なのよ？」

そんな恋人が知らない異性と一緒にいるのを目撃した時のような聞き方をするな。

だから言ってるだろう。こいつはお前なんかまったく歯が立たない程のスゴ腕のハン……

「この人の名前はロックで、王都ではそこそこの知れた中級鍛冶師です」

……ターではなくて、シャーナ様と同じ鍛冶師に決まってるだろ！ ……嘘でしょ？

「へえ、アンタも鍛冶師なんだ。何か鍛冶師って変なのが多いんだな」

「ちよつとライクさん！ それって私も変って事ですか！？」

「え、いや、あの、その……すみません」

「そうですねよライクさん、失礼ですよ。そんな事よりもロックさん、実は鍛冶師なら絶対喉から手が出る程の上質の鉱石が手に入ったんですけど、買う気はありませんかね？ お安くしときますよ、ガハハハ」

「ちよつとハイネさん！ それって私のアイアンブレイカーの鉱石じゃないでしょうね！？ もしかして、一部盗んで自分の物にしたんですか！？」

「や、やだなあ……じよ、冗談ですよ冗談……ガハハハ……」

……あの、話がややこしくなるので貴方達二人はもう黙っててく

れませんか？

あと、ハイネはもう解体屋を廃業しろ、この悪徳業者。

「ハハハ！ シャーナ、お前の知り合いは変な奴らばかりでサブライだぜ！」

「アンタが言うな！」

アンナが素早くツッコむ。

いいぞアンナ、やはり俺が頼れるのはお前だけだ。不本意ではあるが、今日だけで俺の中でアンナの評価がかなり上がった。なあエリザベルよ、ちょっと持ち主を交換してみないか？

……返事がない。やっぱりお前は普通の剣なんだね。羨ましい。

「ハハハ、そう怒りなさんな、お嬢さん！ そのラッキーガールと違って大人びた美しい顔が台無しだぜ！」

「ほっとけ！ ていうかアンタね、さつきからシャーナの事をラッキーガールとか言ってるけど、彼女の鍛冶師としての腕は本物よ。大体、上級鍛冶師は中級鍛冶師の中から王族に認められた極一部だけがなれるのよ。アンタみたいな中級止まりの奴とは天と地ほどの差があるのよ。もっと敬意を表したらどうなのよ！」

アンナがすごい勢いでまくし立てる。

いいね、いい勢いだぞ。その調子で、さつき戦意喪失まで追い込まれたお礼を何倍にもして返してやれ！

「サブライ！ 素晴らしい！」

「な、何よ？」

「最高だよ、お嬢さん！ 美しいだけのつまらない女かと思いきや、男のように気が強くて堂々としていて、女とは思えない内に秘めた熱い激情をひしひしと感ずるぜ！ お嬢さん、正にお嬢さんは戦

う乙女だ！ 痺れるぜ！」

「あ……ありがとう」

本当にお礼を言っただろう。

アンナは興奮気味のロックに両肩を掴まれながら、まんざらでもない表情を浮かべているが、さっきのはよく考えたら女性として色々侮辱されている気がする。

しかし、アンナには自分を女としてではなく、一人の剣士として見て欲しいという願望みたいなものがあるので、今は十分褒め言葉として役割を果たしているのだろう。

「どういたしまして。そんな素直で痺れるお嬢さんに教えてあげよう。なぜあのラッキーガールがラッキーガールなのかをね！」

そう言ってロックは、心臓を貫かん勢いでシャーナ様を指差した。さすがのシャーナ様でも、ここまで無礼な行いを見て見ぬ振りをするはずがないと思われたが、依然として沈黙を守り続けている。

それをいいことに、ロックは更に調子に乗って語り始めた。

「二年前、俺とシャーナはレイテナ国の国王主催の鍛冶師コンテストに参加していた。そのコンテストの優勝者は上級鍛冶師の称号を得られるという事で、俺はいつにも増して気合いを入れて、熱く痺れる俺の魂をそれはもう激しく激しく鳴り響かせて、周囲を熱い激情の渦に巻き込む程にまで昇華させて挑んださ」

俺が審査員なら、その時点ですでに失格にしているだろう。ウザすぎで。

「そして俺は持ち前の鍛冶技術を全開で力の限り披露し、見事に決

勝まで進んだ！ ……だが、優勝者に選ばれたのはそのシャーナだった！」

ロツクは今度は鋭い視線付きで再びシャーナ様を指差したが、やはりシャーナ様は何の反応も起こさずに俯いているだけだった。

その様子を見て、アンナが代わりにつつかかった。

「だからそれはシャーナがアンタよりも鍛冶師として優れていたからでしょ！？」

「ふん、違うね。俺の作った剣は最高に激しい出来だった。シャーナの剣もいい出来ではあったが、俺様程じゃなかった。俺様の敗因は……シャーナの可愛さだ！」

「は？ 可愛さ？」

「そうだ、あのコンテストの審査員は国王と熟練の上級鍛冶師の爺さん数人だった。そしてその審査員は国王を除いて、総じて可愛い小さな女が好きな変態ばかりだった。国王を除いてはな。だからシャーナはその変態共にひいきされて優勝したんだ。全部、その女の計算通りの策略だったんだよ。国王を除いてはな。要するにシャーナは、運よく審査員が変態だから上級鍛冶師になれたラツキーガールなんだよ！ 国王を除いてな」

ロツクはやけに国王の部分を強調している。

そんな世界の常識に一人で逆らっているような服装と風貌をしながら、過剰なまでに権力を恐れているようだ。だがロツクよ、上級鍛冶師に対するその侮辱は十分重罪だと思っぞ。

そうだよ、こいつは重罪人なんだよ。そんな奴を野放しにしておくのは危険だ。よし斬ろう、斬っちゃおう。

ライクよ、そこで呆れ顔で頭を抱えている職務怠慢の警備兵の代わりに、俺達で奴を成敗するんだ。今こそ俺を抜く時だ！

あそこで、いわれのないイチャモンをつけられて悔しそうに俯いているだけのシャーナ様のために……も……どうやらその必要はないようだ。

今、俺の視界には信じられない光景が映っている。

5・熱く痺れる男？

「ちょ、ちょっとシャーナ！ そんなもの持ってどうするつもり！？」

アンナは目を見開いて驚きの声をあげた。

その視線は先程までシャーナ様が俯き立っていた場所ではなく、工房の奥でこちらに背中を向けて立っているシャーナ様へと向けられていた。

工房の奥にはシャーナ様が何人か入れそうな大きい工具箱が置かれていたのだが、そんな工具箱からハミ出てしまっている巨大な槌を、シャーナ様は手に取っていた。

ディアナの斧と同等か、それ以上の大きさだ。用途がまったく分からない。

巨大な槌と小さな少女、到底計り知れない違和感をひしひしと感じたが、シャーナ様がこちらにゆっくりと振り向くと、そんなものは一瞬で吹き飛んでいってしまった。

「何って、そこで好き勝手言ってる人にお仕置きするだけですよ、うふふふ」

満面の笑み。いつにも増して頬の筋肉が緩んでいて、完璧な笑顔をシャーナ様は浮かべていた。しかし、いつもの様に可愛いとは思えないどころか、不気味ささえある。それに加えて、周りの空気がピリピリと一気に乾いていくのが感じ取れた。

原因は明らかだ。シャーナ様の笑顔の上でヒュンヒュンと空を斬り裂きながら、高速で回転する巨大な槌。シャーナ様はその細い腕で器用に力強く、激しく振り回しているのだ。狭い工房内に激しい

旋風が巻き起こっている。

あの腕のどこにそんな力が秘められているのだろうか。

シャーナ様怪力説がここに確定したと言ってもいいだろう……うう、俺の女神様が……いかん、剣身が湿ってきた。涙よ、そのウザい男に飛んで行け！

「へ、へい、シャーナ嬢。そんな物騒な物をこんな場所で振り回すのは感心しないな。お、落ち着け……ごめんなさい、本当にごめんなさい許してください本当にすみませんでした……」

……飛ばす必要などまったくなかった。

ロツクはすでに工房の入り口に張り付いて下半身をガクガク震わせながら、目に涙を浮かべて必死にシャーナ様をなだめている、というよりもひたすら謝罪していた。そりゃ誰でもこんなの見せられたら謝るしかない。

シャーナ様はロツクの情けない様子を見て、溜息を一つ吐くと、槌を下ろして面倒くさそうに口を開いた。

「あのですねえ、ロツク。貴方が納得できないのは勝手ですけど、審査員の方々はちゃんと私の作った剣を正当に評価してくれましたよ。どちらかというと名誉ある上級鍛冶師にこんな若い女性を選びたくなかったでしょうし。大体、上級鍛冶師の称号の重みを一番知っているのは審査員の皆さんなんですよ？ ヒイキなんてするはずないじゃないですか」

真相は分からないが、俺もシャーナ様と同意見だ。

上級鍛冶師の称号というのは鍛冶を生業にしている者達にとって、最も名誉で喉から手が出る程の称号だ。それを好みだけで選ぶのも

のなら、審査員である上級鍛冶師達の信頼はすぐに地に墜ちてしま
うだろう。

だが、シャーナ様は一つだけ間違っている事がある。それは

「確かにお前の言い分はもつとだが、信頼を裏切つてでも俺のよう
な世界に反逆して生きているような男よりも、未熟でも可愛くてマ
トモな奴を選びたくなるのは当然の事だろう！」

「自覚してるんかい！」

間違いの理由も語れず、ツツコミすらもアンナに取られてしまっ
た。俺は頬を膨らまして拗ねたい気分だったが、無機質な俺の体は
微動だにしなかった。そもそも剣の頬つてどこだ？

そんな俺の疑問はすぐに解消される事となった。

「とにかく、俺はシャーナよりも鍛冶師としての腕は上だ！ 間違
いない！」

「アンタもしつこいわねえ……、そこまで言うなら証拠を見せなさ
いよ、証拠」

「証拠？ いいだろう、見せてやるぜ。えーと……あ、その縛ら
れる弱そうな剣士っぽい兄ちゃん！ お前の剣をちよつと貸して
くれー！」

「え、俺？ ……お、おい！ 勝手に何すんだ！」

「ほう、一見ダサダサだが、悪くない。スベスベなほつぺたしてる
じゃねえか」

何かを探して、しきりに周りをきよるきよるしていたロックは、
俺を見つけるやいなや、慌ただしくライクの腰の鞘から俺を抜くと、
俺の剣身の真ん中辺りを気持ち悪い手つきで何度もナデてきた。

どうやらそこが俺の頬らしい……そんな事よりも気持ち悪いよ！

何か俺を腰に当てだしたよ！ 助けて、折られ

うおおおおお！ サブラアアアアイ！

「いやっはー！ いくぜえ、熱い激情をぶちこんでやるぜ！」

熱い、熱い、全身が熱い！

といつても、ステイシル火山のような嫌な熱さではない。俺の意思を奮い立たせる心地いい熱い刺激。思わずサブライって言っちゃう程の驚愕の快感が、荒ぶる波のように何度も何度も俺に迫り

うおおおおお！ サブラアアアアイ！

「ノってきたぜ！ もっと激しく俺様、ロツクの激情を叩き込んでやるぜ！」

「な、なあシャーナ、あいつ何かすごい研ぎ方してるけど大丈夫なのか……？」

「あー……大丈夫だと思えますよ。ああ見えて技術はしっかりしていますから。何故あの研ぎ方でちゃんと研げるのかというのが、王都では鍛冶七不思議のうちの一つと言われています」

「なるほど、だから有名なわけね……私ならそんな理由で有名になつたら恥ずかしくて街歩けないわ。あいつも歩かないでくれないかしら……」

「まったくです……」

高ぶる意識の中で呆れ口調の女二人とオロオロとしたライクの声が聞こえてきた。

もはや心が熱くなりすぎて周りがまったく見えないが、どうやら俺は研がれてこうなっているらしい。

あいつらの会話から察するに俺は何やらとんでもない研ぎ方をさ

れているようだ。

だが、そんな事はどうでもいい。俺はもつと……俺をもつと……熱くしてくれええええええ！

うおおおおおおお！ サブリアアアアアイ！

「よっしゃあ！ 完璧に仕上がったぜ！ どうだい、熱くなれたかい？」

……ああ、終わってしまった。

ロックは満足そうに俺の剣身をさすっている。不覚ながら熱くなってしまったぜ……さすがはシャーナ様と決勝で競っただけあって、人間技とは思えない研ぎ技を持っていやがる。中級鍛冶師のロック、恐るべし！

とはいえ、二人の研ぎ技を味わった俺から言わせて貰えば、やはりシャーナ様の方が上だろう。これはえこひいきではない、事実だ。ロックの研ぎの特徴は、全身が熱くなる程のすさまじい刺激。それも不思議と不快ではない極上の刺激だ。

それに比べて、シャーナ様の研ぎは飴と鞭。刺激の後には天にも昇りそうな優しさという名の快感が待っている。その気持ちよさは今更語る必要もないだろう。

どちらの研ぎも素晴らしいが、シャーナ様のが快楽に満ちた天国だとすれば、ロックのは少し悪い表現になってしまうが、どこまでも激しい刺激が続く地獄だ。

天国と地獄。どちらに行きたいと言われれば、そりゃ誰だって天国だと答えるだろう。

だから実際に味わった俺からすれば、僅差ではあるがシャーナ様が勝っているといえる。手心など加えていない。もし手心を加えて

いいなら、一万点差ぐらいでシャーナ様の圧勝にする。

一切私情を挟まなければ、本当に二人の研ぎは僅差なのだ。少しの体調不良や環境の変化であっさり均衡が崩れてしまう程の……
ああああん！

「ふん、その程度でいい気にならないでほしいですねえ。今度は私の研ぎ技と新品の砥石グローブの力を見せてあげるですよ！」

誰も聞いていないのに熱く語っていた間に、俺の所有権はいつのまにかロックからシャーナ様へと譲渡されて……いたああああん！

痛い！ 激しすぎて痛い！ でもそれが……気持ちいいいい！

「ほらほらー、サウザートちゃんどうですかあ？ これが気持ちいいんでしょっ？」

やめて目覚めちゃう、本格的に目覚めちゃう！

やばい、新しい砥石グローブやばい！

俺こそが世界一の砥石と言わんばかりにグイグイと攻めてくる！
それにシャーナ様の絶妙な技巧が相まって、俺の身体の隅々に刺激を送りこんでく……るううううう！

先程のロックの研ぎも味わった事のない絶技だったが、こちらも負けず劣らずの新感覚だ。

……しかしこれは

「よし、完璧です！ どうですかロック、私の研ぎは！」

「……ふん、なかなかやるじゃねえか。相変わらずの技術だ。だが

な、俺の研ぎの方が一枚上手だったぜ。それがこの世でたった一つの変える事の叶わない真実だ。残念だったな、シャーナ！」

「何言ってるんですか、寝言は寝て言うてくださいよ！……ライクさん！」

「は、はい！？」

……………。

「ライクさんはどっちの研ぎがすごいと思いましたが！？ サウザートさんの持ち主なんですから責任取ってくださいよ！」

「せ、責任！？」

「そうだぜ、弱そうな兄ちゃん。言っちゃいなよ、俺の方が上だったな。もし言わなかったら、俺はお前にサブライだ！」

「ロツクはちよつと黙っててください！ さあ、ライクさん。早く答えを！」

「そ、そんな事言われても……………」

…………… あー、まだ視界がふわふわしている。

何やらライクが理不尽に責められている様だが、今の俺にはそんな事はどうでも良かった。

立て続けに味わった事のないような最上級の快楽を味わった俺は、シャーナ様の研ぎの途中あたりから意識が朦朧となり、今もまだ快感が全身を支配している。少しでも気を抜けば、俺の意思は消えてなくなりそうだ。風前の灯火というやつだ。

「ねえアンタ達、勝敗を決めるのはいいけど、その剣って最初からピカピカだったわよ？ ていうか、二人共同し剣を研いたって分からないじゃない」

「……………あ」

「……………あ」

……あ。

呆れ顔のアンナの言う通りだ。俺は今日の朝にシャーナ様に研がれたばかりだ。

そして記憶が正しければ、俺の剣身は虫一匹にすら触れていない。そんな俺を研いだ所で、優劣がつけられるはずがない。

要するに俺は無駄に何回も研がれたわけで、消えてなくなりそうなのは俺の意思ではなく、身体の方だったというわけだ。

まあでも、俺は二人を責める気はない。何故なら俺はそこら辺の剣が一生かけても味わえないような快楽を一日に何度も味わえたんだ。もう研ぎすぎでポッキリ折れちゃっても何も文句は言わないよ。もう色々振り回されるのにも疲れたし、安息の 때가近づいたと思ってよしとしようじゃないか。よし、この件はもう終わり！ 解散！

お疲れ様！

……と、もちろんそうなるはずはなかった。

「ち、こうなったら仕方がねえ。シャーナ！ 俺は改めてお前に勝負を申し込むぜ！ 逃げるんじゃないぞ！」

「望む所ですよ！ 今度こそ文句も言えないぐらいにギツタンギツタンにしてやるですよお！」

……もう勝手にして。

6 ・今日も彼女はエルガニまんじゅうを頬張る

成長とは何か。

落ちこぼれ魔剣の俺の場合は至って簡単。何の役にも立たない能力を次々と開花する事によって、人生……もとい剣生の厳しさを身をもって知り、どんな事にもめげない強靱な意思を作っていく。それが俺にとっての成長だ。

そうだ、俺は目覚める能力がしょぼければしょぼい程、災難が降りかかれば降りかかる程に成長できるのだ。

……言ってて何か悲しくなってきたので、俺の事は置いておくとして、人間の場合はどうだろう。

俺が今まで人間を観察してきた結果、奴らには大きく分けて二つの成長方法がある事が分かった。

一つ目は人間以外の生物にも言える事だが、身体の成長だ。
奴らはある一定までは年を取れば取る程、何もしなくても身体が大きくなり、生まれた直後とはまったく別人へと変貌を遂げる。とても見て分かりやすい成長なのだが、剣の俺には理解できない成長でもある。

何故なら、剣の身体は生まれた直後には、すでにピークに達しているからだ。

剣は使い込む程強くなるなんて言う奴もいるが、それは使い手が剣の重さや特徴に慣れて扱いが上達していくからであって、剣自身が強くなっているわけでは決していない。

むしろ逆に、敵を斬るたびに剣身はわずかに傷を刻みつけていき、

その切れ味は衰えていく。

研がれる事によって切れ味を取り戻す事は可能ではあるが、その度にわずかながらも耐久力は失われていき、いずれは使い物にならなくなるだろう。

要するに剣の剣生は人間で言うところの、成長期を過ぎたオッサンからスタートという事になる。だから俺が酒場に行くと妙に落ち着くのも当然の事であり、俺とライクが今いる場所がまったく落ち着かないのも当然の事なのだ。

「ライクにいちやん遊ぼうよう！」

「相変わらず、サウザートはだっせえなあ！」

うっさい！ 黙れ、このクソガキ共！ 勝手に触るな！

「分かった、分かったから引っ張るな。おい、危ないからサウザートに触るなって」

「へん、サウザートなんて危なくも何ともないよ。こんなのじゃハムスターも斬れないよ！」

……お前の言う通りだ。優しい俺にはあんなに可愛い小動物に手をかける事なんてできない。

だがクソガキ、俺はお前なら躊躇なく切り刻んでやる。貴様のハムスターよりも柔らかかそうな肌に一生消えない傷を刻んでやるから、今すぐ俺を抜いてみるコノヤロウ！

「こら、あんた達！ ライク君にあまり迷惑かけちゃ駄目ですよ。

良い子にしていないとオヤツ抜きだからね！」

「やだー！」

どこからともなく颯爽と現れた純白の女神……ではなく、白いエプロンを纏った小太りのオバサンがパンパンと両手を鳴らしながら声を張り上げると、クソガキ共は一目散に逃げ去って行った。ざまあみる、ははははは！

「まったくもう。ごめんね、ライク君。せっかく来てくれたのに騒がしくて」

「いや、いいですよ。俺もいつもアマンドさんに迷惑かけてましたからね」

「あら、そんな事はないわよ。ライク君はいつも木刀持って、無断で勝手に誰にも言わずに一人でどこか行ってくれてたから面倒かからなかったわよ」

俺には純白オバサンことアマンドが、『そうだよ、いつも勝手にいなくなつて、こつちは迷惑してたんだぞ』と言つたように聞こえたが、ライクがそんな皮肉に気付くはずもなく、バカ面をして照れている。

アマンドはライクがそういう反応をする事を悟っていたようで、不満顔をする事もなく、その様子を笑顔で見ていた。さすがライクの育ての親、こいつの性格を熟知している。

アマンドは俺達が今いる『エルトリル孤児院』の院長で、ここで育つたライクはこの人の義理の子供といつても過言ではない。なので、ライクがこんな馬鹿に育つたのは全部このオバサンが甘やかした結果なのだ。もし俺が院長ならば、ライクは俺に似てもっと良識ある大人らしい大人になっていたに違いない。

「でも、ライク君は最近すごく大人になってきたわね」

「え、そうですか？」

「そうよ、だって昔のライク君は子供達にイタズラされたら、すぐ

に剣を抜いて『斬つてやる、このクソガキ!』って怒り狂っていたもの」

「……ははは、そんな事もありましたね。ははは……」

ははは、それさっきの俺じゃん。……耳が痛い。耳なんてないのに耳が痛い。

い、いいんだよ。俺はまだ成長途中なんだから、ちょっとぐらい子供っぽい所があってもさ。

「ねえ、オヤツまーだー?」

「はいはい、今行きますよ。ライク君も食べていくでしょ?」

「え、いや俺はいいですよ」

「遠慮しなくていいのよ。買ってきてくれたのはライク君なんだから。さあさあ、行きましょ」

「じゃ、じゃあ、お言葉に甘えて」

それに俺は剣だ。剣の存在意義は斬る事だ。斬れない剣なんてただの飾りだ。だから、ライクがクソガキを斬ろうとするのは問題があっても、俺があいつらを斬る事には何の問題も無く、むしろ自然な事である。だから俺は何の罪の意識も持たずにあいつらを。

「うめー! エルガニまんじゅう、うめー!」

「こら、そんなに慌てて食べなくてもエルガニまんじゅうは逃げませんよ! ゆっくり食べなさい!」

延々と孤独に剣の存在意義について語っていた俺に、エルガニまんじゅうの美味に魅了されたクソガキと、それをたしなめるアマンダの騒音が嵐のように押し寄せた。

いつの間にか俺は孤児院内の食堂に連れこまれていた。

殺風景でさほど広くもない部屋で唯一存在感を露わにしている木製の長机。それを仲良く囲んで幸せそうな顔をしてエルガニまんじゅうを頬張るクソガキ共……くそう、これは一体何の拷問だ。どうせ拷問されるならシャーナ様にしてもらいたい。

「ライクにいちちゃん、エルガニまんじゅう美味しかったよ。ありがとうー」

「やっぱりエルトリルといえばエルガニまんじゅうだよー。ライクにいちちゃんありがとうー」

「おう、どういたしまして」

エルガニまんじゅうを食べ終わったクソガキ達が、次々と俺達の所に来てはライクにお礼を言ってきた。

クソガキにしては礼儀がいいじゃないか。そのエルガニまんじゅうは俺の鍛冶屋代を削って購入したもので、本当はライクにではなく俺に神を崇める程の感謝をして欲しいところだが、まあ良しとしようじゃないか。

……さて突然だが、ここでさっき言っていた人間の成長方法の二つ目について考えてみよう。

二つ目は心の成長で、経験を積むことによつて知識を蓄えたり、人との接し方、礼儀を知り、失敗から成功への秘訣を見出す。まあ、俺の成長とほぼ同じなので説明はそんなにいらぬか。

この成長方法もまた年を取るたびに鍛えられていくものだと言われているが、俺は最近その説に疑問を覚えるようになってきた。

何故なら、子供ながらにちゃんと礼儀を通すクソガキ達や、子供ながらに女神のように優しい心を持つシャーナ様がいるのに対していつまでたっても子供っぽくて馬鹿なライクや、その隣にいる女みたいにいつまでたっても無口で無礼な奴がいるからだ。

「ところで……何でお前はここにおいて、当たり前のようにエルガニまんじゅうを食べているんだ？」

「……運命」

「……そうか」

勝手に運命って言葉を大安売りするんじゃない。

ライクも納得して、一緒になってエルガニまんじゅうをパクつくな。

全身を黒いローブで包み、常に無愛想な表情を浮かべているこの女の名前はミエル。

あらゆる物に魔力を注いで魔具化してしまう恐怖の魔具師で、気に入らない魔剣を見つければ容赦なくドブ川へと投げ捨てる冷血女であり、俺が一生恨み続けると心に決めた女である。

「……ねちっこい」

「ん？ まんじゅう腐ってたか？」

「……大丈夫」

「そうか」

「サウザート折っていい？」

「どういふ流れでそうなった!？」

「ごく自然な流れ」

「不自然だよ!」

忘れてた。ミエルには俺の意思が筒抜けだったんだ。
いや待てよ、これはチャンスだ。こいつは俺がライクの腰にいる
限り手を出せない。ということは、今こそ日頃の鬱憤を全てぶつけ
る時ではないか！

さあ、何からねちねちしてやろうか

「間違えた、折るんじゃないで粉々にさせて」

「余計、駄目だわ！」

ミエルは俺に手を伸ばしてきたが、ライクは素早く俺を掴んで遠
ざけてくれた。

甘いよ、ドブ川に投げ捨てられた時と違って、こついう時には頼
りになる相棒が側にいるんだ。何をやっても無駄だ！

……と思った俺の方が甘かった。

「うーん、お前がそこまで言うんだ。何か理由があるんだろうが、
大切な相棒を粉々にするのは勘弁してくれ。せめて踏むぐらいにし
てくれ」

俺の体がミエルへと迫っていく、奴の眼前へと差し出された。俺
の視界の先には、感情を隠しきれずに不気味な笑みを浮かべるミエ
ルの顔が、どアップで映し出された。

まさか相棒に売られるとは思っていなかった。エルガニまんじゅ
う口に突っ込むぞ、この剣でなし！

ああ、ミエルの手が勢いよく俺に迫って……え？

「むごあ!?!」
「……………」

俺が覚悟を決めた直後、ミエルの手は俺を素通りしてライクの口を塞いだ。ミエルが慌てて手をどけると、ライクの口いっぱい白い物体が詰め込まれていた。これは間違いなく、エルガニまんじゅうだ。

「いきゆなりゆなにすんだふお!」

「……………私のまんじゅう返して」

「ふあい!?! おふあえがじひゆんでおふえのくひにつっこひゃんだひよ!」

「……………何言ってるか分からない」

「むう、たふえおひやるまふえひよとまっへろ」

「食べ終わったら、ちゃんと代わりのまんじゅう用意して」

「だひやらなんふえらよ! というひゃひゃんととききとふえれへりゆふあないふあ!」

いいから、お前は早くエルガニまんじゅうを飲み込め。

そんな事よりも、また忘れてた。ミエルは俺の意思を耳からではなく、脳内に直接響かせるため、俺が強く念じた事を自分の意思だと勘違いして行動に移してしまう時がある。そう、例えばこんな風に。

脱げ脱げ脱げ脱げ脱げ、服を脱げ!

「……………!」
「むくあ!?!」

おー、成功した。

突然ロープを捲り上げ始めたミエルを見て、ライクは驚いてエルガニまんじゅうを喉に詰まらせて、苦しそうに必死で自らの胸辺りを右拳で連打している。

そんなライクの危機などには目もくれず、ミエルは最早その殺気を隠そうともせず、親の敵でも見つけたかのような目つきで怒号を放った。

「この外道！ 変態！ 絶対折る！」

「お、おへがなにしふあって……ぐふゆ……」

恐らくミエルは俺に言ったのだろうが、ライクは自分が言われたと勘違いしたみたいで、最後の力を振り絞って反論をしながら、その場に倒れ込んでしまった。

「ちょ、ちょっとライクくん！？ 大丈夫なの！？ ねえ、しっかりして！」

騒ぎに気付いたアマンドが慌ててライクに駆け寄っては抱きおこし、何度もライクの顔に平手打ちをお見舞いしているが、ライクはすでに虫の息で何の返事もしなかった。

駄目だ、死んじゃ駄目だライク！

お前が死んだら、俺はその殺剣者にどんな無惨な折られ方をするか分かったもんじゃない。頼む、頼むから蘇ってくれ、ライクウウウウ！

「自業自得よ！」

「あー死ぬかと思った……」

ライクが意識を取り戻したのは数十分後の事だった。

孤児院内にある医務室のベッドの上で生きている事に喜びを感じているライクを尻目に、ミエルは何の反省もなくエルガニまんじゅうを無表情で頬張っている。

ライクが生死をさまよっていた間、俺は何回もミエルに折られそうになったが、その度にアマンダがオヤツの余りであるエルガニまんじゅうを与える事で落ち着かせていた。ちなみに今ので六個目だ。

「……うまいか？」

「うん」

「そうか、じゃあもう機嫌直ったか？」

「もう一個くれたら直る」

「……余ってるなら勝手に食べ」

まだ食う気が、この女。

まあ、まんじゅうの食いすぎでブクブク太って動けなくなってくれた方が世のため剣のためだが。

「やっぱり」

「サウザートは折るなよ」

「……ぶっ」

「それよりも結局、お前は何でここにいるんだよ？」

「拾われた」

「拾われた？」

「ミエルちゃんは泊まる場所がなくて、うちの前で座り込んでたのよ。だから、しばらくの間うちに居てもらうことになったのよ」

ライクの問いに答えたのは、すぐ側にある棚で薬を整理していたアマンダだった。前からお人好しだとは思っていたが、とんだ狂犬を拾ってくれたもんだ。

「でも今日みたいな喧嘩沙汰を起こすようなら追い出しますからね。ほらミエルちゃん、ちゃんと謝りなさい。ライクくんもよ」

「……ごめんなさい」

「ちよつと待つてくださいよ。俺は何もしてませんよ!」

「ミエルちゃんはちゃんと謝ったわよ?」

「……ごめんなさい」

ライクは納得がいかないという表情を浮かべながらも、アマンダの威圧に圧倒され、しぶしぶ頭を下げた。

喧嘩両成敗というが、ここまで理不尽な喧嘩両成敗は初めて見た。だが、元はといえばライクが俺を売ったのが原因なので、まったく同情する気にはなれない。

それよりも、こんなしょうもない事に使われた喧嘩という言葉に同情をしてやりたい。

俺はそんな自分の考えをすぐに改めなければいけなくなった。

「そうだ、喧嘩といえば、偉い鍛冶師の二人が喧嘩して決闘するんだってね」

もはや同情では済まされない。これはもう喧嘩さんに謝罪すべきだ。

あんなのは鍛冶馬鹿同士のじゃれ合い以外の何ものでもない。

「え、それどこで聞いたんですか？」

「どこでも何もエルトリル中の噂になってるわよ。トンガリ頭の騒がしい男が街中走り回って宣伝していたもの。『シャーナとロツクの世紀の鍛冶対決、明日の昼にエルトリル広場で開催だ。見に来ないやつはサブライだぜ！』ってね」

「え、いつの間にそんな事に……」

あの二人はじゃれ合いにエルトリル中を巻き込もうというのか。

さすがは王都でも有名な鍛冶師の二人だ。田舎者とはスケールが違う。もちろん悪い意味でだ。

「ところで、サブライってどういう意味なのかしら？」

「俺に関わると、鬱陶しい事になるから気をつけるって意味ですよ」

ライクが言った事は完全にでまかせだが、これは嘘は嘘でも善意の嘘だ。ライク、お前もたまには気がきくじゃないか。

しかし、そんなライクの善意は、アマンダにはまったく伝わらなかった。

「あら、そうなの？ それは大変だわ。あの人、言葉の使い方間違えてる。教えてあげないと、お客さんが誰も来てくれないわ」

「そ、そうですね……。でも、この言葉の意味知ってる人はエルトリルにはほとんどいないから大丈夫ですよ、たぶん……」

「あら、そうなの？ うーん、じゃあまあいいかしら、どこにいるかも分からないし……」

世話好きもここまでくると、もはや病気だな。

ライクが止めなかつたら、この女は今頃ロツクを探してエルトリ

ル中を彷徨い続けていた事だろう。

「あ、いけない。そんな事よりも、そろそろ夕飯の支度しなきゃ、今日は何にしようかしら……」

「リザードマンのシチュー」

アマンドはミエルの要求に親指を突き立てて答えると、医務室から慌ただしく出ていった。

この無愛想女、居候だけではなく食事の献立にまで口をだしているのか、どこまでもあつかましい奴だ。

「ライク」

「ん？ 何だ？」

「最近、タイガー見たことある？」

「は？ タイガー？」

こいつ、俺の嫌味を華麗に無視して、次なる食材を求めだしたぞ。どこまで食いしん坊なんだ。

「別に食べるわけじゃない」

「いや別に食べるかどうかなんて聞いていないが……んー、タイガーは見ていないなあ。タイガーマンなら昨日会ったけど」

おい、やめろ。あいつの名前はだすな。

その名前を聞くだけで、あの女の世にもおぞましい悪臭を思い出してしまうじゃないか。……おえっぷ！

「お、おい、大丈夫か？」

「……大丈夫、何でもない」

俺の意思が伝わり、突然気持ち悪そうに手で口を塞いで、心配されるミエル。前にもこんな場面を俺は見た事がある。

まったく進歩のない奴だな。……冗談だよ、そんなに睨まないでくださいよ、ミエルさん。

「……もう帰りなさいよ」

「何だよ、お前が質問してきたんじゃないか」

「私はタイガーの事を聞いたの。そんな臭い女の事なんて聞いていない」

「臭い女って、お前、あいつと知り合いなのか？」

「……まあね」

嘘つけ。

「ふーん、まあどうでもいいや。これ以上いたら夕飯までご馳走になっちゃおう。帰るから、アマンダさんによろしく言うておいてくれ」

「分かった」

ライクと俺はミエルを置いて医務室を出ると、そのまま孤児院の敷地外へと歩を進めた。

去り際に嫌味の一つでも言うてやろうと思ったが、ただならぬ殺気を感じたので、俺は口なんてないけど口を硬く閉ざした。

あいつはあんな感じで本当に意思を持たない魔具なんて作れるのだろうか。負の感情が渦巻きすぎだろ。主に俺に対する。

そんなに嫌なら持ち主であるライクに文句の一つでも言えればいいのに、ミエルは何故か俺が魔剣である事をライクに言おうとはしない。自分が魔具師って事を知られたくないからか？

まあいいか、黙っててくれるなら、それに越した事はない。
そんな事よりも、この前の仕返しを十分にできた事を今は素直に
喜ぶとしよう。

家にたどり着くまでの間、ライクが歩く度に起こる小刻みな揺れ
に心地よさを感じながら、俺は先程のミエルの様子を思い出して悦
に浸っていた。

7・暴れ狂うエルトリルの民

「あー眠い……。何で俺がこんな事を……」

「もう、さつきからグチグチうるさいわねえ。シャーナには色々世話になってるでしょ？ 応援ぐらいしてあげなさいよ、この薄情者」

「誰も応援するのが嫌だなんて言ってないじゃないか。俺が文句を言いたいのは、警備の仕事を押しつけられている事だ」

「仕方ないでしょ。今ギルドの人達が討伐作戦で出払って、私しか手が空いてないんだから。私だって討伐作戦に参加したかったわよ。あいつら、私が新人で女だからって見下して……。ああ、腹が立つ！」

アンナは地団駄を踏んで底知れぬ怒りを表現しているが、これは完全にとぼちりというものだ。何が仕方がないのかが、まったく理解できない。というか、どんだけ人員不足なんだよ、国营警備兵ギルド。

さすがのライクも、あまりの理不尽さに不満を隠せない様子だ。

「いやだからって、何でハンターの俺が警備の手伝いをしなければいけないんだよ。民営の警備ギルドにでもやらせればいいだろ」

「馬鹿ね、こんなイベントでも主催の一人はシャーナなのよ？ 国の宝である上級鍛冶師主催のイベントの警備を民営にされたなんて事になれば、国营のメンツは丸潰れよ」

警備兵でもないハンターに手伝いをさせるのも、十分メンツ丸潰れではないのだろうか？

まあ、アンナの強引さと理不尽さは今に始まった事ではないので、何を言っても無駄だろう。

それに、この無駄に大規模になったイベントをアンナ一人で警備

するなんて到底不可能だ。シャーナ様は俺が守るんだ！ 何もできないけど。

「はいはい、わかったよ。手伝えばいいんだろ。……それにしても、大層な事になったもんだな」

「皆、暇なのよ。こんな、いつモンスターが襲ってきてもおかしくない街で暢気なもんよね」

アンナは呆れ顔で大きな溜息をついた。そりゃ、こんな現状を見せられては、溜息の一つもついて当たり前だ。

エルトリル中央に位置するエルトリル広場。普段から露店がいくつもあり、賑やかな場所ではあるが、今日の賑わいぶりは普段の比ではない。

広場の中央には木製のテーブルを寄せ集めて、上から白い巨大な布をかけただけの即席の舞台が用意され、その上には鍛冶道具一式が二人分用意されている。

舞台を囲うようにして、領主に一斉召集でもかけられたかのよう
に、大勢の人間が集まってきている。

まるで祭りでも始まるかのような騒がしさだが、実際始まるのは鍛冶バカ世界一決定戦だ。あのくだらない鍛冶師同士のじゃれ合いが、どうしてここまで大きな騒ぎになったのか、まったくもって理解し難い。

まあ、この街でこれ程の騒ぎといえば、一年に一度のエルトリル祭りかモンスターの襲撃ぐらいなわけで、住民達は騒げたら何でもいいのかもしれないな。

「まあ、いいじゃないか、たまにはこういうのもさ。俺だって警備

なんて押しつけられなければ、楽しんでたさ」

「何よ、さつきから文句ばかりなんだから！」

「お前だって文句ばかりじゃないか。警備も討伐作戦も立派な人を守る仕事だろ。ちゃんと働け、この新米警備兵」

「はいはい、分かってますよ……」

アンナは完全にふてくされている。

ライクの言う通り、人の命を守るのに大きいも小さいもない。

死んでいった者達の遺族を全力で守るといふ、あの日の決意はどこにいつてしまったのだろうか。

「ところで、討伐作戦って何の討伐？」

「は？ そんな事言えるわけないでしょ。ギルドの秘密事項よ、秘密事項。それに討伐作戦っていつても搜索から……ちよつと、そこ！ 喧嘩なんてしてるんじゃないわよ！ 斬り捨てるわよ！」

アンナは話をしながらも、人ゴミの中から言い争いをしているオツサン二人組をめざとく見つけると、偉そうに物騒な事を言いながら、自らも人ゴミの中へと身を投じていった。

斬り捨てるのはやりすぎだと思うが、何だかんだ言いながらも、一生懸命に仕事をこなそうとしているじゃないか。まったく、どこまでも素直じゃない女だ。

「エルトリルに住む皆さん！ 今日はこんなくだらないイベントにわざわざ参加してくれてありがとう！」

アンナとは正反対に、あまりにも素直すぎる爆音のような大声が鳴り響いた。発信源は舞台の上だ。

声の主はタキシードとシルクハットがまったく似合っていないモジャモジャ髭の太ったオッサンだった。

そのオッサンは、エルトリルで一番の大声の持ち主で、声がでかいというだけで毎回、祭りの司会進行役、モンスター襲撃時の警報役などを一手に引き受ける有名人だ。名前はイアン・スミノフ。四十六歳、結婚相手募集中だ。

なぜ俺がそこまで知っているかというところ……

「私の自己紹介はもう必要ないでしょうが、一応させて頂きます。えー、私の名前はイアン・スミノフ。四十六歳、結婚相手募集中。エルトリルで一番の大声の持ち主で、声がでかいというだけで毎回、祭りの司会進行役、モンスター襲撃時の警報役などを一手に引き受けさせてもらっています！自分で言うのもなんですが、有名人です！」

と、いうわけだ。

昔、街に数匹のモンスターが入り込んだ際に、警報役そっちのけで、さつきとまったく同じ自己紹介をし始めたため、現場は混乱の渦に巻き込まれた。確かに有名人である事に間違いはないが、決して良い意味で有名というわけではないだろう。

その証拠に、周りからは一切歓声は起きず、観客達はまったく耳を傾けようとしていなかったが、傾けなくても強引に入り込んでくる大声に、誰もが鬱陶しそうな表情を浮かべている。

そんな事はお構いなしに、イアンは上機嫌で司会進行をしようとしている。空気を読めていないというよりも、もはや空気をぐっちやぐちやにかき乱している。名前を呼ぶのもおぞましいので、これからは司会と呼ぶ事にする。

「さあ！ ついに始まります！ 歴史に名を刻むであろう歴史的な戦！ 鍛冶師の誇りをかけた史上最強の激戦の幕が今開きます！」

お前さつき、くだらないイベントとか言っただけか。

「さあ、では早速進めて行きましょう！ まずは今回の大物ゲストであり、厳正な審査をしてくださる審査員の御三方だ！」

舞台のすぐ側に三つの机が設置されており、そこには三人の男が座っていた。男達は司会に紹介されると、勢いよく立ち上がった。

ま、まさか、あの三人は……！

「今回審査員を任せました鍛冶屋のドンです。今日はよろしく！」

「弟子のチャカです！」

「弟子のチャンです！」

きたー！ エルトリルで俺が常連の鍛冶屋の名物トリオ、ドンチャカチャンだー！

師弟関係八年は伊達じゃない。彼らが息ピッタリな流れるような連携作業で作る武器達は、エルトリルの鍛冶屋の中で、一番力強く、一番頑丈な出来である。もちろん研ぎの方も一級品で、さすがにシヤーナ様やロツクには劣るものの、見た目には似合わず繊細で心地良い研ぎをする。

まさか、この三人がこんなイベントの審査員をしてくれるなんて、一気にイベントの格が上がったぜ！ 正に大物ゲストと呼ぶにふさわしい三人だ！

……あれ、盛り上がってるの俺だけ？

「……え、ええと、私達が今回審査員に抜擢された理由はとていまして、ええと……今回二人の鍛冶師が誇りをかけて決闘をするという事で……だから……その……あの……」

負けるな、負けるなドンのオツチャン！ 動揺するな、平常心を保つんだ！

くそう、何なんだよこいつら。さっきまでお祭り気分で騒いでた癖に、急にお葬式のように静まりかえりやがって……。

挙げ句には、「ねえねえ、あの人達誰なの？」とか「あんなのが大物だったら、この街に小物なんていないんじゃないか？」などと、失礼にも程があるヒソヒソ声まで聞こえてくるじゃないか……ドンチャカチャンを知らないなんて、お前らモグリだろ！ ちくしよっ！

「は、はい！ ありがとうございます。審査員のドン、チャカ、チャンの三人でした。時間もないので、次へ進行しましょう！」

さすがは自称有名司会だ。周りの冷めた雰囲気を感じ、速やかに次の段取りへと移行しようとしている。

これでこれ以上、ドンチャカチャンが晒し者になる事もないだろう。彼らに代わって礼を言っておくぞ。

だが、司会の打った次の一手は、明らかに悪手だ。

「さあ、ではお待ちかね。今回のイベントの主演、中級鍛冶師のロツクの入場だー！」

「ひゃっほー！ 待ちくたびれたぜー！ ついにこの、最高に熱くて痺れる男、ロツク様の出番がきたぜー！」

司会に呼ばれたロツクは、すぐさま広場の西側から颯爽と現れ、

相変わらずの鬱陶しさを爆発させた。

しかし、観客のテンションは爆発するどころか、逆に氷結している。

無理もない。こんな冷めきった状況で、ロックなんか投入しても逆効果もいところだ。ここは先にシャーナ様を呼ぶのが正解だったな、司会よ。

「サブライ！ いいね、いい冷めっぷりだな、お前達！ いいぜ、そんなお前達のハートを俺が今から灼熱地獄のように熱くしてやるぜ！」

さすがのロックでもこの状況にはショックを受けるかと思われたが、奴はそんな事はお構いなしに、依然として不発と気付かずに爆発を続けている。この男の辞書には落ち込むという言葉は存在しないのだろうか。

「は、はい！ というわけで、暑苦しくて痺れる男のロックさんでした！」

暑苦しいって言っちゃったよ。

「さあ、今度こそ皆のお待ちかね。若くして上級鍛冶師にまで昇りつめた女、シャーナの入場だー！」

うお！？ うるせえええええ！

突然、エルトリル広場に轟音が鳴り響いた。

「きゃー！ シャーナちゃん、かわいいー！」

「シャーナさん、こっち向いてー！」

「待つてましたー！ シャーナちゃああん！」

「結婚してくれー！」

「踏んでくれー！」

「罵ってくれー！」

一瞬、ロックが本当に爆発でもしたのかと思っただが、残念だがそれは違った。

轟音の正体は、変なものも混ぜてはいるが歓声だ。その歓声は全て、広場の東側から可愛い笑みを浮かべて、ゆっくりと舞台へと向かっているシャーナ様に向けられていた。何という一体感。さすがは上級鍛冶師、人氣が段違いだ。人氣ゼロの奴と比べたら失礼というものだな。

「へっ！ よく逃げなかつたな、シャーナ。それだけは褒めてやるぜ」

「へん！ それはこっちの台詞ですよ。鍛冶師コンテストの時みたいにギツタンギツタンにしてやるですよ！」

しかしそんな歓声も、シャーナ様が舞台上に上り、ロックとの睨み合いが始まると、緊張感と威圧感に飲み込まれ、辺りはまた静寂を取り戻した。

「おーっと！ 舞台の上では早くも二人の闘いが始まりました。二人ともすごい迫力で睨み合っております。見えます。私には二人の間に火花が見えます！ 見てください、この野獣のように相手を威嚇する様を！ もうこれは意気込みを聞くのも野暮ってものでしょう！ 私、興奮してまいりました！」

静寂の中、司会だけが今の状況に興奮を隠せない様子だった。やっといベントが盛り上がってきたんだ。そりゃ司会としては興奮も

するだろう。

「さあ、この興奮が冷めてしまう前に、早速今回のイベントの説明に入りましょう。えー、今回は様々な対決方法で争ってもらい、先に三勝した方の勝利とさせていただきます。尚、決闘の内容はロツクさんに全て委ねているという事なので、ロツクさんの方から第一戦目の内容をお話いただきましょう！」

おいおい、全部ロツクが考えただつて？ それってシャーナ様にすぐ不利なんじゃないのか？ いくらシャーナ様でも向こうの得意な勝負を仕掛けられては苦戦は必至だろう。

シャーナ様としては、上級鍛冶師の意地もあるので、ロツクの提案を受けざるを得なかったのだろうが、あまりにもセコすぎる。俺は絶対そんなの認め

「よっしゃー、じゃあ発表させてもらうぜ。いいか、最高の鍛冶師つてのは、カリスマ性も重要なんだ。ダサい奴が作った剣なんて使いたくもないからな！ だから、第一戦目は見た目勝負だ！」

……は？

「み、見た目ですか？」

「そうさ、文字通り、見た目だけで判断してくれよな！ サブライ！」

何の問題もなかった。いや、違う意味で問題だらけだ。

もはや静寂なんて言葉では生温い。これはもう時が止まったと言つていい。

観客はもちろん、舞台上のシャーナ様と司会までもが、ロツクの発言によって微動だにできずにポカーンとだらしなく口を開けて突

っ立っている。

「……と……と……というわけで……一回戦は……見た目勝負に決定しました……。……では、審査員の方、早速どちらの見た目がい
いか、審査をどうぞ！」

さすがは自称有名司会。他の誰よりも早く立ち直り、くだらない勝負を進行させようとしている。あんたプロだよ。

しかし、そのプロ根性が最悪の事態を招く事になるとは予想していなかっただろう。

司会の大声で我に返った観客達は、一斉に今までの不満を爆発させた。

「ふざけんなー！ そんなの審査するまでもねえだろー！ 大体、その審査員どもは誰なんだー！」

「世紀の一戦とか言って、やる前から勝負みえてるじゃない！ シャーナちゃんの勝ちに決まってるわよ、そんなの！」

「そうだそうだ！ シャーナちゃんの勝ちだー！ さっさと二回戦に進めろー！」

観客は完全に暴徒と化している。さすがのロックもこの状況には動揺を隠しきれないようで、ひたすら「サプライ！」と連呼している。でも良かったじゃないか、宣言通りに観客を熱くできたぞ。

「み、皆さん落ちついて！ わかりました。第一戦はシャーナの勝ちとします！ 続きましての二回戦は事前に情報をいただいております！ 二回戦は鍛冶師たるもの手先が器用でセンスが必要というわけで、木彫り人形対決となります！ 一応人形としていますが、今回はどんな形にしようかと自由とさせていただきます。ですが、今ここで作成するには時間がかかり過ぎるので、実は作品は事前に預

かつており」

司会が一生懸命に説明をしているが、最早、話を聞いている観客など一人もおらず、エルトリル広場は混沌の渦に飲み込まれていた。

「お、おいアンナ！ どうするんだよ、これ！」

「ど、どうするもこうするも……止めるのよ！ とりあえず止めるのよ！」

「どつやって！」

「知らないわよ、そんな事！」

ライクとアンナは必死で暴れ狂う観客を止めようとしているが、暴徒と化した奴らをたった二人で止められるはずもなかった。

「ヘイ、お前らこれを見ても、まだ文句が言えるかな！ 見ろ、我が最高傑作を！」

ロツクが舞台上から叫んだ。手にはいつの間にか何やら木彫りの物体が持たれていた。そういえば、次は木彫り人形対決だったな。

観客達は依然として怒りのオーラを醸し出しているが、嫌々ながらもロツクに注目をした。

ライクとアンナはその様子を見て、仲良く安堵の溜息を吐いた。

どれどれ、一体どんな木彫り人形を作った……何だあれは。

正直な感想を述べるとカツコイイ。カツコイイんだけど……あれが何なのかがまったく分からない。

ギターとかいう弦楽器に若干似ている気がするが、ロツクの作品は奴の服と同様でトゲトゲしい印象である。俺が見た事のあるギタ

「はもつとシンプルで素朴な感じであって、決してあんなに禍々しい物ではない。いやそれが悪いというわけではなく、むしろそれがカッコイイわけだが……」。

観客達もあれが何なのか分かっていないようで、ほとんどが眉をひそめて、その謎の物体に釘付けとなっている。

何はともあれ、観客達が静かになってなつてよかつた……

「へい、どうだエルトリルの男女達よ、俺の作品がすごすぎて声も出ないだろう！ いいんだぞ、俺に賛美の声を送つてもな！ ハーハッハッハ！」

と思つた矢先に、ロツクが余計な事を言いやがつた。

観客達がそれを聞き流してくれるはずもなく……

「ふざけんなー！ 誰がテメエなんかに賛美なんか送るかー！」

「すごいとかいう以前に何なんだそれはー！」

「冗談は服装と顔だけにしろー！」

「木を彫る前に自分のその薄っぺらい顔をもつと彫れー！」

予想通り、観客は再び暴徒と化した。しかも先程よりも圧倒的にパワーアップしている。アンナの毒舌にもまったく屈しなかつたロツクだが、今回はもう強がりの一つも言えない状況にまで追い込まれている。

もう誰もこの状況を治められる者などいないと思われた、その時ついにあの御方が動き出した。

「皆さん、落ち着いてくださいですよ！ 私の作品も是非見てください。ほら、私の自信作ですよ、可愛いでしょ……！」

直後、再び広場の時間が止まった。

8・ソツとする剣の研ぎ方

「どうしよう、これ……」

知らん。部屋にでも飾ればいいんじゃないのか？

ただし、俺の寢床である剣立ての近くに置くのだけは勘弁してくれよ。何か夜とか勝手に動き出しそうで怖いから。

鍛冶バカ世界一決定戦は二回戦が終わり、今は休憩中だ。

暴徒と化していた観客達も落ち着きを取り戻している。エルトリルにまた平穩が訪れたのだ。

平穩に導いてくれた功労者が、今ライクが手に持って扱いに困っている物体なわけだが……うーん、何度見てもおぞましい。

片手に収まる程度の小さな木製の動物……らしき物。

頭部という物は存在せず、胴体はどうすればこんな風になるのか理解できない程に複雑怪奇。無理矢理例えるならば、エルガニまんじゅうを数個踏みつぶした後に、グツチャグチャに混ぜ合わせたといった感じだろうか。

とにかく、足が四本あるという事以外に生物としての特徴が見受けられないのだが、作った本人がそう主張しているのだから動物なのだろう。

ちなみに作った本人というのが誰の事は、あの御方の名誉のためにも、絶対言えない。

「……それ何？」

「ん？ 何だ、ミエルじゃないか。お前も観戦しに来たのか。これはシャーナが二回戦のために作った……何だと思っ？」

言っなっば！

「……タイガー？」

「……タイガーに謝れ」

「ごめんなさい」

ミエルはライクに言われると、すぐさま謝った。謝るぐらいなら最初から言っな。

ミエルよ、何でお前は昨日からそんなにタイガーに執着しているんだ。

「秘密」

「秘密？ いや別に秘密にしているわけではないが……これはあれだ、ハムスターだ」

それは秘密にしていた方が良かったのではないだろうか。

そうだ、これは認めたくないがハムスターの木彫り人形だ。

その事実さえ知らなければ、慣れてくればシャーナ様を作ったという補正のおかげで、可愛く見えてきた可能性もあった。なんであそこでシャーナ様は「どうです？ 可愛いハムスターでしょ？」とか言っちやっただのかね。

おかげで、ドンチャカチャン全員がロツクに投票してしまった。

結果、ライクは機嫌を悪くしたシャーナ様に、このハムスターらしい物を押しつけられたというワケだ。

アイアンブレイカーを料理した時から分かっていた事だが、本当にシャーナ様は鍛冶以外の才能は皆無のようだ。

さすがの無愛想女もこれには驚きを隠せないだろう。

「ふーん……実物よりも可愛い」

……は？

「可愛いつてこれがか？」

「うん」

驚くどころか、逆にこちらが驚かされた。こいつは感情を殺し続けたきた反動で、感性がねじ曲がってしまったのだろうか。いや、元から変に決まってる。

……あれ、おかしいな。こついう事言つと必ず睨んでくるのに、何の反応もないな。

もしかして、俺が嫌みを言うのを察知して、俺の意思を遮断したのか。魔力の無駄遣いしやがって。

「……欲しいか？」

「くれるの？」

「欲しいならやるよ。でもシャーナには内緒にしてくれよ」
「わかった」

ミエルはライクからハムスターらしい物を受け取ると、それをじつと見つめて動かなくなつた。表情はまったく変化していないが、余程嬉しかったのだろう。

そんなミエルの様子を見ると、何故か不思議とハムスターらしき物が少しだけ可愛く見えてきた。それどころか何やら光輝いているようにさえ見える。

「お、ライクさんにミエルさんじゃないですかい。どうですかい？
二人の勝負の方は」

お前の仕業かい。

ハムスターらしき物が輝いているのではなく、ハイネの頭が太陽光を反射して、その光によって輝いているように見えていただけだった。紛らわしい。

「今二回戦まで終わって同点だよ」

「ほう、シャーナ様が一敗したんですか」

「ああ、木彫り人形対決でな」

おい、ミエルが持つてるハムスターらしい物を指差しながら言うな。これ以上、シャーナ様の恥を晒さないであげて！

「ああ……、それは仕方ないですな。シャーナ様は鍛冶以外は何もできないですから。まあそれだけ鍛冶師になるために努力をしていたって事ですがね」

そういえば、何でシャーナ様は鍛冶師を目指したのだろうか。前に聞いた理由はエリスの作った嘘話だったので、真の理由を聞いてみたいもんだ。

「さあ、皆様お待たせ致しました。帰ってきました、司会のイアン・スミノフです！ちなみに私が何故、司会や警報役を任されているかというと、誰よりも声が大きいからです！」

お前の理由は聞いてない。知ってるし。また観客達を暴徒化させるつもりか、こいつは。

「ちっ、あいつの声はいつ聞いてもウルサイですな。喉仏えぐり取ってやりましょうか」

ハイネのツルツルの頭に多数の血管が、迷路のように浮き上がってきている。こいつが言くと、まったく冗談に聞こえない。

「さあ早速、三回戦を始めましょうか。ではロックさんから三回戦の内容を発表していただきましょう」

いつの間にか司会だけではなく、シャーナ様とロックも舞台上に戻ってきていた。

うっ、また広場の空気がピリピリし始めたよ。

司会とロックとドンチャカチャンの悪口に華を咲かせていた観客達の冷たい視線が、一気に舞台上に押し寄せている。

次、またくだらない対決方法だったら、今度こそ広場が血に染まるぞ。

「へい、お前ら喜べ！ ついに俺の技が味わえるぜ！ お次の対決は鍛冶師にとって武器作成と同等の重要さを誇る研ぎ勝負だ！ 作った武器が折れるまで責任持って面倒をみる。それが真の鍛冶師ってもんだからな！」

良かった。やっとまともな鍛冶師の勝負になった。ロックの分際で中々良い事言っじゃないか。腐っても中級鍛冶師って事か。

シャーナ様の登場以来の歓声が広場中から沸き起こっている。もちろん、「最初からそういう勝負しなさいよね、馬鹿じゃないの！ 私の労力返しなさいよ」など、苦情の声も混ざっているけどな。主に文句言ってるのはアンナなワケだが。お前はちゃんと仕事しろ。

「さあ、やっと鍛冶師の決闘らしくなってきましたよ！ 研ぎ技勝負という事ですので、お二人にはこのボロボロの剣を研いでいただ

きます！」

そう言った司会の両手にはそれぞれ一本ずつ剣……あの剣は！

「今回、研ぎ用の剣を提供してくださったのは中古武器屋『エンシエントウエポン』の店主様です！ あそこは良い剣がお安く購入できますので、皆様一度はお立ち寄りくださいませ！」

エンシエントウエポン！ 間違いない、あの俺に負けず劣らずの簡素な形、あのボロボロの柄！

かすかにだが、覚えているぞ。あの二つの剣は俺がいた中古武器屋で、俺と共に誰にも見向きもされなかった悲しき剣達だ。まさかこんな形で再会する事になるとは……。

「よし、貸しな！ 俺がこいつを熱く生まれ変わらせてやるぜ！」
「私もこの子をピカピカにしてやるですよ！」

ああ、俺の同胞が変質者と女神様の手に……いやこれはチャンスだ。お前達も立派な剣に生まれ変わってあんな狭苦しい場所から抜け出すんだ！

……いやおい待て、あいつは何をしているんだ。

「いえーい！ いくぜー！ 熱くいこうぜー！」

二人の鍛冶師は同時に俺の同胞達を研ぎ始めた。

シャーナ様はいつもと同様、剣を抱くようにして、優しくナデるように研いでいる。

その研いでいる姿はまるで聖母の様だ。ずっと見ていたい、ずっと

と見ていたのだが……、不覚にもアイツに目がいつてしまつう。

他の観客達も同じような様子だった。名残惜しそうにシャーナ様の方をチラ見しているが、どうしてもロックが気になって仕方がない様子だ。

「ハイハイハイハイ！ ハイヘヘーイ！」

何故だ、何故こいつは剣を研ぐのに片足で激しくステップを刻んでいるんだ。それよりも何でわざわざそんな体勢で研ぐんだ……。

左手で剣を逆手で持ち、そのまま剣身を腰に当てて抜刀の構えをとっている。そして右手に持った携帯砥石を激しく上下にスライドさせて剣を研いでいる。

驚くべき状況だが、もっと驚くべきなのは、その状況化で見事に剣を研いでいるという事だ。

一見、乱暴に研いでいるように見えるが、とても柔らかいタッチで計算されつくした繊細さがある。その上、体全身を熱くさせてくれる。一度味わった俺が言うんだから間違いない。あんな状態で研がれていたかと思うと、ゾツとするけどな。

「サブライ！ 出来た！」

お前は何でもサブライって言えばいいと思ってるだろ。

そんなツツコミがどうでもよくなる程に、ロックの研いだ剣は剣身だけではあるが、まるで新品のようにピカピカしていた。それどころか、あの剣を見ていると不思議とこちらまで熱い気分させられる。

「「こちらもできましたよ！」

対するシャーナ様の研いだ剣も完璧だった。研がれたその刃は大地さえも斬れそうな程に鋭い。

……だが、それだけだ。ロックの研いだ剣のように不思議な力を感じない。いつもの優しさを感じないんだ。

俺がこの前、シャーナ様の工房で研がれた時にも思った事なのだが、今までのエンゴク鉱石の砥石グローブと比べると、圧倒的に優しさが足りない。決して、アイアンブレイカーの鉱石が悪いというわけではないのだが、何かが違うんだ……。

あまり認めたくはないが、ロックの研いだ剣の方が優れている。剣の俺が言うのだから間違いない。

もちろん、それでもやはりドンチャカチャンに比べたら、シャーナ様の研ぎの完成度が別次元な事に変わりはない。

そんな別次元の二人の研ぎの違いを、ドンチャカチャンは正当に評価できるのだろうか……。

俺はおろか、舞台を見つめる観客の全員が、その僅かな差しかない勝負の行方を固唾を飲んで見守っていた。

「素晴らしい！二人とも素晴らしい出来です！これは甲乙つけがたいです！しかし、私にはまったく分かりません！だから聞きましよう！審査員の御三方、審査をどうぞ！」

「さあ、どうやら答えが出たようです。皆様、心の準備はいいですか？ 聞いちゃいます、聞いちゃいますよ!？」

早くしろ。

ドンチャカチャンによる審査は、数分にわたって行われた。そして今、二つの剣を舐め回すかのように見ていた三人の審査結果が発表されようとしている。

しかし、審査の様子を見ていた限りでは、もう勝負は決まっているようなものだ。

「では、聞きましょう！ 審査員の御三方、結果をどうぞ！」

「シャーナの勝ちです！」

「シャーナの勝ちです！」

「……シャーナだ」

「おおーっと、接戦が予想されたが、予想を裏切ったのシャーナの圧勝だああああ！」

圧勝？ あの二本の剣を見て、どの口がそんな事を言う。

やはり、ドンチャカチャンにあの違いを見分けるのは荷が重すぎたか。

三人は審査している間、審査している振りをしているだけだった。ドンのオツチャンは、まだまともに悩んでいる節はあったが、チャカとチャンは終始チンプンカンプンといった表情を浮かべていた。結局、最後は上級鍛冶師という事と、シャーナ様という存在の補正の影響で、シャーナ様を選んだに違いない。

だからといって、剣の俺だからこそ分かった程度の差なので、ドンチャカチャンを責める気にはなれない。

だが、これでは舞台上で絶句しているロックが不憫すぎてならない。観客のシャーナ様に対する声援と拍手喝采が、更にロックを惨めにしている。

鍛冶師コンテストの時もロックはこういう状況に立たされていたのだろう。そしてまた、ロックはシャーナ様が可愛さで勝ったと思うのだろう……

「ちょっと待ってください！」

な、なんだ！？

突然、エルトリル広場を力強い叫び声が襲い、一瞬で観客達を黙らせてしまった。

その声の主はシャーナ様だった。その真剣な表情は、さすがは上級鍛冶師だという貫禄があった。

「ど、どうしたんですか？ シャーナ様？」

「どうしたもこうしたありません。今の勝負は……ロックの勝ちです」

……俺は幻聴でも聞いているのか？

あの誇り高いシャーナ様が負けを認めたように聞こえたが……。

「あ、あの、シャーナさん。今何て……」

「だから、今のは私の負けです。どう見ても、ロックの研いだ剣の方が素晴らしいです。確実に私の負けです」

幻聴ではなかった。シャーナ様は確かにロックの研いだ剣を正当に評価し、自らの負けを認めている。

「で、ですが……審査員の方が……」

「確かに審査員の判断に逆らうのは失礼だとは思いますが。でも、私にも誇りがあります。私はもう自分がヒイキされたなんてロックに思われたくないんです。お願いします、私の負けにしてください」

シャーナ様は信じられない事に、負けを認めるばかりか自分が負けたという事を認めてくれと頭を下げている。

そんな様子をロックが黙って見過ごすはずはなかった。

「へい、シャーナ！ どういうつもりだ。お前はみすみす勝利を手放すというのか！ ふざけるな、俺を侮辱するつもりか！」

「侮辱なんてしてません。私は二つの剣を見て感じた事をそのまま言っているだけです！ ……どうしても、納得がいかないのなら、勝ちを譲る代わりに四回戦目の対決方法を私に決めさせてください。それならどうです？」

「何だと？ 何で対決するっていうんだ？」

「昔話です」

「は？ 昔話だと？」

「そうですね、その内容は鍛冶師になろうと思った理由です。ロックだってその歳で中級鍛冶師になったんですから、あるでしょう？ 理由ぐらい」

「も、もちろんだ、ももちろんだとも。理由がなかったらサブライダゼ！」

「ないな、こいつ。」

でも、理由もなしに中級鍛冶師になってしまったのは逆にすごいと思うぞ。尊敬はしないけど。」

「ふーん、じゃあいいですよね？」

「くっ……いいだろう、そんなに話したいなら話せばいいじゃないか。聞いてやるから今すぐ話しな！」

ロックがそう言うと、シャーナ様は司会や観客の動揺してる様子には目も向けず、ゆっくりと口を開いた。

ふと周囲を見回すと、何故かハイネが泣いていた。

8 ソツとする剣の研ぎ方（後書き）

これ以降は少し不定期になります。

9・素直な笑顔（前書き）

今回の語り手はシャーナです。

9・素直な笑顔

私が初めて槌を握ったのは、十歳の時でした。

私の母さんはレイテナ国王都で小さな鍛冶屋を営んでいました。

小さいながらも常連客は多く、そこそこ裕福な生活をしていました。

それもそのはずで、母さんは中級鍛冶師の称号を持っていて、小さな鍛冶屋なんてやっているのがおかしいくらい、王都でもかなり有名だったからです。

でも、常連客が多かった理由はそれだけではありませんでした。一番の理由は母さんの人柄にあったのです。

母さんはいつも明るく笑顔の絶えない人で、誰にでも正直に真剣に向き合う人なのです。

それは私に対しても同じで、私が何か失敗したりすると、真剣に怒りはするものの、最後は笑顔でいつも許してくれていました。本当に優しい母さんです。

でも、その当時の私には逆にその優しさと笑顔が怖かったです。何故なら、私は母さんの本当の子供じゃなかったからです。母さんは結婚なんてしていません。昔も今も独身です。

私の本当の母親は、私が八歳の時に父親に捨てられ、私もまた母親に捨てられました。

その後、私は親戚などをタライ回しにされました。

誰もが表面上では私の事を哀れんで、最初は優しくしてくれましたが、内心では邪魔者としか思われていませんでした。

そして次第に、それはあからさまな嫌がらせという形に変わっていき、出ていかなくてはいけないという状況を何回も繰り返しました。

そしてついには、私の居場所はどこにも無くなり、王都の路地裏でうずくまり、体が衰弱していくのを静かに受け止めていました。すると、そこに母さんが現れて私を拾ってくれたんです。母さんは私を孤児院に連れて行く事もなく、引き取ってくれました。

母さんが差し伸べてくれた手はとても暖かくて、この人は優しい人だと直感しました。

実際、母さんは私に対して、とても優しくしてくれました。

でも、その優しさが私を追いつめていきました。

終わらない優しさなんかない。当時の私はそう思っていました。

だから、私は必死で母さんのご機嫌を取ろうとしました。少しでも長く、その居心地のいい優しい場所に居たかったから。

私は母さんに鍛冶屋の仕事を覚えたいと、自分から言いました。

母さんは本当に鍛冶屋という仕事を愛していました。いつも楽しそうに剣を鍛える姿はとても魅力的でした。

だから、母さんの側に少しでも長く居るためには、自分も鍛冶屋の仕事ができるようになるしかないと思ったんです。

正直、私は鍛冶がまったく好きにはなれませんでした。熱いし、疲れるし、難しいし。

母さんはその事に気付いたのか、無理に鍛冶なんか覚えなくていいと言ってくれましたが、当時の私は無理をするしかなかったんです。

それはもう必死でした。辛くて泣いた時もありました。それでも、ただただ必死に頑張りました。

その頑張りの芽が開いたのは、十二歳の時に出場した小さな鍛冶コンテストでした。残念ながら、私は優勝も準優勝もできませんでした。でも、審査員の一人が私を特別賞に選んでくれたのです。

十二歳で特別賞を貰うなんて事は前例がなく、私はとても注目を浴びました。母さんの常連客だった人達も、それはもう自分の事のように喜んでくれましたよ。ただ、母さんだけは違いました。

何が違ったかというと、笑顔が違ったんです。いつもは裏表のない素直な笑顔をしているのに、その時の母さんの笑顔はどこかぎこちなく、無理をしているように見えました。

私は知っていました。何度も見たことのある偽りの笑顔。私の事を邪魔者だと思っている作り笑顔。

分かりませんでした。何故、賞を取ったのに邪魔者だと思われたか、私にはまったく理解ができませんでした。

泣きました。私は混乱してどうすればいいのか分からなくなって、その場で泣き崩れました。

母さんはすごく困った顔をしていました。でも、私にはもうこうするしかなかったのです。泣きながら「捨てないで……捨てないで……」と、心の中で何度も訴えるしか。

それがあの事件の引き金になるとも知らずに……。

事件は三日後に鍛冶屋内で起こりました。

一人の女性が鍛冶屋に訪れたのです。その女性は私の本当の母親でした……。

昔と比べるとかなり痩せていて、髪はボサボサ、服はボロボロでしたが、間違いなく八歳まで一緒に暮らしていた母親でした。

「なあ、シャーナ。本当にこの人がお前の母親なのかい？」

問いかけに私が「はい」と一言で答えると、母さんはとても難しい表情を浮かべて母親をじっと睨んでいました。

何で今さら現れたのかと目で訴えかけていると、私はそう思っていました。それは母親も同じようでした。

「ふん、何で今更この子の前に現れたとでも言いたげね」

母親はそう言いながら、母さんを睨み返しました。

母親が突然訪れるなんて、理由は一つしか考えられません。私の事を連れ戻しにきたのです。

そして私は、また母親の元に戻るんだなと確信していました。母さんは反抗的な態度をとっているものの、内心では私を手放せると喜んでいると思ったからです。

ですが、違いました。私は母さんが次に言った言葉に、耳を疑いました。

「シャーナは絶対に渡さないよ」

信じられませんでした。でも、母さんの真剣な表情を見る限り、嘘をついてるとはどうしても思えませんでした。

「は？ アンタに何でそんな権利があるわけ？ この子は私がお腹を痛めて産んだ子だよ。私の娘なんだよ！」

「ふん、一度捨てておいて、よくそんな事が言えたもんだね。大体何で急に連れ戻す気になったのさ」

「はん、そんなの決まってるじゃないか。シャーナが鍛冶コンテストで賞を取ったからだよ。この子は金になる」

母さんに比べ、母親の言った事はあまりにも予想通りでした。

母親は、父親に捨てられてからというものの、とにかく金に執着し

始めました。今回も、話題性を武器にして私に鍛冶屋でもやらせようと考えていたのでしょう。

そんな母親に対して、母さんは呆れながら言いました。

「正直なのは誉めてやるけど……そんな理由じゃ余計渡せないよ。ちよつとはシャーナの幸せも考えたらどうなんだい!？」

「うるさい! この子は私の娘だ。親のために金を稼ぐなんて当然の事じゃないのさ!」

「ふざけるな、普通逆だろう! 親なら子供のために身を粉にして働いたらどうなんだい!」

その後もそんな言い争いが、数分に渡って繰り広げられました。優勢だったのは母さんの方でした。迫力のある口調に加え、女性とはいえ長年鍛冶屋してきたそのガツシリとした肉体は母親に威圧感を与え続け、母親はどんどん弱腰になっていき、拳げ句には体を震わせ始めました。

ですが、そんな母親よりももっと体を震えさせ、怯えている人がいました。もちろん、私の事です。

私はあまりにも激しい二人の言い争いにどうすればいいか分からなくなり、また母さんがこんなに怒っている姿を初めて見たので恐くなってしまったんです。

そんな私の様子にいち早く気付いたのは、母さんの方でした。

「……もうやめないか、シャーナが怯えているじゃないか。とにかく、私はシャーナを渡す気はないよ」

「ちっ、分かったよ……今日は帰るよ」

母さんがそう言うと、予想外にも母親は潔く引き下がりました。ですが、それには裏があったのです。

「これ、アンタが潔くシャーナを渡してくれたら、お礼にあげようと思っていたんだ。もったいないから食べておくれよ」

そう言つて、母親は母さんに茶色の物体を差し出しました。よく見ると、それはパンでした。お世辞にもおいしそうとは言えない、しなびたパン。お礼の品としてはあまりにも失礼な物でした。

母さんは何故かそれを真剣な眼差しで数秒見つめた後に、そのパンを受け取ると勢いよく口へと運んでいきました。その直後……

「うわああああああああ！」

母さんの断末魔のような叫びが鍛冶屋内に響き渡りました……。

母さんは苦しそうに目を押さえながら、その場にうずくまりました。

それを見て、母親……あの女は……楽しそうに笑ったんです！

「きゃーはっはっは！ 効いてる！ 効いてる！ さすが、こんな薄汚い子を拾った程のお人好し！ 簡単に引つかかってくれたわ！ 残念だけど、アンタの目はもう一生見えないわよ！ 私に逆らった事を後悔する事ね！ シャーナは連れてくよ！」

もうワケがわかりませんでした。何が起こったのか全く理解できませんでした。ただ一つ理解できたのは、母さんの視力を奪ったあの女の手が、私に向かって伸びてきているということ。ですが、分かっていても私は一步も動く事ができずに、ただ涙を浮かべながら頭を左右に振る事しかできませんでした。もちろん、そんな事である女が止まるはずもなく、手はどんどん私に近づいてきました。

その時です。母さんがモンスターの雄叫びのような力強い大声を

発したのは。

「私の娘に指一本でも触れて見る！ ただじゃ済まないぞ！」

「な！？」

「後悔？ そんなのするはずないだろ！むしろ、感謝したいぐらいさ。私に覚悟を決めさせてくれてね！」

「か、覚悟……？」

「そうさ、覚悟さ！ 私は一生シャーナの母親でいる、その覚悟さ！ アンタがパンに毒を仕込んでいたのは知ってたよ。私の情報網を舐めないで欲しいね。シャーナが賞を取った次の日、アンタによく似た女性が闇商人から視力を奪う即効性の神経毒を買ったっていう情報は得てたよ。シャーナが有名になった事で、本当の母親が何かしてくる可能性があると思うてたからね。事件性のありそうな話には警戒してたのさ」

母さんは全てを知っていたのです。最初、難しい表情を浮かべていたのは警戒していたからだっただけです。

「じゃ、じゃあ、アンタは自ら毒入りパンを食べたというの！？」

あの女はお化けでも見たかのような表情で母さんを見ていました。もしかしたら、私もそんな顔をしていたかもしれません。何故、母さんがそこまでしてくれるのか理解できなかつたからです。

「そうさ、ここで断って帰らせても、アンタは諦めないだろう。私のいない間にシャーナを誘拐するかもしれない。そうさせないためにはアンタを犯罪者にして捕まえるしかなかった。アンタが使った神経毒は、国が禁止している薬品の中でも特級だ。生きてる間に牢屋から出てこれると思う……な……よ……う……う……」

母さんはまたその場にうずくまってしまいました。大分、無理をしていたんだと思います……。

あの女はそれを良い事に、また強気になって悪態をつきました。

「は、はん！　へ口へ口で目が見えないくせに調子に乗りやがって。アンタが警備兵を呼ぶ頃には私はもうこんな国からはオサラバさ！　戦争している国に行つて、シャーナの作る剣で一儲けさ！　ははは、ざまあ　」

「そんな事はさせねえぞ！」

あの女の気持ちの悪い高笑いを遮るように、突然、怒鳴り声と共に鍛冶屋入り口の扉が勢いよく開かれました。

そこから入ってきたのは、鍛冶屋の常連客や近所に住む母さんと仲の良い人達でした。狭い鍛冶屋の工房は一気に人で埋めつくされました。入りきれなかった人も含めると、軽く五十人以上はいたんじゃないでしょうか。とにかく凄い人でした。

あの女は何も抵抗できずに捕らえられ、数名の人達が警備兵ギルドに突き出しに行つてくれました。

「シャーナ……シャーナは無事！？」

何とか体調が回復した母さんが最初言った言葉がそれでした。

私が母さんの側に行くと、母さんの目は開いていましたが、その目には輝きがありませんでした。それを見て、私は母さんの視力が無くなったという事実を痛感しました。

私が母さんに拾われなければ、私が捨てられたくないと必死で鍛冶なんてしなければ、こんな事にはならなかった。私が母さんの鍛冶屋としての人生を奪つたんだ。

一気に押し寄せてきた罪悪感に耐えられなくなり、私はまた泣きそうになりました。それを母さんは何故か見抜きました。

「シャーナ、今泣こうとしてるだろ」

私は驚いて何も言えませんでした。

「凶星のようだね。駄目だよ、泣いちゃ駄目だ。笑いな、こういう時こそ笑うんだ」

私には母さんの言う事が理解できませんでした。悲しい時に笑うなんて普通に考えたら無理でしょう。

「いいか、シャーナ。何で私のピンチにこんなに人が助けに来てくれたと思う？」

私はその問いに「分かりません」とだけ答えました。

「いいか、それは私がいつも笑顔でいたからだ。無理してない自然体の笑顔で、皆と正面から向き合ったからだ。笑顔は力なんだ」

「笑顔は力……」

「そうだ、どんな辛い事も笑顔で吹き飛ばせばいいんだ。……とまあ、こんな偉そうな事を言っても、一番向き合いたい奴とはちゃんと向き合えていなかったんだけどな。なあシャーナ、お前は気付いていたみたいだけど、何でお前が賞を取った時に、私が心の底から喜べなかったと思う？」

その質問に、私はまた「分かりません」と一言だけ答えました。

「それはお前が無理をしているのに気付いてたからだ。本当は鍛冶

なんて興味なくせに、私に捨てられないように無理していたからだ。どんなに技術があっても、そんな心意気で剣を作っては駄目なんだ」

「じゃあ……私はどうすれば……」

私にはその一言を絞りだすのが精一杯でした。

そんな私の頭に、母さんは優しくそつと手をおきました。

「自然でいいんだよ。自分の思っている事を素直に言えばいいんだ。私もそうだ。もつと早く素直に言えば良かったんだ。シャーナ、前は私の娘だ。一生大切にしたい娘だ、絶対に捨てたりしないってごめんな、お前のあまりにも必死な様子を見ていたら、どうしてもそんな簡単な事が言えなくてさ……」

悩んでいてくれてたんです。私は一人で必死に頑張っていると思っていた。でも母さんはそれと同じくらい、いえ、それ以上に真剣に私の事で悩んでくれていたに違いありません。自分の目を犠牲にしてまで守ろうなんて、並大抵の覚悟じゃありませんから。

大きな愛、大きすぎる愛、私の罪悪感が押し潰されそうな程の愛情を感じた私が、取った行動は一つ。

「……シャーナ。お前、今……もしかして笑ってるか？」

母さんの言うとおり、私は笑顔を浮かべていました。

自然体というにはあまりにもぎこちない笑顔。笑顔と言っているのかも分からないような、涙混じりの笑顔。

でも確かにそれは、私が母親に捨てられて以降、初めて浮かべた本当の笑顔。母さんの私への大きすぎる愛情を受けて浮かべた、私なりの素直な笑顔。

そして、私はこう言いました。

「母さん……私、鍛冶を続けるよ」

「で、でも。お前は別に鍛冶が……」

「確かに私は母さんに捨てられたくない一心で、鍛冶を習ってきた。でもこれからは違います。私はなりたいんです。母さんのような、笑顔で楽しく愛情を込めて剣を作れる鍛冶屋に。それにそんな状態じゃ剣を研ぐ事すら難しいでしょ？ そうなったら、この常連さん達が困ってしまいますからねえ！」

私がそう言うと、周りからも笑い声が沸き起こり、鍛冶屋内は暖かい笑顔に包まれました。そして母さんは両手で私の頬を触りながら、こう言いました。

「ああ、シャーナ。おかしいな……見えないはずなのに見えるよ。お前の優しい女神様のような笑顔が……」

とまあ、これが私が鍛冶を本気で始めた理由です。

その後、母さんが実は上級鍛冶師になれるチャンスを掴んでいたけど、私のために辞退していたという話を聞いたんです。上級鍛冶師になると忙しすぎて私の面倒が見れないと思ったんでしょうね。

だから、私は母さんの夢を継いで上級鍛冶師になりました。

上級鍛冶師になれたのは、鍛冶に対していつも真剣に素直に真っ正面から笑顔で向き合ってきたからだと思っています。

だからロック、貴方が私にエコひいきで上級鍛冶師になったと言っただけなら全力で異議を唱えますし、逆に貴方が正当な評価をされてい

なくても全力で異議を唱えます。それが私の上級鍛冶師としての誇りです。

私の昔話はこれで以上です。ご静聴ありがとうございました。
よお。

10・勝利へ導く剣となびええええええ！

うるさい、うるさい、うるさい。

「うおおおん！ 何回聞いても良い話ですなああああ！」

だから、うるさいって。こっちは何回もその台詞を聞いてウンザリしてるんだよ、この悪徳解体屋。

「そつだびゃー、シャーナは悩みながら頑張ってきたんだびゃー……」

お前もうるさい。ライクはシャーナ様と同じで捨て子なんだから、お前もちよつとは悩め。

「……ビエーン」

ビエーンじゃないよ。泣くならちゃんと泣け。声で表現するな、この無愛想女。

こいつらだけじゃない。広場にいるほぼ全員が俺の気も知らずに、未だにシャーナ様の昔話に感動の涙を流している。

誰か、あいつの話も聞いてやれよ。

「……と、これが俺様が鍛冶師を目指した理由だ。どうだ、サブライだろ……うっ……」

ほら、終わっちゃったじゃないか。

シャーナ様の話が終わってすぐに、今度はロックが自分の過去を話し始めたが、誰一人としてまともに聞いている奴はいなかった。

のまま灰になってくれると非常に助かる。

「しかし、まさかシャーナも捨て子だったとはなあ……」

「本当に立派ですぜ、シャーナ様も……そのお母さんも……うう……」

お前達はまだ泣いていたのか。

ライクはともかく、ハイネは前からシャーナ様の過去を知っている様子だったのに、この泣き様。似合わないのは名前だけにしてくれ。

「そつだ、捨て子といえば……ミエル、アマンダさん達はどうした？ 来ないのか？」

「後で、皆で来るって言ってた」

「そうか、ケビンって奴がすごい鍛冶に興味持ってたから、見せたいと思ってたんだよ。間に合うといいな」

ああ、いつも俺にダサいって言うてくるアイツか。あんな見た目でしか剣を判断できない子供に見せても無駄だと思っけどな。

だって、どうせ今回は剣作りっていつても

「さて、今回の剣作りですが、まことに申し訳ありませんが、時間の関係上、剣身のみを作ってもらい、その出来で審査させていただきます」

だと思った。

いくらこの二人でも柄の見た目にまでこだわって作るとなると、結構な時間を必要とするだろう。司会の判断は間違っではない。

とはいえ、それで観客が納得するはずもなく、周りからは不満の声が上がり始めている。

だが、それもほんの束の間の事だった。
司会の説明が終わった直後、二人の鍛冶師の元に縦長の鉄塊が、
司会の知り合いらしき者によって持ち運ばれた。それを見るやいな
や、研ぎ勝負の時とは比べ物にならない程の緊張感が周囲を覆う。
観客達はそれに圧倒されて押し黙った。

「さあ、緊迫した空気が漂い始めました。もうすぐです。もうすぐ
最後の決戦が始まります！」

そんな緊張感を台無しにするかのように、司会が素っ頓狂な事を
言い放つ。

もうすぐ始まる？ 違うね、すでに勝負は始まっているんだ。

鉄の塊を見つめる二人の真剣な表情を見てくれ。二人はもうす
でに剣を作り始めているんだ。鉄塊の質や大きさから最適な剣の形を
頭の中でイメージしているのだ。いや、二人の事だ。もうそんな事
はとっくに終わっているのかもしれない。

「それでは準備万端のようなので、始めましょう！ 最終決戦スタ
ート！」

俺の予想通り、司会の掛け声と共に、二人は何の迷いもなく鍛冶
屋箆で鉄塊を掴むと、業火うごめく火炉へとそれを投入していった。
二人同時に鉄塊を投入した時には歓声が起こりもしたが、それか
ら後は静かなものだった。それも当然で、観客からは、火炉の中が
どうなっているかよく見えず、大人二人が中腰で火に何か突っ込ん
でるようにしか見えない。といつても、シャーナ様は後ろ姿も幼く、
どうボカして見ても大人には見えない。

正面でこれなので、裏側にいる観客には火炉の背中しか見えていないだろう。

それでも観客達は、誰も帰ろうとせず、静かに舞台上を固唾を飲みながら見守っていた。あの司会さえもが、邪魔をしてはいけないと思っただのか、静かに二人の様子を伺っている。

聞こえる声といえば、たまに子供が「ねえ、何やってるの？全然見えないよ、つまんないよー」と、親に文句を言っているくらいだ。さすがに子供にこの緊張感を味わえというのは無理な話か。

二人が鉄塊を投入してから結構な時が過ぎた。俺の見立てではもうそろそろだ。見た感じ、鉄塊はほとんど同質で、ほぼ同じ大きさだった。とすれば、二人は同時に

「おおっと、ついに動いた！ しかも二人同時だー！ 何という息ピッタリ！ どちらも譲りません！ 勝負はここからだー！」

また俺の予想通り、二人はほぼ同時に鉄塊を火炉から取り出した。先程まで灰色だった鉄塊がフレビーのように真っ赤になっている。それと同時に、今まで黙っていたうつぶんを晴らすかのように、司会が興奮気味に実況してうるさい。別に速さを競ってるわけじゃないんだぞ、分かっているのか。

そんな俺のどうでもいいツツコミを叩き割るかのように、激しい衝撃音が舞台上から鳴り響いた。

二人がまたしても同時に、真っ赤になった鉄塊を作業台にのせて槌で叩き始めた。鉄は熱いうちに打つとはよく言ったものだ。どうやら速さ勝負というのも、あながち間違っではないのかもしれない。

だが、二人が同じだったのはここまでだ。二人の槌の打ち方は真

逆だった。

「ふんふんふーん、強くて立派な剣になるですよ」

鍛冶なんてものは暑苦しくて、無骨で、大味で、癒しなんて要素は皆無だ。確かにそのはずなんだ。

ならば、今の俺の目の前で繰り広げられている出来事は一体どうやって説明する。

俺にはもう鍛冶師が作業台で剣を作っているようには見えない。あそこは楽園だ。天国だ。天国で女神様が、天使を作っているんだ。神をも魅了してしまいそうなシャーナ様の楽しそうな笑顔が、俺をそんな妄想の世界に旅立たせてしまった。できればもう戻りたくない。

慎重に繰り出される優しくも力強い槌による一撃が心地よい子守歌のように一定のリズムで耳に飛び込んでくる。耳なんてないけどそれは観客達も同じ様で、シャーナ様に注目している観客のほとんどが眠そうな目をしながら、夢の世界へ旅立っているように見える。

これが苦難を乗り越え、本当の愛情と素直な笑顔を手に入れたシャーナ様の真骨頂……駄目だ、今はその話はやめよう。

「ひゃっほー！ 今日調子がいいぜえ！ サブライ！」

対するロックは相変わらず暑苦しい。研ぎの時と同様に激しくリズムを刻むように、軽めの一撃を何度も繰り返している。といても、ただ無闇やたらに連打しているわけではなく、研ぎの時同様、綿密に計算されている様に見える。実際、無骨な鉄塊がロックの一撃ごとに少しずつ鋭い剣の形へと変貌を遂げていつている。

見てるだけで興奮してきた。熱い、熱いぜロック！

……って、え、何で!？

「あいつ……普通に鍛冶できるんだな」

「そのようすなあ……、変な体勢でしか鍛冶ができない呪いで
もかかっていると思ってましたわ」

ライクとハイネの指摘通り、普通だった。とても普通だった。普通
に作業台の前に立って、普通に作業をしてるんだよ！……いや
それが普通なただけだね。

まあ、研ぎと同じ体勢で鉄塊を打とうものなら、たちまち腰は大
火傷だ。したくてもできないというのが正解だろうな。

ライクとハイネの会話に周りの観客が無言で相槌を打っている。
この短時間でロックは完全に変な鍛冶師のレッテルを貼られている。
本当の事だから仕方がないが……、哀れロック。

そんなわけで、二人の槌打ちはどちらも個性的で無駄がない。完
璧に自分のペースと力加減というものを把握しているからこそその芸
当だ。さすが上級鍛冶師と中級鍛冶師。

しかし、そんな真逆な打ち方にも関わらず、二人の奏でる槌の音
色はまったく競合してなく、むしろ合わさって一つの音楽のようにな
っている。これぞ正に熱く痺れる魂と優しくも力強い想いの奇跡
の共演といえるのではないだろうか！

……何か俺、さつきから一人で盛り上がって恥ずかしい事言っ
てない？ 大丈夫？ 聞かれてない？

「……ぶぶぶ……」

聞かれてたー！

意思を遮断するならちゃん最後まで遮断しとけよ！ それとも魔力が尽きたのか？ そんな事はどうでもいい。どんな理由であれ聞かないでよね、エッチ！ あの二人のリズムに合わせてストリップさせるぞ、こら。

「ねえライク。ついでだから貴方の剣も火炉に突っ込んでもらったら？」

「……遠慮します」

や、やだなあミエルさん。冗談ですよ、冗談……それにもうストリップショーはできないようだ。

「おおっと、二人の手が止まりましたよ！ 二人共、値踏みするかのよう真剣に自分の作品をチェックしております！」

先にロツク、少し遅れてシャーナ様がそれぞれ槌を置いて確認作業に移っている。さすがは二日で三十本作る怪物、速度が尋常ではない。しかも見る限り、どちらもここまでの出来は完璧といったところだ。もうほとんど剣の形が出来上がっている。

しかし、勝負はここから重要だ。ここから作業は焼き入れという行程に移る。

焼き入れとは、まだ熱の残っている鉄塊を冷水で急激に冷やす作業だ。それによって鉄塊の体は引き締められ、そこでやっと剣としての強靱な硬さを手に入れる重要な行程なのだが、これがまた難しいんだ。理想的な硬度にするタイミングは様々な要素によって毎回変化する。それを完璧に読みとって最適なタイミングで取り出すには、かなりの修行が必要とされる。ここが剣の運命の分かれ道とい

っていいだろう。

まあ、この二人なら突発的なアクシデントでもない限り、タイミングを間違うなんて事はないと思うが……。

「よっしゃー、いくぜ！」

先に動いたのはロックだった。鉄塊を鍛冶屋箆で掴んだまま、作業台の横手にある冷水の入った桶へと持っていくと、素早く鉄塊の全身を冷水へと投入した。

刹那、舞台上に水蒸気が巻き起こり、広場中へと蔓延していく。観客から一気に盛り上がった歓声が飛び交う。

その中でも一際元気で明るい声が、舞台を挟んで反対方向から聞こえてきた。

「すげー！ アマンド先生、鍛冶だよ鍛冶！ ここからじゃよく見えないよー！」

「ちょっと、ケビン！ どこ行くの！ 戻ってきなさい！」

「こら！ その君、危ないから止まりなさい！」

同じ方向からアマンドとアンナの叫び声が聞こえてきた。

何だ、何が起こって……あのクソガキ何してる！？

「おおっと、突然舞台上に一人の少年が乱入してきたー！」

言ってる場合か！ 止めろよ！

乱入者は間違いない、俺をダサイ呼ばわりするケビンとかいうクソガキだ。あるうことが、あいつは焼き入れ作業に移ろうとしているシャーナ様の方に向かっていき

「な、何ですか！？」

「うわあ!？」

……バシャーン! バシャーンだよ、それ以外に表現の仕様がな
い。

やりやがったよ、あのクソガキ……、シャーナ様の冷水入りの桶
を盛大にひっくり返しやがった。

「うわああああああん! ごめんなさああああい!」
「いいから君、はやく降りましょう!」

泣きじゃくるクソガキを、アンナが抱きかかえて舞台から降ろし
た。ぶちまけられた冷水が舞台を覆っている布に染み込んでいくの
を、シャーナ様はただ呆然と見ているだけだった。

「だ、誰か観客の方で、冷水入りの桶を持っている方はいませんか
ー!？」

いるわけないだろ! 落ち着け!

いや、落ち着いている場合ではない。こんな事をしている間にも
シャーナ様の鉄塊は刻一刻と熱を失っている。このままでは折角シ
ャーナ様が愛情を込めて打ったのが台無しになってしまう。唯一、
桶を持っているのはロックだが……、駄目だ、奴は真剣に取り出す
タイミングを伺っていて騒ぎにすら気付いていない。

そ、そうだ! ミエルだ! ミエルなら魔具で何とかできるんじ
やないのか!？」

最悪、靴の魔具を使って全速力で水を汲んでくるとか……駄目だ、
ミエルは無言で首を振っている。

やはり魔力が尽きてたんだ。だから無駄遣いするなと言ったのに。

……ふざけるな、ふざけるなよ。この世に神がいるというなら、お前は最低な神だ。シャーナ様は今まで十分苦しんで、誰よりも頑張ってきたじゃないか。それなのに、何でまだこんな仕打ちを仕掛けるんだよ。まだ彼女は苦しまないといけないのかよ。

ふざけるなよ……我慢してたけど、もう限界だ。必死でツッコミで気を紛らわしてたけど、もう無理だ……。

シャーナ様……シャーナ様……シャーナ様は何も悪くないよおおおおおおお！

「おいおい、大丈夫なのかシャーナ……冷たい!?!」

シャーナ様は立派だよおおお、頑張ってきたよおおお、シャーナ様の母さんも立派だよおおお、二人共何も悪くないよおおおお！ うびええええん！

「ど、どうしましたライクさん!?!」

「それが突然サウザートから水が……あ、もしかしたらロックが出してる水蒸気を吸い込んだのかもしれない!」

「け、剣って水蒸気吸い込むんですかい!?!」

誰か助けてやってくれびよ！ 俺みたいな落ちこぼれじゃ何もできなびよ……だから誰でもいいからシャーナさびやを助けてやってくれびよ……。

「分からないが、ステイシル火山でも同じ現象が……そんな事より、これは使えるぞ！ シャーナ、受け取れ!」

「はう!?!」

びゃああああ！？　なんかついてびゅっつっつっつー！

「ラ、ライクさん！？　サウザートさん、何でこんなにビシヨビシヨなんですか！？」

な、なんびゃ！？　なんびえシャーナさびゃがこんなに近くにいるびよ……？

「サウザートは水蒸気を溜めこんで水を出す性質があるみたいなんだ！　その水を使ってくれ！」

「す、水蒸気を！？　……分かりました。サウザートさん、使わせてもらいますですー！」

びえ？　おでを何につかびゅの？　なんびえ鞘からぬがしてるびよ……何で鉄塊に近づけてるびよ……

あづづづづづづづづづづづづづづづづー！

「すごい、すごい量の水が出てますー！　これならいけそうですー！」

あづいびよおおおおー！

逝けちやうびよおおおおー！

蒸気でなんびよ見えないびよおおおおー！

何でこうなつたびよおおおおー！

「頑張ってくださいサウザードさん。もう少しの辛抱ですー！」

頑張るけどあついびよおおおおー！

駄目びゃ、このままじゃ熱で変形するびよ、こうなつたびゃ……

11・二つの頂点

「御覧ください。この甲乙つけ難い美しさ。どちらも光輝いています。ただ太陽光を反射して輝いてるだけではありません。二人の剣に対する熱意がこもっているからこそ、ここまで光輝いているのです！」

ほう、たまには司会らしい気の効いた事も言えるじゃないか。だが司会よ、お前の話には大事な事が欠けている。

シャーナ様の作った剣が今こうして光輝いているのは、俺が熱さに耐えながら頑張り、泣きじゃくりながらも、『勝利へ導く剣になれ』という願いを込めたからなのだ。

そうだ、そうに違いない。そうだと思いたい。むしろ、そうじゃないと泣く……駄目駄目、泣くのはもう駄目だ。あまりの急展開で、シャーナ様が奇跡的にも俺の涙について追求してこなかったんだから。絶対にシャーナ様が思い出すような事をしてはならないのだ。

「……………つぶつぶ……………」

だから、さつきから必死で笑いを堪えている無愛想な女。お前は何かあっても絶対笑うなよ。もし笑ったら、お前が次作る魔具は一生笑い続ける魔具になるからな。覚悟しとけよ。

「さて、いつまでもこの二つの剣身を私が独占しているわけにもいきません。名残惜しいですが、審査員の御三方に委ねるとしましゅー！」

司会は両手に一本ずつ握っている剣身を舞台下のドンチャカチャンに持って行こうと歩を進め始めたが、ドンチャカチャンはあから

さまに嫌そうな顔で、それを迎えにいらした。三回戦の一件で、完全に自信を無くしているようだ。

「ちよつと待った！」

そんなドンチャカチャンを助けるかのように、どこからともなく……なんだ、ロックか。

舞台上から何故かセクシーな感じのポーズをキメながら司会を呼び止めたのはロックだった。

ドンチャカチャンの顔にいつそう陰りが見え始めた。

「な、何ですか？ ロックさん……」

司会も『もうこれ以上は勘弁してください……』とでも言いたそうに目に涙を浮かべながら、ロックに聞き返した。元氣そうに振る舞ってはいたが、相当心労が溜まっているとみえる。

まあ、その気持ちはとても分かる。ロックがロクな事を言うはずがないからな。今は決してギャグではない。

「今の勝負……俺様の負けだ」

ほら、言わんことじゃない。何か自分の負けとか言いだし……え？

「ロ、ロック!? どういう事ですか!？」

さすがのシャーナ様もこれには驚きを隠せない様子だ。

司会も何か言おうとしたが、シャーナ様に先を越されて押し黙ってしまった。

「へん、俺だって誇りある中級鍛冶師だ。自分の負けって事ぐらい、

審査なんかされなくても分かるさ。形、刃の鋭さ、一瞬触っただけでも分かった硬度の差、どれを取ってもシャーナの剣身の方が優れている。それだけの事さ」

ロツクのその言葉を受けて、ドンチャカチャンの三人は安堵の溜息をついていた。

アンタら、審査員としての存在を完全否定されているんだぞ、いいのかそれで。

「それに本当は分かってんだよ、あの鍛冶コンテストの時も俺の完全な負けだったって事はよ。ただ、俺にも意地つてもんがあった。だからどうしても、もう一度お前と勝負したかったんだ。まあ結局前回も今回も、お前の鍛冶に対する大きすぎる熱意と愛情にやられちまったがな」

「ロツク……」

「シャーナ、聞いてくれ……俺様、音楽家になるぜ！」

「……は？」

お前はもつといいのかそれで。何を言い出してんだこいつ……。折角、シャーナ様がお前なんかに感動しかけてたのに、急変してもの凄い『へ』の字顔になっているじゃないか。

シャーナ様だけじゃない。広場にいる全ての者が置いてけぼりにされている。

「俺、実は前から音楽に興味があったんだ」

「はあ、そうですか……」

「それで、今回槌で鉄を鍛えてる時に、お前の打つ音色と俺の打つ音色が合わさって、とても心地良かったんだ」

ああ、確かにそれは俺も思ったが……。

「その時、俺は気付いたんだ。俺は鍛冶では世界中の人間を熱くする事はできなかったが、音楽でならできるってな!」

どうしてそう思った。そもそも、鍛冶で熱くしようというのが間違いだ。

「俺様は今度こそやってみせるぜ。俺だけの音楽で、俺という名を音楽史に刻むんだ! 俺様、ロック・エレキの名前をな!」

「……あ、うん、頑張ってください」

シャーナ様は困惑した結果、他人事にしてしまう事を選んだようだ。まったく声に生気が感じられない。

それでも、ロックの熱意は止まる事を知らなかった。

「応援ありがとうよ、必ず期待に応えてやるぜ! シャーナ、お前も頑張れよ。お前なら必ず世界一の熱い鍛冶師になれると信じてるぜ。だからといっては何だが……俺の相棒をお前に託す!」

そう言つて、ロックはシャーナ様の右手に何かを握らせた。気安く俺の女神様に触るな。

「それは俺が前から使っていた据え置き砥石を、持ってくるには重すぎたので加工して携帯砥石にしたものだ。一緒に全てを熱くしようぜっていう俺の熱く痺れる魂が注がれているんだぜ。サブライム!」

シャーナ様の右手に置かれたものは確かに俺を熱くした携帯砥石で間違いなかった。

おいおい、何かマンズブラッドより危なそうな想いが込められて

いるぞ。

おいミエル、あれ魔具だったりしない……あれ？ いつの間にか居なくなってるぞ、あいつ。

「とにかく、それさえあればお前はもつと熱くなれる。だからそれを使って世界一熱い上級鍛冶師を目指してくれ！ な！」

「え、いや、あの、その……はい、頑張ります」

俺がミエルを探して視界をグルグルさせている間に、シャーナ様はロツクに無理矢理熱くなる事を強要させられていた。

やめるよ、ロープで縛り上げた剣を暑苦しく尋問しながら研ぐ上級鍛冶師なんか嫌だからな、絶対。

「よし、約束だ。お互い、鍛冶師界と音楽界で頂点を取ったら再会しようぜ！ じゃあな、あばよ！」

それは二度と会わないという意味か。

ロツクはそう言い残して、舞台上から駆け降りると、エルトリルの街へと颯爽と姿を消した。まるで嵐のようだった。

そして残された者達は……

「え、ええと……というわけで、今回の勝者はシャーナとなりましたー！」

「何が、なりましただー！ ふざけるな、何なんだこのイベントはー！」

「お前の司会が下手だからこうなるんだー！ 責任取れー！」

「こんなイベントの警備をさせられた私の身にもなりなさいよー！ 斬ってやるから首差し出さなさいよー！」

言うまでもなく、観客の不満が全て司会にぶつけられた。特にア

「なあ、エリスさん。何か仕事ないのかい？」

「んー……今のところ、急ぎの仕事はないわねえ」

「むう。あ、そうだ。警備兵が討伐作戦してたつていうあれはどうなんだ？」

「ああ、あれね。取り逃がしたみたいだけど、あれは駄目よ。警備兵とのモメ事は勘弁だからね」

「いいよ、仕事なんて。そんな気分じゃないんだよ……」。

「困ったなあ、シャーナは王都に帰っちゃったし、ドンチャカチャンはしばらくシヨックで店休むって言うし……。他の鍛冶屋は常連じゃないから高いしで、サウザートを研いでやるにも稼がないんだよなあ」

「あー、それは確かに困った……」。

ライクの言う通り、シャーナ様はあの馬鹿らしい勝負の翌日、要するに今日の朝、アンナを含める数人の警備兵に護衛されながら、エルトリルを後にした。

もうシャーナ様と研ぎ研ぎウフフをできないと思うと、何もする気が起きない……ん？ そうだよ、何もしなければいいんだよ。

俺はシャーナ様とロックに研がれてから一度も何も斬っていないので、何もしなければ研いでもらう必要もないというワケだ。

よし、ライクよ。シャーナ様がまたエルトリルに来るその日まで、仕事なんかせずに自堕落に生きていこう。そうだ、そうしよう。

俺のそんな提案をぶち壊すかのように、ハンターギルドの扉が勢いよく開かれた。

入ってきたのは……何だアンナ……おい、何であんなに傷だらけなんだ。

「ちょ、ちょっとアンナちゃん！ どうしたの、ボロボロじゃないの！」

「うう……タイガーが……シャーナは……シャーナは来てない……の……？」

12・サブライ！ どうして助けた！（前書き）

今回の話は少し遡って、アンナとシャーナが王都に向かう途中の話です。

また、今回から数話の間、サウザートとは違う視点で進みます。

12・サプライ！ どうして助けた！

……………。

「ちょっと、さっきから揺れすぎよ！ シャーナが痔にでもなったらどうすんのよ！ 馬車の一つも満足に扱えないの！？」

「アンナ！ 何恥ずかしい事言ってるんですか！ 私はこれぐらい気にならないから落ち着いてくださいよ。それに山道なんですから仕方ないですよ。早く帰りたいので、この道通るのをお願いしたの
は私ですし」

……………。

「そ、そう？ それならいいんだけど」

「まったく、もっと落ち着きがないとライクさんに嫌われちゃいますよ？」

「な！？ べ、別にあんな奴にどう思われても関係ないわよ！」

「へえ、告白したって聞きましたけどねえ、うふふ」

「ちょっと、それ誰から聞いたのよ！ そっいうシャーナだって、ロックと再会の約束までしちゃって、いい感じじゃない。本当はちょっと気になってたりするんですよ？」

……………。

「うーん、そりゃあ、あの無駄にある存在感は多少気になりますけど、好きになるかって言われたら……そんな要素あると思います？」

「ないわね」

「でしょ？ さすがにあれと間違っ
て結婚でもしたら二、三日で心
労が溜まって倒れちゃうですよ」

「違うわい。まだ私の兄の方がマシ……どっちもどっちね……」
「お互い、大変ですね……」
「だね……」

……サブライ！ さつきから聞いていれば、俺の作り主の事をボロクソ言ってくれるじゃないか。

俺が意思を持ったのは、そんなに昔の事じゃないが、それでも俺には分かるぜ。あんなに熱くて痺れる男は他にいないって事ぐらいな！

だからこそ、ロックが俺をいとも簡単に手放して、あんなボケーっとしてるまったく熱くない女に俺を託した事が、まだ信じられないぜ。

「ところで、あいつから貰ったアレどうするの？ 携帯砥石だけ？」

「ああ、ピックちゃんの事ですか？ 熱くなるのはごめんですが、折角貰ったので使いはしますよ。素晴らしい砥石ですからね」

「ピック？ それ名前ついてるの？」

「そつみたいですよ。丁寧に名前が刻まれていますから」

サブライ！ まさかこんなに熱くて痺れる砥石の俺が、ちゃん付けされる日が来るとは思いもしなかったぜ。

何が使いはします。俺はお前を新しい相棒とは認めてないんだからな！ 何が素晴らしい砥石だ！

……いや、それはありがとう。

だがな、本当に素晴らしいと思ってるなら、紐で縛り上げて腰のポシェットにぶら下げるといっ扱いはひどいんじゃないか？ 俺はアクセサリーじゃないんだぜ！ 落ちたらどうするんだ！

「へえ……名前はともかく、確かにロックがソレで研いだ剣は良い出来だったわ。あいつも変じゃなければ、優秀な鍛冶師なのにな……」

サプライ！ おめでとう！

ロックの事で溜息をついたのは、俺の知る限りではお前達が記念すべき九十九人目と百人目だ！ 適当だけどな！

「変といえばアイツもよ……」

「ん？ アイツって誰です？」

「ほら、最近ライクに付きまどつてる無愛想な……何だっけ名前」

無愛想？ そんなのそこら中にいっぱいいるぜ。ロックの周りには、ロックに話かけられてもウンザリした顔で無視しやがる熱くない人間ばかりだったぜ！

だから、それだけの情報で特定なんかできたらサプライだ！

「ああ、ミエルさんの事ですか？」

「そうそう、あの無口で妖精とか見えちゃってる女よ」

サプライ！ 特定できちまった！

「うーん、たしかに少し変わっていますけど……悪い人ではないと思いますけどねえ。あ、もしかしてアンナ……ヤキモチやいています？」

「な！？ バ、バカ言わないでよ！ 何で私があんな暗い女にヤキモチやくのよ！」

「ふーん……」

いいね、アンナとかいうお嬢ちゃん。その真っ赤な顔、実に熱いぜ。

それに比べてシャーナは何だ。涼しげな顔してニヤニヤしゃがって、俺の熱く痺れる魂が冷めちまうぜ！

それよりも、女の会話つてのは何でこうナヨナヨした色恋沙汰の話ばかりなのかね。まったく研ぎ甲斐がねえ。やっぱり研ぐなら熱くて硬いやつじゃねえとな。例えば、あの弱そうな兄ちゃんの剣とかな。確かサウザートとか言ったか。あいつはダサいわりに、なかなか熱い心を持ってたぜ！

「本当に違っつてば！ あのミエルって女、私達が追ってる獲物の事をかき回ってるらしいのよ」

「アンナ達が追ってる獲物？ …… ああ、警備兵ギルドが討伐作戦を行なったっていうタイガーの事ですか」

「さすが上級鍛冶師、情報が早いわね。その通り、私達の狙いはタイガーよ」

サブライ！ タイガー！ 知ってるぞ！

外見の特徴を簡単にいえば猫を大きくした感じだが、あんなナヨナヨしたのと一緒にしちゃいけない。顔はいくつもの戦場を生き抜いてきた熟練戦士のように凛々しく鋭い眼光で、その鋭さに勝るとも劣らない鋭き爪を持つ強靱な前足は、巨石すらも砕く！ その上速い！ 激アツだぜ！

「でも珍しいですね。タイガーってモンスターじゃなくて動物でしょ？ 動物に対してわざわざ討伐作戦なんて……」

「まあ、普通に考えたら動物相手に討伐作戦は大げさよね。でもね、もうそのタイガーに何人もの人が襲われてるのよ。しかもその襲わ

れた人の中に、王都でそこその権力を持った貴族がいたらしいの」
「ああ、それで国からの命令があったと……」
「そういう事」

サブライ！ 権力に屈しないその姿勢、ますます熱い！ ロック
にも見習わせないぜ！

ああ、何か俺様、興奮しすぎて体が震えだしてきたぜ。

「きゃあ、何です!？」

「ちよつと！ 揺らしすぎよ、下手くそ！」

サブライ！ 馬車が尋常じゃなく揺れてるだけだった！
何か馬の悲鳴が聞こえるぜ。大丈夫か？

「タ、タイガーだああああ！」

「うわあああああ！」

タイガーだつて!？

サブライ！ 噂をすれば何とやら！ これぞ正にこ都合主義つて
やつたぜ！

……お、見に行くのかい。

「きゃあ！ 本物のタイガーさんですよ！」

「うげつ、何でこんな時に……まったくついてないわ」

サブライ！ 馬車を降りると戦場だった！ タイガーと警備兵達
のガチンコだ！ 周りが木々だらけの狭い山道を舞台に激しく争っ
てるぜ！

でも、八人もいるくせに警備兵側が一方的に押されてて、あまり熱くないな。タイガーの素早い動きにまったくついていけない。よくこんな狭い山道で自由自在に動けるもんだ。

いや、こんな山道だからこそ強さを発揮できているんだな。周りの木々をうまく利用して三角飛び攻撃をしかけているぞ。

闘い自体は一方的でつまらないが、タイガー自体はやはり熱く痺れる風格が漂ってるぜ。俺が見たことあるのよりも一回り大きく、そして何よりも色が白黒の縞模様！これがホワイトタイガーってやつか。かつこいいじゃないか、サブライ！

しかし、一つだけ残念な点がある。それは頭に女がするような飾りをつけている事だ！

確かサークレットとか言ったか。無駄に宝石がいくつかが装飾されていて、まったく熱くねえ。ナヨナヨしやがって。

「おいアンナ、ボーっと見てないでお前も加勢しろ！」

「はいはい、わかったわよ！」

サブライ！ タイガー並みの突撃だ！

「ちっ、素早いわね。厄介だわ」

ああ、惜しい！ もう少しであのナヨナヨサークレットを破壊できたのに、抜刀斬りを寸前で避けられやがった！

でもこれはサブライ！ 意外にあのお嬢ちゃんやるじゃないか！ だらしない男共と違って、タイガーのスピードについていってるじゃねえか。冷静で慎重で良い反応をする。

お嬢ちゃんの参戦で、周りの警備兵達の体勢が整ってきたな。これで五分になったってところか。

だがな、お嬢ちゃんがタイガーに圧倒的に負けているものがある。それは、熱さだ！ 冷静さだけでは駄目だ。戦いには大胆な熱さが必要なのさ！

その証拠に少しずつだが、まただんだんと押されてきてるじゃないか。心を燃やせ！

「くっ……！ 駄目だわ、パワーが違いすぎる……」

だから熱さだつて！

……いや、言われてみればその可能性もあるか。現に警備兵共が束になって押さえ込もうとしても、逆にぶっ飛ばされてるしな。

お嬢ちゃんの剣もそこそこ良い剣のようだが、見たところ耐久性に難がありそうだ。それが原因で今いち積極的に攻められない様子だ。やっぱり剣は熱くて太くて硬いのに限るぜ！

「シャーナ、逃げて！ 私達が食い止めている間に早く！」

「は、はい！ ライクさんをお願いします！ だから、それまで耐えていてください！」

サブライ！ 良い判断だ！

タイガーは戦闘に夢中で、シャーナの事など眼中にないようだぜ。いいぞ走れ、脱兎のごとく走るんだ！

あの兄ちゃんの剣ならきつと熱い闘いを……ぶおおおおおおお！？

「早く……早く、ライクさん呼びに行くですよ！」

だ、脱兎のごとくとは言ったが、そんな早く動いたらポシエツトにぶら下がっている俺の視界がぐるんぐるん……ぶおおおおおおお！

周りの木々が激しくスクワットをしながら、どんどん後ろに流れていく！ いや、違う。俺が激しく上下に揺れているんだ！ 跳ねる跳ねる！ この女、意外に速いぞ！

しかも、道がデコボコしてるせいで余計に状態が安定しな……ぶ
おおおおおお！？

酔う酔う！ 酔っちまう！ 頼む、誰でもいいから、この女を止めてくれ！

「ぶははははは！」

「な、何です！？」

……ハアハア……サプライ！ 助かつ……うえつぶ！

ああ、気持ち悪い。まだぐるぐるしてるぜ。そのせいか、俺の命の恩人の姿がどこにも見当たらないぜ。

「ど、どこですか！？ 今笑ったのは誰ですか！？」

違うな、シャーナにもどうやら見えてないみたいだ。

どこだ、どこに……ん？ 何だ、あれは？ どこかで見た事ある
ような……。

「え？ これって私が作ったハムスターの木彫り人形じゃないですか。何でこんなところに？」

サプライ！ 思い出した！

このモデルを完全に無視した前衛的な造形をしている木製の謎は間違いないシャーナの木彫り人形だ！ うーむ、改めて見ると余計に不気味……

「ぷはははは！ サウザート折る！ ぷはははは！」
「笑いながら物騒な事言ってる!？」

ぎゃあああああ、喋ったあああああ！ じゃなくて……サブライ！ 喋った！

そしてシャーナ、驚きながらも的確なツッコミをしたお前にもサブライだぜ！

いやいや、そんな事言ってる場合じゃないぞ。何でこいつ喋ってるんだよ。サウザートって、あの剣のサウザートか？ ……あ、逃げた。

「ぷはははは！ サウザート折る！ ぷはははは！」

もはや、サブライなどと言ってる場合じゃない。今起きてる出来事は、俺の石のように硬い頭脳の許容範囲を遙かに越えている。何で木彫り人形がそのみすぼらしい足でトテトテと歩いてるんだよ！ 誰か説明してくれ！ ぎこちない動きのくせにやけに俊敏だしよ！

「動いた!? ちょ、ちょっと、どこ行くですか！ 何でサウザートさんを折るんですか!」

やはりこういう場合は、プリンのように柔らかい頭脳の持ち主の方が対応が早いな。シャーナは木彫り人形を追って、どんどん道から外れて山頂の方へと入っていくぞ。なかなか肝が座ってるじゃないか。

そんな事よりも、さっきから何か身体に違和感を感じる。何かはよくわからないが……。

「ぜえぜえ……、どこまで登るんですかあ。一体どこに行くんですかあ……」
「ぷはははは！ サウザート折る！ ぷははははは！」

サブライ！ もうギブアップかい！ まだ山頂までの半分にも到達してないぜ！ 足は速いが持久力はないようだな！

さすがに俺も状況を受け入れて熱さ回復だぜ。違和感がまだ気にはなるけどな。

それより、そんな疲れてる状態で、こんな狭い登山道とも言えない岩だらけの狭い道を歩いて大丈夫なのか？ すぐ横が崖になってしまうぞ。

「うう、すごい崖ですよ……。落ちると危ないから帰るですよお、ハムスターちゃん」

サブライ！ まだハムスターと言い張るか！

そんな事より、この崖は確かに危険な香りがするぜ。こんな熱くない女に崖側を歩かせるのは酷つてもんだ。落ちたらひとたまりも……サブライ！ 今わかった！

違和感の正体。それは俺を縛っている紐がどんどん緩んでいくってなんだ！ さっきまで揺れに揺れてたから気付かなかったぜ！

しかも、かなりのユルユル具合だ。……ああ、まだいくか。まだスルスルと緩んでいくか！

サブライ！ 落ちる！ サブライ！ 落ちる！

真下！ 俺の真下に崖あるぜ！ 落ちる！ どんどん緩んでいっ

サブライ！ 強がりはやせ！

お前みたいな貧弱な奴がどうやって登るといふ………サブライ！ 普通に右手の力だけで上りやがった！

忘れてたぜ、この女は巨大な槌を振り回す怪力女だった。

「ふう、ピクちゃんごめんなさい。私のせいで崖下に落ちちゃうところでした。もう落とさないようにしっかり持っていますからねえ」

お、おう。頼むぜ、まったく。でも、その、あれだ………ありがとう。

「ぷはははは！ サウザート折る！ ぷはははは！」

サブライ！ 笑い事じゃないぜ！ 死にかけたんだぞ、こっちは！

「はいはい、こうなったら、どこまでもついていくですよ」

どこまでもお人好しなやつだぜ。仕方なさそうにしながらも笑ってやがる。それがお前のご自慢の素直な笑顔ってやつかよ。

……でもまあ、悪い気はしないぜ。

しかしどこまで行く気なんだ、あの木彫り人形は。ついには道をそれて森の中へと入りだしたぞ。

こんな所に一体何が……ん？ 何かあるぞ。

「ぷはははは！ サウザート折る！ ぷはははは！」

「むむ？ これは……洞窟？」

サブライ！
いかにもって感じだぜ！

12・サブライ！ どうして助けた！（後書き）

ピックはサウザートみたいに説明口調ではないキャラにしたかったので、少し状況説明や描写が少ない部分があって、分かりにくいところがあるかもしれません……。

13 命がけの熱意

サプライ！ サプライ！ サプライ！ サプライ！……うう、やっぱり無理。もう帰ろうぜ……。

「はうう……、どんどん不気味になっていくですよ。何だか肌寒いし」

まったくだぜ、どうかしてるぜ、この寒気。

世界一熱い砥石の俺には肌寒いのなんてまったく平気だが、この寒い雰囲気駄目だ。こういう怖い感じの寒気がする場所じゃどうにも熱くなれねえ。

そんな情けねえ俺に比べてお前はすごいな、シャーナが作った即席たいまつよ。

こんな場所でも構わず熱く燃えたぎれるんだから、嫉妬さえ覚えるぜ。

！
だがな、お前が中途半端に照らすせいで逆に薄暗くて怖いんだよ

お前は俺が火打ち石代わりになってやったから、そうやって燃えていられるんだぞ。

恩を仇で返す、そんなお前にサブラ……ぎゃあああああ！

「きゃあ！？ ……もう何なんですか！ 急に落ちてきたら危ないでしょ！」

そうだそうだ、もっと言ってやれ。その理由もなく突然落ちてきた、ただの岩に対してな。折角、たいまつへの怒りで熱さを取り戻

しかけていたのに台無しだぜ。

台無しといえば、アイツは一体どうなってんだ。

「本当にここに何かあるんですか？ 何とか言ってくださいよお、ハムスターちゃんてばあ」

無駄だぜ、そいつはただの木彫り人形に戻っちまったんだ。連れてくるだけ連れてきておいて、あとはおまかせなんて、投げっぱなしにも程があるぜ。

刃が完全に欠けちまつてる剣を研いでくれと言ってくる客ぐらい無茶苦茶だ。あんなの、どうしようもないっての。

しっかし、どこまで続けば気が済むんだよ、この真つ暗な細い一本道は……………ん？ あそこに見えるのはまさか！？

「あ、光ですよ。光が見えますよ！」

サブライ！ その通り！ あそこに見えるは天からの恵み！

突然広いホールのような場所に出た俺達を待っていたのは、天井に空いている穴から差し込む太陽光。いいね、神秘的だ。ここで大勢の観客の前で、俺の砥石としての実力を披露したいもんだ。考えるだけで熱くなるぜ！ サブライ！

だが残念な事に、こんな場所に観客が集まるはずもなく、観客になつてくれそうなのはホールの真ん中で太陽光を浴びながら寝ている女………… サブライ！ 誰だ、お前は！

「あれはもしかして…………ミエルさん！？」

サブライ！ さつき言つてた変な女か！ こんな所で寝るなんて、予想以上に変だった！

いや、違つぞ。よく見ると、足が岩の下敷きになっている。これは寝ているんじゃない、気絶しているんだ！

幸い、下敷きといつても地面のデコボコのおかげで隙間ができていて、足は潰されてはいないようだ。それに人間一人で担げる程度の大きさなので、どかすのは簡単だろう。

「ミエルさん！ 大丈夫ですか！ ミエルさん！」

「……すーすー」

「……寝てる」

サブライ！ やつぱり寝てるだけだった！

こんな場所で寝ちゃうお前にサブラ……ぎゃあああああああ！

「きゃあ！ ……また落石ですか」

サブライ！ デジャヴだ！ 更にこんな状況でも起きない緑髪の女にもサブライ！

と、思つたら起きた。

「……ウルサイ」

「え、あ、すみませんです」

「……貴方じゃない」

「は、はあ。……じゃなくて、何でこんな所で寝てるんですか！ 危ないですよ！ はやく安全な場所に行くですよ！」

「行きたくてもいけない」

「え？ あ、この岩ですね。まかせてください！ これぐらいちょ

「ちょいのちょいですよ!」

「無理だと思っわ」

「大丈夫ですよ! ……うーん、よっころしょー、むううう!」

サブライ! 威勢が良いわりには全然動く気配がないぜ! この非力女! ……いやいや、そんなはずないだろ。こいつは怪力女だぞ!

「何ですか、この岩! そんなに大きくないのにすごく重いですよ!」

「だから無理って言った。多分これはエンゴク鉱石」

サブライ! エンゴク鉱石! あの悪魔のような石か!

ああ、思い出せず、あの悪夢を。

エルトリルに出発する前に、突然舞い込んで来たエンゴク鉱石を加工して欲しいという依頼の事を……。

仕上げの段階で俺が研がされたんだが、あれはひどかった。何がひどいって優しすぎるんだよ、あいつは。

俺の熱さを全て奪っていくような優しさ。こちらが研いでいるのに逆に快感を与えてくるんだ。あれは地獄だったぜ……。逆に言えば、砥石にするには最高の鉱石って事だがな。

しかも、こんなところにあるエンゴク鉱石って事は

「ちょ、ちょっと待ってください。確かに色は似てますが、こんな涼しい場所にあるはずが……まさか、温室エンゴク!？」

「そうみたいね。私があ的那天の穴から落ちた時に一緒に落ちてきた岩に混ざってたみたい。他の岩は何とかしたけど、それだけはどうにもならなかった」

サプライ！ 涼しい場所なのに温室とはこれいかに！

まあ、そう呼ばれてるんだから仕方がない。熱とは無縁の場所で偶然できた温室育ちのエンゴク鉱石。略して温室エンゴク。熱さから逃げるなんて最高に熱くないぜ！

だが、温室育ちといっても侮るなよ。とんだ怪物だぞ、そいつは

「はわわ、これが温室エンゴクですかあ。稀に熱のない場所に生成される奇跡の鉱石……噂通りの硬度と重量ですね。ごくりです」

サプライ！ ごくりって口で言うなよ！

だが、言いたい気持ちも分かるぜ。温室エンゴクは熱の影響を受けていない純粋なエンゴクと言ってもいい。鍛冶師なら喉から手が出る程欲しいレア物だ。

「喉から手が出そうなところ悪いんだけど、どうにかできない？」

「え、えつと……、どうにかと言われましても……そうだ！ たいまつで火で熱すれば！」

そいつは無理だ。熱に弱いと言っても、さすがにこの純度のエンゴク鉱石じゃ、たいまつ程度の熱じゃどうにもならないだろう。消えかかってるし。

「はうう、まったく溶けませんねえ……あ、消えちゃいましたよお」

サプライ！ 俺の言うとおり！

もう諦めな。まあ、方法がないわけじゃない。俺の熱い砥石魂をもってすれば、温室エンゴクぐらい簡単に溶かす事ができるだろう。何の根拠もないがな。

だが、俺はシャーナのためにそこまでしてやるつもりはないぜ。

「……………その砥石は？」

「へ？ ああ、これは知り合いの鍛冶師から貰った砥石のピックちゃんですよ」

「それでこの岩研いでみて」

「え？ ピックちゃんでこの岩を……………？」

サブライ！ どうした急に！ 俺に目をつけるとは、なかなかお目が高い！ だが、全力でお断りだ！

……………といつても、声が出せない俺に拒否権なんてないわけで、これは覚悟を決めないといけないか……………。

仕方がねえ、俺も男だ！ さあ、来いよ！

「なるほど、研いだ摩擦の熱でエンゴク鉱石を溶かすわけですね……………すみません、ミエルさん。それはできません」

サブライ！ 来なかった！

お人好しのシャーナなら躊躇なく俺を使うと思ったんだが、これは予想外だぜ。

「……………何故？」

「この砥石には知り合いの鍛冶師の誇りと、鍛冶への情熱、強い想いが……………魂がこもっています。その知り合いは鍛冶師をやめてしまいました。それはちゃんと悩みに悩んだ末の事でしょう。だからこそ、彼の鍛冶への想いの全てが詰まっているピックちゃんを、私は犠牲にするわけにはいきません。その代わりと言っては何ですが、私の砥石グローブで試させてもらいますですよ」

……何だよ、あれだけロツクの事をボロクソ言っただくせに、ちゃんと分かってくれてるじゃないか。

そうだ、ロツクはいつも熱く痺れる男で何も悩みなんてなさそうに見えるが、内心ではいつも鍛冶師としての限界に悩んでいたんだ。世界中を熱くするような事をしたという、あいつの熱すぎる想いは本物だったんだ。だからこそ、ロツクはシャーナとの勝負に鍛冶師生命をかけていたんだ。

そしてその事を全て分かっていたからこそ、シャーナは命を張ってまで俺を助けてくれたんだ。

「うう、駄目ですよお。硬すぎて研いだら逆に砥石グローブが削れていってるですよ……」

そりゃそうだ。いくらアイアンブレイカーの鉋石を使っても、相手は世界一と言っていい程の硬さを誇る温室エンゴクだ。到底歯が立つわけがない。そもそも熱くない。

だが、シャーナは情けない声を上げながらも必死で温室エンゴクを研いでいる。あの顔はまったく諦めてない顔だ。どうしてそこまで頑張れる。

「……もういいわ。そんな事しても無駄。いつ落石してくるか分からない。貴女は逃げて」

「嫌です、諦めません！ 誰かを見殺しになんてできません！ 母さんが私を拾って必死で育てて守ってくれたように、私は困っている人を全力で助けてあげたい。だから、私は絶対に諦めません。私のできる事を全てですよ！」

サブライ……強い、強いぜ。お前は強い女だぜ。

その強さの源は優しさだ。人の汚い部分を誰よりも知り、その上で真の愛情を知ったシャーナだからこそ、純粋な優しさだ。

俺はどうやら勘違いをしてたぜ……ただ熱くなるだけが熱さじゃねえ。何があっても揺るがない信念を糧に燃える、決して表にはでない秘めたる熱さつてもんがあるんだ。シャーナ、お前は今最高にサブライに熱いぜ！

「助けるですよお、絶対助けるですよお！」

いいぜ、認めてやるぜ。お前は今から俺の新しい相棒だ。そしてこれから始まるのは、俺と新相棒の最初で最後の共同作業だ！あの温室育ちに俺とお前の熱さを見せつけてやるうぜ！

俺だ、俺を使え！ 届け、俺の熱意よ！

「……シャーナ」

「はい？ どうしました？」

「ピックを使って」

「いや、ですからピックちゃんは……」

「それがピックの意思でも？」

サブライ！ お前に伝わってどうする！

「ほえ？ ピックちゃんの意味？ 何でそんなのが分かるんですか」

「……私は魔具師。ピックは魔具」

「こんな時に何を……魔具師！？」

何をサブライしてるんだ、相棒。

マグシ？ マグ？ 何だそれ。俺はトイシだぜ？

「そう。本当の事。こんな時に嘘なんて言わない」

「た、確かに嘘をついている風には見えませんが……魔具師って魔剣を作ったりするあれですよね？」

「そう。ちなみにマンズブラッド……アンナが持っていた魔剣は私の師匠が作った」

「あのオカマの剣さんですか!？」

サプライ！ オカマの剣？ 何だ、そのナヨナヨした剣は！

俺がその腐った性根を熱く研ぎなおしてやるから、ここに連れてきな！

「マンズブラッドはもう折ったわ。だからちよつと黙ってて」

サプライ！ また俺の意思が伝わった!？ お前は何者だ！

「魔具師って言った。だからちよつと黙ってて」

……………。

「あ、あの……私喋ってませんけど……」

「ピックに言った」

「魔具師は魔具と会話が出来るって聞いた事ありますけど……本当に魔具師なんですか？」

「そう言ってる」

「じゃ、じゃあ。ピックちゃんはどんな感じですか？」

「サプライ言い過ぎで鬱陶しい」

「わあ！ 本当に魔具師なんですね!」

サプライ！ そこで信じちゃうのはどうなんだ！ こんなに熱く

サプライ言う奴は他にいないぞ。失礼しちゃうぜ！

「だから、それが鬱陶しいのよ」

……むづ、どうやら本当に俺の意思が聞こえてるようだな。これは迂闊にサブライできないぜ。

「あ、あの。ミエルさんが魔具師という事は信じるとして、何でピツクちゃんが魔具なんです？　もしかして、ロツクは実は魔具師！？」

「違う。魔具師じゃなくても、強く想いを込めながら何かを作るとたまに魔具化してしまう時がある。無意識に魔力を使ってね。ちなみに込められた想いは世界中を熱くする事みたい。多分、研いだ物を熱くできる能力でもあるんじゃないかしら」

「な、なるほど。ロツクなら十分ありえますね。そういえば、ロツクが研いだサウザートさんも研ぎ勝負で使った剣さんも、ほのかに熱を帯びていた気が……」

サブライ！　さすが俺を作った男！　世界で一番熱く痺れる男だぜ！　まあ、自分にその能力がある事は気付いてたがな！

俺が意思を持った直後、ロツクが俺で試し研ぎをした時の事だ。俺は調子に乗って熱くなりすぎて、剣だけではなく、ロツクにも火傷を負わせかけたんだ。ロツクはその俺の熱さに感激していたが、さすがに危険だと思った俺は、能力を制御できるように頑張ったんだぜ。

……へ、最後にロツクの凄さが証明できて、もう満足だ。未練はねえ、俺の決心が鈍らない内に早く始めようぜ。

前にエンゴク鉱石を研いだ時はまったく熱くなれなかったが、今度こそドロドロに溶かしてやるぜ！

「早く始めようって言うてる」

「本当にいいんですか？　ピツクちゃん？」

ああ、いいぜ。俺はお前と熱くなりたいんだ。俺がロック以外で認めた唯一の熱い鍛冶師のお前にな。

「いいぜ、シャーナと熱くなりたい。だそうよ」

「あ、熱くですか……分かりました。できるか分かりませんが、いきますよピックちゃん！」

おっ、いいい！

……………。

ああああああああああん！……！

「うう、やっぱりピックちゃんでも駄目そうですよ……ミエルさん、ピックちゃんの様子はどうですか？」

「感じてる」

「か、感じてる！？」

そ、そりゃ感じるさー！

ああ、優しい！ 優しすぎるぜ、この快感！ 熱く、熱く、熱く

……………なれねえ、ちくしょう！

俺の……俺の熱さはこの程度だったの……ああああああん！

「……………サプライです！」

……………！

「サプライ！ サプライですよ！ ピックちゃん、サプライ！」

そうだ、サブライだ！ ロックが教えてくれた、驚く程熱くなれる魔法の言葉だ！ まさか、シャーナがそれを言うとは、サブライだ！

「サブライ！ サブライ！ サブライですよお！」

サブライ！ サブライ！ サブライだ！

「サブライサブライ」

サブライ！ ミエル、お前の言い方はまったく熱くなれないから黙ってな！

「すごい、少しずつですけどエンゴク鉱石が溶けてきましたよ！」

当たり前だ、俺を誰だと思ってる。世界一熱い男が作った世界中を熱くするための砥石のピックだぜ！

だが、相手もなかなかやるな。さすが、世界一硬い鉱石だ。こちらの身もすでにボロボロだ。

だがいいんだ、これでいい。正直、ロックに手放されて俺はもう燃えるような熱い研ぎは、一生できないと思っていた。

だが、今こうして最高に熱くなれてる！ 砥石として最高の研ぎをしている！ ここで死ぬほど熱くなれなきゃ砥石じゃねえ！

サアアアアブウウウウラアアアアイイイイイ！！！！

14・ミエルの隠し事(前書き)

今回は一人称ではなく、三人称視点です。三人称で書くのって難しいですね……。

14・ミエルの隠し事

ミエルは助かった。

確かに助かったはずなのだが、彼女にはその実感が持てなかった。それもそのはず、ミエルは先程とは別の驚異にさらされている最中なのだから。

「ミエルさん、大丈夫ですか？ 足痛みませんか？」

「……大丈夫」

隣で肩を貸してくれているシャーナの問いに、ミエルはいつも通りの無愛想つぶりで簡潔に返答したが、それは強がりだ。

実際は、歩く度に温室エンジンゴクの下敷きになっていた右足に、顔を歪めてしまいそうな程の激痛が襲いかかっていた。

そんな状態で、すぐ横が崖になっている狭い坂道を二人並んで歩いているのだから、その恐怖感は計り知れないものがあるだろう。

しかも、隣にいるのがシャーナだ。

「んー、でもやっぱり危ないですよ。私が崖側の方がいいんじゃないですかねえ？」

「……大丈夫」

「そうですか？ それならいいんですけど……」

これ以上、私の心労を増やさないで。お願いだから。

ミエルは心の中でそう願った。

普通に考えれば、一歩足を踏み外せば崖下に一直線のこの状況で、足を怪我しているミエルが崖側を歩くなど考えられない事だが、シャーナはそれ以上に考えられない程ドジなのだ。

ミエルはシャーナがドジな事をよくは知らなかったが、洞窟から脱出する際に何十回と地面に躓き転んだシャーナの姿を見て、嫌でも思い知らされたのだ。シャーナが洞窟内に入ってきた時と違い、たいまつがなくなって真つ暗だったので仕方がないと言えれば仕方がないのだが、それでも異常なまでの躓き様だった。

これ以上シャーナの「はうううう」という声を聞くと洗脳されそうなのと、安全性を考慮した結果、ミエルは痛む右足に鞭打ちながらも崖側を歩く事にかけて出たというわけだ。

「それにしても、災難でしたねえ。穴から落ちた上にエンゴク鉱石の下敷きになって。一体何があったんです？」

「……巨大な斧を持った女に襲われた。その衝撃で地面に穴が開いて落ちた。落石が始まったのも、多分そのせい」

「へ、へえ……それは災難でしたねえ」

ミエルはあの忌々しい女の事を思い出して、憂鬱になって黙り込み、シャーナはミエルの簡潔すぎる説明に状況を把握しきれずに、ポカーンとした表情のまま黙ってしまった。

そんな二人の沈黙を破ったのは、シャーナの吉報を知らせる声だった。

「あ、やっと広い場所が見えてきましたですよ！」

「……分かったから、落ち着いて」

興奮して揺れるシャーナの身体を必死で押さえつけながら、ミエルもまた目の前に広がる危険な坂道の終着点を確認していたが、押さえつけた反動での右足の激痛のせいで、彼女にはその終着点が大きな口を開けた巨大なモンスターのように見えた。

だが、実際はそんな事があるはずもなく、恐る恐る入り込んだその場所は、周りを木々に囲まれた普通の休憩地点だった。

ここから先の下山道は、木々に囲まれた広めの道で、危険性はないうように見える。それを確認したミエルは、そこでついに自分が無事生還できたという事実を認識する事ができ、安堵でその場にへたり込んでしまった。

「ど、どうしました？ ミエルさん、大丈夫ですか？」

「疲れた。休憩」

「あ、そうですね。さすがに疲れましたよー。何故か私も傷だらけですし」

あれだけ転んだら普通傷だらけよ、とミエルは思ったが、ツッコむのも億劫だったので無視を決め込んだ。

すると、シャーナは近くの岩に腰掛けて、おもむろにポシエットから何かを取り出すと、まじまじと見つめ始めた。

「……………気になる？」

「え？ ええ、頑張ってくれましたからねえ。……………やっぱり、もう声は……………」

それは親指大ほどまでに削れて小さくなってしまった砥石のピツクだった。あれほどウルさくて暑苦しかったのに、今では静かに沈黙を守っている。それだけではなく、纏っていた魔力も散り散りになっってしまった、一片も残っていない。それは意思持ちの魔具としての完全なる死を意味する。

ミエルはその事実をどう伝えるか一瞬迷ったが、隠しても仕方がないので率直に答える事にした。

「駄目ね、ピックは身を削るたびに魔力を霧散させていった。今はもう一握りも残ってない。私が魔力を注いでも意思を復活させる事はもう無理。ピックは……死んだ」

「そう……ですか……ごめんなさい、ピックちゃん……」

ミエルの言葉を受けて、シャーナは悲しげな表情を浮かべながら俯いてしまった。ピックを握るシャーナの手は小刻みに震えていて、本気で悲しんでいる事がミエルにひしひしと伝わってきた。

その様子を見て、もう少し言葉を選べば良かったとミエルは後悔したが、そんな後悔よりももっと強大な感情が彼女に荒波のごとく押し寄せた。その感情は罪悪感だ。そして、それは彼女の中で次第に大きく大きくなっていき

「危険な魔具を破壊する。それが私の使命であり、生きる意味」

「……え？ 突然、何を言ってるんです？」

当然のごとく、突然のミエルの発言にシャーナはハトが豆鉄砲をくらったような顔をしている。

シャーナの言う通りだ。私は何を言ってるんだ。やめろ、やめるのよ。

ミエルは頭の中で必死に自分を制止しようとして訴えかけたが、それに反してミエルの口は止まろうとはしなかった。

「私は感情を殺し、意思を持たない魔具を作った。全ては意思を持つ危険な魔具を壊すため。そして、それはピックも例外ではなかった」

「……………」

「だから、私を助けてくれる上に消えてくれるならと、貴女にピッ

クを使うように仕向けた」

「……………」

「でもそれは間違いだっただのかもしれない。あいつは危険な魔具じやなかったのかもしれない。もし危険だとしても、シャーナがいれば……砥石にさえ本気で悲しんでくれるような優しい貴女がいれば、ピックは大丈夫だったのかもしれない……私は……私は……」

「ミエルさん、泣いてるんですか？」

シャーナに言われて、ミエルは慌てて自分の頬に手をやった。

冷たい、というよりは生温かい感触がそこにはあった。確かにそれは涙だった。

ミエルが自ら作った魔剣アリエッタを折って以来、アリエッタの事以外で流す初めての涙。いやアリエッタがまったく関係ないわけではない。何故なら、シャーナのピックに対する想いは、ミエルのアリエッタに対する想いと何ら変わりはないものなのだから。

だからこそ、ミエルは自分とシャーナを重ね合わせて泣いたのだ。シャーナのピックを想う純粋な心に感化された純粋な涙だ。

「私が泣いてる？ 嘘だ……嘘だ嘘だ、そんなの嘘だ！」

だが、そんな自分が流す純粋な涙は、ミエルの心をおおいに揺さぶった。助かるためにピックを利用した自分の黒い部分への嫌悪、今まで魔具を破壊してきた事が正しかったのかという疑問。アリエッタを破壊したあの日の固い決心が、魔具に対して本気で悲しむシャーナの姿によって簡単に崩されようとしている現実に、ミエルは頭を抱えて困惑した。

そんな中、シャーナの発した言葉が、またしてもミエルの心を動かした。

「……ミエルさんは優しいですね」

「……優しい？ 私が？」

「はい、自分の過ちを素直に打ち明けて涙を流せる人は優しい人です」

シャーナは満面の笑顔で言った。子供の様な無邪気さと、女神のような優しさと美しさを合わせ持つ不思議な魅力を持った笑顔だ。

ミエルには何故それが優しい人なのかが、あまり理解ができなかった。だが、そんな不思議な笑顔で言われたら不思議とそんな気がして、ミエルは恥ずかしくなって顔を真っ赤にして俯いてしまった。

シャーナはそんな照れ隠ししているミエルの行動を落ち込んでいると勘違いしたようで、

「ほらあ、落ち込まないで顔を上げてくださいよお。ミエルさんが仕向けなくても、きつと結果は変わりませんでしたよ。何ていったって、ピクちゃんの世界一熱い砥石ですからね！ それに意思が無くなった程度でピクちゃんが熱く無くなるはず無いですよお！」

と、何の根拠もないのに自信満々に胸を張るシャーナ。

それを見て、照れるのもアホらしくなったミエルは、「……そうね」と一言で返事をする、いつもの無表情に戻った。

「あのですね、ミエルさん。貴女が魔剣に限らず魔具を破壊するというのは鍛冶師という立場から賛同はできませんけど、何か深い事情がある事は分かります。だから、私に止める権利などありません。でも、これだけはお願ひします。もっと魔具の事を知ろうとしてください、向き合ってください。十分話し合った後でも遅くはないですよ？ 折角、魔具とお喋りできるなんて素敵な能力があるんです

からね」

素敵な能力……。やっぱり他人から見れば、そう思うのね。
……いえ、私も昔は素敵だと思っていたのかもしれない。

ミエルはアリエッタが強奪される前に、彼女と喋った事を思い出していた。

鞘は鉄製と皮製のどちらがいいか。

縦斬りと横斬り、どちらが気持ちいいか。

好みの剣について。

普通、人とは絶対しないような変な会話。でもそんな変な一時が、ミエルにとっては幸せでとても大事な時間だったのは確かだ。それはアリエッタも同じだったに違いない。

どんな魔具にでも幸せになる資格があるんだ。

そう思ったミエルは一つの決心をした。

「そうね。これからは破壊する前に喋ってみる」

(シャーナ様どこですかああああああ！ 俺の愛しのシャーナ様ああああああ！)

「……やっぱり、もうちょっと考えておくわ」

突然、脳内に鳴り響いたウルさい叫び声のせいで、ミエルの決意は簡単に崩れさった。

「えー！ 何ですかあ！」

「……そんな事よりも、救助が来たみたいよ。口が悪くて鬱陶しい奴がね」

「それって……サウザートさんの事ですか？」

ミエルがドキリとしたのを、シャーナは見逃さなかった。

「やっぱりそうなんですね。サウザートさんは魔剣だったんですね」

「……知ってたの？」

「薄々とですけどねえ。剣が水蒸気を吸い込んで水を出すなんてありえませんか」

「……そう、そうよね」

ミエルは納得すると同時に、エルトリル中が水蒸気説を疑わない中で、正常な思考の持ち主がいた事に安堵を覚えた。

「あとは……この子の鳴き声ですよ。これもミエルさんが魔具にしたんでしょっ？」

シャーナがポシエットから取り出したのは、シャーナがハムスタ―だと言いつける木彫り人形だった。それは間違いなく、ミエルがライクから受け取り、気まぐれに魔具にした物で間違いなかった。

「そう、それが貴女を連れてきてくれたのね」

ミエルは何故シャーナがああ場所に来たのか疑問に思っていたが、木彫り人形を見た瞬間、全ての謎が解けてスッキリした。逆にシャーナは、まだまだ色々疑問だらけといった様子だ。

「何か笑いながらサウザートさんを折るとか言っていましたけど……」

サウザートさんに何かされたですか？」

「別に。ただちょっと、破壊するのも馬鹿らしくなるほどに低俗な嫌味を繰り返しネチネチと言ってきて腹立たしいだけよ」

「はりゃあ、サウザートさんは悪い子なんですねえ。今度サウザートさん研ぐ時、ちょっとお灸をすえてあげないと駄目ですねえ。ふふふ」

そう言ったシャーナは、何やら楽しげに見えた。

「でも、シャーナの事は大好きみたいで、いつもベタ誉めしてるわよ」

「ほえっ!?! サウザートさんが私の事を!?!」

(俺のシャーナ様どこおおおおおおお!)

「ほら、今だって俺のシャーナはどこだー! ってすごい大声で叫んでる」

「お、俺のシャーナ!? 私サウザートさんの物になってしまっただすか!? そんな事急にいわれても困るですよあ……。ねえ、ミエルさん。魔剣の子供って産めるんですかねえ?」

そんなシャーナの素っ頓狂な質問を受けて、ミエルは昨日の鍛冶師勝負の事を思い出して、思わず吹き出しそうになった。

「ぷはは……そうね、子供なら作れるんじゃないかしら。そういえば、貴女が昨日作った剣身はどうしたの?」

「ああ、あの子なら王都に帰ってゆっくり完成させようと思って、先に他の荷物と一緒に送りましたよ」

「そう、愛情を込めて作ってあげるといいわ。きっと貴女を幸せにしてくれる剣になるから」

「はい！ 頑張りますよお！ 愛情込めれば意思を持ってくれるかもしれないですね！」

シャーナは可愛らしくガッツポーズを作った。ミエルはその様子を見てまた吹き出しそうになった。

「そういえばライクさんには、サウザートさんが魔剣って事を教えてあげないんですか？」

「それは……」

「あ、言わなくても分かりますよ。その方が面白いから、でしょ？ ふふふです」

「……そうね、よく分かったわね」

「えへへ、当たったですよ。安心してください、私も秘密にしておきますから」

ミエルがシャーナの指摘を肯定したのは、その場を逃れるためなどではなく、本当にそうだったからだ。もちろん、自分が魔具師である事をあまり他人に知られたくないというのもある。今回だってシャーナに魔具師である事を打ち明けたのは緊急事態で仕方なかったからだ。

でもそんな理由よりも、ライクとサウザートがこれからどうなっていくのかという事に対しての好奇心の方が大きかった。そして嬉しい事にミエルはまた一つ好奇心の対象を見つけたのだ。

（シャーナ様あああああああ！）

「おーい！ シャーナ、どこだあー！」

「あ、ライクさんの声が聞こえてきましたよ！ ちょっと呼んで来ますから、ミエルさんはここで待っていてくださいですよー」

ミエルがこくりと頷いて返事をする、シャーナは一人で山道を、危なっかしい足どりで駆け降りていった。

それを確認したミエルは、ぼそりと呟いた。

「面白そうなのは貴女も同じよ、シャーナ。……ぷははは」

ミエルの呟きに返事をするかのように、山道の方から「はううう……」という、洞窟内で何度も聞いた可愛らしい声が響いてきた。

エピソード

ああああああん！ 優しくて熱くて、優しくて熱いいいいい！

底知れぬ優しさの中からこみ上げてくる熱さ……いや熱さというよりは温もりだ。

これはまさしく聖母だ。聖母の優しくて温もりのある神々しい手が俺の剣身を撫でるように……ああああああん！

「うふふー、好きなんでしょー？ 私の事の好きなんでしょー？ 白状しちゃうですよ」

そ、そんな。駄目ですよ、シャーナ様。ライクとアンナが見て……ああああああん、大好きですうううう！

「よーし、今日も完璧に研げましたよお！」
「良かったな、サウザート。大好きなシャーナにピカピカにしてもらえて」

うん、良かった。でも、その後にお前が汗まみれの手でベタベタと触ってこなければ、もっと良かったよ。

それにしても、今回の砥石グローブは本当に凄まじい。

三日前にシャーナ様が持ち帰ってきた拳程の大きさをした温室エングク。それを加工した物がシャーナ様の新しい砥石グローブだ。やはりエングクの優しさはアイアンブレイカーの比じゃないな。しかも、今回はそれだけではない。このグローブには何と隠された秘密があるのだ。

「どうだ？ 新しい砥石グローブの使い心地は」

「はい、それはもう最高ですよ。大満足です」

「ふーん、でもさ、そのグローブの真ん中のやついらんじゃない？」

「分かってないですねえ、アンナは。ピックちゃんがあるからこそ、味のある研ぎができるのですよ」

「ふーん、そんなもんなのね」

アンナはそう言いながらも、全く納得がいつてなさそうな表情を浮かべている。かくいう俺も、実際に研がれてみるまでは、まったく納得がいつてなかった。

良質な温室エンゴクに囲まれるようにして、砥石グローブのど真ん中に埋め込まれた、みすばらしい小さな砥石。それはロツクがシヤーナ様に送った砥石のなれの果てで、名前はピックとかいうらしい。

しかし、そんな姿になった今でも、俺を熱くしようとしてくるのだから、悔りがたい。

シヤーナ様の話では、何でもシヤーナ様とオマケのミエルの命の恩人という事らしいが……ダメだぞ、シヤーナ様は俺のものだからな！

とはいえ、悔しいけどシヤーナ様との連携は素晴らしいの一言だ。エンゴクとピック、まったく特徴の違う鉱石が混ざっている砥石で、完璧に研ぎきるのは至難の業だ。並の鍛冶師では間違いなくチグハグな研ぎの出来になってしまうだろう。シヤーナ様の人並み外れた鍛冶の技術とセンスがあつてこそ、この砥石グローブは真価を発揮するのだ。

「ところで、ライクさん？」

「ん？ 何だ？」

「何でミエルさんが私の作ったハムスターさんを持っていたんですか？」

「え？ いや、あの、それは……な、何でだろう？」

やだなあ、シャーナ様。折角、俺がセンスを誉めているんだから、もうあのおぞましい物体の事はいいじゃないですか。駄目ですよ、女神様がそんな汚物でも見るかのようなジト目をしちゃ。

「あげたんですよね？ 何であげたんですか？」

「うぐ……、それはミエルが欲しいって言ったからで……」

「それは、ライクさんは別にいらなかったって事ですよね？」

「う……」

ライクはシャーナ様に詰め寄られ、返事の一つもできずに口ごもりながら後退していき アンナとぶつかった。

そのせいで運が良いのか悪いのか、奴の口を開かせてしまった。

「ちょっと何よ、もう！ ……どうでもいいんだけどさ、何でミエルはあんな場所にいたのよ？」

さすが空気を読まない毒舌女のアンナだ。話をぶったぎる切れ味が実に鋭い。

それを受けて優しいシャーナ様は、話がそれで安堵しているライクを恨めしそうに睨みながらも、アンナに対して口を開いた。

「よくは分かりませんが、何か巨大な斧を持った女性に襲われたそうですよ」

「巨大な斧？ それってもしかしてディアナの事じゃないか？」

恐らく、ライクの予想は正しいだろう。巨大な斧を振り回す女なんて、あの田舎者以外ありえない。というよりも、あんなのが他にも居たら、たまったもんじゃない。

「はあ……、そつちもディアナなのね。何者なのよ、あいつ……」

アンナは頭を抱えて溜息をついた。……そつちも？

「そつちもって、どういう事です？ そのディアナって人がどうしたんですか？」

「タイガーに襲撃されて、シャーナを逃がしたじゃない？ その後こちらが全滅しそうになった時に、あの女が現れたのよ。そしたらタイガーは逃げて行くし、ディアナもそれを追いかけて去っていったし。もうワケが分からないわよ」

ふーん、ディアナがねえ。

タイガーとタイガーマンか。偶然とは思えないが、正直どうでもいい。それよりも、その後の結果に俺はとても満足している。

「何かよく分からないが、早くタイガーを捕まえてやれよ。タイガーが捕まるまでは馬車を出せないんだろ？」

「そんなの言われなくても分かってるわよ！」

いいよ、捕まえなくて。

あいつが捕まらない限り、俺は何度でもシャーナ様に優しい温もりを与えてもらえるんだからな。

タイガーよ、逃げるんだ。どこまでも、果てしなく永遠に逃げるがいいさ。

そんなワケで俺は今、最高に幸せだ。アンナが毎日シャーナ様の

警護についてなければ、もつと幸せなんだけどな。シャーナ様も警護なんていらなと言っていたが、上級鍛冶師を危険にさらしてしまった警備兵ギルドのメンツを保つためにも、仕方のない事だろう。

まあ、それを含めても十分幸せなはずなのだが……何だろう、何故かすごく嫌な予感がする。

* * *

言った。言いました。ええ、言いましたとも。

確かに俺は嫌な予感がすると言った。だからって、こんなすぐに的中しなくてもいいじゃないか。しかもこんな真夜中に。

「仕方がない。夜中じゃないと貴方を連れ出せなかった。貴方達いつもベツタリ」

ハンターと剣が一緒にいるのは当然の事だ。そんないつもイチヤチヤしてるカップルみたいに言っな。

というよりも、勝手に家に入ってくるなよ、この不法侵入者。

「だつて鍵開いてたから」

誰も夜中に窓から人が侵入して来るなんて思わないだろ！

……で？ ミエルよ、こんな夜中に屋上に連れ出して、何の用だよ？

「タイガーを倒すの手伝って」

断る。

「即答しなくてもいいじゃない」

するよ。するに決まってるだろ。

というか、どんな頼みでも断るつもりだった。

「どうしても？」

どうしても。

「泣くと水が出る能力、気に入ってる？」

突然何だよ！ 気に入ってるワケないだろ！

悲しくても泣けない俺の切ない気分がお前に分かるか！

「分からない」

だろうね！

「分からないけど、封印ならできる」

はいはい、そうです……え？ 封印？

「そう。もし手伝ってくれて、タイガーが倒せたら、水が出る能力を封印してあげる」

封印なんて事ができるのか。

ちよっと待てよ……そんな事できるなら、わざわざ魔具を破壊する必要ないじゃないか。

「能力を封印するには魔具側がそれを望んでいないと駄目なの」

ふむ、なるほどな。

……本当に手伝ったら封印してくれるのか？

「する。むしろ封印したい。何も無い所から何かを作り出すというのは、魔具の能力でもかなり珍しい。熟練した魔具師でも、そういう能力を魔具に持たせるのはかなり難しい。それを泣く能力なんかにするなんて、魔具師に対する冒瀆にも程がある」

能力の無駄遣いしてどうも済みませんね。こっちだって、好きでそんな能力に目覚めたわけじゃないんだよ、ちくしょう。

そこまで言うなら、無償で封印してくれよ。

「それは嫌。手伝ってくれるの？ くないの？」

……はいはい、手伝えばいいんだろ。手伝えば。

その代わり、絶対約束だからな！

俺はまだ知らなかった。その安請け合いのせいで、あんなに悲しい事件に巻き込まれる事になるなんて。

エピローグ（後書き）

完全に続いていて、これをエピローグと言っているかは分かりませんが、第二章はこれで終了です。ここまで読んでくださった方、本当にありがとうございます！

第三章では、今回チヨイ役となってしまった新キャラが活躍する予定です。また、この小説の山場の一つ、もしくは最終章にする事を考えていますので、しっかりと話を組み立てた後にじっくり書いていきたいと思えます。

なので、次回の更新は大分遅れると思いますが、読んでいただけたら幸いです。

感想・評価待ってます！

プロローグ

もう俺に関わるな。それがお互いのためだ。

エルトリル近郊のレイテナ王都へと続く山道沿いの森。その森の中で息を潜めているディアナの頭の中で、その言葉がセミの鳴き声のように何度もしつこく繰り返し再生されていた。

自然と顔は強ばり、斧を握る手に力がはいる。そして感情を抑えきれずに、「何でだよ、何でそんな事を言うんだよ……バか」と、相変わらずの訛り口調で思わず独り言を呟いてしまう。

そんな状態にも関わらず、ディアナの眼は虫一匹見逃さまいと鋭く辺りの様子を伺っている。

眼だけではない。音、ニオイ、気配、彼女は身体で感じる事のできる全てを、五感をフル稼働させて網を張っている。

森の中での生活で培った野性を持つディアナの見えない網は、一キロ先までの様子を探る事ができる。しかし、それには尋常ではない程の集中力を必要とする。さすがのディアナも疲労を隠せず、少しずつ網にほつれが出来始めていた。

それでも彼女は網を張る事をやめなかった。

全ては相棒のため。

相棒を見つけるため。

相棒をあの手まわしき物から救うため。

幸せだったあの日々を取り戻すため。

しかし、そんなディアナの想いも虚しく、網には別の大物がひっかかった。

ズシン！　ズシン！　ズシン！

突然、激しい重音がディアナの鼓膜の奥深くにまで突き刺さった。距離はまだ大分離れていると思われるのに、はつきりと聞こえる重苦しい音。その正体は恐らく人の足音だ。だが、ただの人の足音ではない。ただの足音でここまでの重音が響くはずがない。最初は大型モンスターの足音かとも思ったが、それも違う。同時に聞こえるガシャガシャという音。これは金属の擦れ合う音だ。それがいくつも重なり、重厚な旋律を奏でている。

これらから導きだされる答えは一つ。足音の正体は重鎧を纏った部隊の行軍。さすがに部隊の正体までは分からないが、足音の数からして、かなりの人数がいるのは間違いないだろう。

「くそ、あいつらついに本格的に動きだしたか……」

ディアナは舌打ちをしながら呟いた。

何の確認も無いものの、彼女は確信していた。このタイミングでエルトリルに部隊が来るなど、目的は一つしかないからだ。

「相棒が危ない……。一体どうすれば……。そうだ、相棒といえど！」

ディアナは悩んだ末、一人の男とその相棒の事を思い出した。少々頼りないが、ディアナが今助けを求められそうなのは彼しかないなかつた。

自分が彼にした行いを思い返すと、助けを求めるのが少し憂鬱ではあったが、そんな事を言っている場合ではない。

ディアナはこんな状況にも関わらず、いまだに頭の中で再生され

続けているあの言葉を頭を激しく振って振り払い、力強く地面を蹴って疾走した。

「待って口よ。お前が何と言おうと、私はお前を助けるかな！」

1・さらばライク、また会う日まで

俺は魔剣だ。作り主によって魔力を込められて生まれた魔剣だ。しかも普通の魔剣ではない。身体全体を鉄壁の要塞と化すのはもちろん、おぞましき悪の二オイを察知したり、魔力を解放して超局地的な地震を起こしたり、悲しみを糧にして辺り一体を水害の渦に巻き込んだりと、世のにも恐ろしい四つの強大な能力を使う事ができる。

だが、そんな俺にも欠点がある。それは自由自在に動く事ができない事だ。俺は持ち主であるライクがいないと基本的に何もできない。それはそこら辺の普通の剣と同じだ。

なので、俺は人に頼まれ事をされて安請け合いましたとしても一切何もできないし、一切何もする必要がないのだ。ふはははは！

「言っつて悲しくない？ 色々と」

うるさい。

「うるさくない。すごい小声で呟いてる」

声量の問題じゃないんだよ！

……はあ、落ちこぼれの俺には自分の能力を上げさかつカッコ良く表現する自由すらないというのか。

「引き受けた事を放棄するような奴にはそんな資格ない。この詐欺魔剣」

そんな事言っても仕方ないだろ。本当に何もできないんだから。そんな事よりもミエルよ、お前は一体何が目的でこんな状況を作

りでした？ お前のせいなんだから、責任持ってあそこの二人をどうにかしろよ。鬱陶しい。

「いい加減に白状しなさいよ！ アンタがタイガーを討伐しようとしてる事は分かってるのよ！」

「だから知らないって！ 俺はそんな事は一言も言っていない！」

普通の声量でも全体に十分響く程に狭い室内に、ライクとアンナの怒鳴り声が響き渡る。その影響で、俺が置かれている剣立てが小動物のように小刻みに震えている。それどころか、老朽化した部屋の壁やら柱が音の衝撃で粉碎されてしまいそうだ。いつ近隣住民が鬼のような形相で乗り込んで来てもおかしくない。

「じゃあ、もし目の前に戦い甲斐のある強敵が現れたらどうする？」

「え？ そりゃまあ……、ハンターとして引き下がるわけにはいかないな」

「それがタイガーだとしても？」

「タイガーだとしてもだ」

「ほら、やっぱり討伐する気満々じゃないのよ！」

「ち、違う！ 今のは誘導尋問だ！ 卑怯だぞアンナ！」

俺の心配などそつちのけで、二人の低レベルな争いは加熱する一方だ。俺の平和だった休日の昼下がりを返してくれ。こうなったのも全てお前のせいだぞ、ミエル。

俺とライクが家でだらだらと過ごしている所に突然アンナとミエルが押し寄せてくるなり、アンナが開口一番に「ちよつとライク！ アンタ、警備兵ギルドを差し置いてタイガーを討伐する気らしいわね！」と、怒鳴ってきたのが全ての始まりだ。

言い争いを聞いている限り、どうやらアンナはミエルからライクがタイガー討伐を企てている事を聞かされたようだ。俺の記憶が正しければ、ライクが一言でもそんな事を言ったという事実は存在しない。

「というか何なんだよ。先日からタイガータイガーって、どんだけタイガー流行ってるんだよ。もうウンザリだよ。タイガーの話はもう大概に……今はシャレじゃないぞ。」

「ぶい」

あ、ミエルが笑った。前から思っていたが、笑いのセンスはおるか、こいつは色々と感性がズレている気がする。

「ちょっとそこの根暗女！ 何笑ってるのよ！」

そんなミエルとは正反対に、一ミリのズレもなく毒舌街道を突き進むアンナは、勢いよく指差しながら怒りの矛先をミエルへと向けた。

「別に」

「別についてアンタね……。アンタが突然私の所に来てライクの事を言い出したから、わざわざここまで来たのよ？ どうなのよ、本当にこいつはタイガーを討伐するって言ったの！？」

「言ってた。間違いない」

「ほら、やっぱり言ってたんじゃない！ もう、今日はただでさえアイツらが来るから大変なのに、これ以上仕事を増やさないでよね！」

「だから違うって！ 何かの間違いだって！ そもそも」

ミエルがしれつとついた嘘のせいで、二人はまた言い争いを始めた。

人は嘘をつく時、決まって手に汗をかくものだ。ライクなんか特にひどくて、アンナやエリスと口論になった時に適当な言い訳をしては俺のグリップを汗まみれにしてくる。それに対してミエルはどうだ。俺のグリップを握るミエルの手は一滴の汗すらかいてないじゃないか。この生粋のペテン師め。

……ん？ というか、何で俺はいつの間にもミエルに握られているんだ？ おい、やめろ。一体何をするつもりだ。

「約束は守ってもらおう」

ミエルはそう言うと、俺を持ったまま争う二人の間に割り込み、怪訝そうな顔をしているアンナの眼前に俺を突き出した。

うーむ、間近で見ると、アンナはやはり美人だ。警備兵をしているとは到底思えないその白い肌には、傷はもちろん、ニキビやシワ、虫刺されすら一つも存在しない。まるで上質な雪のようだ。

こうなると、本当に性格が悪いのが悔やまれる。世界一棘が多い薔薇といったところか。

などと、冷静にアンナについて考察している場合ではなかった。

「な、何よ？ そのダサい剣がどうしたってどういうのよ？」

「これ預かって」

「は？ 預かる？ アンナが俺を？」

「お、おい。勝手に何を言い出してるんだよ、ミエル」

「ライクはサウザートがいなければ何もできない」
「ふむ、なるほどね……それは名案だわ」

……ああ、分かった。ミエルの目的は俺をアンナに渡す事だったんだ。現時点では、エルトリルでタイガーの討伐を企てているのは国営警備兵ギルドのみだ。という事は、タイガーの情報を得るのに一番手つとり早いのは警備兵ギルドに入る事だ。要するにミエルは俺にスパイをさせるつもりなんだ。

確かにそれなら俺でもできる。いや、むしろ俺程の適任者はいないだろう。何しろ、アンナの腰にぶら下がってるだけで何も怪しまれる事も無く簡単に侵入できるんだからな。今日は俺の元妻であるエリザベルも持ってきてないみたいだし、代わりにずっと持ち歩いてくれる事だろう。恐らくミエルに急かされて忘れてきたんだろうな。これもミエルの策の内かもしれない。恐ろしい女だ。

まあ、良い作戦だとは思う。だがな、ミエルよ。お前は甘くみすぎだぞ。ライクが俺と離ればなれになる事を許すはずがないだろう。

「お、おい。勝手に話を進めるなよ！ タイガーを討伐するつもりなんて無いって言ってるだろ。それに俺はサウザートがいないと……」

「……」
「いないと何よ？」

ほら見る、ライクは俺の事を大事な相棒だと思ってくれてるんだ。ライクよ、その仏頂面した毒舌女にビシッと教えてやれ。俺達の温室エンゴク鉱石のように固い絆をな！

「いないと……寂しくて夜寝れないじゃないか！」

……。

「……………」
「……………」
「な、何だよ、その沈黙は……………」

……………え、あ、うん、そうですね。じゃあ、えっと一応ツッコませてもらおうと……………お前は甘えん坊な子供か！……………こんな感じでいいですか？

清々しい程にビシツと言ったのはいいんだけどさ、もっと他にあるだろ。『サウザートは俺のかけがえのない相棒だ。絶対に渡してはしない』とか『例えこの命尽きようとも、サウザートだけは俺が守る！』ぐらい言えよ。……………自分で言っただけで何か照れてきちゃった。えへへ。

「はあ……………分かったわ」

「そうか、分かってくれたか」

「ええ、分かったわ。やっぱりこのダサイ剣は私が預かっておく。それがアンタのためだって事がね」

そう言っただけでアンナは俺をミエルから奪い取った。

やめろ、そんな剣士とは思えない白くて細い美しい手で俺を……………うーむ、意外と悪くないな。

外見は女性の手その物だが、手の平は剣ダコで意外にゴツゴツしている。これは間違いなく努力の結晶だ。ただモンスター討伐しているだけではこうはならない。これは毎日かかさず鍛錬を行っている手だ。しかもゴツゴツしているだけはなく、ちゃんと女性らしい柔らかさも少しする。ライクとはまた違った味わいのする中々良い手をしている。剣が言うのだから間違いはない。

「おい！ 意味が分からないぞ。何でお前にサウザートを預けるのが俺のためになるんだよ！」

「分からないなら、はつきり言ってあげる。アンタは病気よ、サウザート依存症よ！ 気持ち悪いのよ！ 一度離れた方がいいわ！」
「サ、サウザート依存症！？ き、気持ち悪い！？」

アンナがずばり指摘すると、ライクは長年に渡って隠されていた真実にでもたどり着いたかのように、目を見開いてショックを受けているように見えた。一度離れた方がいいのかは別として、アンナの言う事はほぼ正解と言っていていいだろう。むしろ、自覚が無かった事に驚きだ。だが、ハンターが相棒である剣に依存するのは至極当然の事なので、病気とは言いがたい。しかし、ここまで自信満々に言われるとそんな気がしてきた。

これはライクのためにも、アンナについて行った方がいいのだろうか。しかし、俺は本当にこいつに預けられて無事で済むのだろうか……？

「泥棒だー！ 誰か捕まえてくださーい！」

そうだ、そのままアンナに盗まれてもしたら……は？ 泥棒？

「泥棒ですって！」

外から突然聞こえてきた大声に、一番最初に反応したのはアンナだった。

アンナは素早く窓際に移動すると、窓を突き破りそうな勢いで乱暴に開いた。窓から下を見下ろすと、奥の方から二人の男が追いかけてっこをしながらこちらに向かって見えた。追っている方の男は必死で逃げる男を追っているが、差は開く一方だ。

「ちよつとその泥棒！ 私の目の前で盗みを働くななんて良い度胸

じゃないの!」

別にお前の目の前で盗んだわけじゃないだろ。

そんな俺のツッコミなどそっちのけで、アンナは興奮混じりに鼻息を荒らげながら、窓に足をのっけて身を乗り出した。

こいつまさか窓から飛び降りて、泥棒を捕まえるつもりか? …

…ふ、いいぜ。そういう無茶は嫌いじゃない。もしかしたら俺は当分お前の世話になるかもしれない。その予行練習としてはうってつけだ。何だかんだで俺はアンナの剣の腕前を認めている。相棒の代わりとしては申し分ない。即席コンビの力思い知らせてやるうぜ!

そうだ、そうやって顎をひいて狙いを定めて俺を大きく振りかぶって勢いよく……え?

「ちゃんと当たるのよ!」

「サウザートオオオオオ!」

前言撤回だあああああ! 馬鹿やるおおおおお!

違う。お前は間違っている。

「ありがとうございます、ありがとうございます。本当にありがとうございます! この鞆が盗まれたらどうしようかと思いましたがよ!」

だから間違ってるって。礼を言うなら、剣を剣とも思わない冷徹

女ではなく、何も悪い事をしていないのに泥棒めがけて突然投げられた俺に感謝をするべきだ。

「だから、もういいってば……。私は仕事の一環としてしたようなもんだし」

ほう、お前の仕事は無害な剣を窓から放り投げる事だったのか。良い仕事だな。今すぐ辞める。

というかさ、そんなに顔をひきつらせてないで、いい加減に俺を拾ってくれよ。今度は俺が泥棒に盗まれたらどうするんだよ。アンナだけではなく、ライクまでもが俺の事なんて忘れて顔をひきつらせて苦笑いをしている。ミエルは相変わらず無表情で、俺の意思が聞こえているはずなのにまったく微動だにしない。全く薄情者ばかりだ。

それもこれも、全部この男のせいだ。二人が苦笑いをしているのは、別にこいつが『ありがとう』って言いすぎだからというわけではない。理由は別にある。それはこいつの服装だ。

茶色のベレー帽子からはみだした肩まである金髪。そしてその髪色に負けずとも劣らない鮮やか黄色のシャツ。そして極めつけはエルガニでも詰まっているんじゃないかと思う程にもっこり膨らんだ膝下まである紫色のスボン。常人、常剣では到底理解できない奇抜な服装をしている。ダサいを通り越して面白ささえある。そりゃ俺の事なんか忘れて、顔をひきつらせて苦笑いもしてしまうというものだ。

変な服装といえば、俺と衝突して盗んだ鞆を捨てて逃げ去った泥棒の方もそうだ。この男と似たような黄色のシャツに半スボン、頭には麦わら帽子をかぶっていた。

俺はあの服装に見覚えがある。あれはミエルの家から魔剣を盗みだし、ライクから四万シヤルーをばったくった釣り好き盗賊団とかいうふざけた連中の服装だ。てつきりミエルが壊滅させたものだと思うっていたが、まだ活動していたのか。

「いやあ、本当に助かりました。いくら叫んでも誰も助けしてくれないんで、どうしようかと思いましたよ」

「そ、そう。それは災難だったわね……」

そりゃそうだ、変な格好した二人組が追いかけてこしてたら、誰でもコントか何かだと思っただろう。むしろ何の躊躇もなく助けに入ったアンナの方がおかしいぐらいだ。アンナもその事に自覚があるのか、更に顔をひきつらせている。

「いやあ、仕事の関係上、王都からこちらに来たんですけど、来た早々泥棒に狙われるなんて災難でしたよ。確かに王都よりこちらの方が仕事が多そうだ。あ、申し遅れました。私の名前はクイス・ポ―チエルと言います」

クイスなるダサイ男は丁寧にお辞儀をしたが、両手で左右のズボンの裾を掴み、右足を後ろに回す動作は必要ないだろう。お前はどこかの貴族の娘か。

そんな偽貴族に対して本物の貴族の娘は、丁寧さの欠片も無い偉そうな態度で口を開いた。

「私の名前はアンナ・エクレールよ。警備兵をやってるわ」

「ライク・カインスだ。よろしくな」

「ミエル・フォンブルー」

サウザートだ。

「アンナさんにライクさんにミエルさんですね。どうも、初めましてよろしく願います」

おい、俺の名前も言えよ。俺はお前の恩人だぞ！

「……サウザート」

「はい？ サウザートとは何ですか？」

「……そこに落ちてる剣。貴方の恩人」

ミエルが俺を指差すと、全員の視線が俺に集中する。やっとだ、やっと気付いて貰えた。感動のあまり、体から水が吹き出しそうだ。ミエルが俺の意思に影響されたのか、あまりにも可哀想な俺を見かねたのかは分からないが、まあ礼を言って……やっぱり言わない。

「おお、そうでした！ 私とした事が恩人をこんな地面に放置しておくなんて、本当にすみません。そしてありがとう。えーと……サウザートさん！」

そうだ、俺が礼を言う義理などないのだ。まったく、礼を言うのが遅いんだよ！……うん、まあでも、許してあげようかな。許してあげるから、拾い上げた俺を舐め回すようにベタベタと触らないでくれるかな。俺、そういう趣味ないから。

それにしても、こいつは華奢な手をしているな。虫一匹殺した事もなさそうな乙女のような手だ。男のくせに何という軟弱っぷり。男でこんな手が許されるのは、繊細な技術を要求される芸術家ぐら이다ぞ。

「ところでアンナさんは警備兵なんですな。それなら、仕事で一緒にになるかもしれませんね」

「はい？ 確かに私は警備兵だけど……アンタの職業は？」

「あ、これはまた申し遅れました。実は私、絵描きなんですよ」
「へえ、絵描きなんだ。それならその格好も納得ね」

……芸術家だったよ。

確かにアンナの言う通り、絵描きならばその変な格好もしっくりくる。普通のセンスでは到底、芸術家になどなれないだろう。

しかし、納得している場合ではない。クイスは明らかにおかしい事を言っていた。

「……ん？ いやいや、何で警備兵の私と絵描きのアンタが仕事で一緒になるのよ？」

アンナも気付いたようで、クイスに疑惑の目を投げかける。ライクはそんな事には興味無さそうに、ずっと俺に視線を投げかけている。忘れていたくせに俺の事が気になって仕方がないようだ。まったく勝手な奴だ。俺大好きっ子失格だぞ！ ……子じゃないけど。

「あ、それはですね。絵描きというか、ちょっとした副業をしながら……お見せした方が早いかな」

うおう！？

ライクに少し気を取られていた束の間にクイスが動き出した。俺の視点もそれにつられて動き出し、俺の前に鞆が一つ出現した。これは先程、俺の犠牲によって救い出されたクイスの鞆だ。それにクイスの右手がぐんぐん伸びていき、中をがさごそと漁り始めた。この中に俺とアンナの疑問を解く鍵が眠っているようだ。

「ああああああああああ！？」

「な、何！？ どうしたのよ！？」

「お、おい！ 大丈夫か、サウザート！」

「……うるさい」

突如、豪雷のような叫び声が辺り一帯を支配し、それに対してアンナ達も声を荒らげて反応した。一つの物事に対してこんなに足並みの揃わない反応も珍しい。ミエルはまだ分かるとして、ライクはなぜ俺に大丈夫かを聞いたんだ。俺はクイスの左手に持たれているだけで、何の問題も無い。

「無い！ 無いんです！ 私の大事な羽ペンがないんです！」

「羽ペン？」

「そうです！ 昔、父から貰ったものなんです。高価な装飾のついた箱に入れていたのですが、無いんですよ！」

明らかにその箱が原因だな。鞆の中を覗いた泥棒が、高価そうな物だけあらかじめ抜いておいたのだろう。

「多分さっきの奴が持っていたんです！ お願いです、取り返してください！ お願いしますお願いします」

「う、うーん。そう言われてもねえ……あ、そうだ。ライク、アンタが探さないよ」

「は、はあ！？ 何で俺が！？」

必死で懇願するクイスに対して、アンナは困った様子で悩んだ結果、ライクに全てを押しつける事を選んだようだ。おい警備兵、仕事しろ。

これにはさすがのライクも黙っておけないようで、怒りの表情でアンナを睨みつけている。

「いい加減にしろよ！ この前はイベント警備を手伝わせて、今度は泥棒捕まえるのを丸投げかよ！ 俺は警備兵ギルドの雑用係じゃないんだぞ！」

「仕方ないでしょ、私には用事があるのよ。本当は私だって泥棒追ってる方が気が楽よ。それに、人助けするのに警備兵とかハンターとか関係あるのかしら？ こんなに困ってるのにアンタは無視する気なの？」

「う、それは……」

「ライクさんお願いです……私あの羽ペンがないと仕事ができないんです……」

「うう……」

ライクの積もりに積もった不満の声は、アンナの巧みな話術とハムスターのように情けないクイスの泣き顔によって、簡単にあしらわれてしまった。その様子をみてアンナはうすら笑いを浮かべている。ああ、こいつを調子に乗せたらロクな事にならないぞ……。

「いいじゃない暇なんだから。アンタはこの剣がないとハンターの依頼もロクにこなせないヘツポコなんだから」

そう言って、アンナがクイスから俺を強引に奪い取った。はあ、結局こうなる運命か。

でも仕方がない。今までの流れを見ていたら、本気でライクは一回俺と離れてみた方が良い気がしてきた。悲しいがライク、俺はお前のために少し旅立つよ。

「ま、待て。サウザートがいなかったら、モンスターどころか泥棒と戦う事もできないじゃないか」

「そんなのシャーナにでも剣を借りればいいじゃない。慣れない剣でも泥棒ぐらい倒せるでしょ」

え、シャーナ様の所行くなら俺もやっぱりそっちの方が……。

「じゃあ、そういう事で頼んだわよ。急がないとアイツらが来てしまつわ。じゃあね」

「こら、まだ話は終わって……」

「うわあああん！ ライクさん、お願いしますお願いしますうううう！」

「ちよ、ちよっと離せよ！ おいアンナ待て！ 待てってば！」

ライクは一方的に話を切り上げて立ち去ろうとするアンナを追いかけようとしたが、クイスにしがみつかれて、身動きが取れなくなっている。

……ああ、離れていく。中古武器屋で買われて以来、一度も離れた事のない相棒がどんどん遠ざかっていく……。

ライク、俺がいないからって鍛錬を怠るなよ。

たまには野菜も食べよ。

飯食つたらちゃんと歯磨けよ。

鎧着たまま寝るなよ。

俺のいない間に他の剣を、俺の剣立てに置くなよ。

あとは……あとは……うう……ライク……ライク……。

ライクウウウウウウウウ！

俺は必ず戻ってくるからなああああああ！

また会う日までえええええ！

俺の事を忘れないでくれよおおおおお！

シャーナ様によろしくなああああああ！

「サウザートオオオオオオ！」

ライクウウウウウウウ！

「……二人とも馬鹿」

1・さらばライク、また会う日まで（後書き）

かなり遅くなってしまうましたが、連載再開です！

……ですが、当分は忙しくて更新速度は遅めになりますorz

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7982u/>

振り回される日々の中で

2011年10月1日16時48分発行